

置くと立上りしが兄弟を。にくしと思ひけんふり返つて兩人を。ぐつとねめたる目付のこはさ。見ぬ顔すれば六郎も我家へヨクリこそは立歸れ。地泉三郎跡見送り。ア、頼もしき若者と。心に深く感じながら。兄弟が前を摺抜て。挨拶もなく義經の。フシ御座の一間に入りにつけり。地跡に兄弟鼻つき合。詞コレ兄者人。權ノ頭を始め。忠義達するやつ原大かたに押し込め。残つた泉と龜井めがけむたくてならなんだに。先づ一人は半片付け。序に泉三郎めも。押込める思案はないか。有るとも。きやつが今いふ五斗兵衛。根が目貫の細工人。生れ付いての底ぬけ上戸。酒をくらへば亂れ出し。一斗が二斗三斗限りもなき底ぬけゆゑ。誰がいふとなく五斗兵衛。本性を失ひ何の役に立ぬやつ。それを見込て一つの方便。五斗めがうせたる時。目見えぬ内酒をくらはせ。地馬鹿つくすを越度にして。きやつは勿論三郎めも。ざんげざんげに云ちらし。追まわつて仕まうたら。うつそりの大將は立とうと伏うと我々次第。必ずぬかるな弟と。人をそこなふわるだくみ。コリヤ上々の御分別。氣遣有るな拙者に諸事をお任せと打連れヨクリ奥へ入ける。地費く有つて五斗兵衛。二度花咲く會稽の錦にあらぬ出立ばえ。木綿どてらに麻上下藤巻柄の大小を。さすが名高き軍師とは。見すばらしげに見ゆれども細瑾を顧ぬ大丈夫。笑ふもそしるもなんともなく。フシ御座の間近く入り来る。地伊達次郎出迎ひ。詞ヤ珍らしや五斗殿。先達て承はれば改め御名を聞くには及ず。手前は伊達次郎と申者。萬事貴公の御引廻しに預りたし。コレハ結構な御挨拶でございます。新參の某諸事此方からお頼み。サアお手を上られい。扱もお堅い事では有ぞ。サ、いざと。地互に禮儀フシをなす所へ。銚子盃。地携へて地姫頭澤田が立出て。錦戸様のおつしやりますは。是は御前のお盃。どう成りといやうに遊ばせとの御口上。ム、我君のおながれか。イヤサこれ五斗殿。御邊が酒を好まるゝと聞し召。義經公よりお盃。地ナント一つ參らぬかと差付けば。焼石の飛付程に思ひしがちやくと思案し。ア、いやて候こりて候。まだお目見えも濟まぬ内。先づよしに仕らう。ハテそれは氣の毒。達てとは申されぬが。すいた物を吞まぬといふは。ア其元に似合ぬ愚癡の至り。地しかも此酒は

隅田川の諸白。油のやうで和らかな我等が仕合たばませうと。盃取つて一ばいつぎ。ぐつと吞ば咽ぎつくり。羨しげ成る顔付に。又盃に丁ど受け。詞コレ此かざをかゞつしやれ。ドレ。ム、ウ甘くさい。地序に爰へと口もとへつき付ければ。獵師のわなにかゝる狐の油揚。いつそ儘よとする。詞エコリヤたまらぬ。地序に最一つおさへも給う。イヤなんぼ成りとも聞しめせと銚子渡せば押取つて。ついでに吞み。詞いやはやどうも申されぬ。結構な御馳走と。地そろく。亂るゝ舌あんばい。してやつたりと伊達次郎。何思ひけん挨拶なく。フシ一間の内へ駈入たり。詞是はどうぢや。盃の埒も明けず。亭主がはづして座敷は濟ぬ。地どこへ。と見廻す内。五斗兵衛に對面と。大將九郎義經公直垂に打鳥帽子。泉三郎先に立ち御廣書院に出給へば。引續いて錦戸兄弟フシ威儀を繕ひ座に直る。地五斗兵衛はじろりと打守り。詞コレハ皆様ようこそお出なされましたなめ。コリヤか。よ。ソレたばこ益。地ヤレ釜の下も焼付けよと。我家と心え馳走ぶり。泉はハツト仰天し。扱は錦戸兄弟が酒をもりしに極つたりと。悟りながらも此場の難儀。シツくしと鼠を追ふ如く。目顔で知らせどろりくはん。義經遙に見下し給ひ。三郎が進めし軍師。五斗とは彼が事な。いにしへ。漢の韓信を高祖始て見し時。得たる諸藝を尋給ふ。地其例有れば尋て見ん。ソレく兄弟聞いて見よと。仰に出しやばる錦戸太郎。詞コレく五斗殿。六韜三略を暗んぜしか。明白に述聞かされよ。エナンジヤ六韜三略。我等すつきり存ぜぬてゑすは。ナンジヤ知らぬ。ホイ。見事な軍師の。然らば武藝は。武藝か。コリヤ又武士の表道具てゑす。先づと。弓鎧鐵炮馬乘事。劍術體術ひつくるめ。すつきりと知らぬてゑすは。ナントきつものか。先づ一體根がきらひてゑす。知らぬてゑす。右の通りの仕合ゆゑ。何をさせても埒明てゑすはい。地兎角好きなのはコレく。と。又引か。へ呑む酒を。手に汗にぎる泉三郎。フシ胸をいためる計りなり。地大將甚だ立腹ましまし。詞かゝる浮世のすだれ人。我にすめし三郎が心底こそいぶかしさよ。ハア御尤の仰ながら。昔より言傳へる智者の一つ失とは此事。酔さめて後。軍術の奥義を尋ね見給へと。地いひも切らせず御色替り。詞コハ

心得ぬ一言。スハ一大事の場所に成つて。五斗が酒に亂れしとて。正氣に成る迄待つべしと。敵が軍を延すべきか。地言語にたえたる愈忽の言分。此義經を嘲るのか。軍師とは思ひも寄す。アレ引出せと怒の面色。重ねて何の御説もなく。座を立ち奥へ入給ふはフシにがく敷ぞ見えにける。地錦戸兄弟多つばに入り。詞アノやうな極道を。軍師ぢやの音頭取りのと。目利なされたお方が見事。地よう合點の行く様に誰か有るアノ生酔め。たき出してお目かけよとフシ言捨て一間へ入りければ。地下知に下部がはしたなくたき出せの人音を。泉の三郎聞かぬふり。たとへいか程働く共きやつらが手に合ふ五斗にあらず。萬事の思案は館でこそ。エ、につくきやつは兄弟なれど。愚人を相手に隙づいやし。無益の論と誤りを。フシ身に引受けて歸らる。地程なく出る雑人原。手々により棒引かたげ。しどろもどろにかけり出し。詞あんなたはいな酔だふれ。軍師とは事をかしい。道理かな元が職人。商賣が目貫師ゆゑ人の目迄ぬきくさる。地意見の爲にどこもかも。たきゆがめて追まくれと立寄をどこへ。詞御馳走のより棒。酒が下地が充滿。モウ望ないてゑすは。ナ扱と。貴様方がしかるによつて。是からは軍者をやめ。元の目貫を任るぢや。ほしくば一對おまそかな。コリヤ談合がおもしろい。眞實にくれる氣か。やるともくぶつてさへ下されねばいくらでも易い事。シタガ。目貫も品々有り。とてもものに直段付て細工のもやうを語つて聞かせう。どれ成りともお氣になされ。舞ガ、リ先づ富貴成る牡丹の花に。たはむれ遊ぶ獸は。地大かた四々の十六文。月に兎は子持の證據さんごをかけて十五貫。猫はにしんが。八百匁。狸は金で百匁なり。つなぎ馬は相場もなくめつたむしやうに太こ付。狼は三十三貫三百三十三文なり。道具カ、リ紋づくしなら桐のとう。五七兩から五三兩。毛彫は。かゝが重寶で。お望なれば。三百匁。其外家の三番三。お望次第好次第とフシ口に任せて云立る。詞ハレヤレくくく。どれもたかい目貫の。とてももらはど三番三。くれる事は成まいか。成るともくく。地どれやると。フシ鼻紙袋取出し。地中を拂うてあたまにすつぱり。かづけ物ではござらぬぞ。イデ三番三が所望なら。詞何より以て安う候。地さあらば一つ参らせん

と拍子をふんで。詞ヤアランハく。地はづむ拍子に下部もつかれ。鷹とびやら横とびやら。うつゝぬかして付けまはすを。エイエイくく。地つきとばし足に任せて。三重へ立歸る。地請繼し武門の榮えきらめきて。庭の本草の落葉かく座敷廻りのはき掃除。箒片手にはやり歌實も泉ノ三郎が。館と知れて勇まし。女子仲間のべりく頭。お鈴は何がな鈴ふりに。詞コレ我身達。此間から御座敷へ女夫に娘三人連れ。五斗とやら八斗とやら。へちまのやうな浪人衆。お客くくと大事にかけ。めつたむしやうに御馳走なさる。どうでも譯の有らさうな事。地みんなは何も聞やらぬかと尋ねれば。口ばしの長い鶴野が羽繕ひ。何いやるやらどこにあれが浪人衆。もとは目貫の彫物師。兵法や軍法が上手なゆゑ。大將に成るといふ。しかも今日はお目見えとて。旦那様と御同道。それ程軍が功者なら人の見ぬ間の夜軍も。大體の事では有まい。詞ナントさうは思やらぬか。なんのいの。目貫師なら高がしれた。お内儀の穴彫のと。馬事するは上手であるが。地本の馬に打乗て切合ひは覺束ないと。遠慮會釋もかけ言の仇口々ぞやかまし。地をりから奥より泉が妻。育ちもかたき岩浪が。障子開いてあゆみ出て。詞コレハくさがなし聞きにくい。尤是迄職人にて。大津の里にお住居なれども。根が木曾殿の御浪人。氏といひ武藝といひ。唐土の張良にも劣らぬ武士を抱へたとて。連合の悦び。義經様の御爲には。早天に雨を得たる心。地様子も知らいて見苦しいかげ言。おかもじや娘御の耳へ入つてはこちとらが。共々にもそしるかとさげしまるゝが恥しい。詞重ねてをたしなめと。地いつなき詞の張合よく。フシ關女は娘を伴ひて。何心なく奥より出て氣の毒顔に是はしたり。詞どういふ事と奥様の御きげんがそこねしぞ。少々誤りなら。慮外ながら。私共に免じての御了簡。常から結構なお方能々のお腹立。アイ誤つた申してござります。御堪忍遊ばせと受つ答へつ追従ませり。我身の上の噂とは。しすまし顔に詫口上。フシ傍で聞さへ笑止なり。地岩浪いと迷惑さ。コリヤ皆の者。けふはあなたの御挨拶。了簡するぞ勝手へ立てと。地云ふに幸ひをかしさを。怵へ兼たる下女はした。フシ吹出しながら走入る。地娘は母の袖を引き。と、様は何方へのお出まだお歸りもな

事に又いたそと。地樽かたむくれば。女房興さめもぎ取つて涙を浮め。詞エ、淺ましい。口はそれ程かはいひか。地恥を恥共思はぬ生醉なまろ。さほどにある共思はずに。娘を連れてよめりし此かた。五年餘りの辛抱。又しても呑過のみすぎしてのしぞこなひ。ほつとあいそもつき果た。こなたが何の以前が武士。竹のふしか木のふしか鯉かづぶしてもあるまいと。恥づらかせどきよろりが味噌。詞コリヤ出かした。ふし盡つくしどうもいへぬ。とても事の事に小歌ぶして。一ぱいしかけう。サワギ歌備前岡山新太郎様が。江戸へござらば雨風あられ。雨ちやござらぬ新太郎様の。戀の涙がヤレコリヤ雨と成る雨となろよりおれは酒と成がよい。コリヤきやらめ。あいしをらぬか。地おさへると。しなだれかゝるを取つてつきのけひつしよなく。詞エ、こなたはの。とても其根性で。女房子の面倒を見届る事は成まい。よいかげんに際おこしや。地去狀書かそと床の間の。硯取る手もこらしめと。思へどつよき詞の角。娘は悲しく申しと様。詞今からふつり思ひ切り。酒呑ぬと云うてたべ。地拜みまするとゆりおこし。歎く間に硯をつき付。此後酒をとまる氣か。それがいやなら去狀を。書ておこしやと引起せば。詞マア、よいはい。せはしない者ぢや。我が其やうにつれない事いふけれど。おれは我れがかはいひて。晝も涙夜も涙。泣ぬ日とは一日片時もないはいな。詞エ、其あだ口もきゝあいた。地去狀早うとせり立てられ。詞夫程ほしか書いてやる。跡で必ず悔むなよ。ヲ、置てたも。悔みやせぬ。ホ、きつふ張はりがつよいな。それもおれが合點ぢや。女のなづむ風俗ふうぞくの。よい殿御を詞持うと思つて。地そんならどれと硯引寄せ。お定りの三行半。詞ナ望の文言是てよいか。シタガ五斗が隙やるのにたゞやつては分が立ぬ。コレハこれ。重代の腰の物。青江下坂。百三十二文で買つたけれど。暇の印に持つて行けと。九寸五分を投出し。六分ないかと又ころり。地寝るより早く高いびき。フシ前後も知らず伏しにけり。地娘は頭是も涙にくれ。おろくするをコレハしたり。是は母がこらしめ。意見いけんの爲に取る暇。目が覺たら常つねの通り。やつぱり替からぬ女夫の中。泣く事ないと娘をすかし。間の襖を引明て。出んとするを岩浪が。お内儀待つたりと走り出て。詞此生醉を殘し置き。そなた衆計

り歸ろとはさう甘うは成りますまい。地お連合も引起し連ていんでもらひましょと。呼びとめられて五斗が女房。むしやくしや腹にどつかと坐し。詞コレ奥様。イヤ泉三郎のおかもじ。こちの男が酒呑の。たはいなしと云ふ事は最前さいぜんから知れて有る。夫を爰の御亭主ごていしゅが目も明かぬ形かたちをして。見込の有るの取次とりだのと。めつたむしやうにそゝり上げ。住みなれた大津の里身代をたゝませて。今ではどこも居所のないやうにして貰ふ忝かたじけうてたまりませぬ。それに何ぢや。こちの夫はしめくゝりがよい故。泉ノ三郎とは人がいはぬ。さなだ紐いづなの。イヤ六文錢むくわんせんのと自慢じまんたらんく。地是がどこにしめくゝり。ひよんなお人に見込れてこちとらが迷惑めいわく。あげくの果に縁切れて去られたら他人むき。構かまはふ理窟りくつはないはず。醉まよだふれはあたまから呑込んでのお世話。やつかい序ついでにどうなと御勝手ごかたて。アタ面倒めんどうなと出はうだい言ひたい事を言ひ破やぶり。サアこい娘と引立て。次の一間へひつしよなく。氣強きづよく出るは出たれども心もとなき氣遣きぢさ。フシ暫しばし小かげにたたずめり。フシ胸はせきくる。岩浪も。五斗が妻に言ひこめられ。齒はがみをなしてあたりしが。よし、是からこちも意地。生醉を引出し諸人に顔かほをさらしてやると。やら腹立はらだに立かゝり。詞テモ熟柿じゆくしくさい。地是程にのまいてはと兩足取つて引ずれども。女の力に叶はばこそ。詞ヤア家來共早うこい。地此生醉たゝき出せと呼立れば。詞ヤレ待て女房。用事有りと聲をかけ。地鐵炮引さげ泉三郎。フシ一間の内より立出て。詞唐土からどの劉河間りうかかんは。四百餘州に並びなき。博識多才はくしきたさいの名醫めいなれ共。酒を好が一つのきず。五斗が酒を好めるも。是にひとしき疵かさの内。地さのみ武勇の疵にも成るまじ。古今に秀まし猛勇まうゆうとにらみ付たる我眼力。見損じたるか試せん。そこ立退と追退。火ぶたを切つてねらひもなく。どうどはなすから鐵炮。ひゞきに五斗はむつくと起。詞ア、ラぎやうくしや。今打ちし鐵炮は。陰にはなれ陽にはづれ。筒に音有つて向ふに音なし。扱は玉なきから鐵炮。地何者の仕業ぞと四方をきつとねめ廻し。勢替つて立たる有様。實に諺に言傳ふ心がけ有る侍は。響こたの音に目を覺すさフシたとへを引くも愚なり。地扱こそと泉ノ三郎。すかさず寄ていかに五斗。詞今ひゞきたる鐵炮の。五音ごおんの調子はいか。ヲ、尤

の御尋。乾坤二つの間をぬけ。不吉の調子離の中斷。中斷とは中をたつ地御兄弟の御中も。讒者の爲に斷ちかれて。鎌倉の怒りつよく大軍追付け責來らん。油斷する所てなし。詞ホ、左ほどの御邊が何ゆゑに。錦戸伊達が。計略に乗られて。大酒に正氣は亂れしぞ。イヤサ。病と知つて盛酒を。吞まずば却つて世にへつらひ。祿をむさぼる輩といはれん。地名利に放れし此五斗。いかで愚人の心を背かん。詞一つは又。主君の心引見んための事成るぞや。ハツア頼もしく忝し。地然らば以前に頼みしごとく。一方ふせぎ給はるべきや。詞ハア御念に及ばず兼ての契約。地君の心はうすくとも。貴殿の忠義厚きにめんじ。いかで。違背の有べきぞ。軍の用意イザお出。御尤と兩人はッシ勇んで一間にかけ入つたり。地岩浪は二度びつくり。テモ扱も天晴の侍。目利した夫も夫。揃ひに揃し弓取やと悦ぶ襖のあなたには五斗が妻も興さめ顔。かほど功有る武士と。知らて暮せし。ッシくやしやと。前非を悔む去狀に。今さら何といひやらん。仰なければ思案して。ヨクリ襖をへ押明おづく。ッシ娘が手を引き。差足に。歩む疊の目に涙。つむ心の恥かしさ何といひ寄る詞さへ。俄に作る輕薄笑。詞ホ、へ、へ、へ、まあ。わたくしとした事が。七八年も連添て。あのやうに武藝の有る男とは。夢さんぼう知つたら何の暇を取りませう。ひよつとした腹立まされ。ア、はお内儀やかましい。とつと。いんで貰ひませう。アイ。お腹の立つは御尤ながら。地行所もない身の上。常は何程結構でも。退くの去るのというた跡。直に詫も致しにくい。慮外ながら詞を添られ。中直して下さりませと手をつかゆれば突退て。詞コレ女中。きついこなたは千枚ばり。めん。が勝手づく。無理に取つた暇ぢやないか。いかにアノ五斗殿が。今ぞ誠の武勇をあらはし。一方の大將を請取。出世の身に成給へばとて。一旦暇を取つた身が。又添ひたいとはどの顔で。殊に最前いはれし通り。こちの夫泉の三郎は。目の明かぬひよんな男。地其女房に詫言を。お頼みは御無用と。持つて参つたあたり口。さうおつしやると私は。爰て穴へはいりたい。とにかく慈悲の神々の。御罰を請る法も有れ眞實縁を切る心で。書かせて取つた去狀ならず。詞こらしめに意見の爲。其譯をよ。おつしやつ

て。夫の得心有るやうに。お詫を頼む奥様。地コレ手を合せて拜みますと。スエテ涙をこぼし頼むにぞ。地傍に娘は聞づらく。こたへ兼しか。最前に。五斗兵衛が渡したる暇の印の相口を。抜くより早く我と我。膽のたねを一そぐり。ナフ悲しやと母親が。あわてふためき取付けば。岩浪も仰天し。何ゆゑの自害ぞとッシをどろ驚く其ひまに。地こなたをひらき泉ノ三郎。額縷の鏡眞垂。あなたの一間は五斗兵衛。紫裾濃の割小札。小手脚當もッシ花やかに。金の采銀のざい。打振。出立て。床几にかゝりし二人が形相。ッシめざましくも又いさぎよし。地手負は苦しき息の下。父を見上見おろして。嬉しき中に涙ぐみ。詞へエ、淺ましいは母様。地いかに是迄世渡りの。貧き煙に苦しみて。見苦敷く暮せしとて。なぜそれ程に心迄。さもしくは成り給ひしぞ。詞たつた今迄父上を。もつたいたなくも畜生の。喰どれのとにくて口。お前はようもいはれしぞ。地吾妻にござる兄様の。お耳へ入つたらさぞ腹立。其上無體に去狀書せ。望んで暇を取し身が。御出世の姿を見て。又添ひたいとの詫言を。詞聞入なき奥様を頼み。見苦しい追従の有りたけ。今では本のかゝ様より。他人のとゝ様がいとしい。詫する手間てさつぱりと。なぜに死んで下されぬ。わしやあんまりの恥かしさに。お前の替りに死まする。地先達つ不孝は赦してたべ。申しとゝ様。母さまとは縁切れよ共。私はやつぱりおまへの子。娘と言うて下さんせ。おもひ出しては折々の。御回向頼み上まする。是ばかりが此世の願ひ。もう物いはして下さんな。苦しいわいのと計りにて。ッシもだへ。歎くぞ哀れなる。地聞くにせき女は氣も狂亂。よい手な事を言譯に。するやうでわるけれども。詞わしも五斗兵衛が妻。恥を知らいて何とせう。最前詫をせぬ内に。自害せうとは思ひしが。地跡でそなたがみなし子の。流浪せんかと心の案じ。顔押ぬぐうて叶はぬ詫。いつそ其時死んだなら。今此うきめは見まい物。思ひ過しが結句仇。堪忍しやと伏しづみ正體。ッシ涙にむせかへる。地五斗も目に持涙をはらひ。詞誠や聖人は有智の小兒。小兒は無智の聖人と。言傳へしに違ひなく。まだ十三四の小兒同然。殊更すなほに生れしゆゑ。親の未練を面目ないと。おもひ詰てけなげの最期。地不孝ではない大孝行。やつぱり子にし

て下されとは。ヲ、よういうたなア。フシ嬉しいぞよ。地未永々大事の我子。心の迷ひ打晴れて。成佛せよと跡いひさし。合掌せねど口には稱名。胸迄ぐつぐつと突のぼす。涙を見せじ。知らせじとこたゆる心の三郎夫婦。推量しての貫泣袂を。フシしぼる計りなり。地今はの徳女は目をひらき。詞其お詞を聞いたれば。もはや浮世に望みなし。とく様さらば。かゝ様さらば。地兄様にもようこゝろえ。御息災でと傳へてたべ。詞三郎様御夫婦。是迄はいかいお世話。モウお暇を申します。地名残をしやと計りにて。刀を抜けば玉の緒の切れて此世をフシ去りけらし。地わつと計りに母親は。死骸にひつしと抱き付フシ前後。泣入るたりしが。地とても娘がさげしきは百千萬の言譯も。此世ではかひ有るまじ。我も共にと相口に。取付くを泉ノ三郎飛びかゝつてしつかと押へ。詞娘への言譯に。自害せんとは何事。徳女計りが御身の子で。兄の大三は子ならずや。死すべき命をながらへて。ナ。東に下り首尾能う奪ひ立歸り。五斗殿に手渡しあらば。夫へ立つる心の操。是に増したる事あるまじ。地いかにくんと制すれば。岩浪も力を付け。御息災を息災で伴ひ給はゞわれく夫婦。再び結ぶ妹背の仲人。フシはやとくくと勧められ。地是非なく心を取直し。いかやう共御夫婦の御差圖は背くまじ。只此上は何事もよきにと歎きを押包み。フシあゆみ出るを。五斗は聲かけ。詞コリヤ女暫くまで。はるく吾妻へ下るとも生死不定の悴大三。切腹して相果つるか若。頼朝の手にかゝり空しくならばいかにく。地胸を定めて赴けと釘をさしたる夫の詞。げにことわりと走り寄り。泉が最前打捨し鐵炮小脇にかいはさみ詞御尋に及ぶべき。地いづれの道にも息子の大三。相果てしと聞くならば其折こそ頼朝は。我子の敵妹背の仇。たとへ年月経るとても。鎌倉に徘徊し。力業で叶はずば計略智謀の仕様も有り。鎌倉武士は色好み筒と出かけて口薬。詞咽の火ぶたのかけがねのはづれるやうなまみを見込み。地ぼんといはせる二つ玉やはか仕損じ申すべき。氣遣有るな我夫といさめる體にこなたも勇み。出かけた行けとの一言が。直に門出のフシはなむけや。地心はやたけにはやれども。娘の別に後髪引きはかへざし弓張の。盡きぬ歌を押包み。出てんとしては。ふり返り見るも。見するも亡き魂呼ばひ。無常の風に盛りを待たて。吹散したる會者定離別愛。離苦を今爰に残して出づる都路や東の空へと急行く。

第 四 道行しぐれがさ

雨にきる。田蓑の鳥とよみたれば。露もますげの笠はなからん。笠と蓑とに身を包みかくし持たる種が鳥。姿をかへて小脇指五斗が妻は。恩愛と義理と情を一つにかね。二人ともなき子の行方おぼつか。なみの夜をこめて。鎌倉山へと尋行く。フシヨクリこゝろのへ内ぞ。はてしなき。所態かまはぬ出立ばえ。ヨクリ素足に。わらぢ引しめてむすぶ庵のわび住居。ふせやの床とよそに見てフシ狩人。ならぬとりなりも。フシ人目の關の。忍ぶ草。しのぶ文字摺たれゆゑに。亂れそめにし我が思ひは。フシ子の命。たえなば敵。長地ながらへば伴ひ歸り我夫と比翼連理の添臥を。思ひ勇みてちよこく走り。はしりついたる水口のはを。ふせぎ兼ねたる雨の足しばしはれまに菅義やフシかさを取る宮城野の露佐野の雪それさへ笠にしのげども。身一つに降る。小夜時雨袖のたきつせ血の涙。スエテ目もくれなるに染なすは。紅葉笠とや名もしるき。つれなき色のまつがさも。ヨクリ肩を休めの慰みに東の空へ家つと。並木の枝に目を付けてねらひすませし種が鳥。火ぶた切る間にひよ鳥がふいととんだる翼の音に。胸はだくぼん坂の下。登ればさつさくたればさつさ。さつさ先退け先のけと手もふる里をフシ見返りて。フシひきもどさる。後髪。いとゞ道さへはかどらず小ヲクリ野邊の薄の重りてそよと。風を便に舟呼ばひ。宮の渡しも月影やもに住む蟲のかはいらし實ねをさへて。ながめをにのふ田子の浦。江戸富士のけぶりを。跡になし。はるく爰に。フシ清見がた。箱根の峠こゆるぎや田面に蓑と加賀笠を。きたる姿はげにも實に。フシ名におふしづが花笠。ぬふてう鳥の翼には。かさゝぎも有明の。月の笠に袖さすは。天津乙女のきぬ笠。それは乙女是は又。賤の女のく。かづく袖笠ひぢ笠の。

雨のあしべの亂るゝ初しぐれあなたへざらり。こなたへざらり。ざらりゝざらゝざつと。風の上げたる古籐はてしもなくて又降りかゝる。雨の音。みの着ていそげ。笠きてヤレ。いそげ。フシいそぐたびぢもわが子の。よはひ。いのるは。千代や萬年の。龜がやつにもほどこかき小松。坂にぞ三重へ着にける

地兄弟親まざるは他人の始と諺の當れる哉。頼朝義經御中吳越と隔たりて。鎌倉よりの討手には梶原平三景時。數萬騎を引牽し早先勢は粟田口日の岡邊に滿ちゝたり。地堀川の御館にも五斗龜井は敵勢の。道を切らんと近江路や志賀幸崎迄出張して。路に残るは泉の三郎物の具かため士卒を集め。詞ヤアゝ汝等。敵は大勢味方は小勢。此度の討手は並々にては防れじ。地某思慮を廻らして。敵を欺く計略有り云ふ所へ。腰元澤田走り出て。申しゝ三郎様。仰の通り奥を覗いて見ましたれば。殿様は例の御酒宴。靜様の膝を枕におよつて御ざるが。地あの跡をまちつと覗いて參りましよとフシ云捨てゝ走り入る。地エ、いか程諫てもア、是非もなきお身持と。スエテ齒がみをなして立つたる折しも。間近く聞ゆる鯨波スハ事急に及びたり。方便の様子密に語らん。門々しめよと引連れて皆々。オクリ内に入りにつけり。地程なく寄來る鎌倉勢。一面に充満しフシときをどつとぞ上げたりける。地御館にはときをも合せず。門押開き洒掃し。物見の玉だれ亭々と色をこめたる琴三味線。大將始め諸軍勢もけてん顔。番場忠太進み出て。詞少しもためらふ所でなし。寄手を迷さん爲。智略らしくあまへて見せる化し事。地續や者共先陣は番場ノ忠太と。かけ入る所を景時おさへて。詞イヤゝゝ恐るゝには徳有り。あなどるには損有り。地乗込で不覺をとるな是におり敷き敵の變を窺ふべし。詞ヤアゝ兵共。必ずゝ女の色にうかざるゝな。地琴三味線にのする共乗るまいぞと床几にかゝり。館をにらんで控へたり。地靜御前は目もやり給はず。泉が手術をのみ込んで。敵の心を融せし。威陽宮の琴の音を思ひ出し。琴柱を律に立てかへて。歌七尺の屏風をこえしかゞも。スガ、キ落つる物。梅有り其花七つ八つ。九つ半爲市いと十。歌謡いとしさを。糸にそむるか。しらべに。戀の色が出る。地チヤリ花むらさきとこい紅の色よりふか

いは戀の色。業平男。行平男。それよりフシ敵めはよい男。地手をつくし品つくす。琴の秘曲に寄せ手の兵。大將始め氣をうばはれ。魂ぬかしうつかりひよん。地鹿岩木さへ。引手により來る。心を。今ぞつくし琴エイソリヤ引かれて。くれば名も立たぬ。笛には牡鹿か。浮かれて踊れ。うかれて踊れ。浮れて踊ればフシ名もたゝぬ。地うかれ浮され大將雜兵そゝり立ち。覺えずしらずフシ門内へをどり入るにぞ。地追手の門をばはたとしめどつと作る相圖のとき。搦手より泉ノ三郎。手勢引具しをめて出づれば度を失ひ。逃げ場なければうろたへて。爰にかゞみかしこに走り。フシ討るゝ者ぞ多かりける地時に味方の聲々に。詞雜兵に目なかけそ。大將梶原景時をのがすな。我君を讒言せし鎌倉のげぢゝめ。地主從共に踏にぢれと。呼はる聲に胸ひやゝゝ。ひえる次手と水門より。フシ主從打連れ逃げて行く。地泉ノ三郎門外へ飛で出て。詞エ、殘念や討もらせしと。地齒がみをなして立つたる所へ。討もらされの雜兵あまた。泉と見るより討つてかゝる。詞シヤしほらしきうんざい共。儕等殺すに双物は入らずと。地大手をひろげ一所にこいとフシ待ちかけたり。すきをあらせず取付大勢。とつてなげ付けつかんで打ちつけはらりゝと三重へ入つて。地此勢ひに恐れをなしフシ皆ちりゝに逃散たり。地エ、よしなき事に隙取し。目ざす敵の梶原め。よしゝ今は討ず共。景時が首は我物。先づゝ勝どきゝと勇んで館へ。三重下歌へ年は文治の春の比。敵寄せきたるさゞ浪や。志賀の濱邊の戦ひに。さもいそがはしかりし身も。ゝ。心の花か櫻木に。悲しと頼むかり枕。結ぶや春の夢。覺ての後はしら雪とちりつもる花ぞはかなき。地義經公の御内にて四天王と呼ばれたる五斗兵衛實基は文武二道を兼備へ。世上に眼高浪やげしき勇者の指折に。二つと下らぬ一つ松唐崎の戦に。あまたの敵を切りちらし。とねりも俱せず只一騎フシ暫しつかれを春の日も。フシ志賀の浦風。吹きしきてさいた櫻も散るものと。花にいとひしあら馬のフシ高いなゝきも恨なる。地五斗はねむりの眼をひらき。詞あら面白の春の景色や。兄弟互にしのをけづり双をあらそふ時しも有れ。しばし浮世のうき事を眠りに忘れし花の徳。地實に誠世の常の。スエテさくらは櫻是は又。志

賀の濱邊の雲井の花。無下にやみなんもいと本意なし。すぎし壽永の春の頃。源平の戦に。薩摩守忠度卿櫻の本にてまどろみ給ひ。つらね給ひし御歌に。スエテ旅行の花と題をすゑ。行きくれて木の下陰を。宿とせば花や今宵のあるじならましと。吟じ給ふ御心と。五斗が今の身の上に、フシ思ひ知られて痛はしや。是に付けてもあぢきなき親子の縁はうつろふ花。不便や可愛や大三郎我をつらしと恨むらん。今は親子の縁切れて。いろもちり行く兒櫻。此身の果の浅ましやと。涙の雨のフシ古郷を思ひ。歎きてゐたりしが。詞ハツア我ながら正體なや。さしも名高き實基が我子を思ふ不覺の涙。花もさこそは笑ふらめ。地迷うたり。よく思へば是ぞこの娑婆の絆を、行きて木の下陰の涼しき宿御法の花の主とならん。五斗兵衛實基が譽を顯はす一軍と。やだけ心の一と筋に身の討死を磯際や。思ひをながすしら波に。フシつれて寄せくる鬨の聲。地すはや敵の近付と馬引よせてゆらりと乗り。鞍あぢ心にあぶみのはな向ふ汀の方よりも。地鎌倉勢の其中に梶原景時が郎等に番場忠太同藤太。宇津谷三郎などいふ。東そだちの荒武者共六七騎にてどつとよせ。五斗兵衛と知らばこそよき敵ごさんなれ。遁さじやらじと馬上をめぐり追取まいてむらむら。村重藤の本はづにしつかとすがつて引もどせば。しや物々し雑兵原と打なぐり。櫻の枝に弓打掛。左に廻る三郎が綿上擱んで引上れば。振放さんともだゆるまに目より高く諸手に差上。きりくくる。大の男を人礫打付られて宇津の谷が。心は苦しき葛かづら。フシはふ。命を遁れ行。地ついで左右にどつと寄せ番場ノ忠太。同く藤太是に有り。遁さじと。むしやぶり付いたる轡づら馬もいかりの高いなまき。眞砂を蹴立る四本の足かけ出せば引もどし。こたへもこたゆる二人が力。よしなき妨げ手並を見よと兄は左弟は右。順逆二つを一掴み。指上げ。あら馬に打立て。人の鞭。有あふ端武者を追めぐれば。叶はじ物と夕浪の。岩に碎くる其ふせいちりぢりばつと逃行を遁さじやらじと。三重追うて行く。地こゝに一際はなく敷く。緋をどしの胴丸に。五枚甲を猪首にきなし連錢蘆毛に乗つたるこそ。五斗大三基春なりけふの軍に討死と。思ひ込んだる武者ぶりに。おくれを見せずい

いと。濱邊をさして歩ます。地五斗はむらがる大勢を駒の蹄にかけちらし。よき敵有らば一軍と馬引なほし歸りしが。スハ是こそは能き敵と。駒を乗りする大音上げ。調落行く中より只一騎返し合すは神妙々々。出立といひ其骨骸。御名ゆかし候ぞや名乗れやつとぞ申しける。ヲ、人の假名を尋るには我名をなめるが軍の法。辨へ知らぬ葉武者には合ぬ。フシ敵とあざ笑ふ。詞ヤア葉武者とは奇怪なり。義經公の御内にて四天王の其一人。五斗兵衛實基なり。合はぬ敵と歎きし御邊が假名いかに。地聞より扱は父上かと。云んとせしが待て暫し。我首を父に參らせ。子に引されぬ武士と。父の御名を上げ給は。此上の本望なしと覺悟を極め。詞ホ、五斗と有らば不足なし。仔細有つて名は云ず。我首とつて高名せられよイザゴイ。地勝負と打寄する。駒の足なみかつし。片手綱に打物かざし。うつや白双のゑい。ヤアエイしつてい。丁々々と受けてははつしと拂ふ。鎧の袖もひら。ひら風のうら吹荒磯に。どうど打浪岩角に。碎けたばしる如くにて打寄せ。かけ寄せ。フシ付廻す。地馬も達者乗り入も達者。手綱にめぐる駿足の。轡の音はから。堅田の野路の草摺に住むかすだかか蟲の音か。いつを松蟲武士の。かうろぎ鈴蟲りん。ちりりんからめく兵具の金物。鈴々として金鐵皆鳴障泥の音はばんばか。かへさんとかつしと當る。鎧のはなを乗りすかし。右手を廻れば弓手に進み。共にはなれずくる。くるとくる。フシ追めぐる。ゑい。さけびし其勢ひ。馬のさんづも今爰に修羅のちまたと切結ぶ。血氣の大三に修練の實基。甲乙見えざる二人が働き。半時計りの戦に更に勝負も付かざれば。いぞうれ組ん尤と。馬の上にてむずと組み。ゑいや。ともみ合しが。兩馬が間にどうど落ち。大三は上になりけるを。ゑいやつとはね返せば。覺悟を極め伏まるぶを我子と知らず取つて抑へ。すでに討たんとしたりしが。詞かほどけなげの武士を討取は天晴高名。いか成る者ぞ名を名乗れと。云ひも果てぬにア、愚なり五斗殿。運も力も御邊に劣り。組みしかれては候へ共弓矢の習ひは忘れぬ某。何面目に名を語らんとく。首をかき給へ。ム、ウ尤の一言なれ共。其名を誰れとも辨へねば。我高

名の其かひも並々ならぬ御邊の武勇。埋木となす互の残念。たゞ／＼名乗れと責付くれば。地いや／＼なのらじいや名乗れ。いゝや／＼と争ひも果し並木の松陰より。走寄つたる女の聲。ヤア大三様ではないかいなと。さし覗て。詞ヤアほんに大三様ぢや。地お前にあはうばかりに玉世がはる／＼來たわいのと。聞くに驚く五斗兵衛。大三郎は組伏せられし父の手前の恥しと。思ふ心に聲荒らげ。詞いもせの契りをしたひくる心ざしはせつなれ共。戰場迄女をつるゝ大三郎といはれては。イヤ見ぐるしい地はや歸れと。詞のにべさへあらけなく。詞さあ五斗殿。はやく首を討ち給へと。態と他人に云ひなす詞。地ヤア扱は舅御様かいのと。顔を見合す玉世は悔り。五斗兵衛心をしづめ。詞ム扱は御身は本田次郎近經が娘よな。勲大三と夫婦になりしと。沙汰には聞けども逢ふは始め。親子互に鎧をけづり。我子を殺す無得心と。女心の一筋に。地思はん事のうたてさよと。膝をゆるめて立てんとする草摺を下より引とめ。詞其御心と知つたるゆゑなからて討るゝ覺悟の命。組みしかれたる此儘の我存念を立てたべ。さもなくば起上り。此大三は生害ぞと。地聞くに悲しき玉世が心。ア、申し五斗様。いつ迄もおさえてみてそのいて下さんすな。起ると其儘腹切らうと。つきつめたお心は日頃に私が知つてゐる。大三様を助けるはお前の腕の力ぞやと。あどなき詞に打うなづき。詞其方が頼まいでも。大三郎は殺しはせぬ。過し頃鎌倉殿より。我を味方に招かるれど。泉と一旦約せしゆゑ。せがれを偽り追返へす。地さすれば頼朝立腹まし／＼。手討にもあひつらんと思ひの外。近經が養子に下され。詞そちと妹背の語らひなし。假名も五斗を名乗と聞く。地其親の身の嬉しさは。フシいか斗と思ふらん。何卒大三に廻り合ひ我首を取らせ。忠義に親を見替しは。天晴の武士と。世上に汝を云はせん爲。爰かしこの手詰の合戦に秘術をつくし身を遁れ。又有る時はさもなく武士にも後を見せて實基が。朋友の討死に。けふ迄残りともまりしはナフ玉世。大三郎も聞いてくれ。詞汝を助け下されし御恩を父か報せん爲。今日只今の戦も。勲とは露知らず爰を大事と鎧をけづり。組んで落たる兩馬が間。運つよくもはね返し。取つておさへし我大力。我ながら實基は剛成る

者と心の自慢。ハアはづかしや。地面白なや。地今よく思ひ合すれば最前五斗と聞しゆゑ。我に首をくれん爲なのりもやらす討れんとは。さすが父が名を惜む心ざし。ハアでかした／＼さりながら。詞我君姪酒に迷ひ給ひ。士卒の心まち／＼なれば再び御運は開かるまじ。地物數ならぬ我ながら首取つて頼朝の。實檢に供へてくれ。さすれば五斗の家も立つ。頼む／＼と身を惜まぬ。フシ義者の詞ぞいさぎよし。詞ハア、有難き仰せ成れ共。御覽候へあの山々。並みは鎌倉勢。濱手の方は京都の軍兵。兩陣互に押並び數萬騎の見る所。五斗大三は組しかれ。其上に助られ。恩を仇なる首取しと嘲り笑はんは必定。地只々拙者が首を打ち父上の名を上げてたべ。但し助かつて基春に。つらよごせとの御事かと。スエテ恨みの詞も理にせまれば。實にも／＼武士のおもては濟ぬ敵と敵。詞ヤアこれ玉世。女房傍に有りながら。現在夫を手にかくる。五斗兵衛は遁されまじ。サア我を切つて大三を助けよ。エ、イゑゝいとほうろたへたか。女てこそ有れ本田が娘。其一腰は何の爲。さあ／＼抜いて打かけよ。地早く／＼とせり立られ。なう情ない仰事。私はお前を切うとて。はる／＼都へきたかいな。無理もわやくも事による。仰を背くが悲しいとて。嫁の身として大事の舅御。そもや／＼わしやいや／＼。是ばつかりは何ほども。詞ヲ、さうぢや／＼玉世。此大三が命かばふな。夫の親は實の親にも見替ぬが操々。地心得たかと聲かくればいやさこれ玉世。詞夫を守つて舅のいふ事を背くか。背けば直に大三を殺し。親子でないがそれでも討ぬか。地夫まだそんな悲しひ事。親子の縁を切るまいとてお首を切つてしまうては。どのお命で女夫の結び。詞ヤアぐち／＼。親子は一つ世と言ながら。永き契りの夫はなんと。地サア夫れは。詞サア討て／＼討たねば切るぞ。ヤアコリヤうつたらばすぐに離別。未來永々夫婦でないぞ。地サア切らうとはいひませぬ。詞いゝや切らねば親が勘當。いや切つたらば夫が離別。必ず切るな。いや切れと。舅がせむればとむる夫。悲しさつらさ身一つにわつとさけびて歎きしが。地涙の内に胸を極め。ア、うろたへたりさうぢや物と。すそかい取つてさもり、敷こしの刀を抜放せば。詞コレ／＼玉世。ソリヤ何する。夫の詞背くかと。地たけりもだゆる

大三をば。起さじ物とおさへ付け。詞出來たてきた。夫れてこそは五斗が嫁。地サア討てくと首さしのべ双を待つたる實基か。後へ廻り太刀振上。右の腕を打落すと。見えし双は刀の背。何のつつがもあらざれば。大三郎は安堵の思ひ。玉世は刀からりと捨て。大事の舅を嫁の身で。夫に背いて双向ひし。天道の咎めにて双がねが背へ廻つたなど。了簡つけて堪忍して。元の通りの我嫁とたつた一言おつしやつて。夫諸共比場の命ながらへて下さりませ。一人は舅御ひとりは殿御。どちらをどちらとわけがたき。心の内の悲しさを思ひやつてとかきくどく。涙の玉も亂焼。刀の背にをさめし思案。二人にそむかぬ發明はようがしこうて哀れなり。五斗兵衛は打點き。詞ヲ、てかされたり玉世。天晴御身は近經が娘ぞや。此實基に双を當つれば心も剛成る武士の妻。背て討たうが双でうたうが右の腕は討たれたり。地腕こそは切らるゝ共大三と夫婦の手はきれじ。もとのごとくの嫁舅。此上とても中よくせよと。左の手にて大三郎を引おこし。今は叶はぬ右の腕汝を討つべき手もなければ。我助けしといふには非ず運つよき五斗大三。我首をサアとれよとフシどうと。坐して云放せば。詞ハツア有難き父の恵何と報せん詞もなし。さりながら子の身として現在の親を手にかけ。地手柄せしとて何の益。いや只とかく某がと。刀拔持ち自害の體。やれはやまるな夫れ留めよと。差圖にすがる玉世の前。心はせつなき涙の下。お前を助けう計に。心をくだきしかひもなう自害とは何事ぞや。爺御様もあんまりな。大三様の身にもなり。少しは心を思ひやり。此場をのがれフシ給はれとかきくどきたる恨泣き。ヲ、さすがは女よな。詞淺はかなる心より恨むるも理。コリヤ大三。汝は未だ知るまじきが。様子有つて妹徳女は。自害して死んだわやい。エ、イして母様はへ。ヲ、母の關女は一旦離別したれ共。大三郎をばひかへして連れ來らば。元のごとく夫婦にせんと。地泉が云ひしを力には鎌倉へ下り。汝が行方を爰かしたことさぞ尋んフシ不便さよ。又某は最前もいふごとく。頼朝公の之恩を受け其恩を報せんずば。鬼畜にも劣るべし。それゆゑに此度は父が最後のはれ軍と。覺悟極し上なればとても助かる所存はなし。汝は父が首を持ち鎌倉に下り。右の様子を頼朝公へ恐れながら言上申

し。五斗の家を引起し。我妄執を晴らさん者。汝ならではなきぞとよ。地心餘つて詞には。たらぬ思ひを知れやとてかこちなげけば玉世の前。大三も涙せきあへず。スエテ恨を何と夕浪のフシ打しほれてぞ泣居たる。地時刻もしばし移り行く日影も西の濱手より。爰に一筋飛箭の來ると見えしが基春が。右手の肩先はつしと立ち籠もふかんといた手の血汐。實基玉世もコはいかにとフシ道に。あきるゝ計りなり。地大三郎につこと笑ひ。詞ハツア有難や忝なや。我心をあはれみて天より與ふる飛箭ぞや。此上に論議はなしサア我首を打つてたべ。とは云ひながら妹は先立ち。母様は東に下り。此大三を尋廻り。地行方知らねば云譯なしと。自害がななされんかと。夫が悲しいくとわつと歎けば玉世の前。正氣正體泣きくづをれ。コレ大三様。お前に最一度此世にてあはうゝを力草。知らぬ旅路を來た物をむごらしい此おすがた。どこのやつめが射くさつて此ながれ矢は何事ぞや。神様も佛様もあんまりむごい聞えませぬ。思へばく鎌倉をお立の時形見にせよと残されし一首の歌が氣にかゝり。肌身も放さず持つてきた。是此短冊見給へと涙ながらに取出し。五斗に渡すを押取つて吟じて見れば。詞武士の。弓矢の道はをしまねど。うづもれ果つる名こそをしけれ。ハツアさすが五斗が胤程有る。でかしたく。武士の名を後代に残すこそ。弓矢取る身の習ひなれ。さるによつて汝が首取り。譽を末世た残して得させん。心よく最期をとげよ。まつた某もながらへ有らば。何とぞ母にめぐりあひ。さいごの様子云聞せ。汝が跡を弔らはすぞ。地妹徳女に未來で逢はば。父も追付け行程に。半ん座をわけて待つといへ。さらばくと涙を拂ひ思ひ切つたる其風情。ア、有難やと安堵の最期。西拜まんと手を合すれば。實基が氣を取直しふり上る。劍の光もあきらけき。謠光明遍照十。方世界と。すゝむる聲に玉世のまへ。ともに唱ふる十方世界の悲しい事を身の上にとゞめたるあさましさよ。スエテ譯も涙のくりごとくに。地大三郎は眼をとぢ。念佛衆生攝取不捨と唱ふる聲の下よりも。ひらめく劍に若木の櫻。ちり行く身こそはかなけれ。玉世はわつと取亂し。目もくれ心きえくと。涙にむせてことのはもなき夫の首から抱き。前後不覺に泣沈む。思ひのかずく、フシ實基もしば

し。歎きにくれけるが。地ア、我ながらよしなき涙身の高名を顯はすは。躬が譽の其一つとくもれる聲を取直し。詞遠からん者は音にも聞け。近からん者は目にも見よ。鎌倉殿の御内にて五斗大三基春を。五斗兵衛が打取つたりと。呼はりながらしをく首を衣にて押包。ステテ涙と共に身にそへて。詞是々玉世。あへなきからだ妻の役よきに葬り申はれよと。云捨て立上るを。なうこれ暫し待つていなう。此御骸を葬りても肝心のお首がないと。思へばどうやら心の迷ひ。申ひも追善もとどかぬ未來のかたびんぎ。五體そろはぬ其人は。佛にはならぬとかや。此上の御慈悲に。其お首をもフシ給はれよと又泣。しづむぞ道理成る。地五斗げにもと思ひしが。詞ハツア大事を忘れたり。首實檢の期に及んで。玉世が歎く不便さに。首は與へて候と言譯も成るまじ。又泉龜井兩人が。疑ひ受けんも弓矢の恥。というて眼前玉世のまへ。歎くを見すて、行かれもせず。地とやせんかくやヲ、それく。望に任せ大三が首玉世に與ふるうけ取れと。いぜんの短冊さし出せば。と、様是はどうぞいな。此短冊をお首とは。ヲ、それこそは大三郎が形見に讀し歌一首。一首とかいて一つの首と讀ざるや。是此からだに其短冊連續したる三十一文字。五倫五體のてにはよく題に叶へば御佛の。心になかふ詠歌の徳。未來はまさに極樂淨土何か疑ひ嵐の音に聞えたるよきの聲は法の聲。手向の香花忘るなど。いさめすかせば玉世の前あつとかんじて有がたき。舅のめぐみを嬉し泣き夫に別れの涙の時雨。ふりみならずみ定なきあまのしほ木もなき人の。身には無常の夕けぶり立別れ行く玉世のまへ。歎きの種をわけ残す。木の下陰の思ひの宿涙を袖のあるじとは。かゝるうき身を夕ぐれのいきを都の伴ひに。志賀の浦風吹残す花も名残や惜むらん。

第五

地流水岩に砕れども末は一つの源や。頼朝公の御前には在鎌倉の諸大名威儀を正して相つめ。都よりの軍の知らせ櫛

の齒を引くごとく成れば。フシ評定取々まぢなり。地奏者の侍罷出て。詞都堀川の御所より。御使者として龜井の六郎重清。地參りぞふと訴ふれば。スハ又例の計略ならん。油断有るなど諸大名フシ心をくばる計りなり。地頼朝暫く御思案有り。詞軍半の都を明け。一騎當千の六郎を指す事仔細あらん。地何にもせよ是へ通せと御説の下。立出る龜井の六郎。錦戸伊達の兄弟を高手小手にいましめ。御前間近く謹で。詞主人義經反逆なき申譯は。先達つて靜御前。人質として差下せとの御説。權ノ頭兼房早速受合候所。主君をいさめ兼ね忠死仕る。夫れに付是成る錦戸靜御前の養父と成り。姪酒の二字を以て主君を失なひ。儕が都を守護せんたくみ。明白に顯れしゆゑ。地急ぎ兩人を召捕鎌倉へつかはし。義經が親兄の體を重んじ。毛頭別心なき條申開けの仰を請け。夜を日について參上し。讒者の舌にさへられ思はず君に双向ふこと。本意を背くと後悔最中。詞とりこに成りし五斗が妻も此たび本田ノ近經より。都へ送り返されし段。地是迄敵たい致す事ほぞをかねて神文を相加へ。慎んで差上る間和睦の一段。ひとへにねがひ奉ると辯舌水の流るゝがごとく。さもいさましくのべければ。地君も疑心を止られて。詞義經方より和睦を乞はば。我に別心有るべからず。又錦戸兄弟は。本田近經にまかせ置き。追て沙汰を極むべしと地聞くに龜井は安堵の胸。使者の面目有がたしとフシ悦ぶ事は限りなし。地頼朝甚御機嫌よく。詞義經が胸中相知れし事此上や有べきと。地御盃を下さるれば龜井すさつて押戴き。此盃を都へ上り我君に頂せ。其返盃を鎌倉へすぐに治る天下太平。一張の弓の勢ひに東南西北靡き従ふ君が代や。民も豊かに五穀は實のり。榮えくして源と氏治る。國こそめだたけれ。

延享元年甲子三月

去人懇望ありて。大作のほつれに古きをつぎたし。是非に五段にして板行におよぶ。

櫻木に咲を見まねや作花

後藤目貫終

... 日 ... 月 ... 年 ...
... 大 ... 小 ... 中 ...
... 一 ... 二 ... 三 ...
... 四 ... 五 ... 六 ...
... 七 ... 八 ... 九 ...
... 十 ... 十一 ... 十二 ...
... 十三 ... 十四 ... 十五 ...
... 十六 ... 十七 ... 十八 ...
... 十九 ... 二十 ... 二十一 ...
... 二十二 ... 二十三 ... 二十四 ...
... 二十五 ... 二十六 ... 二十七 ...
... 二十八 ... 二十九 ... 三十 ...
... 三十一 ... 三十二 ... 三十三 ...
... 三十四 ... 三十五 ... 三十六 ...
... 三十七 ... 三十八 ... 三十九 ...
... 四十 ... 四十一 ... 四十二 ...
... 四十三 ... 四十四 ... 四十五 ...
... 四十六 ... 四十七 ... 四十八 ...
... 四十九 ... 五十 ... 五十一 ...
... 五十二 ... 五十三 ... 五十四 ...
... 五十五 ... 五十六 ... 五十七 ...
... 五十八 ... 五十九 ... 六十 ...
... 六十一 ... 六十二 ... 六十三 ...
... 六十四 ... 六十五 ... 六十六 ...
... 六十七 ... 六十八 ... 六十九 ...
... 七十 ... 七十一 ... 七十二 ...
... 七十三 ... 七十四 ... 七十五 ...
... 七十六 ... 七十七 ... 七十八 ...
... 七十九 ... 八十 ... 八十一 ...
... 八十二 ... 八十三 ... 八十四 ...
... 八十五 ... 八十六 ... 八十七 ...
... 八十八 ... 八十九 ... 九十 ...
... 九十一 ... 九十二 ... 九十三 ...
... 九十四 ... 九十五 ... 九十六 ...
... 九十七 ... 九十八 ... 九十九 ...
... 一百 ...

卷之六
終末文

萱桑門筑紫轢

... 萱 ... 桑 ... 門 ... 筑 ... 紫 ... 轢 ...
... 一 ... 二 ... 三 ...
... 四 ... 五 ... 六 ...
... 七 ... 八 ... 九 ...
... 十 ... 十一 ... 十二 ...
... 十三 ... 十四 ... 十五 ...
... 十六 ... 十七 ... 十八 ...
... 十九 ... 二十 ... 二十一 ...
... 二十二 ... 二十三 ... 二十四 ...
... 二十五 ... 二十六 ... 二十七 ...
... 二十八 ... 二十九 ... 三十 ...
... 三十一 ... 三十二 ... 三十三 ...
... 三十四 ... 三十五 ... 三十六 ...
... 三十七 ... 三十八 ... 三十九 ...
... 四十 ... 四十一 ... 四十二 ...
... 四十三 ... 四十四 ... 四十五 ...
... 四十六 ... 四十七 ... 四十八 ...
... 四十九 ... 五十 ... 五十一 ...
... 五十二 ... 五十三 ... 五十四 ...
... 五十五 ... 五十六 ... 五十七 ...
... 五十八 ... 五十九 ... 六十 ...
... 六十一 ... 六十二 ... 六十三 ...
... 六十四 ... 六十五 ... 六十六 ...
... 六十七 ... 六十八 ... 六十九 ...
... 七十 ... 七十一 ... 七十二 ...
... 七十三 ... 七十四 ... 七十五 ...
... 七十六 ... 七十七 ... 七十八 ...
... 七十九 ... 八十 ... 八十一 ...
... 八十二 ... 八十三 ... 八十四 ...
... 八十五 ... 八十六 ... 八十七 ...
... 八十八 ... 八十九 ... 九十 ...
... 九十一 ... 九十二 ... 九十三 ...
... 九十四 ... 九十五 ... 九十六 ...
... 九十七 ... 九十八 ... 九十九 ...
... 一百 ...

筑紫桑門筑紫轍

筑紫桑門筑紫轍

作者 並 木 宗 輔
並 木 丈 輔

序詞大道廢れて仁義起り。國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば。道にも亦誠の本あり。其誠の源を尋ぬれば。戀慕愛執に如くはなしと。豊葦原の陰神陽神。探り給ひし天の逆鋒。種擴りし世々の祚。御小松の院の御治世。従ひ靡く君子國。オロシハ時めく春の。榮なり。地當今未だ御幼稚なれば。御母通陽門院殿。暫く寶祚を預り給ひ。踏歌の節會を御行事。禁庭守護の武士は。筑前の國の住人。加藤左衛門尉繁氏。宵より詰めて宿直守。假に授かる官職に。在京の其間右大將の烏帽子狩衣。華やかなりし出立も衛士が焚く火に光添へフシ威あつて。猛く見えにけり。地色夜半も次第に更過ぎて。明方近き星の影衛士は篝を焚きさして。郁芳門に立出づれば。オクリ代るハ時刻と入替り。フシ出て来る衛士は。奥女中。御國母の召使千鳥といへる品者が。長地すつきりとした下げ髪に似合はぬ烏帽子装束も。派手な風俗柳腰。男欲しがる曲者とはフシ目許の。愛に知られたり。地繁氏卿の後に立ちどうやら何ぞ言ひたげに。うちくすれば振返り。詞是はしたり千鳥御前風流なお姿。扱は今宵の篝火は其許がお勤めか。ハテしやれた衛士。地焚いて貰ふ篝めは果報なやつと挨拶の。中にもつくり色持たず。フシじやれは物師のしるしなり。地色千鳥の前は先取られ何と答も恥かしく。顔を赤めて居たりしが。てんぼの皮と御手を取り。詞七歳餘りの御在京御參内の度毎に翠簾の隙より垣間見て。ひよつと燃えつく戀の篝火。思ひの煙絶えぬ故露程なりと此心を。地申上げ度き願ひに

て形を賽す衛士の役。胸の焚く火に焦がれ死ぬ。命を助け給はれと御弱腰に。フシ抱きつく。地色もとより好む色男子。否にはあらぬいな船の。漂ふ心を押鎮め。詞志は過分ながら。禁中在番の某。御所の女中に不義ありなどと。風聞あつては後日の難儀。地折もあらんと言捨て。振切り給ふをそりやならぬ。詞はもじい事のありたけを。言はして置いて惘然な。地色お上の事は公なれば。こんな詮議はござんせぬ。よしお咎めがあるならば。罪を私が一人して請けませう。其段には氣遣ひなくどうなとせうとつい一口。嬉しいお詞聞かせてたべ。さうなれば何ほども。フシ放しやせぬと取付くを。詞イヤイヤそれは勝手了簡。高呑込みて請合はれぬ。地色赦し給へと振放し。あなたこなたへ外しても。猶も放れず附纏ふ折もこそあれ御簾を巻上げ。御母通陽門院。關白良基公を始とし公卿を伴ひ出て給へば。二人は庭に敗亡の。逃げもやられず平伏はフシあやまり。入りし風情なり。地色國母御聲麗しく。苦しからず遠慮なせそ。深くも思ひ染めたりし色をば如何でさますべき。詞コレコレ繁氏。國に妻子を残り置き枕の伽も七歳餘り。地懈怠なき勤番の褒美に千鳥を取らすべし。淋しき闇の穴とせよ。詞その往昔近衛の院。源三位頼政に下されしは。池の眞菰に水増して引きぞ煩ふ蒼蒲の前。地それには引替へ戀風に吹立てられし浪の上鳴き騒いだる千鳥そや。永く比翼の友羽交打せよと宣言あれば。コハ有難しと繁氏卿。千鳥は猶も悦びの。胸落着けど心はせき。詞又もや御意の變らぬ内。私はお屋敷へお先へ參つて待ちませう。地色お前は跡から御歸館と。早しこなせし妻氣質。フシいそいそ立つて入りにけり。地色折から知らず朝嵐。人の面も白々と。オグリ明渡へりたる。フシ四方の空。地色御番の代りと聲かけて。豊前の大領大内之助義弘が舊臣。多々羅新洞左衛門秀貫。白髪まじりの曲者階下間近く額を下げ。詞今日守護の勤番は。主人大内義弘が役目の所。此間より所勞に依つて某が名代。地御赦免仰ぎ奉ると奏すれば繁氏立寄り。詞病氣とあれば餘儀なき仕合せ。天子にも勅許あるべし。地色イザ役目を譲り代らんと立出でんとフシし給ふ所へ。地色執權監物太郎信俊。奏聞の事ありと訴へ出て庭上に畏り。詞扱も高雄の御山は觀音菩薩の靈驗あつく。

諸人の信心日々にいや増し。歩みを運ぶ靈地なるに。十日許り以前より身に香染の袈裟をかけ。薙髮の髪ふり亂し。高足駄にて異形の行人。夜は洞穴に取籠り。晝は山を徘徊して。往來を惱ます由昨夜陰に及びての注進。地如何計ひ申さんやと申上ぐれば。關白良基公笏取直し。詞出家ならば佛意を慕ひ。難行苦行に身を凝らし。道を試す教もあり。有髮の行者は心得ず。殊に往來を惱ます由。何にもせよ聞捨てになり難し。地帝都の騒ぎにならざる様。汝密かに行向ひ。都の内を追拂ふか。異議に及ばは召捕つて糺明せよと。仰せの内より承ると立つ所を。新洞左衛門暫しと呼びとめ御前に向ひ。詞夜前迄は彼が主繁氏の勤番。今朝よりは手前の主人。大内義弘が役目。地此討手某めに仰せ付けられ下されと。願へばやがて監物太郎イヤこれ新洞殿。詞高雄山は北嵯峨に相續き。主君繁氏が預り場所。其上拙者が承つた役目。横間より手前へとは。我儘至極と。言はせも立てずア武の道から武を望むを我儘とは舌長し。地色是非この討手は某にと。いひ捨て立つをどこへ。詞人の役目をよい年して。かち落さうとは大人氣なし。地似合つたやうに圓座の上。髭を數へて居召されと。詞あらして駈行くを走りかゝつてしつかと捉へ。詞年は寄つても此親爺。まだ腕先には覺えがある。地行かれうならば往て見よと。引止めたる力瘤。エ、面倒なる老耄めと。腕放せば擱付く。待てよとと關白の仰せも聞かず繁氏の。詞も餘所に監物太郎一ふり振つて振放し。飛ぶが如くに駈出すを。奈落までもと新洞左衛門。辭儀も作法も白砂を。フシ踏散らしてぞ追うて行く。地色通陽門院觀感あり。大内には歌争ひ武士は武を争ふ。其家々の習ひとて勇ましき有様かな。勇む心に迎ひを待たず。嫁入急ぎし千鳥の前さぞ館にて待兼ねん。宿の埒を暖めて友鳴きにせよ繁氏と。御褥を立ち給ふ御戯れは常陸帶。結ぶ契りは。千代八千代。かはらぬ。國の。三重、春風も。フシ匂ひを含む。一霞。都は辰巳高雄山峯は斜の白雲に。巖聳えて茫々たる。雲もとけ行く谷川の。スエ苔滑かに松の聲。げに物凄き。フシ景色なり。地色被衣に靡く若草の素足で拾ふ御所女中。ホフシ男交りにざさめくは。地千鳥御前のお乗物繁氏卿のお館へ。押付けて行く嫁入分道を廻つて觀音詣で。結ぶ誓ひの鐘

の緒に縁も長き山坂を。息休めにとお乗物 フシ松の。木蔭に立てければ。地色けふぞ雲井の眉とけて立出て給ふ千鳥の前。花を隈取る御姿。棲吹返す戀風も フシ憂きとや人は羨まし。地色腰元どもはざわ／＼と駕籠を放れし里雀。中にも梢が囀りて。詞何と皆の衆。小面の憎い此松に。抱付いた藤わいの。丁度あのやうに千鳥様も。繁氏様にしがみ付いてござらうの。地あんな器量のよい殿御果報なあやかり者と。なぶりかゝれば礎が差出て。詞そりや知れた事云やるがくだ。したがどうも吞込まぬは彼方のお心。今迄は御所住居やもめ鳥の千鳥様。飛立つ程に思召し。一寸でも早うお屋敷へござる筈。地それに氣疎い廻りして。觀音参りが心得ぬ。お持たせ振の道草かと尋ねれば打笑み給ひ。詞様子知らねばさう思ふも道理。言ひ出すも恥かしい。フシ事ながら。地色繁氏様に惚れたのは今更の事ならず。とうから惚れて居るわいの。詞お國には石動君とて。若殿まである御臺様。歴乎としてござるとは知りながら。地思ひためては忘れず焚付けて見る衛士の篝火。姿をくろむ濡衣つい門院様に見付けられ。はつと心に思ひの外。詞お氣の通つた粹な勅諭。是といふも自らが年月念ずる心の誠。偏に觀音様の御利生と思ふから。道寄りしてのお禮参り。地ヲ、恥かしたばかりにて フシ御乗物に召し給へば。地色それならば御尤もいよく、大悲のお力で。いちむぢのない様に晩からは念彼のだん。段々によい戀枕うん／＼雲雷鼓撃電。雷に騰取られぬ内。急ぎや／＼と我一に。行きかゝりたる フシ向ふより。地色悪者作の深編笠。供先押割り。のつさのさ。ちと乗物へ御訴訟と。のさばりながら立寄れば家來の者ども聲々に。詞願ひ訴訟の事ならばなぜ記録所へ往てぬかさぬ。地ハレ狼狽た素浪人と。嘲笑へどちつとも怯まず。汝等が知つた事てなしと。押除けて乗物の傍近く。詞コリヤ妹。見ぬ顔するは手が悪い。兄黒塚の鬼藏人見忘れはしまいがな。最前から様子を聞けば。そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話。それなれば無心がある。某をお館へ連行き。私が兄でござる。お取立て頼みますとたつた一口詞を添へなば。義理にても繁氏殿世話しやらねばならぬ事。さすれば兄が身上にありつく。免角いへば思案があると。地妹に向ひ居合腰刀ひねくり囃せしは。フシ大

人氣なくも面憎し。地當惑ながら千鳥の前乗物の戸を押明けて。詞珍らしや藏人殿。まだ息災て此世にござるか。へエ、こなたはの。いふに及ばぬ事なれども。父上黒塚群寮様は。代々續く禁裡の博士。君の覚えも目度出き家柄。男の子としては其許お一人。跡目も相續する身を以て。地十年前清涼殿のお詣の時。酔狂の上人を過ち。直ぐにそれよりお前は駈落。其お咎めにて父上は浪人し給ひ貧しき世渡り。詞悴故に家を潰し。先祖へ對して言譯なし。必ず何處で出逢うても。兄と思はゞ共に勘當と。地御遺言にて貧家の死をば。フシなされたぞや。地色それに今更妹よ千鳥よとは。どの顔下げて對面ぞと。恥しめられてさしもの悪者。押俯向いて詞なく。フシ砂にのゝ字を書きみたり。地色千鳥の前は涙を押へ。ア、恨むまじ返らぬ事。皆の衆の手前も思はず。よしなき昔の長話。日もたけて嘸やさぞ繁氏様にもお待兼ね。フシ心せかれと宣へば。地色そりやお急ぎよと六尺ども腰を振出す五枚肩。行く乗物の棒しつかと捉へ。詞イヤ妹さううまうは抜けさせぬ。いづく迄も同道と。地ねけけかゝれば家來の者ども目をむき出し。詞聞いた様子が大泥坊。兄貴めでも大事な。性根の直る意見の爲。目に物見せんと立ちかゝり。遠慮會釋もなま木の息杖。地色足腰かけて用捨なく連柳投げに打ちのめし。厄介な繩くらひ。棒をくらふとよい氣味かとどつとフシ笑うて行過ぎる。地色藏人やう／＼起上り背骨を擦り齒がみをなし。へエ、罰當りの妹め。此分て濟まさうかと駈出す後の方。暫し／＼と止むる行相。紅の衣を身に纏ひ亂鬢逆に生ひ茂り。一丈餘りの桂の杖。高足駄踏みならし悠悠と立出づる。さしもの藏人肝を消しフシ暫し。詞もなかりけり。詞ホ、目馴れぬ姿不審顔は尤も／＼。我この程より大願の仔細あつて。當山に分け入り身を凝らせど。胎金兩部の峯も慕はず。赤木の珠數を押揉んでは。四海を胸に疊む妙術。汝妹が縁を頼みに。繁氏に仕へんとは廻り遠き分別。地某が幕下に付かば高祿を得せしめ。先途を見届け取らすべしと。さも横柄なる詞つき。地色何がな搔き付く猿智慧の押直つて頭を下げ。詞何がさて／＼。落着く嶋もない某。いか様とお眼識に預りたしと手をつけば。地ヲ、頼もし／＼。いで／＼汝が高祿出世の手がかりとなる

判じ物。よく判じよと歩み寄り。松にからみし藤かづら。若葉は爰ぞと杖取りのべて。ちやうくくくと二枝三枝。薙落して是見よや。元來加藤は藤原氏。其藤をまつ此如く切放す。早く此心を察せよと。いふに角ぐむ鬼藏人。頼の織に智慧かき寄せ。詞ム、ム、ム、近年の謎したりく。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは此藏人に。繁氏が首ア、聲高し密かにく。すりや判じたる心底は。成程討つ氣でござれども。未だ君の御名をも明かさねば。地色あつとは得こそ申すまじ先づ姓名をお聞かせと。いふに領きホ、うい奴出来いたく。かく胸中を見据ゑし上は何をか包まん。詞もと某當山に住む者ならず。九州に隠れなき大内之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事。我多年天下を望み。日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ。又は諸國の安否を窺ひ。國家を握る企なれども。合點の行かぬは繁氏一人助け置いては大望の妨げと。地語る半ばへ轡の音程近く聞ゆれば。奇異の思ひを大内之助眼をくばりヤアラ心許なし。詞暫しが内我は窟に身を隠さん。地汝も暫し忍べよと言合めつ。引別れ。オクリ茂りの内へ入りにける。江戸フシ夕日に背けて向ふ高雄山勇みの鈴も華やかに馬上ゆしく乗りたるは。ナホス地監物太郎信俊身は腹巻に小手躡當。暫時に駆ける沛艾馬。鞍に引添ふ譜代の郎黨。大佛新藏諸侍。息をはかりに。フシ駈來る所へ。地色遙かに下つてオ、イ。オイと呼びかける。心せけども監物太郎何事やらんと手綱かいくり。駒を返せば新洞左衛門頭に星霜降り積れど。身體は忠義の韋駄天走り徒立ちになつて駈着け。詞ヤア曲もなや監物太郎。朝廷にても争ひし今日の討手。是非某にふり代り。其方密に歸つてくれ。地頼むくといふ間を待兼ね。ヤア心得ぬ御邊が胸中。詞さまでの討手にもあらざるに息筋張つての所望。但し其曲者に由縁あるや。心底明かさば品により了簡もあるべきが。無體の望み討し。ホ、ウそれも尤も。何を隠さう閑居して。異相に見ゆる行人は。我主君大内之助義弘殿。ヲ、驚きはさこそ。地かく打明ける上からは爰が互の了簡づく。いふを打消し聲荒らげ。詞さう聞いては猶許されぬ。禁裡表は所勞と偽り。此山に隠れ住んで。何の爲の難行苦行。それを明かさば兎も角も。地サア其様子は仔細はと。問詰められてイヤ其儀は。其

事はと。差詰つたる返答にヤア狼狽へたる一言。詞家來として主の心推察せず仕へるか。善ならば善。悪ならば悪。せ諫言を加へぬぞ。地不覺者と捨ててに引直す轡面。押取つて引きとゞめヲ、尤もなり監物太郎。詞汝が主の繁氏殿とは事かはり。主君大内は古今の猛將。思ひ込んだる初一念中々家來の諫めも聞かず。存じ付いたる大願ありと。仔細言はずの山籠り。地禁廷へは所勞の言立て。萬一此事顯れては上を掠むる大罪。大内の家の滅亡。詞さるに依つて某が無體に討手の役目を願ふ。地主持つた身は相互。一生覚えぬ此親爺が。手をさげる聞分けよと。いへども聞かずいやく。詞洞穴に壇を築き不及の望なす者多し。假初ならぬ勅命を請け。善とも悪とも仔細を聞かず。私に了簡する事ならぬく。コリヤ大佛。無益に時刻も押移る。構はずとも皆引連れ山の手をおつ取巻き。地大内之助を逃がすなと下知に従ひ供廻り。フシ一度に勇み入りにける。地色元より短慮の新洞左衛門。無念とや思ひけん。詞ヤア奇怪なり監物太郎。六十に餘る某に。様々の口叩かせ。其上主君と名を明かさせ。無得心なる人畜生。地いつ迄も動かせじと。乗つたる馬の尾筒をおつ取り引戻せば。又馬上には障泥を打ち。ハイくくと乗出す。コハリ互の忠義に精氣をもみ。心は逸れど老の腕。次第にゆるむ疲れを見込み。ナホス地爰ぞと監物はすみにあふり。丁ど當つれば跳上ぐる。馬の蹴上げに新洞左衛門跳倒されて反る所を。障泥と鞭を打重ねく。馬を飛ばして一散に。フシ奥山指して駈り行く。地色新洞怒りの齒を噛みしめ。忠義に固まる老の兩足。踏固め踏みしめて追っかけ行く一筋道。通りかゝりし銀乗物。向ふ見ずの新洞左衛門。供先おし割り駈行くをつきくくの侍立塞がり。詞不作法なる老耄。此乗物に召したるは忝くも禁中より。繁氏卿へ御入りある千鳥の前。片寄れ。フシ下れと罵つたり。地色新洞左衛門心附き是こそ監物めに。ほ手合させる質物と。乗物の棒しつかと捉へ。詞ハレよい所へ千鳥の前。乗物を踏碎き駈通るは易けれど。も。こつちに少し入用な。元の所へ昇き戻せ。宰領は此親爺と力に任せこりやく。エイくくと突戻せば。地色眞青に腰元ども足もよろく六尺も。降つて湧いたる災難もすべきやうなく理不盡に。フシ深山をさして押し

す。地色暫らくあつて山の頂。義弘が籠りたる洞の邊をうそくと。尋ね廻りし若侍頼冠にて顔隠し。空乗物をこなたに吊らせ巖の前に禮儀正しく。詞イカニ我が君義弘卿。今日禁庭の風聞。當山に於て隠住の族。急ぎ誅せよとの勅諚にて。則ち討手向ふの評定。此儀密かに達せよと。主人新洞左衛門が注進によつて。則ち家來岩淵平馬御迎ひに參上と。フシ似つこらしげに呼ばはれば。地色洞の扉を押開き。義弘は寛々とさあらぬ體にて歩出で。詞なに新洞が家來迎ひに來りしとな。大義を起す某。地小事の害を待たんより一先づ此場を通れんと。乗物引寄せ飛移れば。仕濟ましたりと鐵の大網。フシ双方より打着すれば。地監物太郎駈來り大聲上げ。詞ヤア／＼大内。武士の山籠り不審を暗らせの勅命にて。加藤左衛門繁氏が家來監物太郎向うたり。地言譯あらば天奏にて申開かれよといふ聲を。聞くよりも大内之助五體を揺る唸り聲。詞ヤア／＼黒塚は居り合はぬか。藏人は出合はぬかと。地乗物兩手にめり／＼ぐわたくわた。一人前の大地震うめく窓に鬼藏人。尻引つからげ飛來り。有無をいはずに無二無三斬つてかゝれば大佛新藏。丁ど受けてフシ受流し。地色眞向微塵と斬りかくれば。コハ叶はじと鬼藏人フシはふ／＼逃げて失せにけり。地色かかる折しも岩蔭より。新洞左衛門秀貫が追立て來る銀乗物。詞コリヤ／＼監物。推量が其乗物某が主君大内殿よな。さこそと知つてこつちもぬからぬ。此奪取りし乗物は汝が主人繁氏へ。禁中より下されし千鳥の前。奪取つたは汝へ面當。主君大内を戻せばよし。さもなくば恨みの又此乗物へ突通すいかに／＼と聲かけたり。地南無三寶と監物太郎。詞コリヤ新洞。勅命下りし千鳥の前殺さば汝朝敵同然。ヤア主を擒になすからは破れかぶれ。地サア返答はと又の影ヤレ待てせくな／＼。詞左程忠義を立てる根性。無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛殺さるゝも残念。地理を非に曲げて乗物ぐるめ打換へて得させんさりながら。詞勅命請けて生捕つたる曲者。私に助けては朝家の聞えも恐れあり。此儀にあぐむと言はせも立てず。ヤレそれは一途。高雄山の異行人おつ拂へとは最初の勅。生捕れとは異議に及ぶ時の事と。地いふに領きそれよ／＼。詞いぞ乗物を表立ち渡してくれう安堵せよと。地家來に言付け昇上げさせ。詞こりや／＼新洞確に聞け。洛中洛外。追放の行人網きせて渡すぞと。地いふに喜び尤も／＼また。幾千代の友白髮祝ふ嫁御の色直し。雲井の薫。蘭驛の乗物。双方一度に取換し。損徳なしの山道を分けて信俊。秀貫が肩も揃うてエイサツサ。誘ふ嵐の入相は。かねて思ひの羽を伸し。フシ濡るゝ鴛鴦。妹脊鳥これは遁れぬ網鳥や。網代のうきに大内之助。伴ひ歸る忠臣義士。例は少き君が代にあぐる。譽は高雄山。勇み。勇むる夕間暮別れ／＼になりにけり。

第二

唄カ、リ九折坂には繼傳馬。川瀬は船の。自由する八幡山崎二山の。オクリ間を。棹さす船渡し。黄昏よりも火を點し。夜もすがら渡す故。フシ狐川とはいふやらん。地色筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿。勤番の暇詣八幡をかけて山崎や。渡場近くなりければ暫く此方に立休らひ。詞ヤ家來ども。都は洛中洛外とも。何れをいづれと言はれぬ風景。地わけて男山の昔を尋ぬるに。豊前の國宇佐の郡より勸請ありし正八幡宮。御鎮座もことわり。紀州伽羅山ともいふべき御山。入日に輝く風景。いやはやどうも／＼。斯様に方々の眺めに心浮れ思はずも日が闌け。詞はや暮に及ぶ提灯の用意はよいか。地色見れば渡し船も向ふへ漕行き戻るを待つも退屈。堤傳ひに行くべきぞ。フシ案内せよとありければ。地色御供の若黨横口戸平。家老顔する緩急者つゝと出でて。詞ハレヤレ殿には御存知ないか。此道は登船の引場。道のだくぼく中々歩まるゝ所ならず。旦那は乗物にもお召しなされうが。家來は何になるもの。地渡しをお待ちなされよと。出過ぎた慮外も仁者の優美。詞いか様三里廻つて本海道といへば。悪所を行くは不行作。地所の名さへ狐川ばかされてはなるまいと。御戯れも時の興。挾箱に腰打掛けフシ暫し。休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の。五人七人一連れに乗り後れじと岸蔭に。立集れば向ふより。漕來る船も人の鮪着くと。乗人は乗ろとする。

上ろとすると両方が。採合ふ中に浪人と思しき武士が上りがけ。又こちらより乗る人も同じ風なる侍が。せり合ふ中を摺合うて何とかしけん互の大小。もちり合ひしを急ぎ業ほどく拍子に一方の。脇差ぼつきと。折れにける。地色はつとばかりに折られし侍。面目なさに笠傾け。佇む内に相人の浪人。行過ぐるを堪へ兼ね。詞侍暫しと呼びかける。地急ぐ身なれど是非なくも立ちとゞまりし互の氣相。スハ事こそと船は逃げ。繁氏卿も乗後れながら逃げて退かれねば。詮方煙草くゆらしてフシ打眺めてぞおはします。地色件の侍折れたる脇差拾ひ持ち。相手に向つて詞も荒さず。詞誠に恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠州者。永々の浪人故尾羽打枯し。餓死せんよりはと存じ。武士のあるまじき一腰を賣代なし。奉公稼ぎに西國へ罷下る。時の過ちとは申しながら。此方と摺合ひに此如く差添をこぢ折りあれに歴々も見てござれば。面目のすゞぎ様なく難儀に及ぶ。地色何とぞ了簡の付くべき儀ならば了簡付けてお通り下され。詞それとも。御思案に及ばずば。地御不肖ながら相手になり。討果して下されうや。フシお返事。次第と相述ぶる。地色相手の侍ちつとも臆せず御尤も至極々々。詞手前鹿相者故思はずも不調法。ガ討果す儀をお詫びは申さぬ。しかし差添が竹光故。面目ないとは御胸中が小さい。ア、これ／＼差添でも武士の魂竹光でも苦しうないとはな。ホ、一筋なお心故。是しきを恥辱と思召す。地イデ某が大恥かいてお目にかけてんと。刀拔出し兩手に握り。遠慮會釋も鞆口に。ぼつきと折つて目先へつき付け。詞これ御覽候へ手前も此通り。拙者めは播州浪人。都方へ奉公稼ぎの路銀なにかに詰りまだ其許は差添拙者は刀。地色恥辱は倍増す武士の魂。折つて見せたは外聞を共に現はすお腹癒せ。詞それとも打果す儀に違背は致さぬ。お相手にならうか。と申して好みも致さず。又逃げも仕らぬ。地色いか様とも御勝手次第。サアお返事はと膝立直せば。ヤレおせきなされな言分ない。詞ハレ其許にもいかい難難なされたの。地色よしなき儀を申しかけお刀を折らし。お腰が書いて氣の毒。詞イヤ拙者めが鹿相て其許のお腰が。ハテそれは此方も鹿相。是は／＼。夜中故しかとお顔も見えず。地御縁あらば重ねてお近附きに罷りならう。詞左様致さう。

ハレヤレお暇を取りましたと。地互の禮儀フシ砂打拂ひ。立別るゝを横口戸平。大口あいて高笑ひ。詞ヤレ／＼。いかに浪人すればとて。折れる物を腰に挟み。奉公稼ぎとは野太い和郎たち。地色イデ武士の見せしめに面見しておこと立上るを。繁氏はつたと睨付け給ひ。御帯刀に手をかけて怒りを含む御顔ばせ。悪者づくりも主の威にフシ恐れてかしこに。うづくまる。地色行過ぎたる二人の侍立ち止まつて一思案。心ならずも双方が引返して誓くは。互に詞もなかりしが。脇差折られし侍小腰をかゞめ。詞誠に其許には刀を折り。我が心を宥め下されたれども。今お聞きの通りあれなる御家來。何かと悪口せられ。何とも此場が濟み難し。地色御思案極め下されと横口戸平を尻目にかけて怒りを含む物腰に。詞いか様。あの通りに沙汰あつては。お互に身上仕官の妨げ。地色一旦濟んだる事なるによしなき匹夫の口先故。討果す事近頃残念。詞と言うてあれしきを相手にも大人氣なし。また其主人へ兎や角いはゞ浪人の糧に盡き物取りなどときみせられん。エ、是非もなき次第。地色此上は。潔う刺違へ。最期を共に致すまいか。詞成程拙者もその覺悟。ハテ命冥加な下郎めと。地色繰返し／＼残り多げに戸平を睨付け。詞イヤ此所。地尤もと双方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き何か囁き給ふにぞ。相心得て乗物より。御差替の大小をフシヤがて取出し差上ぐる。地色其間に兩人座を占めて。既にか／＼と見えければ。ヤレ暫らくと立寄り給ひ。詞最前より御兩所の心底尤もさこそあるべき儀。併し。大功は細瑾を顧みずと申す。僅かの恥に命を捨て。いづくの誰と知らざれば犬死も同然。またお腰のあいたるは。地色差錆びたれども某が差替にて塞ぎたし。異議なく貰ひ給はらば喜悅ならんと一腰宛。差出し給へば兩人とも。はつとばかりに平伏し。有難き御裁配。違背申すは憚りながら。詞いづくいかなる御方とも存ぜず。まして御恩受ける筋なし。地此儀は御免と辭退の詞。ホ、一理あり至極せり。詞其儀は。筑前の國加藤左衛門繁氏と申す者。即ち當所は。禁庭より馬の飼領に下し置かれ拙者が領分。其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀其難儀を遁れん爲。進上申す此兩腰快く受け給はゞ。いかばかり大慶と。地退引ならぬ仁者の詞。ハ、ハ、ハ。はつと押戴き／＼。

冥加に餘る御情おんなさけいつの世にかは忘るべき。元我々は何某なにがしと。いはんとするをア、これ／＼。詞お名承つては。恩にかけると申すもの志が無足致す。顔も知らず名も知らず。重ねてお目にかゝつてもお近附でござらぬぞ。急ぎの道お出であれ。お立ちあれと。地慈悲に慈悲ます御詞。兩人餘りの有難さに返す詞もなき中に。猶も手をつき頭を下げ。詞斯くまで深き御情申すは恐れ多けれども。とてもこの事に此場の仕儀。御家來も沙汰なき様。地仰せ付けられ下されと。願へば繁氏返答なく。最前笑ひし若黨の横口戸平を呼出し。詞汝に別して用事あり。是へ來れと仰せに任せ。地色何心なく來る所を飛びかゝつて首打落し。詞手前の政道は斯くの通り外に他言は致すまい。地お別れ申すと細道を。わけて情の御裁おんさばき。有難しとも兩人は御後影。伏拜み。伏拜み。爰は所も男山。フシ正八。幡の化身かと。思ふ迷ひも狐川。渡しを急ぐ旅人と。陸を早める浪人の。心は一つ。行く道は。二つに隔つ。淀堤左右へ。こゝは。三重別れ行く。地色梅を諸木の兄とせば。フシ櫻は花の。振袖や。姉が小路に美を盡くし華麗を飾る殿造り。加藤左衛門繁氏の館には。庭を野山と櫻狩上下。フシさゝめき賑へり。地色奥方近き坪の内下部の出入叶はねば。腰元衆が掃除役。中にも小りうが竹箒塵取りさらへと掻きまぜて。問はず語り何と皆の衆。詞此廣庭へ出躋の様にあの社は何といふ神様ぞ。あた邪麗な掃除がならぬ。箒ついでに掃出そぢやあるまいか。コレあの人とした事が。あれはお國から勸請くわんじやうなされた殿様の氏神様。龜末になどしやつたら。逆討が當るぞやム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや。そんなら今度お國から。勸請なされた御臺様。千鳥様と殿様のしつぽりを御覽じたら。ふんすんでたまるまいと。地案じたはあての槌。お妾女郎てかけぢやうと奥様の中のよいのはどうした事。あんまりで拍子が無い。序に格氣もお國から。勸請したらよからうと。フシ苦もしどもなき高咄。地色折から塀の外そと面には。萬よしなを取交せて。賣る商人の聲高くほの聞ゆれば腰元ども。詞そりやこそいつもの百物賣。地小面の憎い商人め裏門から呼込んで。黽なまつて遊ぼぢやあるまいか。こりやよからうと騒ぎ立ち何がな見たがる聞きたがる。浮氣盛りの女の裏門の戸開けて呼込めば。詞ハイ粉類

なら何なりと。番椒ばんかでも胡椒こしょうでも。イヤそんなもな入りませぬ。いつもの様に賣立て、聞かさつしやれ。それが賑なら何にも買はぬ。地色早う／＼と口々に。せがみ立てられまつかせと。頼杖たのぢやうついて聲張上げ。三下り唄のこ／＼や豆の粉や。まめな手くせに尻こぶた。ふつつりひ／＼と山椒の粉。奴様やつさまには蕃椒ばんか。坊主の好きな胡椒の粉。若い嫁御のはなはじく。姑御しやうごには辛子の粉。おてきに盃さしもぐさ。合身柱あひみぢ。直達すてて心もちや。吉野葛よしのくず。ナホスフシ召しませいとぞ賣りにける。地色腰元どもは目を引き袖引き。詞マア當分何にも入らぬ。大儀たいぎによう喋りやつた。地のこ／＼去にやと打笑ひ。フシ一度に奥へ走り入る。地商人は荷を下し。詞エ、今日けふも亦取りくさつた。テモなめ過ぎた女郎さいどもと。地咳せききうそ／＼差覗き。うろつく内に監物太郎。ひよつと來かゝり小蔭にて。窺ひ居るとも知らぬが天命。荷箱の内より大小取出し。身拵へしてのつさ／＼。忍び入るを曲者待てと呼びかけられ。南無三寶と振返る。隙をあらせず庭に飛び下り擱つかんで大地へぎやつとのめらせ足下に踏まへ。詞ヤアラ心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小取出し。奥を目がける氣相きさういか様仔細しじゆあらん。眞直に白状せよ。骨を斷つても言はせにや置かぬと。地控ひしやう付くれば吠面ながら。詞ヤア下郎げらうとは舌長し。汝等おのらが崇あがまへかしづく。千鳥の前が兄黒塚鬼藏人。繁氏が爲には小舅こじゆ。主同然の某を。土足にかける罰當りめと。地いふに驚く色目を隠し。詞シテ其兄が何故に。斬込んで誰に敵對。目指す相手の名は何と。ヲ、その目當は加藤左衛門。繁氏が首取つて。地知行ちやうぎやうにすると刎返すを。起しも立てず扱こそと。刀の提緒ひしやう手ばしかく後手に括くくり上げ。定めて一味の族もあるべし。密に詮議と引立つれば。奥より來る女中の足音。見付けられては詮議の妨げ。如何いかはせんと取つ措おいつ思案の扉開いて幸ひ暫しの獄屋。神は見通し許させ給へと社の内へ。無體に押込み鰻銚うなぎぢやうしつかとおろし置き。オクリさあらぬ體にて入りにけり。フシ妹脊の中に。固かたりし石動丸の御母君。長地牧の方とは申せども子持ちと見えぬ御形。花見座敷へ出て給へば。跡に續いて千鳥の前。大内山の木隠れより移し植ゑたる花なれど。さすが妾てかけと本妻の。フシ禮儀は戀の品定め。詞ナウ千鳥様。連合れんがひ左衛門繁氏様。七年ななとしあまり

禁裡きんりの勤番首尾きんぱんしゆびよう勤めておしまひなれば。是からお國で御休息。永々の在京に。夜のお殿みやの御ごもなく。お淋しからんと案ぜしに。地色ぢしき自らになり代り殿の心を慰むる。そもじ様があるとの噂。國許で聞く其嬉しさ。とんと心が落着いてゆる／＼上りし今度のお迎ひ。けふは歸國のお願ひに。禁裡様へお上りなれば。お暇いとまが出るや否や。詞ことなた様を國へ伴ひ。たアんとお禮を申さにやならぬと。地色ぢしき奥底おくそこもなき御挨拶。詞こと是はまあ有難いお詞。今更申せば何とやら。言譯がましく悪けれども。地色ぢしき數ならぬ身の殿様に添伏そんぷくし。御臺様のお目にかゝらばお叱りもあらんかと。思ひの外な御憐み。さう結構におつしやつてはお返事もなにくし。詞こと千鳥ちどりようせい斯うせいと腰元衆同然に。地御意ぢごいなされて下さりませ。詞ことハアテわつけない。大事の殿御を半分づつ。いとしばがつて貰ふもの。如才じさいにしてよいものか。其代りに此上外で殿様の。悪性があるならば。二人して言はうぞえ。そりやお氣遣ひ遊ばすな。お前にお世話はかけませぬ。地御名代ぢごなしろと二人前まへ私が番を致しませう。ヲ、それ／＼と領りやうき合ふフシ仲なつよき魚と水入らず。地色ぢしき腰元こしどもは手をさそにお氣慰きゐみと持運もちゐぶ。雙六盤すわくばんや歌がるた野風のふう爐いろり提てい重じゆう茶ちや辨べん當だう。取散とりさんせしはお座敷を野山に移す花見酒。フシ數々めぐる。盃さかずきに御臺所ごたいしよ興きやうじ給ひ。詞ことおつ付け殿様お歸りあらん。お目にかけるも二人が御馳走。アノ櫻を題にして腰折れなりと一首宛。地色ぢしき短冊たんさくをつけまいかこりやようお氣が付きました及ばずながら我もと。雙六盤すわくばんを眞中へ。脇わき息いきに押直させ二人が臂ひでをかけまくも。かしこき國の和歌の道みちフシ案あんじ入つたる御酒ごしゆ機嫌げん。地色ぢしき心隔こころわてぬ中々は。何に遠慮えんりよもなきさ漕そうぐ海士かいしの小舟せうふねや。とろ／＼目。すや／＼寝入り給ひければ。腰元こしどもは囁ささき合ひ仲なつのよい同士どうし打解うちとけて。詞ことテモ快たう御寝ごねなつた。お目のあくまでこちらも暢氣のほろと。地座敷ぢざしきの障子しょうじそつとさし。フシ皆々一間に入りける。地色ぢしき程なく左衛門ざゑもん繁氏しげうぢ卿きやう歸館きかんとを告げる奥使おくづかひ。跡あとよりしづ／＼入り給へば。監物かんと太郎たろう出て迎ひ是はしたり。詞こと殿様のお歸りを。奥方おくかたには御存ごぞんじないかと。地ぢ一間にかゝればさなせそなせそ。詞こと餘念なく寝入りし體。互たがに妬ねたむ色もなく。誰たれまじきこそ満足なれと。地ぢ悦よろこび給へば頭あたまを下げ。詞こと何様御意ごいの如く嫉妬しやくとのあるは婦人の常。その氣遣ひなき

御ご二方にかた。斯くまで御仲ごなつよろしき事我々までの大慶と。地ぢ申まをし上あぐれば繁氏しげうぢ卿きやう。傍たもとなる盃さかずき取上げ給ひ。詞こと禁裡きんり表うらの首尾しゆびもよく。歸國の暇いとまを賜りし悦よろこび。地色ぢしき我も彼等が花見の相伴しやうはん二人が風情ふうじやうを看みにて。花の本はなの一献いっけん。酌しやくせよと宣へば。ハ、ツト銚子しやうしを押し取り。注つぎかけたりし不老不死。薬の水の滴たりと一つ受けさせ給ふ折をりふし。雲心うんしんなく吹く風の盛りを散らす一嵐ひとあらし。受持うけもちち給ふフシ盃さかずきへ舊ふる一房いっぼう落ちにける。地色ぢしき繁氏しげうぢつく／＼うち詠よめ。詞こと散ればこそ。いとど櫻は目出たけれとは詠よめみたれども。雨あめに萎なみ風にもまれ。盛りの散るは科かならず。いまだ時にも逢はぬ此こ雷かみなり。盃さかずきの中へ散つたる事。地色ぢしきこそは人界にんがいの儚はかなき教しやくへの老少不定らうしやうふじやう。老いたるが先立つとも。フシ若わかきが跡に残るとも。地色ぢしき定め難たがきは人の命。忘るまじきは後生の道と。文武ぶぶに猛たけき繁氏しげうぢの無常むじやうを觀みずる悟道ごどうの一言いっごん打ちしをれたる。御有様。監物かんと太郎たろうも尤もと共に悟りは開けども。わざと詞ことに勵むみを付け。詞ことコハいひ甲斐かひなき御迷ごまひ。釋迦しやくぢやといふ賣う僧そう頭かぶ。さまざまの偽いつはりりを書散らし。一文もんぶん不知しらずの姥おば鼻はなをたらさん爲ための一切いっさい經きやう。譬たとへへて申まをさば盜賊たうさくを捕とらへ。殺生せつじやうなりとて助け歸かへさば國家こくがの憂うれとなる道理だうり。地ぢアア忌いはしき後生の道と。心に思はぬ雜言ざつごんに佛法ぶつぽふ講かうるも諫いさなめの忠言しゆうごん。心を感じて打領うちりやうき。誠に汝ながいふ通り弓馬きうばの家に生れながら。假にも無常むじやうに引かされては武の道は立ち難し。詞ことこの後ふつつと思ふまじさりながら。よしなき事に心も滅め入り何とやら物淋ものしみし。地ぢ次じの間に檢校けんぎやうに琴を弾ひかせよ。御臺ごたいや千鳥ちどりに目を覺ささせ我われは是にて慰なぐさまん。フシ早はやとく／＼と宣へば。地色ぢしき只當然ただたうぜんの御戲ごたがひれ強たかひて諫いさなめに及ばずと。オクリ御前ごまへをへ立つてフシ入りにけり。詞ことホ、いつになき我佛法わがぶつぽふ歸依きゐ。武邊ぶへんに弛たるもつかんかと案ずるは尤も／＼。地色ぢしきイデわつさりと酒宴しゆゑんを催もよほし結むすばれし氣を晴はらさんと。立寄たてより給ふ障子しょうじの内。コハリ不思議ふしぎや俄はかに物騒ものさわがしく。あたりに響ひびき。庭の木草きくさもさわさわと。ナホスフシ風も身に沁ひむばかりなり。地ぢコハ心得こころえずと一間の障子しょうじ。さつと開いて見給へば。餘念なく臥ふし給ふ二人の黒髮くろさつ。眞逆まぎやく様に蛇へびの如く。鎌首かまかぶぼつ立て喰く合あふ有様。さしもの繁氏しげうぢ怖おそ氣き立ち。フシ呆ほうれて。詞こともなかりしが。地色ぢしきハツア恐おそるべし／＼。詞こと外面うへめん似に菩薩ぼさつ内心こころ如夜叉にやと説とかれたる。佛の戒め目のあたり。地ぢ顔かほに白粉せくふん丹花たんかの唇くちびる。粧まひ飾かざりて

菩薩の如く。互に妬む顔もせず。打見には仲よき體。心の底に邪鬼執念。絶えせぬ證據をおのれと顯はし。かく淺ましき體たらく。忌はしや穢らはしや。詞妻子は地獄の家土産と。説き示されしに。フシ疑ひなし。地色花の蕾の散つたるに思ひ較べて觀ずれば。是ぞよき菩提の種。家國榮華も望みなし。迷ふが故に三界の。火宅にフシ心を苦しめり。地色悟れば十方空ならずやと。今迄心の滅入し上。いや増さりたる發起心。オクリ烏帽子へ狩衣脱ぎ捨て給ひ。差添抜いて髻を。ふつと切つたる輪廻の絆。硯引寄せ書置を。スエテ認め給ふ其内に。奥座敷には檢校が。琴の音色もしをらしく。詞歌の唱歌は聞えねど。弾く爪音は薄雪か。薄き契りも過去の因縁。地必ず心残すなとこまなく筆に書盡くし。御髻に烏帽子裝束。書置添へて彼處に置き。裏門より悄々と立出ては出てながら。さすが恩愛捨て難く。振返つて涙にくれ。二人が夢覺め斯くと知らば。さぞ歎くらん不便やと。見やり給へば蛇形の黒髪。コハリ猶も盛んに挑合ふ執着心に。ナホス愛想もつき。身顛ひ立て、足早に。フシ行方知れずになり給ふ。地色斯くとも知らず監物太郎。立出づれば一間の騒動。見れば件の怪しき姿。驚きながら走り寄り。用捨もなく喰合ふ黒髪。差添抜いて斬放せば。二人もびつくり起上り。顔を見合はせ一時にフシ吐息を。ほつとつき給ふ。地色監物太郎あたりを見廻し。我が君はまします。御烏帽子狩衣の。脱捨てあるこそ心得ねと。立寄り見れば御髻に。一通添へて残されしは。はや御遁世か情なやと。驚き騒ぐに二人も立寄り。詞ヤア殿様は遁世とや。地何故の御出家ぞと。あまりの事に興さめて。泣くも泣かれずうろくくと。フシ共にうろたへおはします。地監物やうろくく心を鎮め。詞ヲ、驚き給ふは道理。先程禁裡より御歸館の節。いつに勝れし御機嫌。あれなる櫻の本にて御酒宴の折から。御盃へ花の蕾散つたるとて。無明の悟りを開き給ひ。地色さも心細く御意なされしを。打消しては置いたれども。詞御兩人の髪逆立ち。蛇の如くになつて喰合ひしを。御腕あつての發心かと。地歎くに御臺千鳥の前。亂れし髪に心付き。現ともなく夢ともなく。咬つて咬はれつ争ひし。互ひの覺え一時に。スエテどうど。轉びて泣沈みフシ前後。不覺に見えけるが。地ア、恥かしきは人

の心。此度都見物がてら御迎ひに上りしが。千鳥殿と殿様との睦まじさ。見るよりも妬ましく。胸もかき裂く腹立を。じつと堪へて上面には。美しうつき合へども。寢た間に本心顯はして。淺ましき有様を。お目にかけしか悲しやなせめては國に残りたる。石動が大人しく生立つ迄。思ひとまりて給はれかし。呼び止めてくれぬかと歎き給へば。フシ千鳥も涙。地けはひ化粧紅鐵漿より。髪形ぞと艶付けて。かた筈よ吹上よと。結び揃へしは殿様に。見限られまい爲ばかり。其髪が蛇とならば。身體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも道理ぞや。御出家も皆私が業。イヤ遁世をさせませし。科人は自らよ。イ、エ私が。ハテわしがと。涙みなぎる繰言に。思案半ばの監物も。フシ袴の襦に淵をなす。地御臺所は涙を押さへ。イヤく泣いては濟まぬ事。まだ程遠くはござるまい。追つかけて止めんと。千鳥諸共立上るを。詞ヤレ待ち給へと押し止め。とくより某左様は存ずれども。いか程お止め申すとも最早止まり給ふまじ。地色先づは残し置かれたる御書置を見給へと。一通を差出せば。是非もなくく取上げる。涙に聲を震はれてしどろもどろの讀みくせを。千鳥も共に差覗けば。文詞涙ながら書残す一通。一つ。われ弓箭の家に生れ。なに暗からぬ身なれども。家國を捨て妻子を捨て。世も捨人の沙門となるは。前世未生の佛縁ならん。思ひ測らず降つて湧いたる遁世を。胸狭き女心に。淺ましき姿を見せる故と。嗚かし歎きの餘り。共に姿も變へまく思ふらん。フシさにあらず。地色妻子珍寶不隨者とあれば。死出の旅路は別れく。伴へる人もなく。隨ふ者もなく候。詞とは言ひながら。只忘れがたきは石動丸。やうく二歳の時國に残し。それより又七年餘り。顔も見ず候へば。さぞ成人も致し。大人しくもなりつらんと。思へばいと懐かしく。忘るゝ事は是なく候。石動丸を傳立て。加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば。若しや流浪も致さんかと。是のみいかう案じ候。必ずく歎きにくれ。地忪が事を忘れぬやう。返すくも頼入り候。千鳥へも一通を。残さんと思ひしかど。詞心せかれて候ま。此文を一所に詠め。牧の方に力を付けてくれよかし。言ひたき事は山々なれども。涙に筆も廻りかね。と。地讀みも終らず三人は。スエテわつ

とばかりに。泣沈む。地色監物太郎涙をおさへ。殿の事は歎きても詮なき事。一大事はお家の跡目。若君の御身の上。詞殊更隣國には。大内之助義弘といふ佞人あれば。君御遁世なされし事を押包み。幸ひ歸國を許されし砌。いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せかけ。御臺様に我君の装束を召させ。一刻も早く國許へ御供して下るべし。地跡目の願ひはお國から。急いで御用意遊ばせと。せき立つ詞に歎きを止め。兎角よきにと烏帽子狩衣。取上げて立ち給へば。千鳥の前袖を控へ。詞私もお國迄お供は致す身なれども。お前は石動丸様といふ若君あれば。是に越したる形見はなし。地色せめて朝夕御身に添ひし。此烏帽子狩衣を。妾に下し給はれと。取付くを監物太郎。詞御尤もには存ずれども。たつた今お聞きの通り。御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣。此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。ヲそれよく。地究竟一の形見ありと。社の鍵を取出し。詞是はあれなる祠の鍵。社の内には其許の。大切になさる形見あり。扉を開いて取り給へ。併し爰をよく得心あれ其形見の成行にて。地お國へお供は叶はずと。鍵投出し謎をかけ。御臺所を誘ひて。オクリ奥深くこそ入りにけれ。千鳥は一句の判じ物御形見の成行にて。お國へ行く事ならぬとは。どうやら物のある言ひ方。譯こそあらんと庭に下り。社の傍へ立寄つて何かは知らず開いて見んと。鏡前あくれば待兼ねしと。飛んで出でたる鬼藏人。ヤレ怖やと逃退きしが。顔を詠めてヤア兄様か何故爰に。縛られたはどうした科と。驚きながら親は泣寄り。縛め解けば身構へし物をもいはず駈出すを。コレ待つた藏人殿。詞監物太郎が一言に。思ひ合はして思案をすれば。どうでも様子があはるわいの。ヲ、いうて聞かさう某は。大内之助義弘殿に頼まれ。加藤左衛門繁氏が首を取り。出世の種にするわやい。地こ、放せと振切るを。駈塞がつて待つた。詞それ何にも様子が知れた。それなら矢張り縛つて置こもの。地こなたの様な悪人と。一所でないといふ證據。御臺様や監物殿への言譯と。走寄つて藏人が差添拔取り。手早く眞向斬下ぐれば。南無三寶と拔合せ。爰を最後と戦ふ太刀音。地色監物太郎は小蔭に隠れ。それと見ながら詞もかけず。庭には兄弟修羅の巻火花を散らして。三垂へ斬結ぶ。地鬼藏人は油断にて。初

太刀に受けし眉間の深痕。眼も眩み滅多斬り。こなたも手弱き女の手業。數ヶ所の疵によるほひながら。難なくおつ伏せッ乗つかかり。地色念力通す止めの刀。監物太郎庭に飛びおり。詞ヲ、健氣なり千鳥様。御心の操顯はれ。疑ひは晴れたれども。地此深手ではもう叶はぬ。心はいかにと勞はれば。苦しげに起直り。詞自らとても殿様のお情受けし者なるに。様子によつてお國へは。叶はぬとありし時。酷い仕方と恨みしが。地此しだらでは疑ひの。かゝるは道理わしが因果と。諦めて居ますれども。兄妹の悪心故。おのづと殿様に御縁が切れる。是ばかりが黄泉の障りと。血汐に染みし五體を投げ。スエテ泣く聲。奥へ聞えてやッ一間の障子。押開き。御臺は烏帽子狩衣を召され。悠々と立出て給ひ。詞我こそ假の加藤繁氏。千鳥の前が誠を感じ。二世も三世も變らぬ契りと。地の給へば手を合はせ。嬉しき今のお詞は。我が君のお詞より。忝さは百倍と。につと笑ふが置土産。ッ此世の縁は切れにけり。地色いとしやなうと御臺の歎き。泣いて歸らぬ愛別離苦。オクリいざさせ。給へと引立て。頃は薄暮よき時分と。せけばせかる牧の方。力なくッ立給ふ形見は跡に心を残す。着せし人は代るとも變らぬ烏帽子狩衣。假の浮世に迷はしと。悟りッ出てたる主は。直ぐに金色菩薩の位。歎き給ふな歎かじと。悟れば果敢なき花の宴散。りにし姿を残し置き本國。にこそ立歸る

第

三

地富んで香らず貧しうして貪らぬは未可なり。富貴にして禮を知り貧しうして樂しめとは。弟子に示せし孔子の詞。大内之助義弘威勢九州に蔓り。自ら武運を朝日にたくらべ横雲將軍と尊號し。人も許さぬ高胡床浮べる雲の上見ぬ驚。明日は我が身も知らぬ日の。ッ筑紫の御殿と時めきける。地色伺候の諸武士も自から伸上つたる大名氣質。申にも近習の關口隼人御前に進出で。詞豫て仰せ渡されし通り。近國の大名より家々に傳はりし重寶。今日獻上致す

管。則ち寶見分の役は多々羅新洞左衛門と承る。それにつき彼が娘。お國に稀なる美人なれども。いかなる事か終に男の肌觸れず。生れのまゝなる生娘と諸家中の風聞故。御手廻りの召使にと存じ。上意と申してお次まで。地呼寄せ置き候らひしが御慰みに御覽もやと。何かな御意に入らざる追従。フシお髭の塵を取りかける。地色義弘寛々と打鎖き。詞勅説と偽り諸國の寶を集むるは某が謀叛一味の證。連判状も古めかしく。氣をかへて人質の代りにする。家々の寶。まだ請取るには時刻も早し。其間にかの娘ちよと面を見んそれくと。地仰せに斯くといひ次げば。オクリヤがてへ御前に立出づる。地色世に拗ねて。フシ男選みに。年長けし。地色新洞左衛門が娘ゆふしては。長地つひに殿御の肌知らぬおぼこと見えぬ洒落姿。髪に結目に挿したるは。梅花にあらぬ。フシ白羽の鎗矢。地色筭ならて響か何の御用でお召しぞと。案じる内も面はゆく。お書院近く。フシ坐しにけり。地色横雲將軍遙に見やりゆふしてはお事よな。詞ハレ見事。よい器量ノ。汝が親の新洞左衛門忠と義とに固まりし心より。頑固に育てられ。麻につる蓬とてそち迄が身持ちも堅く。一度も男に肌觸れぬと聞き及ぶ。器量といひ風俗まであつたらしき日陰の花。地色殊更男選みとあれば疑ひもなき手入らずの大無垢。水揚はこの義弘今宵から抱いて寝ると。ほやりと笑ふしほの目は。フシ仁王の戀する如くなり。地色ハツト思へどゆふしてはわざと額を疊に付け。詞私風情の賤しき女お寝間のお伽致せよとは有難い事なれども。御臺様の思召し一家中へ聞えても女。早は行くまいし。家來の娘をわつけもないと。我が君を笑はせませすも如何此儀は御免なされませ。地ほんに誓文殿様を微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべとお詞背くも君が爲と。辭儀する詞の控へ綱。フシ切れもやせんと案じ居る。詞ホ、ウ此義弘が言出すこと二言と詞を返す者恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者出来たりさりながら。一天下の主となる某十二人迄は女房持つても苦しからず。否ても應でも妾にする。地深く魅入れし鯛の口。通れるだけと手をつかへ。詞冥加に餘る御意なれども。私はちと譯あつて一生男に肌觸れて。身を穢す事ならぬといふ。申譯は頭にさしたる白羽の鎗矢。細かな

様子は父上に。地お尋ねあれば知る事と。いふに差出る關口隼人。詞ハアゆふして殿悪い合點。殿様に惚れられるは此方の爲に福徳の三年目忝いとお請け申すが上分別。親御も浮み上る事。其頭に挿いてある白羽の矢が邪魔になり。地仰向に寝る勝手が悪くばデエ抜いて進せんと。立寄るをむつとせき上げこりや何しやると突飛ばし。詞親新洞左衛門が御前に居ねば高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず。親迄が浮み上るイヤ果報ぢやの福徳のと慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふア、慮外ながら。サア手は愚そなたの伸びた鼻毛の先でも障へて見や。地赦しはせぬと膝立直し睨み詰めたる理窟詰め。言込められてしがなの隼人。手持。フシ無沙汰に尻込みす。地義弘居丈高になり小ざかしき女めと。肩先擱んで引摺り寄せ。詞女郎の餓鬼は十二三から男を見ればびろ／＼と前後を見る當代。地察する所内證に隠し男を拵へ置き。其男への心中立。詞外の矢先は通さぬといふ心で。起請の代りに此鎗矢挿して居るに違ひはせまいと。地矢を擲抛つて引起し。サア不義者めが名をぬかせと。責問はれてもゆふしてはもとより覺え涙聲。詞コハ無體なる御尋ね私も木竹の身ではなし。地惚れてくれる殿御があれば欲しうなうて何とせう。持つに持たれぬ譯あつて背丈伸びた此年まで。人の數にも入らぬ身を不便なともおつしやれず。酷いお主の心やなさら／＼不義の男はなし。疑ひ晴れて給はれと。身を悔みたる恨み泣き。フシ涙。片手に詫びければ。詞ヤアまだ男めを庇ひをる。よし／＼言はせ様ありと。地口には言へどさすがは戀。目顔で嚇し立つたり居たり。身悶えすればお次より。ヤレ待ち給へと聲かけて。立出づるは新洞左衛門廻返りし天の邪鬼。隼人はお座に堪り兼ね。詞老人の御苦勞に悪い所へよう御出で。地それにゆるりとお遊びと言捨てこそ／＼。フシ逃げて入る。地娘を引退けどつかと坐し。詞不義の相手が聞きたくば某が申上げん。娘が隠し男は忝くも我朝の神の司。天照皇太神宮。何と肝が潰れますか。したが斯うばかりでは合點行くまい。コレ殿耳を浚へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ。其社より一人づつお座子を取り給ふ。印には家の棟へ不思議に白羽の鎗矢立

つ。其役を勤めた我が娘。一旦神に仕へし女一男男を持たすまいと。誓ひの爲に神明の鎬矢を頭にさゝせて不淨を拂はす。地それを無體に拔取つて妾にするの足かけのと。爵をかぶる御合點か。詞其上これ迄願のかいだるい程諫めても。聞入れのない謀叛の企。今となつて意見せぬは。所詮いうても得心は召さるまい。ハテ毒食はゞ皿ねぶれと諦めてする奉公。地ろくだまに望みも達せず榮耀らしい妾狂ひ。まだ早い。置き召されと。病犬の噛み附く如く。只一口にわんとばかり。フシ膠もしやしやりもなかりけり。地色性急なる大内之助。堪へ兼ねてすつくと立ち。ゆふしでを宙に引揚げ元の所へどうと投擧る。詞扱はいよく推量の通り。親め共に呑込んで内證に男があるな。我が心に従はぬ腹癒。眞二つにぶち放し。其男めに鼻明かせんと。地大太刀するりと抜き放せば。わる怖れもせず押直り。父まで深き御疑ひ。曇りなき身は天道が正直。お手にかゝるが申譯と合掌したる健氣さを。見やりもせぬ片意地親爺。サア今こそと義弘は。父が顔を差覗けばびつくとせぬいがみ面。サア／＼と二度三度。嚇しの刃を振上げ／＼。閃かしてもきよろりが味噌。詞テモ扱もしぶとい奴等。エ、是非もなし是迄と。地既に危き太刀の下ナウ待つてたべ暫くと。大内の御臺走り出で。詞重々のお腹立ち御尤もとは言ひながら。地戀ばつかりは嵩押しにいふ程埒の明かぬもの。自らにお任せあらば何とぞ勸めて今日の内。お前の心に離きやる様私が世話を致しませうと。すかし宥める物腰に。フシ貞女のしるし顯はせり。地戀は曲者鬼にも涙。詞情強きどち女郎ぶち殺してしまはんとは思へども。なれば又拾ひ物。少しの間お身に預ける返事が遅いと赦さぬと。地詞の弛みに御臺は心得たつた今よいお返事を。お氣遣ひ遊ばすなとゆふしてを引立て。尾を踏む心地虎の間へ。フシ伴ひ入らせ給ひけり。地色跡には主従物をもいはず。あなたは濫面こなたは工面。睨み合うて居る所へ。國々の諸侯より寶を持參と呼ばはる聲。俄かに繕ふ大將の衣紋美々しく座を占めて。待つ間程なく入り来る。青貝の卓恭しく。目八分に差上げて二つ並べし珊瑚の枕。是は菊地の陶全妻が寝た間も放さぬ重寶なれども。勅諭とあれば力なく。持參致し候と。フシ廣庇に押直す。地次は豊後の

友方大學。水晶簾を臺に据ゑ。この簾は昔昔。晉の國より渡りし寶。庭に掛くれば。コハリ風を生じ。自然と雨を降らしつ。暑氣の時分は。ナホス冷やりと西瓜もどき夕立もどきと。フシ差上ぐる。フシさて其次は肥前の國。海月式部が重寶に。白龍石といふ硯。墨する度に硯より。おのれと水を湧き出す。不性者には第一の。寶なりとぞ言ひ上ぐる。その外松浦五島の一族。筑紫表の國主城主。皆家々に傳はりし。名物寶を臺に据ゑ。フシ廣縁。狭しと並ぶれば。地色見分の役人は新洞左衛門。腹は立てども其日の役目不承無性に見改め。いづれも寶に相違なし。詞誰かある此品々御藏の内へ納めよと。地呼ばければ伺候の武士てんでに捧げ入る體に。先づは首尾よう納まりしと。諸國の城主も安堵の胸。オクリ皆々へ旅宿に。フシ立歸る。地色遙かにさがつて筑前の城主繁氏の執權。物に騒がぬ監物太郎寶も持たて悠々と。フシ白洲の庭に入り来るを。地義弘つく／＼打守り。詞九州の大名より残らず寶を差上げしに。加藤の家より何として寶は送らぬ。宣言を背くか但しは氣儘か。返答せいとときめ付くれば。ちつとも動ぜず御尤もの御不審。勅諭とある上いかで違背の候べき。併し筑前は小國故差上ぐる寶はなしと。地言ひも切らせずさうは言はせぬ。詞大名の家に寶なくて家督の繼目は何を以て規模とする。イヤ我が國は仁義禮智。地五常を寶として國家を治むる。但し此お國には器財を以て寶とし。君子の教へを寶とはなされぬかと。理窟を詰めて言込むれば。もとより不才の大内之助。フシ返す詞もなき所を。地色堪へ兼ねて新洞左衛門目玉を剥出しコリヤ／＼監物。詞それは唐土臨潼の會に善を以て寶とすと。伍子胥がいひし口眞似食はぬ／＼。加藤の家には齊國より渡りたる。夜明珠といふ名玉ある筈。地いま玉女神と神に仰ぎ尊敬する事紛れなし。是非玉を渡さずば大軍を以て押寄せ。家國共に奪ひ取ると退引させぬ手詰めの難題。此場を遁れて分別と無事を繕ふ當座の請合ひ。詞玉女神を夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら。地年を數へて二十と限り。遂に男と肌觸れず。交合の道知らぬ女あらば。玉を迎ひに越さるべし。詞若しも年に過不足あるか。一度でも男に肌觸れ。身の穢れたる女の手携へ持てば。忽ち玉の光を失

ひ石瓦いしがわの如くとなる。その劔符けんぷの合ふ女があらば何時でも玉を渡すに相違はなし。地某は先づお暇と立歸るを待つた待つた。使の女これにありと。走出てたるゆふしてが。御前に向ひ頭かぶを下げ。詞不義の男がある故御心に従はぬとのお腹立ち。地其お疑ひ晴らす爲遂に妹背の道知らず。身を穢さぬといふ申譯まことこのお使を私に。仰付けられて下されとスエテ思ひ入つてぞ願ひけり。地色監物太郎もぎよつとせしがコリヤ女。詞身の穢れぬが定ならばいかにも玉は渡さうが見事實の檢分けんぶんするかと。地何がないうて困らす思案。詞ヲ、氣遣ひすな其檢分は此新洞左衛門。地娘に連立ち行くからは贖物にせものは擱おまぬ。詞シタガやいゆふして。そちには惚れた人があるこちの身體からだは清淨しやうじやうでも餘所よそから穢れを添そゆるといふもの。ソレ。和郎が思ひ切るとおいやらねば使には行かれまいと。地戀慕れんぼの絆きずなを切らせん爲。大内が耳に打て響ひびけを。聞き流して不興ふきやう。返答もなく座を立つて。駈込かこむ向ふへ御臺所立塞たてさいがつて申し殿様。詞女一人に繫つがれて大切なる夜光の珠たま。此度請取り給はずば禁裡表の首尾も如何いか。地ゆふしてをさつぱりと思ひ切つたる證據を見せ。使を仰付けられよと。彼方あな此方こなたでせこめられ。當惑たうわくしたる大内之助何思ひけん。フシ振返り。地色後にかけたる弓押取り件くだんの鎗矢引番かきひきまひ。詞命に替へて某が思ひ込んだる戀なれども。大望成就の妨げなれば此戀ふつ。思ひ切る。證據の鎗矢受取れと。地切つて放せば松の木に。フシはつしと立つたる有様を。地色ゆふして悦び走寄り。矢を抜取つて押戴おさきこの。お使を仕果しおせなば。合枕一つて二十迄寢ね々した事を世上へ言譯いんぎけ。君の心も晴々はれ々とくも。合らぬ女の鑑かみにせんと。合帯引締める親子の勇み。監物太郎を先に立て。白羽の鎗矢やぶ。にさしかざしてこそ。三重定めなき。フシ世を憂うれき事に。見限りて。遁世とんせありし繁氏卿歸國と偽り石動を。跡目に立て、監物太郎國家を治むる智仁勇。三國名譽の夜光の珠たま。玉女神たまきよとじんと勸請くわんぎやうし秋の最中の祭日に。館賑かんでふばかりなり。地御臺牧の方石動君を伴ひ廣書院くわんに出で給へば。執權監物が女房橋立神事の祝儀しゆぎ申し上げ。詞夫監物太郎大内義弘の招きによつて參られ。御寶の御神事に外れし段お赦しと。地斷り申せば御臺所。詞心よからぬ大内の呼寄せ。我が夫の行方ゆくへは知れず。石動は幼少な

り。何言ひ越さんこも測はかられず。地色只なつかしきは繁氏卿と。スエテ嘸なち給へば石動君。詞母様氣遣ひ遊ばすな。追お付け父様の有所しよを尋ね。私が迎ひに參りますと。地大人しやかに。フシ涙もとまる折からに。地色國一番の濡男ぬれおとこその名自然と女之助。兄監物が勸當かんと請け詫わびを頼みの奥書院。フシうぢ。として入り来る。地色御臺は何のお心なく珍めづしや女之助。此程このほど若も尋ねしが何故登城召されぬと。仰せにはつと頭を下げ。詞私儀不行跡ふかゆゑ兄監物太郎が勸當請け。それなる橋立殿を頼み様々さまさま詫わぶれど聞入れなく。是非に及ばず今日は若君様や御前様の。お詞を借る所存。地色恐れながら然るべう頼上げ奉ると。願ひを聞いて御驚おどき。テモ扱あも。堅いそなたが何越度なご。軍法秘密の論議でもしやつた上の諺ことわざかと。尋ね給ふを傍そばに聞く。橋立は吹出し。詞御臺様のあの人を堅いとはお目違ひ。其柔かさ自墮じだ落おさ。軍法論議はさておき。女中論議で家中は大もめ。お上にも御存知の前の内儀ないぎお埒殿らちだんは。夫監物太郎都より貰もらひ歸り。夫婦に致され退引のりひならぬ女房を。地子持ちになると乳臭ちゆうしゆういと離別して。お物師のお縫殿ぬいだんとちん。それも續つかず弓頭ゆみがしらの娘おつるを娶めとり。持つと去いなしてお腰元の長門殿ながと。それから仲居お茶の間の。白髪交りも色めいて。そこでは格氣かくきこゝでは喧嘩。何から起れば女之助。わしが夫ぢや殿御ぢやと。言募いひまつて大騒動。堅い夫が面汚つゝしと勸當せしも無理ならずと。語れば御臺も興おさま顔。若君何の差別しやべつなく。詞女之助はいかい苦勞。それから其喧嘩の仕舞しまい。地どうなつたぞと根問ねどひにほつと行詰り。詞其ソノ跡の儀は。地面目もなき仕合せと。フシ謝り。入りし風情ふうじやうなり。地色御臺もをかしく若氣わかしの至りもあんまり興おがる。以後を嗜たしなむ心なら共に詫わびして得えさすべし。幸ひ今日は御玉の祭。玉女神の御前にて金打きんうちさせん此方こなたへと。立入り給へば有難しと。石動君を御供し。フシ奥をさしてぞ入りにける。地色程なく歸る監物太郎。大内が難題胸に釘打つて變りし思案もなく。廣間へ通れば妻の橋立。義弘よりの呼寄せ。いかなる事ぞ心もとなし。及ばずながらお聞かせと。尋ねればさればの事。詞大内義弘は都の勅と偽り。近國他國の寶を集むる。これ正しく謀叛ぼうはんの下拵したしへと見抜きし故。我が國には寶なし。仁義禮智信の五字を以て寶とすと。伍子胥

が辯を借つてまふと言伏せしに。多々羅新洞左衛門といふ奴。夜光の珠の由来を知つて。汝が家に玉女神と崇むるは。齊國より渡りし夜明珠。寶なしとは言はせじと明白の一言。争ふにも争はれず。成程その寶あり。併し尋常の者携はる事叶はず。地二十と限つて交合せざる女あらば。受取りに越されよ。男女の別ち知つたる者が手に觸るれば。忽ち玉の光失ふと言傳へを難題に。當惑させんと思ひの外。詞かの新洞めが娘當年二十。まだ是まで不犯にて此役目を乞ひ受け。親子連れにて受取りに来る筈。代々加藤の家の重寶。渡さば家滅亡。厭といはゞ大軍を以て攻來らん。地さすれば御臺若君のお命も危し。兎やせん角やと胸はどうづき。思案があらば言つて見やれと。語るを聞いて女房はほつと溜息つきながら。只此上は贖物を急に拵へ渡さうより。外の事はといふを打消し。詞イヤイヤ其儀も思ひ付けども。うつかりと受取る新洞左衛門にあらず。地ハテどうがなと大體の。骨も砕くる一思案。及ばずながら橋立も智慧の袋の棚さがし。暗がり探す如くにて。フシ暫し途方にくれけるが。詞イヤ申し斯様な時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様勘當の詫にお出で。地機嫌直され共々に。御相談はといふに暫らく工夫をめぐらし。詞ム何弟の放埒者。奥へ參つてゐるとな。ホ、ウよき相談相手。思付きあり女ども。地汝も來れと立上がる。心知らねど橋立も夫の詞を力草。フシ伴ひ一間に入りける。地色暫らくあつて大内よりお使者と呼ばはる聲につれ。月と雪との眞中に花と眺める後帯。ホフシ男選みのゆふしてが。片笄の濡髪にさいた白羽の鎗矢は。伊達か潜上か風俗もしとやかに立休らひ。誰を頼まんといひ入る。かゝる相手に相應の。女房選みの女之助。いざお通りといふ内も。思ひ合ます目遣に可愛らしさが身にこたへ。互に顔を見交して。フシ上座へ通れば。地色橋立がやがて出迎ひ頭から。しつぱりむきの挨拶にて。詞是は〜女中の御苦勞にようこそお出で。自らは監物太郎が女房。橋立と申す者。また是なるは主の弟御。女之助と申して武道は勿論歌の道戀の道。地並ぶ方なき優男子則ち今日の御馳走役。御用あらばあの人へと。猫に盤の引合せ。いかな難題でも精進を。フシ落しても見たき心なり。地色女同士こそ此方にもこやか。

詞テモいかいお心遣ひ。私はゆふしてと申して。まだ人數にも入らぬ女。斯様な役に參る筈はなけれども。人好みあるお寶物。親新洞左衛門はお次に控へ。マアそちが受取つて來いと不相應な役目を請け。案じ〜參りしなり。地事なうお渡し下されと。詞の内より何がさて。詞お渡し申さいて何とせう。夫も只今罷歸り御藏の掃除。暫くお暇が入りませう。ヤ幸ひ今日は御玉の祭。神前へ供へしお御酒頂戴遊ばし。地不淨を清めお受取り。それ〜神酒といふに任せ。對の徳利を三寶に。フシ下女が携へ差出す。地色女之助近く差寄り。詞敵を招いて毒酒を盛り。約を變ぜし例もあれば。地毒味致して進上と。御酒を兩方つき合はせ土器にたつと受け。つと乾してゆふしてに。頂戴あれとさしければ。是は御念の入りし事。縁につれたる神の酒。何お疑ひ申さんと一つ受けて呑む酒の。忽ち五臟に沁み渡り。フシ亂れかゝりし。顔の色行儀もくづれ土器を。女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が。わざと咄も打解けて。詞近頃卒爾な事ながら。頭に挿されし白羽の矢は。地いかなる故ぞと尋ねれば。是こそ私が殿御を持たぬ申譯。幼き時この白羽家の棟に立ちしより。詞神のお伽のお座子となりしは幸ひ。よい男好いた殿御のある迄は。人目の關の此白羽。片時も放し侍らはず。あはれ此矢を貰ふ氣な。お人があらば遣りたしと。女之助が傍近く。にじり寄りたる亂れ咲き。花ならば折れ。折る人は。フシぬし様ならてと縫り寄る。地色爰ぞと共に摺寄りて抱付く程に思へども。傍に見て居る兄嫁の。手前を恥ぢて薄紅葉。高をしめたる橋立が傍から焦つてそれこそ。じつと引寄せ引締め。二世の堅めが是迄の。不儀淫奔の返り花。あだ花ならば御無用と。そやしかくればゆふしては。詞テモ粹な兄嫁御。悪性男をわしが手で。こなして見せうが下さんすか。仰せに及ばず互の縁づく。したが口先ばかりにて。どこの斯うのは皆浮氣。地誠をいはゞあの一問。其氣がなくば置かんせと。張掛けられてイヤ申し。詞戀は親にもお主にも。見代へてするが女の意地。跡へは寄らぬコレごんせと。地女之助を引立てる是ぞ工の臍落と。思へどどうやら恥かしく尻込みするを橋立が。鬼も頼めば人食はぬ。入らざるお辭儀と無理やりに手早く跡より押遣つて。一間をびつ

しやり閉すとはや。内陣ひつそと鎮まれば。縷子の帯なるばかりにて。オクリ物静へかにぞなりにける。地色橋立あたり見廻して。女之助の放埒も禍三年時の用。仕果せたりと思ふ所へ。多々羅新洞左衛門。生れ付いたる氣は苛ち。待ち久しくて次の間より歩み出て。コレ女中。詞娘は寶珠を受取つたか。まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。地べら／＼何してをる事ぞと。膨れ返つた髻面を。引延ばさんと橋立が。やがて床几を參らせて。誰そ眞盆お茶持て來いと馳走ぶり。詞イヤ茶はたべぬ莫は嫌ひ。滅多に馳走召されても。受取る物に遠慮はないぞ。地床几は役目恩には着ぬと。腰打ちかくる其内にも。橋立は一間の首尾。いかゞと思ひ立つ居つ狼狽へ廻るをコレサ女中。詞きよるきよると何しめさる。待兼ねて烏帽子首。強ばり申すと言うてくれめせ。但しは直に行かうかと。地立上ればア、是申し。詞今が祭の最中。ナニ祭とは。イエイナ。地かの夜光の珠のお祭と紛らかし。隙取る方便に傍へ寄り。詞お家の祭は先づ最初が鼻高。地其鼻の長さが三間半。男にしたら廢者。次が御輿と提灯。その提灯が餅搗いて。事の埒があかぬかと。いかう私は案じます。詞ア、これ。神事の咄聞きには參らぬ。御玉ばかりを受取るに。斯様の隙入り合點行かずと。地脱み廻せばヲけうと。詞輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚はなく。唐土には下和が璧。我朝にては龍の玉。伊勢の國にはお杉とお玉。飛んだは人魂怖いは目の玉。地下女の玉でも輕々しう。受取らるゝものかいな。マ、お前はお幾つて。お名は何と申します。詞ハテ面倒な事を尋ねる。名は新洞左衛門年は六十。したり。ナンヂヤ。テモ扱も／＼扱も。さつても若いお顔の。ア若うござる。お耳も聞えお目もよいかえ。耳も目もよござるてや。お齒はえ。それもよいてや。サア其よい内からは養生。折々疝氣も出ようがな。ハテ出ようとなま。イエ／＼さう氣を苛つがいとお毒。地それ／＼頭によつぽど白髪デエ。抜いて上げましたと立寄れば。突飛ばし。詞エ七面倒な女めと。地片方に立つて大聲上げ。詞ヤア／＼娘。夜光の珠を受取りしか。何してをるぞつかうどに。地呼ばはる聲の響きてや。心靜かに寶塔を。携へ出づるゆふしてが。跡に續いて女之助。出づるや否や尊敬し。詞悉くも寶塔

の。内に籠めたる御玉は。闇を照らす事。日輪よりも明かなる故。地夜光の珠とヲシ名付けたり。地斯程貴き御寶を。輕々しく受取られし。詞ゆふして殿は仕合せと挨拶すれば。皆はお前のお世話故と。表向なる互の辭儀。新洞左衛門笑壺に入り。地ホヲ、娘。寶を異議なく受取つたか。出來した／＼。しかし某檢分の役。改める爲拜禮せん。地何れも共に拜まれよと。いふに隨ひ女之助。橋立共に頭を下げて。ヲシはつとばかりに敬ひ居る。地色ゆふして心に信を取り。どなたも玉の御威徳。拜み給へと寶塔を。開き見すればコハいかに。眞黒くろと黒玉の。墨をつくれし如くに。是はとばかりゆふして親子。女之助も橋立も。共に呆れ顔付きにて。ヲシ暫し。詞もなかりしが。詞新洞怒つて。ヤア大盗人の監物太郎。改めずんば寶物を持たして歸す工よな。地イデ寶藏へ踏込み摺んで來んと。駈行く向ふをさつと明け。内より飛出る監物太郎。寶をくろめの白々しく。詞コリヤ／＼新洞。先達ていふ如く不淨の女が受取らば。玉の光を失ふといひしは爰ぞ。其女に詮議がかつたそこ退けと。地打つて變りし詮議の裏釘。いがみかゝつて橋立が。詞コレゆふして殿。身に覺えあるならば。有様に白狀あれ。地色一間の内不義がましい。みだりな事はなかりしかと。まぎ／＼しげに問掛けられ。何と言譯ゆふしてが。すべきやうなく髪にさす。白羽の矢をば抜くとはや。矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より半狂亂の新洞左衛門。抱きかゝへてコリヤ娘。詞わりや何故に自害する。言譯なくばない様の。思案もあらうに情ない。地大事の娘を殺すかと。さしもに猛き武士の。子故の闇に目も眩み。スエテどうと。坐りて泣居たり。地今を限りのゆふしてが。涙片手にナウ恥かしか。詞自らは此館へ來るよりも。さるお人をば思ひ初め。情の道に迷へども。大事の役目と心の駒。地繋ぎ留めしを情なや。御内室の饗應酒。詞あれなる御酒を飲むよりも。不思議や五臟に沁み渡り。大事を忘れ何のその。地儘よの上にはり持たされ。ついで紐を解きそめて。是非なく身をば。ヲシ穢せしぞや。地色言譯ならぬ淫奔を。詮議に逢うて恥かいて。斯くなり行くは神の罰。神明忿りの鎗矢に。射殺さるゝと覺悟して。死ぬる心の悲しさを。推量してと泣く涙。袖に餘れば血に

染みて、フシ見る目も。いと哀れなり。地色様子を聞いて新洞左衛門。すつくと立つて走寄り。娘が言ひし御酒徳利兩手に搦んで。詞ヤアラ心得ず。尤も若氣と言ひながら。左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中顯さんと。地縁の框に打付けく。打割る中より守宮のつがひ。現れ出づればしつかと捕へ。扱こそく。詞唐土張華が博物志に。交合の守宮を引分け。酒に浸して其氣を飲ませば。忽ち女の心亂すと書き現はす。其理を知つて娘に飲ませ。性根を亂したづらさせ。身が穢れた故光失せしと。科をこつちへ塗付けて。賈物渡す下拵へ。地さて巧んだり拵たり。憎さも憎し不義の相手。是へ出せずだく。試して胸を晴らさんと。三寸組板見抜きし兩眼。睨みつけてぞ。フシ詰寄する。地色ちつとも臆せず女之助。其不義の相手は某。御存分と押直る。ヲ、よき覺悟觀念と。振上ぐる劍の陰。ナウ是待つてとゆふしてが。苦しむ體に氣も弱り。心も折れて詮方も。スエ泣くより外の事ぞなき。苦しき中にも親の顔。じろくを見ておいとしゃ。親一人子一人の。私に別るゝお前の心。悲しい上にお腹も立たう。フシさりながら。地色たとへ守宮の業ならずと。ちよつと見るから思ひそめ。心が先へ穢れたもの。詞帯紐解かずと御寶の。光失せて何とせう。地假の契りも二世の縁。枕交はせば我が殿御。聲は子といふ世の習慣。私が死んだ跡にても。形見と思ひ懇に。おいとしがつて下さんせ。おぬし様も父上を。親と申うて折ふしの。訪ひ音信を頼みます。親に先立つ我が心。推量して可愛やと。申うて一言未來まで。夫婦と申うて下されと。フシしやくり。上げたる哀れさを。地色見るに身に沁む橋立が。せめての事と介抱し。萬事を胸で諦めて。詞に出ねど心には。さぞ自らが憎からう。言譯するにもしられぬ品。皆これ前世の約束と。思ひ諦め給はれと。歎けば共に女之助。詞是迄盡くせし悪性の。止めとなつた今の悲しみ。未來は扱おき後々萬劫。契りは變らじ夫婦ぞと。地いふ聲耳に經陀羅尼。物も得いはず嬉しげに。合はす兩手が暇乞ひあへなく息は絶えにけり。わつと泣き出す新洞左衛門地踏踏んで。へエ、しなしたり情なや。詞わが片意地な心から。一生夫は持たさぬと。言うたを誠と思ひ詰め。あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦

と悦べども。悲しむ親が此世からそれが見えるかたはけ者。思ひ出す事ばつかりを。言うて死なずと便りなき。地此身を早う迎うてくれ。六十越して子に離れ。何を頼みの娑婆世界。情なの我が身や。不便な娘の最期やと。しやくり上げたる一徹涙。堤も切れて大川に。フシ泥の淵なす如くなり。地色共に哀れと人々の歎きの内に監物太郎。かの寶塔を目通りに据ゑ。女之助を引直し。詞汝この如く。光を失ひし不義の相手。地討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよといふ聲に。涙拂うてすつくと立ち。詞ヤア人そばへすな其手は喰はぬ。義理立てせば助けうと思ふかいつかないつか。眼前娘の敵人手は頼まず。我が手にかけて眞二つ。地恨みを晴らすそ退けと。飛びかゝつて拔打ちにはつしと斬つたは件の名玉。是はとばかり人々は呆れて。フシ詞もなかりしが。地色女之助聲をかけ。手が廻りしか新洞左衛門。せかれずともサア首と。差付くれども目に懸けず。切割りし玉引掴み。詞おのれ陰陽和合を嫌ひ。よう光失うて。娘に自害させたなあ。我が子の敵思ひ知つたか。加藤の家の名玉は。目利の目からは悉皆藍玉。持つて歸り主君に見せ。地恥顯はして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は賈物などと争ふな。詞誠の賈があるならば。石動や御臺に持たせ。早く此家を捨てさせよと。地いひ教へたる詞の裏。表は忍り心には。せめて娘が手向ともなれよとかける情をば。フシ袖に隠して立歸る。地色折よしと御臺若君。駈出て給へば女之助。詞新洞が詞のはし御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞。それを力にお供せん。地いざさせ給へと勧め立て。伴ひ出づれば監物太郎ヤア待て弟。詞汝生れついて好色者。いまだお若き御臺所。預けやる事覺束なしと。地いふよりやがて守宮を引裂き滴る血を。腕へ塗付けは見給へ兄者人。詞守宮は不義を勸むれども。其血は却つて不義顯はす。唐土秦の始皇三千人の宮女に。不義あらんかと疑ひ深く残らず臂に是を塗る。不義ある者は忽ちに落ちて跡なくなる例。さるによつて守宮といふ字を。宮女を守るといふ心で。みやもりと書傳ふ。地我が朝にては萬葉集。脱ぐ沓の重なる事のかさならば。守宮のしるし甲斐やなからん。詞沓重なりてさへ印は落ちると詠みし歌。地まして三代相恩の。お主に對して不

忠不義。天命いかでと言はせも立てずヲ、出来した行けと言が。兄の情の。フシ餞や。地色御臺若君立別れ高野の。山の峯にある。我が夫諸共歸り來んと。連ね給ひし。フシ言の葉も。それはまつとし待つ迄は。お名残り惜しやと橋立が。駈寄るを押隔て。互にさらば。おさらばの。聲を力に忘れ草伴ひ。館を出て給ふ國に。思ひや残るらん。

第 四 道行越後獅子

三下り鹿踊踊り來て。是の大門。眺むればエイソレ七里。大もん花でかゞやく。ナホス花を見捨て。憂き事に。フシ憂きを重ぬる。玉鉦や。繁氏の御臺所。石動丸の御手を引き女之助がお供にて。君は高野にましますと。本フシそれを力の忍草。笠にはあらぬ越後獅子。オクリ習はぬ。わざにと太鼓笛吹くや追風に帆を上げて。國を出船の日和もよく。フシオクリはるく。紀の路。加太の浦。あがる朝日に。摺れ違ひ。爰より徒歩の草鞋がけ。沖の鷗におき別れ。小オクリ誰か。松江と聞くからに。辻占よしといそく傳ひ。長地跡に心は残らねど引戻さる。砂道は歩めどはかの。フシ行惱む。げにや世にある身なりせば。名所古跡も訪ふべきに今は耳にも目にも見ぬ。小家がちな軒の端。煙賑ふ峯々に霧立ちのぼる。絶間よりほころび出づる山々は。野飼の牛の口を執る草刈り童の月代に。似たぢやないかと高笑ひ似たは化けたか。合狐島。フシ睫毛濡らせる袖の露。松に残りし。嵐と共に。オクリ野邊の。草葉も枯れく。いつも變らぬ冬景色。落葉も霜に埋。合もれて木の下蔭の淋しきは。在所離れて北島の。渡り急ぎし舟呼ばひ川の流れに水鳥の。羽を伸す音に驚きて。人目防ぎと舞ひ奏て。スエ櫻木踊の拍子とり。合越後獅子二上り唄櫻木を。枝にふきかけ門に立て。門の。光て。庭も輝くさ。くら木。北山の櫻の様なる。殿がな女郎がなと。ナホス歌ふ聲さへ和歌の浦。フシ爰は寡婦の。かたをなみ。お茶は摘まねど都に紛ふ。所の名さへ。フシ宇治と呼ぶ。月を慕ふか雨を招くか露盤にあらて懸遊。お宿くと招かれて。まだ日は高い先が急ぐと言捨て。ハズミ逃げて。のかはの。觀世音歩みながらに禮拜

し。巖を祈る松島や。千代に入千代に。さゞれ岩出を跡になし振返。冷泉カ、リリ見る。フシ故里は。あれかあそこかあの邊かと。空にしるしの甲斐もなく亂れ。亂れ亂る。白雲の。風に誘はれ。半冷鐘の聲。フシはや入相に。程は長田の里續き。誓ひを頼む粉川寺恵みも深き法の友。胸に木札の順禮も。願ふは二世の道知るべ。我々ともあの世まで。伴ふ主の御在所。尋ね三谷を過ぎ行けば。高野も近し我君に。二上り唄やがておほつと聞くや嬉しさに。道を急いでしやなら。ナホスと紀の川。上にぞ。三重月影に。地光を添ふる法の道高野山の繁昌に。つれて暮る麓の里學文路の宿の賑はしさ。都方より參詣に鄙の道者も打交り。泊りせりあふ旅籠屋の。フシ内騒がしき黄昏過ぎ。同じ浮世に。人忍ぶ。地色身はならはしよ旅の空筑前の三人も。宵より爰にかりの宿笠も草鞋もとくくと。寝られぬまゝに御臺所。石動丸の御手を引き障子開いて次の間へ。フシ立出て給へば。地色女之助跡に引添ひ歩み出て。詞誠や人の盛衰は定め難しと申せども。繁氏卿御在國ましますば。錦の褥に御身を添へ。地隙間の風も防がんに斯く淺ましき旅泊の轉寝。いたはしさよと頭を下ぐれば。共に萎る。涙を隠し。我々親子が苦勞より若い其方が心遣ひ。永の旅路を主なればこそ忝いぞや嬉しそや。死んでも忘れはしませぬと。フシの給ふ顔の艶やかさ。地色旅疲れてさへアノ御器量。さて美しやと思ふよりふつと目の付く煩惱心。例の持病の好色が穂に現はれて是はしたり。詞改まつたおつしやり様。忠義といふは付けたり。永々の道中をお前様のお供して。何の苦勞に存じましょ。我が君のござると風聞する。高野山へはもう四五里。地明日は慥かにお逢ひなさる。さぞ明晩はしつぽりと。久々の溜り水人目堤の切れ口を。フシ御用心遊ばせと仕懸けて見たる問藥。おのが病に配劑の加減は常の如くなり。詞マアあの人のつがもない。たとへ夫に逢うたりとも。御出家の御身なれば其樂しきは切れてある。只歎くのは國の騒動。地大内を亡し此若を世に立てる御相談。一先づ國へお供して立歸りたい心の願ひ。もし其上の御得心還俗でもなされたら。ハテ其時とはばかりにて袂こぼる。鬢には。フシいとぞ思ひや増さるらん。地色媚く詞を付け込むしれ者。じりりと傍に寄り。詞成程おつ

やればそんなもの。しかし一旦浮世を捨て。御出家なされた御主人。何程におつしやるともよもや還俗はなされまい。が又殿様にも無分別。是程奇麗な美しい。うまい盛りの御臺様を捨置き。坊主になるとはどうした御思案。第一きつ
い不心中。地此間から道中をつくつくと存ずるに。ほんにわし等がお前の様な女房を持つたなら戴いてゐる合點。何と
談合なされぬかと。言ひしなづつと立寄つて後より抱き締め。何とく頬摺を。フシ鬘でするこそうたてけれ。地色御
臺は呆れて詞なく振放し飛退きて。詞コリヤ女之助。そちは氣ばし遣うたか。あんまりで物が言はれぬ。石動丸も聞
いてゐるぞよ。國許を出づる時。監物太郎が念に念。誓ひを立て。守宮の血。臂にまで塗つたぢやないか。地まだ廿
日にもなるならず。それ程の大事を忘れ。人てなしめ畜生めと。やり込め給へば思案して。コリヤ色とりでは行くま
いと氣相變へてけらく笑ひ。詞いかに國を出づる時はさう思うて出たれども。一月足らず夜も晝も。テモよい器
量又あるまいと見る度に思ひの種。増さりこそすれ忘れず。も言ほかくと堪へて言出す今夜。地命がけて惚
れた戀。厭とあればお二人を手にかけて拙者も自害。詞オツトあればいつ迄もこつてりのちんくサア。地手短かに
お返事と差添を抜放し。大悪無道に一心が坐り切つたる眼つき。フシ天魔の魅入と知られたり。地色石動君は幼氣に
何の頑是も涙聲。死なうて叶はぬ事ならば父様に巡り逢ひ。其後死なうそれ迄は母様もお詫言。女之助も堪忍しやと
あどなき詫びも武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ仕儀燃え立つ胸を押鎮め。詞命にかけて自らをそれ程思ふが誠な
ら。兎や角もなるべきが。地せめて殿様に巡り逢ふまで。了簡して待つてたもと。の給へばならぬ。詞是まで騙
すが皆其手。そんなあまぢやくには嵌らぬ我等。ハテ厭なれば息子殿から殺してのける。子がかはゆくば合點して
夜の更けぬ内ほめてしまを。イヤそれでも。それでもとは厭な氣か。サアくくと。地座敷の内をあなた。こな
たと付け廻せば。御臺は足の踏所なく若君をかき抱き。コレ龜相しやんなア、危ないくと。慄ひく奥の間へ。
フシ引外して逃入り給ふを。地どうでも遁さじ返事はと。續いて一間に駈入りしが。ごとと一聲釣鐘の音凄まじく鳴響

き。驚かされて見し夢は跡なく。覺めて。三重へ旅姿。地色慈尊院の縁ばなに主従三人笠傾け。前後も知らず臥し給ふ
猶も續いて寺々の。鐘鳴る音に女之助。むつくと起きて月影に。四邊を見廻し詞爰は何處ぢや慈尊院。扱は今は夢
であつたか。ハツア有難や嬉しやく。ホンニ夢ぢや忝しと。地天を拜し地を拜し。悦び片方に座を占めて。エ、我
ながら情なき根性かな。明暮御臺を見る度にさりとほ惜しいお姿。お主ならずば口説き落し我が妻にせんもの。思
ひ初むるは日に幾度。詞我が身て我が身に意見を加へ。勿體ない恐しいと。又思ひ替へて心を改め。忠義を盡くすと思
へども生れ付いての色好み。地淫犯の病ひを顯はし夢の内とはいひながら。主君に對して不義を言ひかけ。剩へ討ち
奉らんとしたりしは。よつく武運に盡きたるか。スエテ暫し涙にくれけるが。地色飛退さつて頭を下げ。詞御臺様若
君様。夢の間の不義不屈。地眞平御免下されと。恐れ入つてのフシ三拜九拜。地色親子の人は正體なく寝入りし額に
汗たらく。魔はれ給ふに走寄り。申し。申しと揺り起せば。二人ながら起上がり。顔を詠めてヤア詞其方はまだ寢
ずかと。地齒の根も合はず面色變り。若君を押圍ひ立退き給へば南無三寶。夢とはいへど通ぜしよと。胸に磐石押込
む如く。切なき心を押鎮め。詞お疲れも出てしにや。魔はれ給ふに驚きて目を覺まし候と。地言ひくろめても氣は濟
まず。フシ案じ煩ひ居る所へ。地色群り来る人音に何事やらんと女之助。立上つて眼を配り。たとへ道行く旅人たり
とも見咎められては御爲悪し。御兩所は笠深々田舎道者の臥したる體。拙者も暫し隠れんと。兎角しつらひ片陰へ。
フシ忍びて。様子を窺ひある。地色程なく来る大勢は學文路の宿の百姓ども。中には庄屋が智慧あり顔。詞コレ皆の衆。
此所の殿様。大内之助義弘様がノヨ。遙々の海山を越え直に登つて繪圖をみんな一枚づつ渡してノヨ。此繪圖に合
うた者を。縛つて來いとこの言付けてござらよ。三十許りなよい女性とノヨ。十ばかりは美しいちつべいのノヨ。ま
た三十餘りな色とり男と。どうやら人の女房を。息子共に盗んでかけおなどに見えるぞや。どうでもむつかしい尋ぬ
者。見付けたら金になりますらよ。共吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ。褒美はおれと半分わけノヨ。地斷

つて置いたぞと。いふを聞兼ねしやばり出る。所でちつと理窟者。男を磨く玉屋の與次。朱鞘の大だら落差。立ちはたかつてコレ爰な庄屋殿。詞拔け作でも身内が慾ぢやの。近年は代官によい人がわせた故。所も騒かず物靜かてよかつたに。何やら又いひ出して代官所へ呼付け廻り。ちつとばかりの褒美であるが。澤山さうに三人まで縛つて來いと。はうまい殿様。騙されておぬく殿が。括たら褒美を取り。ハ、ハ、どこへ褒美。和御寮の様なうまい和郎に。括られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずとサア。地早う去にませうと。先に立つをコリヤ待て玉屋。詞われが今の言分を。この智慧者が勘辨するに。褒美が少なけりや。見付けても取逃がす思案ぢやな。さつきの言付けをどう聞いたぞ。庇ひ立はならぬぞよ。お尋ね者を助けたら。助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。ナア、いづれも去にがけに慈尊院の境内を探して去のらぢやあるまいか。もしも屈て居よつたらノヨ。よつ程な拾ひ物と。地大勢引連れうそと。二人の寢姿見付け出し。詞コリヤ、爰に何やら居るぞ。地く、れ、と立ちかゝるを。女之助飛んで出て。詞何奴なれば旅人を脅やかす。地近寄つたら撫斬るときつば廻せど事ともせず。爰に居る大金を。擱んで去ぬると取巻くを。詞ヤ汝等は人賣りか盜賊か。地目に物見せんと刀の電光。無二無三に斬りかくれば。フシ風に蜘蛛の子散らすが如く。地色逃散りながら口々に。詞ヤイ、玉屋。算用の合うた三人。見ぬ顔して助けるかと。地庄屋の一言聞捨て難く拔合はせて支へたり。詞さてはおのは盜賊の張本か。地一人も餘さじと女之助は根限り。火水になつて斬結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢。與次はもとより構はぬ氣の。人が逃ぐれば共逃げに。フシ逃げて跡なくなりけり。地色長追ひせば悪しかりなんと。刀を納めて二人を呼出し。かく行先を盜賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供していづくへなりとも立忍び。夜明けてお山へ登らんと諫め申せば尤もと。御臺若君かひんしく。帶引締めて草鞋の紐。結ぶ間遅しと三人は。跡をも見ずして。三重へ雲隠れ。星の逢夜と結び合ふ。地學文路の宿の玉屋の與次内には水が月影の。ませども宿へ歸らぬは心許なの日暮れ過ぎ。妻のお尋ねは、明の夜なべを捨て、圍爐裏焚く。自由自

在な我が世帯鑓子に沸る一煎じ。女夫の仲のこつちりの出端も妹脊の。フシ花香かや。地色娘かどたは門の戸をさすと居眠る宵まどひ。詞コリヤそこなお船頭。モウ船を漕出すか。ほんにやれ、嗜めよ。連合ひ與次殿は。遂にお代官の顔も見ぬ人。地それに今日呼びに來て今に戻られず。おれよりマア其方が案じる筈何故と言や。詞アノ與次殿とは生さぬ親子。今にでも戻られ。眠たさうな顔見せて心の義理が立つものか。寢所でもして置けと。地叱るも親身聞くもおろく。詞母様こらへて下さんせ。昨夜の大師講の持越とろくが來ました。地デエ寢所をしておこと。小廻りすれば、それ、詞もう初夜過ぎ。地追付けてあらう寢間掃いて寢所しや。枕はおれが直すぞと二つ並びやを言兼ねて。娘頼まぬ心意氣。フシいらぬ遠慮と見えにける。地色此家を力に女之助御臺若君後に圍ひ。息をばかりに駈來り門の戸忙しく叩く。お尋ねは驚き駈出でしが。待てよ夫の足音ならずと。詞何者なれば夜に入つてけたましやと咎むれば。いや苦しからず。我々は旅の者。足弱二人召連れ盜賊に出逢ひ。やうく切抜け。是まで参りしなり。地色三人の命助けると思召し御圍ひ下されなば。世に有難く候はんと。餘儀なくいふに厭ともいはれず。詞主の夫は留守なれども。左程の難儀見捨てるもお笑止。地暫し此方へお入りあれと門の戸あくれば三人とも。命の御恩と追従し。フシ内へ通れば。地色女房が心をつけて表を締め。イザ先づあれへと圍爐裏の陰。互に見合す顔と顔。詞ヤお前は、紫氏卿の御臺所。牧の御方様ではないか。さう言ふそなたはお尋ねぢやないか。ナニ以前の女房かと。地女之助も吃驚てもと。さてもが一時に手を打ち。フシ共に呆れしが。詞さるにても此お姿。地何故これ迄遙々とお越しありやと尋ねれば御臺は涙を浮めながら。詞連合紫氏卿御週世遊ばし。國は大内に惱まされ。命危く逃げのび。わが夫高野にましますと。地色人の噂を力にて此所まで來りしと。語り給へば共に目を摩り。詞いかい御苦勞遊ばすの。地色若君様の御成人何か思へば。一昔。變る浮世の有様と。フシ憂きを涙に語り合ふ。地色女之助あたりを見。詞其方と離別せし折から。かどたと言ひし水兒を添へしが。地見事育て上げたるか無事て居るかと尋ねの詞。齒に衣させず。詞コレいは

れぬ昔をお尋ね。過りなき身に暇の状。是非なく故郷へ歸り年よつた母様。地色乳呑子抱へどうして暮す當もなく。途方に暮れし折から。詞此家の主も以前は武士。尾羽打枯らした互の落目。共過ぎにするならば。母様ぐるめ養うてやるとある。地色二度の夫と思へども親の爲子の爲に。此家へ嫁入つた其年に母様を見送り。詞娘も成人したけれど何の此方に逢はさうぞ。地言出しても下さるなとけんと言はれて女之助。むつとはすれど宿を借る。フシ無心に詞も無かりける。地若君は大人しく只何事も堪忍し。今夜爰に泊めてたもと涙ぐんだる御仰せ。詞コハ勿體なきお詞。地見苦しけれど一間もありいざあれへ往てお休みと。申し上ぐれば御臺所。主が戻り給ふならよきに頼むと打萎れ。石動君の御手を取り。フシしをく立つて入り給ふ。地色女之助はつきほなく共に奥へと立上るを。お埒はやがて押しとどめ。詞御兩所はお主筋好んでもお宿を申す。其許には宿叶はず。地何處へなりともお越しあれと。差止められて重なる業腹。詞やなめ過ぎた女め。御大切なる二方を預け某いづくへ行くべきぞ。お主ばかりの誼を思ひ。地夫の誼は思はぬかと嵩にかゝれば。詞サア其誼ぢやに依つて猶ならぬ。ソリヤなぜに。さればいの。今自らには玉屋の與次とて夫あり。其留守の間へ以前の連合。泊めてくれとあつた故。泊めましたとはどの口で。どう言はれうぞ無遠慮人まだ其許は昔の道樂直らぬの。お二方は此お埒が命にかけて預つた。地氣遣ひせずと宿なくば軒の下でも一宿あれ。あた自墜落など引立て。有無を言はず門の戸を。明けて表へ突出し。理窟で締める。鍵は押すに。押されぬ心の錠。幼馴染の合鍵も工合違つて海老の腰屈めながらに軒の下。暫しと宿る。フシばかりなり。地色程なく歸る玉屋與次道のどまくれ夜を更かし。闇を照らす禿頭門の柱でこつつりこ。あ痛し爰ぢやと打叩く。お埒は待兼ね走り。あけるや否やテモけうとい。今迄どこに何してと。おきまりなる。フシ怪氣口。詞置けく。今夜はお上の御用筋。夜が更けても權柄。しやつとも言ふなと圍爐裏の火を。地差しくべる内表より女之助が聲として。詞一旦の理に通り軒に一宿致せども。寒風烈しく身も冷え渡る。地御亭主もお歸りと見受けたり。一夜の宿と乞ひにける。與次は聞き耳。

詞ありや何ぢや。何いふのぢや。イヤあれは最前旅人が盜賊に出逢ひ。難儀に及ぶとありし故。引くに引かれず足弱二人は泊めたれども。地お前が留守故男子御は遠慮して。外に寝さして置きましたと。語ればハアテそれは大事な事。詞これ旅の人。外に寝てなら寒からう。こち入られい。圍爐裏にあたつて寝られいと。地だらうらく詞も情は嬉しく。フシ門の戸あけて小腰を屈め。地御免なれともの事。少し焚火の御報謝と。何心なく圍爐裏の端。燃える明りて顔見合せ。詞ヤア。わりや最前の侍かと。地俄かに變る與次が氣相。女之助も拔放し。詞さういふ汝は件の盜賊。出逢うた所が百年目と。地斬りかくれば拔合せ。フシ爰を最後と斬合ふ有様。地お埒は夢か現にも様子は知らずヤレ待つて。暫しといへど聞入れず。詮方つきて茶の水を引すくうて燃える火に。ざんぶとかくれればたりと。消えて闇の夜二人はハット。猶豫しながら。フシ聲かけ合ひ。詞おのれ盜賊そこ引くな。地侍逃げなと鶴の目鷹の目。とめるお埒も暗がりて。フシすべき様なき折からに。コハリ又も圍爐裏かくわつと燃え。そこにをるか互の切先。ナホス南無三寶と杓の水ばつとかくれればふつと消え。目先手先も知ればこそ。詞盜賊め。侍めと。地聲を力の滅多討ち。フシ燃えると斬合ひ。消えると探り千變。萬化の戦に暫し時。をぞ三重移しける。地色隙取る内に圍爐裏の明り。七轉八倒お埒はあわて。一間の障子引きはづし斬合ふ中へ打ちかぶせ。身を捨て鍾と乗りかゝれば。互の太刀先抑へられ。思はずどつかと居坐つて。フシほつと息づくばかりなり。地色音に驚き御臺石動手燭携へ駈出て給へば。お埒はせき上げ是待つてたべお二人。詞わけて我が夫與次殿。此方の事は所ても。人も恐るゝ男一匹。盜賊よ追剝よと。名を立てられて切先勝負。地若しもの事があつた時妻子までの面汚し。何故さもしい名は取り給ふ。様子を聞かねば爰放さぬナア仔細はとせく詞を。詞尤もぢや女ども。全く某盗みはせず。其侍が同道の足弱二人はお尋ね者。則ち此國の領主。筑紫より大内義弘殿到着あつて。此繪圖に合ひし者當國へ來りし由。搦取つて渡せとの仰せ。地證據は爰にと懐より。出して見せたは紛ひもなき。御臺所と若君の。お姿書きし寫繪に。人々ハット胸つかへ肝を。フシ冷するばかり

なり。地色お尋は常から頼もしき夫の心をよく見抜き。コレ其繪のお二人。いづくいかなる御方と。知つて此方は捕へるのか。イヤそりや知らぬ。人違ひでも大事なし。捕へて来いと仰せ。身にかゝらねば念押しして。問ふ間もなく歸りがけ。慈尊院で出くはし見通しならぬ庄屋の一言。其意地持つて此場の出逢ひ。地構ふな退け／＼そこ放せと。勿退けるをイヤ放さぬ。詞斯うなるからは何を隠さう。これなるお侍は自らが前の夫桑原女之助。お供しられた二方は。其繪に違はず筑紫大名。加藤左衛門繁氏様の御臺若君。地わしが以前のお主ぢやと。聞くより與次ははつと飛退き。左様と存ぜず無禮の段。眞平御免と氣折の平伏。心許さぬ女之助反打ちかけ。詞ヤア俄かの三拜喰はぬ／＼。我等も昔は家來筋などと。古手を以つて油断させ。大内が方へ注進する下心か卑怯者。地立上つて勝負せよと勢ひかかれば。詞ヤレ早まり給ふな。其言譯見する物あり。暫くと押宥め。地色簞笥より刀一腰取出し目通りに据ゑ。いづれもお見知りある刀。立寄つて見給へといふに人々氣を付けて。見れば目貫は菊流し牡丹に獅子の國錦は。紛ひもなき夫の差替。げに／＼繁氏卿のお刀。詞こりやどうして其方が所持したる仔細はと。地不思議立つれば。詞ヲ、不審は尤も。もと某は播州浪人。尾羽打枯し都方へ。奉公稼ぎに上る折から。入幡山崎の間狐川の渡しにて。さる浪人と口論仕出し。刺違へんと致せし所。其場へ繁氏卿通り合はされ。雙方一分立てよと。御差替一腰宛下し置かれ。地色命助かるのみか外聞の腰を塞ぎ。それより武士奉公のあり付きなく。此國の土民となつては候へども。詞御恩は忘れぬ昔氣質。命の親の繁氏卿。その御臺若君と聞き。地何と手向ひ申すべき。御疑ひを晴らされ御譜代同然に。思召し下されよと。餘儀なくいふに御臺は嬉しく。げに其事は御物語ありし事。扱は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世。御跡慕ふ我々が。力となつて今一度。繁氏様に逢はせてたも。頼み少なき世の中やと。フシ聊ち給へば。詞お氣遣ひ遊ばすな。天地の間に御座あるなら尋ね逢はせ参らせんと。地奥底もなき心底を見込んで猶も女之助。頼み、お頼もしき御一言。とてもの事に御誓言で承りたし。其上頼む事ありと。地いふに居直り金打し。詞諸天善

神は愚か。佛意をかけ二言なしと。地色聞いて安堵の胸を据ゑ。何思ひけんどつかと坐し。差添抜いて我とわが。腹にくつと突立つる。人々は狂氣かと驚き騒げばア。詞騒ぎ給ふな方々。思ひがけなき最後故。御驚きは尤も。何を隠さう某は。生れ付いて好色深く。兄監物太郎が疑ひを晴らさん爲。守宮の血を腕に塗り。地誓ひを立て、國を出で。心を心で嗜めども。情なや宵の夢。わりなくも御臺へ戀慕。聞入れなきを手にかけて殺さうと迄したりしが。詞尊院の時知らず。鐘の響きに夢さめて。いつにない御臺には。我姿を見て御恐れ南無三寶。地夢とはいへど通せしか。はや切腹とは思へども。我なくなりては御兩所を。守り奉る人なきと。さあらぬ體にて是迄来り。今與次殿の心底見込み。頼み置いて相果つる。詞申し若君様。是なる與次殿を力となされ。父様のお行方尋ね。目出度う御對面遊ばせや。地何の因果で此様に。不所存には生れしぞと。我と我身の悔み泣きフシ見る目も。共に哀れなり。地色與次はわざと涙を隠し。詞夢は五臓の煩ひ。なぜ本心を改め御先途を見届けぬ。地切腹とは腑甲斐なしと恥しむればイヤナウ。詞本心を改めても。夢となぐるになぐられぬ。仔細は腕に塗つた證。心の迷ひで守宮の血が。地これ如く消えたるは。罰か報いか天命か。兄監物へ言譯の。種を失ひ是非なくも。斯くは計ひ。フシ申せしぞや。地色よし證が落ちぬとて。最早御臺は虎の子を。供に連るゝと思召し。片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の。お心休めにする切腹。これ迄盡くせし忠節を。無にして死ぬる跡の儀を。頼む／＼といふ聲も。フシ弱り果てたる息づかひ。地色與次は哀れの袂を絞り。せめて最期の思ひ出に。娘かどたに逢はさんと。呼びに立つを女房が涙ながらに引きとめ。詞定めて様子も聞いても居ませう。駈出る筈が駈出ぬは。前の親を慕ふかと。思はれまいと思ふから。其氣な娘を呼出して泣くも泣かれぬ苦をさそより。やつぱり小陰で存分に。地泣かしてやつて下されと。子に擬へたる我涙。保ちかねて思はずも。スエテわつと。フシばかりに泣叫ぶ。地色御臺も共に御涙。惚れる身よりも惚れらるゝ此身のつらさ悲しさを。推量しやとしやくり上げ。歎かせ給ふ御聲が。冥途の形見南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と差添を。抜くが此世の暇

乞ひ。フシ消えて果敢なくなりけり。地色ハツトばかりに人々の縋り泣入る折こそあれ。遙かに聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち。ノリ詞コリヤ〜女房。泣いて居る所てなし。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて隙間を見てお供せん。地先づそれ迄は一間へ入れ。聲すな音すな油断すな。行け〜急げとフシ追ひやり追ひやり。地七の圖まで尻引からげ。好む所の段平を抜翳して待つ所へ。馬上に跨がる大内義弘。松明提灯星の如く。手の者引具しどつと駈寄せ。詞ヤア〜此家に繁氏が御臺忼石動。圍ひ置いたる條遠見の注進。急いで繩かけ渡せばよし。地異議に及ぶとあばら家を乗潰してくれんずと。くわつと睨めたる兩眼は。海に入り日の射す如く。フシあたり眩く見えにけり。地色内にはわざと音もせず。詞すは風くらつて逃げたるか。踏込めやつと呼ばはる聲。地捕つた捕つたと捕手の役人。われ劣らじと込み入るを。得たりと與次は。眞向梨割車斬り。さしもの大勢たまり得ず。一引きさつと引いたりける。地色大内は馬上に齒がみをなし。詞所の代官駒形一學。あれ蹴散らせと下知すれば。地承ると駈來る侍早繩たぐつて大聲上げ。詞やあ〜與次。いか程に働くとも。斯く十重廿重に取巻いては叶はぬ〜。異議に及ぶと飛道具。いかに〜と罵つたり。地色流石の與次も飛道具に心おかれし折からに。一間の内よりコレナウ御亭主。とても遁れぬ我々。急ぎ繩かけ身の難儀。遁れてたもと障子を明け。出づるを見れば妻のお埒。娘かどたを石動に仕立て、出づる主思ひ。それと悟れど恩愛に。心後れて手を仕へ。詞ホヲ、其御覺悟はさる事なれども。一旦圍ひし某が。むさ〜渡す無念さを。地御推量下されよと夫婦別れの涙をば。目に浮ぶればお埒も萎れ。詞自らは覺悟の前。只いとほしきは此石動。地あらぬ形の男鬚。不便にござると共泣きに。泣きしをれしが。與次はつつ立ち是是役人。詞お尋ねの兩人。繩かけてお渡し申す。地受取られよといふ聲に。駒形一學内に入り隙間あらせぬ氣配り目配り。是非なく繩をかける内御臺は駈出て。ナウ悲しや妾こそと言ふ口押さへて立身で隠し。親子を引立て引渡す。表に控へて大内は大聲。詞コリヤ〜一學。渡し置いたる繪圖あるべし。引合せて受取れと。地遁れがたなき鶴の一聲。

驚を鳥と争うても。争ひにくき姿繪を。明りへ出して引擴げ。見るも一生懸命。遁れぬ所と與次は身構へ。つく〜詠めて駒形一學。詞繁氏が御臺忼繪圖の通りに違ひなしと。地表へ答へる慥かの訴へ。與次は夢かと念に念。其詞に相違ないか。地色跡で違變召されたと。打つたる釘の詞を返し。詞ヤア入らざる馬鹿念。駒形一學春秀が受取つたに相違はない。よく繩かけて渡したよ。當座の褒美に一腰くれると。地差添抜いて提灯の明りへ出したは繁氏の狐川にて情の一腰。詞ヤこりや我夫のお差替。扱は拙者と一時に。御恩を受けた侍かと。地いふ聲高いをシイしつと。押さへて消して引立つる。昔忘れぬ武士や見送る夫も妻子をば。恩に替へたる涙の雫。身に降りかゝる御臺の歎き。餘所に見捨てるお埒は忠義。かどたは實の父に迄。おくれの髪あはれの男鬚。今日は石動明日よりは。賽の川原の石の塔。十づつ十は百歳と。祝ひ飾りし命をば。捨てに行身と捨てにやる。思ひは同じ思ひぞと。泣いては送り送られて。屠所の歩みと歩み兼ね。行きては戻り戻りては泣く音もつらき明鳥。かはい〜の。聲名残り引かれて。こそは別れ行く

第五

地陰徳あれば陽報あり賢き教へ眼前。地色御臺所石動丸玉屋の與次が介抱にて。繁氏卿の御在所尋ね求める高野山。小石交りの細道を爪先上りたど〜と。辿り給ふぞフシせつなけれ。御痛はしや。母君は。習はぬ旅の疲れにて御心地例ならず。歩み悩みて休らひ給ひ。詞ナウ與次殿。誠や人の習ひにて榮え衰へ。浮き沈みありとは豫て知りながら。餘所の事よと思ひしに今身の上に思ひ知る。地色是につけてもいとほしきは内方お埒と娘のかどた。我々が身に代り敵の中に憂き苦勞。定めて憂目に逢ふやらんと案じ過しの御涙。共に萎るゝ詞を嗜み。詞ハア、譯もない御歎き。彼等が御身に代りしは。お主大事と一途の忠義。さは言へ駒形一學は。情を知つたる侍命には氣遣ひなし。地斯様な小事に御心を痛め給ふが御病氣の障り。必ずお案じなさるゝなと。口にはいへど心には。胸迄のぼす涙を抑へ。詞申し若

君様。親子御一所にお供して尋ね廻り。殿様に逢はせませんと存せしに。この御病氣では道抄も参らず。殊に女人禁制の御山。寺中へは行かれぬ御身。お前ばかり先へ駈抜け。地色繁氏卿を尋ね給へ。私はそろ／＼と御臺様の御供し女人堂にて待ち申さん。フシはや疾く／＼と勸むれば。地色今日ぞ戀しき父上に尋ね逢ふよと嬉しくて。御心はせかるれどやう／＼二歳の時別れ。それから逢ひ見ぬ父様なればお顔さへ知らぬもの。何を便りに尋ね逢はん殊には母様の御病氣見捨て、一人わしいや。三人ながら一所にと。フシ離れ難なき御風情。地御臺所は目を開き。詞ヲ、道理道理さりながら。其方が側を離れぬとて此病が治るにあらず。片時も早く父様を尋ね女人堂迄お供しや。地殿様の顔見るならば蒼婆扁鵲が薬にも。百倍ましたる薬となり本復するに。フシ疑ひなし。地色お顔は知らずとお名を名乗り。加藤左衛門繁氏の今道心は何處にと。出家に逢はゞ尋ねよや。詞湯水を取つての介抱より是に増したる孝行なしと。地息もたよわき御仰せ。幼心に聞分けて。詞父様のお顔を見て。御本復さへある事なら成程私が先へ参り。お在所を尋ねましょ。地跡からそろそろ與次を伴ひ。女人堂迄。お出であれと。しを／＼濡るゝ笠と。杖。取上げて立ち給ふを。顔つく／＼と打守り。詞そんなら其方はもう行きやるか。地西も東も知らぬ身を。手放してやる氣遣ひさ。跡で案じはいかならん父様に巡り逢うたらば。随分早う便りをしや。暫しの別れといひながら人の命は電光石火。打つ石の火より果敢なき譬。詞母が顔もよう見とおきや。そなたの顔も詠めんと。地物が知らせし暇乞ひ。傍で聞く身の胸苦しく。與次は詞も泣く涙。フシ目をしばたゞき。あちら向く。地若君何の頑是もなく。然らば母様後程と立出て給ふ。詞コレ山道を餘所見して蹟くな。地怪我ばしすなと氣を付けて見交はし／＼別れたる。是が此世の名残とは後にぞ思ひフシ知られたり。地色與次は御跡見送りて涙を拭ひ。詞サア是から御臺様。坂の間を負ひ参らせん。地いざせ給へといふ所へ。女房お埒娘のかどた。息をばかりに駈來るを見るより喫驚。詞サア女房か。ナウ娘のかどたかと。地御臺も共に御驚き浮木の龜の對面と。悦び給へば潮思つき。詞不思議に命助かりしが御運の末。折角親子が心を碎

きし。お身替りも買者と。新洞左衛門に言ひさがされ。いとほしや駒形一學殿。直ぐに其場で御切腹。我々も危き所をやう／＼切抜け逃げたれども。地追手の來るは知れた事。早う立退く御思案と。いふに驚く與次が面色。詞出來した／＼しかし。此如く御大病たやすく遁れ逃げ難し。地色若君は早や御山へ我も娘を引連れて。御臺様を肩にかけ女人堂に預け置き。立歸つて防ぐべし。詞其間を汝踏みとゞまり。地暫らく追手を支へよと。差したる一腰投出せば。詞ヲ、それ／＼よい合點。爰は妾に御任せ。地此所より一寸も追來る敵を山へは登さぬ。フシ氣遣ひあるなど。男勝り。地脇差取つて脇挾めば。よくせよ抜かるな女房と。御臺所を負ひ参らせ。娘が手を引き逸散に。オクリ山深。へくこそフシ急ぎける。地色サアあなた方さへ落したら心にかゝる事なしと。獨言する折こそあれ。麓より來る大勢は大内之助が雜人ばら。おつ取巻いて聲々に。詞サア賈御臺の喰はせ者逃くるとして逃がさうか。誠の御臺石動はいづくへ落した。有様にほぎき出せ。偽ると肝先へ太刀魚がお見舞と。地袴き騒げどちつとも臆せず。詞ム、親子御の行方が聞きたいか。それは天竺の四日市。大儀ながら上つてござれ。テモ咽のえらい女め。地叩き殺せと拔連れ／＼斬つてかかればまつかせと。同じく此方も抜放し。詞どれ御自慢の太刀魚を。箱摺刺す繩だら料理。切味を賞翫と。地多數を相手に縦横微塵火花を散らして。三重、戦ひけり。フシ女なれども。地忠義の一念飛鳥の如く駈廻り。なぐり立てたる太刀先に。コハ敵じと雜人ども。はふ／＼逃げて失せにけり。舞詞ヤレ此隙がよい引き時。地長居は恐れと逃ぐるも追はず。御臺所と夫の跡。ナホス慕ひてこそは。三重、行く空の。フシ雲間に近き。八葉の。峯に紫雲の靈隠し。高野山と聞えしは三面に山連なり。源一水にして萬水東に流れ。大師二犬に道を習ひ。開き。フシ始めし靈地とかや。林清地いたはしや石動丸。かゝる難所をたど／＼と。心も空に浮草の。根ざしの父は顔知らず。名のみ知るべに。尋ね行く。オトス袖の涙ぞ。フシ哀れなるナホスフシ思ひ高野の。谷川や弓手は岩間。馬手は天野の山嵐。峯に煙の。一結び。見上げて通る。不動坂。踏みも通はぬ。丸木橋名残り情も横吹きの。嵐に木の葉。散果て。スエ心細道つく杖

は。アミドおりつ登りつ。行先を。問へど岩根の松かげに。フシ暫し。休らひ給ひける。謠サシ百年の榮耀は風の前の燈火。悟れば我も佛なり。ナホス地煩惱菩提と。フシ諦めて。地色加藤左衛門尉繁氏入道。苜萱道心と名を改め。佛法修行の山坂を。辿るもフシ後世の便りかや。地色石動親子の機縁にや思はず傍に走寄り。詞申し御出家様。地色の御山に今道心のましまさば。教へてたべとありければ。詞コハ興がる少人かな。九百九十の寺々。毎日入り来る初發心。昨日剃つたも今道心。一昨日剃つたも今道心左様に尋ね給ひては知れ難し。俗の時の名を言うて。地尋ねられよと身の上の。オクリ事とも。知らず。フシ仰せある。地色さればと尋ねるは自らが父上。二つの年別れし故お顔も見知らず。元は筑紫松浦黨。加藤左衛門繁氏様と。言ふより扱は我が子かと。取纏らんとしたりしが待て暫し。佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹脊。爰ぞと思ひよそしく。詞ムウ年も行かぬに遙々と。慕ひ來る志。地色誠の父が聞かれなば嘸嬉しくも懐かしく。飛付く程に思されんさりながら。詞此山の掟にて。縦へめぐり逢うたりとて。名乗り合ふ事かつつ叶はず。地色はや／＼國へ歸り。母御を大事にかしづくが。又一つの孝行と。フシひ教ゆれば。詞イヤナウ我が國は大内といふ者攻惱し。母様諸共この山の麓まで参りしが。地悲しき事は母様が道の疲れに煩うて。命の内に只一目父に逢はせてくれよとのお歎き。情と思つて御在所。御存知ならば教へてと。目に持つ涙はらくと。抑へ兼ねたる有様に。詞我こそと名乗つて聞かそか。いや勿體ない師の御坊の戒め。と云うてはる／＼來たものを。知らず顔見ぬ顔が。地どうなるものぞ不便やと。胸にせきくる血の涙。こたへ兼ねて思はずも。スエわつと。ばかりに泣き給ふ。地色石動丸は目賢く左程に歎き給ふのは。もし父上ではあらざるや。早く名乗りて給はれと。纏り歎かせフシ給ふにぞ。地色亂れ心の折ふしに。後の方の岩陰より。師の阿闍梨の聲として。詞ヤア／＼苜萱。棄恩入無爲地棄恩入無爲の。誓ひを忘れ給ふなど。制せられて苜萱は。起上つて振返り。ハア、さうぢや。迷うたり誤つたり。今此三界悉是吾子。いづれを我が子と思ふべき。師の手前も面目なしと。衣の袖を打拂ひ。詞ハレ小ざかしき少

人かな。地哀れを共に見捨てねば我を父よと纏る事。穢らはしや忌はしや。詞お事が尋ねる繁氏入道。此山におはせしかども。諸國修行に出て給ひ今は行方も知れざるぞ。地色急ぎ下山し母親の。病氣の介抱召されよと。スエつれなく言へどこやらに。フシ残る詞の彌勝り。地色なに父上は行方も知れず。此山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母様が。焦れ死をなされうかと。そればかりが悲しうて。跡へ戻るも戻られず。似た人にもあるならば。逢はせてたべと搔口説く心ぞ。フシ思ひやられたり。共に張裂く。思ひをば押隠して。懐より。包みし薬取出し。詞コレ是は師の御坊一萬座の護摩を焚き。調合ありし妙薬。母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて草臥足ては叶ふまじ。こちらへ行けば花坂とて平地も同じ事。地色馬もあり駕籠もありいざ／＼立つて行かれよと。心強くも引立てられ。長地石動丸は泣く／＼も藥とあるを力にて押戴き／＼是非もなみだの泣別れ。フシ迷ひ道をば。そこ爰と教へながらも苜萱は。心許なさ思はずも。引かるゝ縁の友綱や見えつ。隠れつ。三重へ慕ひ行く。地息をばかりに玉屋の與次御臺所を負ひ奉り。娘を引連れ女人堂迄來りしが。跡先眺め片陰におろし参らせ。お心持は如何ぞと申し上ぐれば御臺所。苦しき體を押隠し。自ら事は思はずとも。お埒を救うたもるのが。我が爲の良薬と。宣ふ詞に跡先を。思ひ廻して猶豫せしが。詞いかさま女の手業に追手を防がせ。地見捨て、置くも心許なし。仰せに任せ引返し申すべし。詞コリヤ／＼かどた。大事の／＼御臺様ぢやぞ。お傍を離れず御介抱申せ。地お腰でも撫らしてござりませ。つい往て参ると口軽く。フシ飛ぶが如くに引返す。地色御臺は重る病ひの床。涙ながらにナウかどた。詞向ふの道より石動が。歸る姿は見えざるか。地戀しの我が子や。なつかしの我が夫やと。彼方を見ては打倒れ。此方を見ては。伏轉び最期も近き御有様。かどたは悲しくコレ御臺様。詞父様や母様の。歸らしやる迄どうぞマア。地死なずに居て下さりませと。スエテあどなき詞かいしよなき。フシ娘の肩に。介抱せられ。詞自らも石動が便り聞く迄／＼と氣の張弓も弦切れて。地死ぬる今端に。フシなりしぞや。地色與次夫婦が歸られなば。石動事をくれ／＼も。頼んで死

んだと言つてたべ。せめて最期に夫や子の顔見る事が叶はずば。聲なと聞いて死にたいと。御山の方を打眺め。眺めても口説いても。逢はれぬ事かとしやくり上げ。泣く音も辛やい。き切れの露の命の果敢なくも。フシ消えて跡なくなり給ふ。地色かどたはあわてナウ是申し。申しといへど其甲斐も。なくも泣かれず立つたり居たり。母様呼びに走らうか。父様はなぜ遅いと。坂を駈けおり聲を上げ。詞父様なう母様なう。御臺様が死なしやつた。地コレなう戻つて下されと。聲をばかりの叫び泣き。フシことわり。せめて哀れなり。コハリ頃は臘月雪空に。餌食乏しき山鴉。ナホスカはい。可愛を引替へて。フシ死骸にたかれば。地ナウ悲しやと駈寄つて。あなたを追へば。こなたから集りかゝれば詮方も。小石を拾ひ打つ礫をこよ。爰よと駈廻り身體も息も絶える程。父を呼び鳥を追ひ。追ひめぐれども小娘の。フシ泣く音もつらき折からに。地色石動丸は徒歩眺かくを見るより走付き。群る鴉を切拂ひ。あへなき死骸を揺起し。ナウ情ない母様。斯くなり給ふ事ならば何しに傍を離るべき。父上には得逢はず。お前に別れて私は。何とならうと思召す。詞これ結構なお薬を。御出家様に貰ひました。是をあがつて健になり。たつた一言石動かと。地物いうたべ起きてたべと。薬取出し噛みこなし。甲斐なき母に吹込んで。ナウ母様々々と。起立て抱きかゝへ。ステテ前後。不覺に泣き給ふ。地色かゝる哀れを遠目から。見るより思はず苜萱道心。走寄りしが是迄さへ。立てし誓ひを今更に。無下にはせじと目を押し拭ひ。詞コレく少人。悲しきは道理ながら。いたく歎くは佛の迷ひ。地いでく回向し參らせんと。口に唱名心には我を慕うて遙々と。海山越えて來りしに。妻子かともえ言はずに。餘所に扱ふ我が心。草葉の蔭からさぞ恨みん。赦してくれよ我が妻と。念誦に交る胸の内。フシとどめ兼ねさせ給ひけり。地色然る所へ與次夫婦駈戻り。詞ヤア御臺様は御最期かと驚き騒げば。地女房が苜萱を一目見て。なうお久しや。繁氏様といふに石動。詞なに此お方が父様か。地なつかしや戀しやと縋り給へば衣の袖。打拂ひく。逃げんとし給ふ後より。詞ヤレ侍も給へ我が君と地聲をかけて監物太郎。大内之助に大綱かけ息をばかりに駈來り。詞勅命受けて一戦に討ち勝ち

生捕つて參つたり。如何計ひ申さんと。地言ふより與次が躍り出て。詞何かはなし急いで首と。地既に斯うよと見えたる所へ。暫しくと新洞左衛門。飛鳥の如く飛來り。詞謀叛人とはいひながら。未だ旗を上げたにあらず。一家中の歎きを思召し。地一命助け給はれと平伏すれば苜萱道心。助けるとも殺すとも私には計ひ難し。都へ行きて奏聞遂げ。命乞ひして得さすべし。詞それを我が子石動が。筑紫へ送る轍と。セメ地仰せによつて引立つる大悪無道の強敵も。我が神國の御注進繩。治まる御代の例として。悪人亡び國安全。民も豊に萬々歳。千代を祝ひし筆の跡長くも。語り傳へたり

和田合戦女舞鶴

Faint vertical text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

和田合戦女舞鶴

Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

和 田 合 戦 女 舞 鶴

和 田 合 戦 女 舞 鶴

作者 並 木 宗 輔
府 本 豊 竹 越 前 少 掾

序詞地理全書を閲するに。金は武備甲兵を司り。倉の字は人一君と書けりと云々。前武衛頼朝卿。御子孫無窮の居城を考へ。三つ葉四つ葉の殿作。宜も富みけり鎌倉山。ヲロシ松も常盤の。陰ひさし。地色長男頼家早世在し。御次男實朝御家督ながら。御弱年におはす故。御母平の政子禪尼。簾中にて政を輔佐し。男まさりの智恵の海。蝦夷が千島の隅々迄。滯なき御惠。悦ぶ民の諺に尼將軍とかしづかれ。用ゆるときは虎の間に。御簾揚げさせて座し給ふ。床をならべてましますは。實朝卿の御妹齋姫。今年三五の玉かづら。嫁入盛りの海棠や。おのれとひらく花の顔。フシ錦。色どる風情なり。地色目通りに三老職。年若なれども北條の嫡男。江馬の太郎義時。和田新左衛門の尉常盛。其外の大名小名。男女別有る威儀を改め。遠侍に蹲踞する。尼君仰せ出さるゝは。詞此度大樹任職の勅使として。參議中の院爲氏卿。今日館へ入興有る由。折こそあれ實朝大江の廣元。其外物なれの老臣どもを召つれ。奥州一見の留守の内。當惑ながら是非もなし。地色かたぐ心付け合せ。故實を守り萬事萬端。無禮麁相の無きやうと。仰せに兩人頭をさげ。詞御誕の如く無骨の我々。饗應覺束なく候へ共。先格を以て相はからひ申すべし。地色御心やすく思し召せと。受けがふ内に門前の。オクリ塵をへ拂ふや長袖の。フシ姿の雅び。爲氏卿。悠々と入り給へば。尼君親子褥を立ち。席を譲つて拜趣の。フシ禮嚴かに平伏ある。地色勅使は座上に威儀を繕ひ。宣命開き讀上げ給

ふ。調それ天子は天命を稟けて王制を正しうし。將軍は王命を奉けて以て將道を守る。實朝武將の器たるによつて宜敷く征夷大將軍に任ずべし。母政子は從二位禪尼に叙す。建曆元年秋七月と讀終つて。地直に口宣を渡さるれば。尼君ハツト頂戴有り。詞器量過分の重職。天恩謝するに詞なく侍ふ。就中實朝儀。千賀の鹽竈一見とて。罷出でしは先月朔日。お勅使京都を御發駕と。承りしは一昨々日。飛脚を走らせ候へ共。長途の延引恐れ入つたる仕合と。地謹んで宣へば爲氏御機嫌麗しく。近頃以て奇特の至り。所々の要害國民の。邪正を知るは武の學文。名所古跡は歌のしるべ。父頼朝の好まれし家の風こそ優しけれ。詞それなるは齋姫よの。京はづかしき立振舞。地色和歌に心もありつらん都の土産に聞たやと。フシそくばに水を汲交す。地色詞の艶に齋姫包むに餘る嬉しさに。コハ恥しき御仰せ。詞花になく鶯。水に住む蛙迄。歌詠むものとは聞ぬれど。地田舎に住めば師匠無し。腰折一首得詠まぬ事口惜しう候ふ故。大内方の宮仕へかねく願ひある折から。今日お目見得を縁にて京が見たやの挨拶も。間渡しならぬ壁訴訟。何れ戀路の下地かや。地色渡りに舟の爲氏卿田面の雁の一向に。君が方にぞよるといふ。母のお許し有るならば臈て京より聲がねの。迎ひの輿を參らせんと。戯れ給へば尼君は。扱て有難きお詞や蝶や花やと齋姫。都の殿に迎へられ檜扇持つて緋の袴。見る目は老の安樂と。奥底も無き詞の唯中。江馬の太郎進み出で。詞シ、申し暫く。尼君には未だ御存じなされずや。齋姫は成人の後。某が妻女に致させよと。先將軍頼家卿の御内證。他へ御縁組御無用と。地言はせも立てず常盛聲に角立て。詞此新左衛門に妻合すとの。頼家卿の御遺言。地他人の戀慕は叶はずと云ふに義時ぎよつとして。詞何の宣ふ和田殿。只今のお詞は。先將軍のお差圖とな。ナカ。貴殿にもお差圖とな。ナカナカ。ム、疑ふにはあらねども。證據ばし候か。オ、證據は則ち藤澤四郎。手前の使者は其親入道安靜。ハ、ハ、ハ、ハ。そりや寢言をおつしやるか。イヤ御邊は酔狂めされたの。ナント武士に向つて酔狂とは。侍が寢言を言ふとは。ハテ寢言で有るまいか。齋姫は某が妻女と。ハレ白痴た事ばかり。地姫の夫は此新左衛門常盛。金輪奈落我が女房。

調アレまだどんな男が有る。忝くも此北條が奥方に。地指ても差いたら許さぬぞ。汝を我を。己れをと互に刀に手をかけて。フシ既に斯うよと見えければ。地色尼君聲かけヤレまで兩人。詞頼家が遺言とは自らとてもいぶかしけれど。大切の客人さね。殊更實朝留守といひ。地色勅使に無禮は天子へ恐れ。平にと鎮め給へども。兩人若氣の詞を揃へ。詞御説には候へ共。先御代よりお目がねにて。相勤むる三老職。虚言者と申し召さん。勅使のお心京都の聞え。地御政道の障りとならんお家の疵には代へられず慮外は御免下さるべし。詞イザ抜け北條。サア抜け和田。地ぬけぬけくと立ちかゝり。フシ無二無三に詰寄れば。詞ヤア遠侍に誰か有る。それ鎮めよと御説の内。地色阿佐利の與市義遠御前に候と。烏帽子にあらで笄鬘。六尺豊の大女房。雲に羽をのす鶴の丸。大紋袴踏みしたきゆらり。ゆさゆさしやなしやなと。争ふなかへ怖氣もなくしやんと分け入る梅枝は。いかな龍虎も香に愛てて。フシ勢ひとまるばかりなり。地色さすがの和田も北條も。呆れて顔を打守り。詞ム、汝は阿佐利が連添ふ板額よな。武士と武士との争ひ。女童の知らぬ事。地退つてみよときめ付ければ。詞ホ、ホ、ホ、オ、輕骨。わたしも主のある身ぢやもの。色好みな殿達へ手をさすも不遠慮と。大きな體を隔ての櫃。破れぬ内にしづめるはお上への御奉公。お勅使のお入につき。夫阿佐利は町廻り。非常を正す外の役。内を勤の仰せを受け。地色お次に控へる侍役。ふはさはなさるりや何時迄も。おしづめ申す私が役。お止りあれば其通り。もしさもなく今度は又。力業で留めますぞや。詞ヤア慮外なる女。汝が力におぢ恐れ。武士道立てず安閑と髭もんですまさうか。地色退かずはおのれときつばを廻せば。此方もひるまぬ女の大兵。握りひしがん眼は八角。和田北條は手練の兵術。うかつに抜かず退ぞかず。三隅になつて争ふは。蛇と蛙の真中へでんく蝸牛の笄わけ。つのめかなめとフシにらみ合ふ。地色爲氏いらつて制し給ひ。詞關東武士と諺に。聞きしにまさるむくつけ者ども。心あらばよつく聞け。普天の下率士の濱。王土にあらずと言ふことなし。勅説と聞く時は雷も地にくだり。鷺もおり居る例を知らずや。取分け此爲氏か宣命使を承り。此地に逗留

する間は。鎌倉が則ち王城。此場は今日の大内なるに。人と産れて仁義を忘れ。目通りにて尾籠の振舞。王命を背く條立歸りて奏聞とげ。地色死罪流罪は後日の決闘。よく／＼覺悟仕れと。御座をひらりと下り給へば。尼君親子は冥加も涙。お裾もそこに取付きひれふし。三人の荒者は頭を疊にすり付けひつ付け。満座はしんと神國のフシ人の。心ぞ素直なる。地色爲氏御氣色なほらせ給ひ。詞神妙／＼。事のり起は某が。心に思はぬ戯れごと。あやまつて改むるに憚らぬのは都風。地當つて碎くるあづま武士。双方遺趣をふくむなと御拔目なき詞の釘。尼君喜悅の顔振上。詞御逗留のお氣ばらし。何をがなとて方々が猿樂とやら能とやら。五品六品の其中に。紅葉狩の大夫は義時。間の役は齋姫。地お目まだるくとも御上覽。御機嫌如何と會釋ある。詞オ、何よりの饗應。まだうら若き齋姫。戀のいろは紅葉狩。相手も丁度義時と。地色御挨拶のはしくを羨ましくや思ひけん。新左衛門つゝと出て。詞能は不得手に候へ共。姫君のお相手に。拙者めワキを致さんと。地むつと顔なるフシどす聲つき聲。地色爲氏殆んど打笑み給ひ。遠慮會釋もならざかやこの手柏の二男。昔男の色好み業平達もこなたへと。興じて御座を立給へば。嬉しさは身に尼將軍齋の姫諸共に。ひきはかへさぬ弓八幡。思ひは花月和田北條。連理争ふ松風の中に立舞ふ鶴の丸。男ども見え女ども裏ふき返す紅葉狩。かりそめならぬ遺趣遺恨勝負は重ねて狸々と。亂るゝも戀和らくも。大和假名には二つ文字。牛の角文字。すぐな文字。ゆがまぬ。國こそ三重久しけれ。地清和の流れ源は幾千代かけて末廣き。扇が谷の御別殿將軍の館には。勅使爲氏儲けの爲。俄にしつらふ能舞臺御所望の番組とて。式三番弓八幡花月松風紅葉狩。切は酒宴の亂れ酒。フシ狸々ところしるされたれ。思ひは色に齋姫。爲氏卿へ戀草の。結び交さん下心いそ／＼として入り給へば。御乳人の城の九郎資國。年寄役に姫の守附從へば向ふより。切幕明けて出迎ふは。荏柄が女房綱手といへる心きゝお氣に入りとて遠慮なく。詞能はまあお姫様。丁度よい時分におこし。たつた今松風が果てまして中入の最中はからは紅葉狩。お前のお役と尼君を始め。地色和田殿や北條殿も申し合せをお待ちかね。サア鏡の間へといふを資國。詞嫁女せはしない。姫君の御役は末社の神。能が始つてもまだ餘程間があるちつとお休め申してから。柴屋入りさせましたがお有りやる。其間にお袋様やシテワキの衆へ。お出での様子を咄し言合せは。夜前の通りと申して置かうおせきなざるゝ事はおりない。地爰で暫く御休息と。心を付けて資國は。フシ奥の一間に入りけり。地色姫君をたり見廻して小聲に成り。詞ナウそなたもかね／＼知つて通り。鎌倉都と隔たれども。爲氏様を見ぬ戀にあこがれ。歌の點取にことよせ。心のたけを詠みつゞけ。地短冊にそへ玉章をお目にかけては數知らず。一度いなせの御返歌もなかりしに。此度稀れのお下りこそ。願ひの叶ふ瑞相さりながら。和田北條が争ひ故。泣寝入りならうかとそればかりが氣遣ひ。何とぞそもじの働きて。首尾する様に頼むぞや。詞ア、アお氣遣ひ遊ばすな。歌に名高き爲氏様。嗚ぞ戀知りてあらうもの。地色よもやつれないお返事はなされまい。幸ひ此内がよい隙間。ちよつと合せましたいが。ハテどうがなと心を碎き。詞オ、それ／＼。私は奥へ參り爲氏様のお目にかゝり。歌の詠みかた傳授事。密かにお受け申したし。御苦勞ながら舞臺迄。ちよつとお出で下されかしたあなたを爰へそびき出そ。地色差向ひにやつてごらうじやれそれでいかずば其跡は。私が受取り仕やうもあらう。詞コレ申し相手むかひに口説くのは。月花ではゆかぬぞえ。地身内に汗の出るやうな。べつたりとした台詞が肝もん。それを抜かり給ふなど。フシいひ教へてぞ走り行く。地色姫君はとつ／＼置いつ手短に直付とは。よささうな事なれども。お顔を見たら途中から。ぞつとする程恥かし成つてなんにも言はれる事であるまい始めのかゝりはどう斯うと。戀のいろはの假名遣ひ。フシあくみ給ひし折からに。綱手がすゝめに爲氏卿。姫の心は察しながら。宥めんものときさあらぬ體い／＼。と歩み出で。詞女の童を使にて詠みかた傳授所望のよし。地色なをざりならぬ事なれば憚々しくは傳へがたし。折もこそあるべきぞ少しも惜しむ心にあらずと。仰せにじつと會釋して。詞歌の口傳は容易くならぬとの御仰せ。其代りには今の間に。地つゝい事のすむお願ひは。拙き筆に三十一文字。文玉章の數々で。とうからお歎き申したる戀の秘密の紐傳授。

女夫に成つて教へてたべと。袂に覆ふ顔のつや。フシ紅葉を散らす如くなり。地爲氏卿打笑み給ひ。詞誠や是迄千束の水莖。地淺はかならぬ志嬉しさは盡きせねども。心にまかせぬ仔細あり。ふつふと思ひ切り給へと。すげなき仰せに姫君は猶いやましの思ひ草。根に顯れて涙ぐみ。昇りつめたる雲の上。及ばぬ色に迷ふ身を思ひ切れとは胸慾な。東育ちの不束が御心に入らずとも。せめて一夜の御情。枕を分けて給はれとフシ袖に。縫りて宣へば。詞オ、恨みは尤々。御身が切なる誠の心。地我も寄邊にこがるれどもまゝならぬは世の有様。詞和田北條が妻争ひ。目前に知りながら。妹脊の語ひなすならば。地兩家の者が本意なき恨み。某獨りに留つて終には天下の騒ぎと成り。國の煩ひ遠かるまじ。相思ひに思はれて憎からぬ仲なれども。國家の爲にはかへられず。此世の縁は是限り。我も輪廻は殘さじと。心強くも振切つてフシ一間に。こそは入り給ふ。地ナウこれ暫しと呼びとめても。其甲斐涙にふし沈み。スエテ前後。不覺に見えけるが。地色ア、思へばあなたに無理はない。和田北條が争ひを現在知つてござるもの。ア、おつしやれいでなんとせう。兎角憎いは二人の者。自らが戀の敵。腹立ちやねたましや。とても此世で爲氏様に添ふ事はならぬわけ。いやな嫁入せうよりも。死んで未來に待つて居よ。名殘惜しやおさらばと。守刀を取出し覺悟を極め給ふ所に。立聞きしたる藤澤入道。御手に縫つて。詞コリヤ何なさるゝ危いと。地もぎ取る刃物に縫り付き。いや／＼黙つて死なしたも。何樂しみに長らへん。放しや／＼と泣き給ふを。詞オ、様子を聞いたがお道理／＼。何であらうと某が。申す事に付き給はせ。地爲氏卿と御夫婦にして進上かと抱込めば。詞オ、夫婦にさへしたもるなら。どんな事でも詞は背かぬ。ム、しかとさうてござるぞやと。地色詞詰めて太刀一振取出し。詞中入過ぎて始まる能は紅葉狩。ワキを勤むる和田の常盛。とろ／＼とまどろむ時。入幡宮の神勅にて授け給ふ名劍。末社の神はお前の役。木太刀の代りにこの眞劍。惟茂の役勤むる。和田が枕元に置かしやれ。イヤ／＼それは怪我がの基。やつぱり木太刀がよかろぞや。サア其處にこそ思案あり。かね／＼仲のよからぬ和田北條。今日のお能を幸ひ。北條は答の杖に杖を握り。

和田を打殺す下拵へ。さるによつて此太刀を。和田へお渡しあれと。彼の諸の文句。太刀抜きかざして待つとも本身。振上げて打つも鐵刀。勅使の御前にて。私の宿意を晴らす無禮者と取つて押込め。かけ構ひなく此方をずつと。爲氏卿へ嫁らす思案。お志がいとしさ故。此お世話申すナウ合點か／＼と。地おのが悪事を塗付くる工と知らずそやされ。如何様邪魔な和田北條。しばらく兩家を遠慮させ。其間に嫁入りさすのとは。嬉しいやうながそれはまあ。命づくにはならぬかや。詞ハテそこには拙者がをります。越度を見付けおまへの事。思ひ切らす計略と。フシすゝめ込まれて。姫君は戀の叶ふ嬉しさに。辨へもなく太刀受取り。入道と點頭きあひ鏡の間へぞ。三重入り給ふ。地色既に其日も未の上刻はや四番目の紅葉狩。始まる知らせは棧敷の。簾巻上げて爲氏卿中央に座し給へば。シテは北條江馬の太郎大鼓在柄の平太。女房綱手は小鼓役。笛地謡は外様とて。目通り。はなれ相詰めて紅葉狩をぞ。へ始めける。謡次第時雨をいそぐ紅葉狩。／＼深き山路を尋ねん。是は此のあたりに住む女にて候。あまり淋しき夕間ぐれ。時雨るゝ空を眺めつ。四方の梢もなつかしさに。實にや谷川に。風のかけたる柵は。流れもやらぬ紅葉葉を。渡らば錦中絶えんと。先づ木のもとに立寄りて。四方の梢を眺めると。ナホスフシかたへに座せば。地色ワキの役人和田の常盛。負けじと聲も鋭げに。ウタヒフシ面白や頃は長月廿日餘り。四方の木末もいろ／＼に。錦を彩る夕しぐれ。濡れてや鹿のひとり啼く聲を知るべの狩場の末。げに面白き景色かな。ナホスフシ謡ひつづけて。歩み寄り。互に心よからぬシテワキ。一河の流れを汲む酒を。いかでか見捨て給ふべきと。袂に縫るもフシ居合腰。謡流石岩木にあらざれば。心弱くも立歸る。所は山路の菊の酒何かは苦しかるべきと。ナホス眼を放さぬ身構に。地在柄夫婦がフシ目くばり氣くばり。地色謡も所作も半ば過ぎ。ワキは片へに居眠れば。謡月まつ程の轉寢に。夢ばし覺まし給ふなよ夢ばし覺まし給ふなよ。地シテは裝束改めんとフシ樂屋にこそは入りにけれ。役目はうはの空だきか。はつと薫りし。オクリ柄襦姿。齋姫は末社の神。太刀提へて橋がかり。長地他目遣ひの二かはに見交す君も憎からず思ひ亂るゝ間の役。詞コレ／＼

惟茂。女と見えしは此山の鬼神なるぞ心を奪はれ其身を果たす事なかれと。八幡の神勅にて此御太刀を下さるゝ。我は是末社の神武氏。地あら正體なやとうゝ眠りを覺し候へ。覺まされ候へやと。常盛が枕元。フシ太刀投げ捨て、入り給ふ。地和田はむつくと起上り。誰あら淺ましや我ながら。無明の酒の酔ひ心。まどろむ暇もなき内に。あらたなりける夢の告げと。江戸地太刀を小脇に掻い込んで樂屋を睨み待ちかけたなり。江馬の太郎は鬼神の姿を振立て飛び来る勢ひ。不思議や今迄ありつる女とりどり化生の姿を顯はし。其丈。一丈の鬼神の角はかほく。眼は日月。ナホス面を向くべきフシやうぞなき。誰惟茂少しも騒がずして。惟茂少しも騒ぎ給はず南無や八幡大菩薩と劍を抜いて待ちかけ給へば。微塵になさんとナホス飛んでかゝるも。誠の鐵杖。和田も本身の劍の光り。ナホス地スハ事こそ在柄の平太。二人が中を押割りながら。ヤア。ハアと女房綱手も諸共に和田を隔つる鼓の手。二人は猶も撓みなく抜けつくゞりつつ手だれの達人。地勅使は棧敷に冷汗を。苦り切つたる此場の仕儀危かりける。三重次第なり。地色平太夫婦もあしらひ兼ね。詞ヤア御兩人心得ぬ振舞。法に外れし眞劍鐵刀仔細を語つて聞かされよと。地聲かけられて江馬の太郎面をかなぐり卑怯なり常盛。詞遺恨あつて討果たさば。名乗りかけてなぜ討たぬ。狂言綺語にこと寄せ我を害せんと。企おろかゝ。イヤア卑怯とは己が事。某を討取り姫君を娶らん爲。鐵刀にて向ふ由。先達て藤澤入道内意を以て知らせし故。最前姫の渡されし此太刀。眞劍といふ事はよく知つて用ひたりと。言はせも果てずホ、口賢き和田が一言。汝が眞劍にて能を勤むるとは。我方へ入道が内通。サア斯うしらばけに言ひ出すからは。一寸も遁されぬ。オ、己れとても其通り。イヤ尋常に勝負せいと。地留めても留まらぬ二人が有様。平太夫婦も持餘し。如何はせんと思ふ所へ。尼君の上意あり暫しとと呼ばはつて。走り出でたる城の九郎。流石の和田も北條も。上意とあるに是非もなくフシハツとばかりに平伏す。地色資國詞を改め。詞尼公の仰せ餘の儀にあらず。若氣とは言ひながら兩人共六十餘州の政務を預り。私の宿意にて討果たすなどとは。不忠とや言はん龜忽とやせん。殊に勅使の御前といひ。

甚だ尾籠の働きなり。就中木太刀を渡すべき所眞劍を渡したる齋姫にこそ仔細あり。暫く藤澤入道に預り。きつと詮議を糺し追ての沙汰に致すべし。地色先つそれ迄は兩人共。必ずはやまる事なかれとの仰せなりと言ふ内に。藤澤入道姫君の御手を引き。我は顔にのさばり出で。詞サア二人の衆が望みの花嫁。某が預つた。抱いて寝たくば朝晩にちよこちよことお見舞。拙者が機嫌を取り召され。地何方へなりとも此入道が。氣に入つた翠殿へ嫁入を致させる。ぎつとばりではいかぬぞとフシ憎て口。地姫は棧敷を眺めやり。別るゝ今の苦しさを言ふに岩手の里ならば。しのぶの思ひ通ぜよと。心を残す目遣ひや歩み惱むを入道に。引立てられて是非なくも。フシ涙ながらに出で給ふ。地色爲氏棧敷を下り立ち給ひ我響應の美に誇りかゝる騒動劍戟の愁ひを招く基となる。帝都の聞えも恐れあり。此事世上に沙汰無きやう。和田北條も遺恨を残さず。實朝の輔佐肝要たるべし。鎌倉の滞留遠慮あり。我は是より都へ歸らん。尼公の手前頼み入る何れもさらばと宣ひて。しづゝ還車の御催し。城の九郎取敢へず。詞いかやうとも御賢慮次第。コリヤく平太夫婦の者。將軍尼公の御名代。見送り申せといふに隨ひ。地勅使のお供とひつ添うてフシ夫婦諸共出でて行く。地色跡に残りし和田北條。また怒り出す二人の蟲腹。詞サア勅使お立ちなされし上は誰に憚る事もなし。最前の勝負残りイザ来いやつと飛びかゝるを。地城の九郎押隔て待つた。詞二人の憤り尤もながら。心得がたきは入道が心底。彼方は眞劍。此方は誠の鐵杖と。兩方へ内通せしは胸中に。一物あるに極つたり。爰をとつくと御思案あり。此争ひを某に暫くお預け下されなば。御兩所の存念を急度正し申すべし。言はゞ天下の三老職。地色近頃龜忽輕はづみと。事に慣れたる老人の。當座を鎮むるフシ頓智の一言。地色實に尤もと和田北條顔を見合せ。詞コリヤ常盛。資國の思慮面白し。暫く預けて此場の勝負。先へ延ばすか何と。ム、其方が待つ心底ならば。一人物にも狂はれまい。必ず和田が臆病で逃げたなどと口叩くな。オ、城の九郎が扱ひを幸ひに。江馬の太郎が臆れしなどと。廣言を吐き出すなど。地二人が後れぬ言葉詰め。フシ左右にわかつて控へる。詞ホ、數ならぬ某が。詞を立て、御了簡

眞以て忝し。然し今日の御祝儀。五番の番組今一番にて都合せり。地せめて狸々の切ばかり。御兩人の鼓にて。目出度う某勤めて立たん。御苦勞ながらと頼むに是非なく和田北條。不性無性に取る鼓。資國扇押開き。誰老いせぬや。薬の名をも菊の水。盃も浮び出でてともに逢ふぞ嬉しき。地鼓の拍子もちぐはぐに心揃はぬ囃子方。ウタヒよも盡きじ。〳。萬代までの竹の葉の酒。汲めども盡きず飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江にかれ立つ足元はよろ〳と。舞の間に資國は心を附ける二人が取成。得心しても氣は張弓。稍ともすれば目に角を。地立舞ふ太夫が差しあふぎ。詰合ふ中を。開き扇や舞ひ扇。天下の要は二人の勇者。家の骨なる老武者が。忠義に榮える源氏。ウタと盡きせぬ宿こそ目出度けれ。

第二

地人は神の徳に従ひ來り集る鶴が岡。秋の半の中五日例年變らぬ放生會。社内に鶯を放しかけ鳩は勿論鶯雀。羽のす國のまつり事。四海太平洋豊か。五穀も實のるしには。春や杓子の尼鼻も。フシ群集をなすぞ賑はしき。地商ひは世のフシ浮草や。様々に。人の後生を當てにして。罪を荷うて放し鳥酷い顔をば見せまいと。ぞめき絞りの頬冠り鶯聲のやさかたに。放し鳥雀や雀。詞や來たり買うたり〳。鳩は八幡のつかはしめ。雀は親に孝行鳥。鶯は三遍舞ひまする。買はぬは大きな殺生人。慈悲は神様。地いらぬかと。フシ突付け賣りに賣歩く。同じ世に同じ事なら商賣を。固めて見たい土細工。子供たらしの土産物も同じく顔隠し。一荷の箱にさす初。通りを當てに廻しかけ。詞こりや誰が手車。お長殿の手車。誰がのぢやい。おれがのぢや。誰がのぢやい俺がのぢや。ヂヤござりませ早う〳。地やつとこ正面鳥居の陰。フシ荷を下して休みしが。地色人は愛想と側に立寄り。詞コレ鳥屋殿賣れまするか。去年より参りも多いが。減多に小銭放さぬぞいの。オ、テヤ買はぬ〳。六文の雀を二文にしても。邪見な奴

は彼方向く。後生願ひは鳥賣を鬼の様に吐しをる。地鳥を驚としやべつても。喰氣でなければ賣れぬぞや。詞それいの。おれも土に付くまいと思ひ。手車と出かけて見たが。錢の廻りはよけれども。さして甘い事もないぞいの。ヤ甘い次手に此あたりに。よい酒屋は〳〳らぬか。ヒヤこりやあり様はもぢりかけるのか。ハテまん直しに。よかる。教へてやつて相伴せう。シテ入れ物はあるか。荷箱の内に五合徳利。茶碗は先で買つて來う。テモぬからぬの。つい此坂の下頼殿の社の前に。坪井と云ふ暖簾の印。その隣に三升や。どちらでなりと五合してこい。地おつとまかせと荷箱の徳利口につかはる三升やへ。フシ手車賣は買ひに行く。兩都をかねし。若宮の別當阿闍梨の秘藏弟子。善哉丸と聞えしは先將軍頼家公の妾腹。出家させんと幼少より御弟子となして十一歳。お稚兒盛りの振袖や。里なつかしく鳥居の外。小鳥買はんと出て給へば同宿小僧立集り。値をして上げんとしこなし顔。詞コリヤ〳鳥屋。鳥召されんとお稚兒の仰せ。地是へ参れの權柄も時の旦那とはい〳の。フシ這ひつくばうて持出す。地色坊主ども口々に。詞雀は何程。鳩は幾ら。鶯はこちらが豆腐の敵。鶯の長首放してやらう。地随分負けて値を言へと。言ふもよい鳥か〳り口。物に成つたと出次第に。詞先づ雀は三四の十二文鳩は八八六十四文。鶯は泥鰌を踏む故に。お足揃へて二百文。地何れなりとも放し鳥フシお召しなされと賣付ける。地色坊主ども頭を掻き。詞巾着錢では買ひにくい。何と鳥屋。今言うた鶯が踏んだ泥鰌はないか。又此鳥も放さずに。生きた奴に生醬油。丸焼きては何ぼする。地遠火にかけて羽たたきさせ。頭から喰うて見たいといふに鳥屋はぎよつとして。詞アこな坊様達けうとい和郎。そんな酷い料理お寺ではなされうが。在家では得致さぬ。地どうやら魔所へ來たやうなと。荷を片付けるを善哉君。詞是々鳥屋。あれは皆口わやく。御坊の内は不行儀など。思うてばし給もんなと。地色大人しやかに言ひなだめ今日はわしも志。一二羽放し供養せん其鳥是へとありければ。もうとれるはと物工。一荷の鳥籠差出し。雀なりと鳩なりとお好み次第と籠の口。明けて渡せし横着は。フシ皆賣付ける工なり。地色若君何の心も付かず。あれか是かと差覗き。手を入れんとし給へ

ば。口より飛出る五羽六羽。是はと驚き給ふ内残らず雲井に。羽をのして。あんご鳥の坊主達。狼狽へあせり騒げども。其甲斐もなく是非もなく。地迷惑顔に若君は。スエテ打涙ぐみお坐します。地色サアしてやつたと鳥賣は。そらさぬ顔て是はく。詞残らずお買ひなされて忝い。大概代物卍貫。地やつて去なして下さりませと。ねだりかけたる悪者の。氣を宥めんと若君は。詞思はずも魚相して何程か氣の毒。地よきに了簡してたもと。仰せを待たずコレ。詞むまい事おつしやるな。雀ばかりも百羽の上。鳩から驚から鶴も四五羽了簡してとは。エ、こりや持合せがごんせぬの。ハテナいとあれば御謎目。身に着た物腰の物。裸にして簡せう。きりく脱いておこさあれと。地物にする氣の慾面は。頬冠り迄白あげの。フシ絞り出さんと詰寄する。地色子心にも若君は無念と浮かむ目に角立て。詞ヤイ賣人め。武士に向つて裸にとは。慮外者め許さぬと。地御佩刀に手をかけ給へば。オ切つて貰へば猶金と。慕ひ寄るを坊主達立隔てこりや鳥賣。詞あなたは忝くも先將軍頼家公のお子。地世が世なれば天下の世繼。雑言言うて後悔すなと口々いふ程付上り。詞オ、面白いそんな和郎なら猶錢金は自由な筈。地見せ付け取つて呉れうぞと。フシ腕まくり。地色隔たる同宿蹴飛ばし。立寄る所を若君こたへず抜打ちに。ちやうど切つたも小腕の肩先。ハット飛び退く其内に。サア大事と坊主達。若君抱へ逃げ行けば事がな笛のねだり者。己れ餓飢奴一掴みと大手を擴げ一散に。フシ跡を慕うて追っかけ行く。地色かゝる騒ぎの其中へ。手車賣はぶらくと。茶碗片手に徳利さげ。詞サア鳥屋殿買うて来た。手の悪い隠れてかと。地尋廻つて。ハア、こりや待ちかねて去なれたさうな。損な和郎ぢやと獨言。二人前をば引受けてぐんぐと言はして。フシ居る所へ。地別當阿闍梨は若君を。引つ抱へて駈來り。詞こりやく若者。鳥賣奴が無體をいひかけ。此稚兒の身の難儀。暫く影を隠してくれ。地色其方男と見込んだと。いふ間に手拭後へ廻し。詞ア、やくたいも無い事。男ぢやごんせぬこちや女子。地外をお頼み遊ばせと。尻込みするをヤレ情なし此お子は。詞仔細有つてよしある御方。地急な場所ぢや救うてくれと。言へども聞かず。詞よしでもあしでも薄くても。

麻酔を杖ぢやお頼み無用。地許し給へと荷を拵へ。逃げんとするをコリヤ待てと。荷箱押へてホオ、これ究竟の隠し所。頼むく〜と無理矢理に。片荷へ若君押入れて蓋しつかりと預けたぞ。必ず見捨ててくれるなと。言ひさしフシ阿闍梨は引返す。地ア、是坊様。無體な人ぢや知らぬぞや。箱の細工が皆崩れる。飲んだ酒も身にならぬと。狼狽へ廻る其場所へ鳥賣飛鳥の駈來る勢ひ。跡より寺僧は棒ちぎり木打てよ叩けとわめく聲。手車賣はきよろ〜と。徳利茶碗を放しもやらす。鳥屋殿息つきに。參らぬかとして差出す。エ面倒なと足下につけ。詞ヤイ芋掘り奴等。棒の先でも動かしたら片端に蹴殺すと八方に眼をくばり。詞ハレ合點のいかぬ。たつた今老耄れ坊主が餓飢めを抱へ。此方へ失せたが姿も見えず。脇へは行くまい此邊りと。地見廻し〜荷箱に目をつけエ、聞えた。在家は爰ぞと駈寄る所を。流石男の手車賣。髪束掴んてはつたと蹴倒し。すつくと立つたる有様は。フシ心地よかりし風情なり。地色思ひがけなく鳥屋はきよろり。詞夢見たやうに思ひしが。ム、扱は己が隠まうて隠し置いたに極つた。地さあ渡せ渡さぬと枝骨蹴つて〜蹴放すと。飛びかゝるを寄せつけず。詞コリヤ忝くも此箱は。浦島殿より傳はつたる。お手車の玉手箱。お稚兒の命を封じ込め。阿闍梨が頼んで置れしを。あかべつとせいならぬはと。地駈來る鳥屋にしつかと組む。シヤ小賢しいと上手になり。一振り振つて跳ね倒せば。寝ながら蹴返す足車。手車賣が根限り。命限りと兩方が死身に成つて掴合ひ。是ぞ大和の蹶速と。野見の宿禰が争ひし本朝相撲の初りも。フシかくやと思ふばかりなり。地色見掛けによらぬ手車が晴れの早業向ふの霞。一跳ね跳ねて來る所を腰車に取つて投げ。起るを掴んだ髻髪。抜けよとばかりひつ据えて。ほつと一息つき敢へず。詞これ〜僧達。最前別當お預けの。稚兒入れ置きしはそちらの箱。地色御坊へ急いで戻して給へ。早う〜と言ふ間も待ちかね。あぶない事と教への片荷。フシ皆ひつ抱へ走り行く。地色サア是からは氣遣ひなしと。下なる相手を突放し片荷の箱を引出せば。同じく鳥屋が駈寄つて。箱を覗けば内に若君。ちやつと蓋して邊りを眺め。詞鳥屋殿。いかい御苦勞。いや御自分が。首尾がよかつた。むまい〜と。地初通して差荷ひ。

こりや誰が手車。お大將の手車。詞誰がのぢやい。おれがのぢや。地此方のものぢやと勇み立ち館を。指してぞ三重立歸る。地倭者は賢者のまぎれ物慾と戀とに滅れし。藤澤入道安靜は齋姫を預り參らせ。和田北條が確執の日々に募るを松が谷。己が館の奥御殿かしづく心に一物の。工あるこそ道ならぬ。地色お伽に付きし腰元はした。御用の透はおしきせの人事まじる色咄し。詞何と浮世は思ふ様にならぬものぢやないかいの。眞から底から爲氏様に惚れてござる姫君を。北條殿や和田殿が固い顔で女房争ひ。あなたの爲には大きな悪魔。成る相談もならぬやう。それ故か此間はぶら／＼と戀煩ひ。ひよんな事ではないかいの。そりやお道理ぢやまだ其上に取交せて。荏柄の平太がお姫様に付け文。しみしたるい文章。返事にほつとあぐんでござる。誰がマアあた太い。地わし等がやうに不自由な身ても。女房子のある人に五尺の體の眞中を。澤山さうに法界の。フシ物にはさせぬと譏り合ふ。地色折から來るは荏柄が親城の九郎資國。昔細工の堅作り乳人役の御病氣見舞。鑿みし顔をにこ／＼と。支關よりフシ直ぐ通り。詞ホ、けふはいとの機嫌がよいやら。女中方もいそ／＼と賑はしいよ。九郎めが參つたと姫君へいうておくりやれ。テモ堅くろしい毎日のお見舞に案内とは御遠慮深い。イヤ／＼さうておりない。親しきに禮儀あり。御主人といひ殊には女儀。直ぐに通るは不禮の至り。地取次頼むとせちがふ聲。フシ洩れてや奥より齋姫。間の襖をめつきりと一目に見ゆる御やつれ。蕭然に立出て給ひ。詞思はぬ人に思はれて思ふ戀路の叶はねば。地色我のみ獨り身をこがし明日をも知らぬ自らを。訪ひ慰めんと老人の行く日も來る日も憂き苦勞。よしにとばかり打恨み。フシすねさせ給ふぞ痛はしき。地色資國眉に皺を寄せ。詞思はぬ人に思はエ、聞えた。和田北條が事をお悔みか。ア、きな／＼と埒もない。そりや何を被仰る。それを苦にしてござる故その御病氣。お心に入らねば此爺奴がどちらへもやりやしませぬ。誰なりと好いた男を持たつしやれ。何誰の御意でも其處が縁づく。いやなと思ふ夫婦縁は。打みしやがれうが結ばぬものさ。が又好き合ふといふ段には格別。拙者が姫の板額女は。地幼少にて二親にはなれ孤兒と成つたる故。我娘同然に守り

育て成人して形を見れば。面はさのみ見苦しうも御座らねど。詞關相撲を見るやうな大女房。力の強いばかりが取柄。それをさあお聞きなされ。鎌倉中に隠れも無い美男。地阿佐利の與市が戀女房。然も仲がよくて當年十歳に成る市若とて。男の子迄まうけました。詞コリヤこれ互に陰陽和合致したと申すもの。お前にも十分氣に入つた殿御を持たせ。彼の和合をよくさせて。若君を見にやならぬもの。何の無理にいやな所へやりませう。丈夫にじつと落着いてござりませと。地可笑しき交せて逆らはず機嫌とる内勝手より。詞荏柄の平太胤長殿。尼君よりの御使地フシ只今是へと知らすれば。詞何忤がお使に參つたとやホ、幸ひ／＼。地色お氣晴しにわつさりと。浮世咄の輕口でも。言はせてお聞きなされませ。詞私がお傍に居ては窮屈で咄が出来まい。地色聞きや入道も留守とやら奥へ參つて歸りを待受け。年寄同士は後世咄し。詞昨日半分あて付たけ。提婆が悪の耳こすり。ずつけり言うて厭がらし。地妙薬一服用みてやろと。フシ言捨て一間に入りけり。地腰元どもは嘸き合ひ。尼君のお使とは嘘の皮。またあなたへ何の彼のと。面憎い事ぬかすのぢやあるまいか。詞それも知れまい。どの道お逢ひなさるゝは入らぬもの。地色御氣色が悪いと平太めを勝手より追戻すが上分別。ナ申しお姫様と尋ねれば。詞いや／＼。偽りにもせよ母様の。御用とあれば粗末にならず。地色たとへ平太が道ならぬ不義不屈をいふとても。自らが思案もある。詞みんなは何にも構やんな。爰へ通しやと宣ふ所へ。地色袴肩衣いため着け。御前かゝりの實體なる顔に似合はぬ色好み。したる目にて。フシ座敷へ通れば。地色何時よりいと姫君は御詞も優しげに。詞母様のお使とや。大儀ぢやづつと近う寄りや。御口上か。但しお文でも來ましたか。イヤお使は御口上。さして變つた事でも無し。此度和田新左衛門。北條の嫡男江馬の太郎。兩人よりお姫様を達つての所望。何れも天下の大老なれば。片手打ちの了簡もなり難しと。尼君にもお心を痛め給ひ。地色兎角姫が心底次第。何方へなりとも否應の御返事を。承つて參れとの仰せ。詞ナお嬉しうござりませう。ア御果報なお方ではあるはいの。方々から惚れ手は澤山。行き度い方へつゝとござれ。サア片付けて御返答。地色お聞

かせなされと自墮落ませり。詞の角を聞きながし。詞テモ何事かと思ひしに輕骨なお使。地わしや北條へも和田へもいや。詞左様ならば何方へ。ハテ何處へとは其方に大分。アノ惚れてゐるとおつしやる事か。地それ程よう知つてゐて何の尋ねに来る事があるぞいの。とは言へ我身にや綱手といふ女房あり。鎌倉では添はれまい。自らを連れ都へ立退きや。どんな辛さも厭ひはせぬ。こつそりと二人暮し度いやいの／＼としなだれて。手を取り給へば振放し。詞ハハ／＼アてもしらく／＼しい。取りかけて御覽じても滅多に深い所へ參らぬ。コレ姫君。爲氏殿に首だけ。いきついでござるのを知るまいと思し召すか。我等に此家をそびき出させ。道からついと都の方。戀し床しい爲氏殿と。こつてりをやらうでの。いまあさうは得致すまい。腰元中も知つての通り。何時ぞやから千本程。進せた文の返事さへ。一度もなされぬお前ぢやないか。それともほんぼんのお心なら。地色ちよつと手附の戀結び。後とは言はせじ只今と抱き付くを突飛ばし。詞ヤイ畜生め。和田北條が自らを。地色妻にせんとせり合ふさへ慮外と思ひ口惜しきに。女房子を持ちながら狀文送りて不義を言ひかけ。剩へ今の難言。とくより老中の耳にも入れ。憂目を見せる筈なれども詞親資國が忠義に免じ今日迄胸をさすりしに。地色重々の不忠者。詞そこ立つて行け穢らはしいと。地聲はしたなく走り寄り。平太が顔を立蹴に蹴やり。縫るを蹴飛ばし睨み付け。以ての外の御氣色にて。一間に入らせ給ひければ。つき／＼は口さがなく。詞お使を脇にして。とても及ばぬ色詮策。地當の槌が頬面へ。やつと參つたよい氣味の。フシどつと笑うて走り入る。地色平太は無念骨髓を貫ぬくばかりの眼色にて。エ、是非もなや。不忠不義とは言ひながらかく面恥をかゝされ。何面目に長らへん。とても死すべき命なら戀ひこがれたる齋姫。跡に残して餘の人と肌合せるも妬まし。和田北條も我とても。變らぬ家來の望み事。一念通さて置くべきかと。獨言して奥の間へ。オクリ窺ひ行くぞ不敵なる。地色程なく且那お歸りと下部が呼ばはる聲につれ。藤澤入道安禪邪智貪慾の。鵬眼。我家の權柄のつさのつさ。フシ肩臂張つて立歸れば。地色嫡子四郎出て向ひ。詞ホ、親人。未明よりの御他行何方へお出て。

地色城の九郎も最前より奥へ參つて待ち退屈。ちよつとお會ひなされぬか。詞ム、資國が參つたは。毎日の病氣見舞對面に及ばず。それにつき。地色其方に言聞かせ置く大事あり。近う／＼と小聲になり。詞某豫て天下を望み。先將軍頼家の馬鹿者をそゝり上げ。まんまと阿呆に實を入れさせ詰腹迄切らせしに。和田北條奴が安穩では。大望成就思ひもよらず。其節とつくと工夫を廻らし。地同士戦をさせんと思ひたはけ者の頼家が使者と偽り。獨りの姫を兩人へ。成人の後妻にせよと。汝と某いひ入れ置きしに。詞案の如く不和と成るは工の躰おち。爰にたるみを付けまいと。今日も又早々より北條が館へ立越え。地色堪忍のならぬやうに毒氣を吹込み。其歸るさ和田へも寄つて同じ文談。詞近日軍始まるは必定。これ兩虎争ふ時は一虎つひえに乗るといふ謀。地兩人さへ亡したら實朝殺すは手間隙要らず。ナ其時おことは天下の世繼。跡先に氣を付けよと。フシ言ひ含むれば。詞ハ、ア連れの御智恵。如何様いやなは彼奴め等二人。手も濡らさず滅すとは。どうても親は親だけの分別。地天下の世繼と成つたらば。四海を庭へ取り。富士山を築山。獵漁を常の樂み。是も親のお蔭ぞと。山も見えざる高くくり。フシうなづき合つて居る折から。俄に騒ぐ奥の騒動。腰元ども聲々に。詞荏柄の平太胤長。姫君に不義いひかけ戀の叶はぬ遺趣ばらし。御首討つて立退きしと。地色首なき死骸を戸板にのせ涙ながらに昇出づれば。入道親子大きに騒ぎ。スハ一大事出来せり。此通り御所への注進諸大名へ觸知らせよ。詞駈付ける武士改めて。荏柄が一家とあるならば門外より追返せ。地主を殺した者の類族異議に及ばぶち殺せ。四方の門々固めよと。聲をばかりに呼ばはつて。フシ親子は奥へかけ入れれば。地家内の上下騒ぎ立ち琴柱よ熊手と犇めく内。近道なりと裏門より。乗込む武士は土肥の一族佐々木の何某。根井岩永兒玉黨。皆我一にとかけ着けて。フシ上を下へと返しけりかくと聞くより。阿佐利の與市下部にかゝせし女乗物。ぼつ立て／＼眞一文字に駈來り。門外にどつかと下し。十里に開く大聲にて。詞荏柄の平太胤長。齋姫を討ち奉り行方なく成つたる由。徒黨の者詮議の爲。評定の役人阿佐利の與市駈付けたり。早々門を開かれよと大聲に呼ばはる聲。地聞くと等

しく入道が嫡子四郎清親。物見の一間にをどり出で。詞ヤアならぬ。貴殿の内方板額は荏柄の平太と従弟同士。主殺しの一類竹鋸の相伴人。館へ歸つて待つて居やれと。フシさも憎さげに鳴りわめく。詞オ汝等親子が性根にくるへ。さあらうと察せし故。目の前にて離別せん爲。愚妻も共に召具したり。後日の爲に見ておけと。地色やがて乗物押開き。女房是へと呼出せば。長地あいと返事はなよ竹の樋につまりし思ひにて。打しをれてぞマシ立出づる。地色與市詞をしづめ。詞先達つて仔細語らんとは思ひしかども。館には悴市若早や十歳の子心つき。別れを悲しむ不便さ。地色思ひ圖つて様子もいはず。今聞く通り荏柄が親。城の九郎は汝が伯父近き一家。それ恐るゝてはなけれど。詞評定の役儀を蒙り。一列を省かれては武士道立たず。さつぱりと縁を切り。他人と成つて平太が詮議。胸の鏡を磨く爲。暇をくれる女房。地色酷いとばし思ふなど。いひ聞かすれば板額女。顔も上げずにしくくと。フシ道理に伏す血の涙。地是非なくも手をつかへ。詞後儀に付いてのお暇と。事を分けての仰せをば無理とはさらさら思はねども。地色かりそめならず十年に餘り子仲なした夫婦間。さつぱりと切る縁を。まあ暇やるとつい輕う。まあといふ字が後藥。上は女御お后から下は内方裏囃迄。夫に去られ何のその。まよと思ふは若いとき。三十も越して母様と朝夕慕ふ子を持つて。あふぎの別れをする心。ちつとやつとと思ひやり。了簡付けても見て給べと。泣きしをるれば。詞ヤア未練千萬。市若は我子粗末にせうか。常の性根に似合はぬ繰言。早く此場を立歸れ。地色暇の印と投出す一腰。はつとばかりに胸迫り。フシ前後不覺に見えにける。地色物見の上より四郎清親。大口明いて高笑ひ。詞ハアアよい仲の小諍ひ門前で味やらるゝ。土佛の内儀も大力と聞いたに違ひいかいめる。其手で館へ入らうとはいつかないつかな。地内證の言合ひむまゝ。食ふ四郎ならずと言はせも立てず。詞ヤア荏柄と他人に成つたる某。地是非通さずば此門一重。打破つて通るが通さぬかと。勢ひ込んで罵れば。詞オ、破らるゝなら破つて見よ。理不盡に通るなら君へ對して狼藉者。叛逆人も同然。地者ども來つて討つて取れと。呼ばはる聲に家來の大勢われ討取らんと。

フシ待ちかけたなり。地色流石の與市も狼藉と。上の聞えを憚りてさうなくも密りつかず。免やせん斯くやと身をもがき。館を脱み拳を握り。フシ詮方。もなき有様を。地色見るに堪へかね妻の板額。爰ぞ夫へ奉公と。涙拂うてすつくと立つ。去られた女房は三界に家が無ければ主もなし。誰に憚り遠慮せん。外記假令。此門磐石にて固めたりとも。夫思ひの我念力。やはか。通さで置くべきかと。飛びかゝつて門柱尺に餘るをひつ抱へ。えいや。えいやと。コハリ押す程に。スハ狼藉よ破らすなど。數多の家來が柱に取付き扉にひつ付き。骸を柄と。押合うたり。ナホス地女も爰を破らず。夫も我も顔汚し。一世一度の。コハリ晴業と。總身の力を兩腕に柳の腰も古木となし。揺り立つたる襖門。四十五間の高屏も共に揺られてゆつさ。互ははら。屋根はふは。ナホス不破の關屋の板廂風に揉まるゝ。フシ如くに。地廣言吐きし四郎もあぐみ。詞ア、是々與市殿。御内方の悪あがき。足の下迄ゆさつて眼がまひさうな。是なうちつと制して下され。見ぬ振は胸怒と。地頼めど詮なく是非もなく。うんと一押し金剛力。礎土を掘返し。門も扉も一時にめり。ぐわたりびつしやりと。壓しに打たれて死ぬる人。コハ叶はじと逃ぐる人。四郎も共に舌震ひ。フシ跡恐ろしと逃入れば。地色板額いそ。勇み付き。是ぞ夫の機嫌直し。何でも手柄と衣紋つくろひ。いざ快うお通りあれ。道開き致せしと自慢笑顔も思ひの外。阿佐利の與市ハツタと睨め付け。詞ヤア推參なる女め。門打破つて通るなら己が力を頼むべきか。上へ對して狼藉の。共に不覺の名を取らす働き。地色言語道斷不届き者と。叱り付けられがつくりと。どうしたら亦御機嫌に。入る事ぞいのだと伏し。フシ泣くより。外の事ぞなき。地折ふし奥より使の役人。詞阿佐利殿へ。城の九郎殿お會ひなされ度きとの儀。地はやお通りと聞くより與市。詞ナニ荏柄が親。地九郎が參つてゐるとな。地色それぞよき詮議の手掛り。平太が行方押へて聞かんと。白砂蹴立て一散に。フシ奥をさしてぞ。駈り行く。地色板額はつと胸迫り。資國殿は自らが伯父。姪の我夫と如何なる事か出て來らんと。案じに騒ぐ折こそあれ。入道親子が下知として門を破りし女めを。叩き伏せて生捕れと。熊手刺股長柄を力。右往左往に追つ取巻

く。詞シヤレをらしき青蟲奴等。坊主憎めばけさいろく。地おのれ等迄面憎しと。取つたと寄るを右左。車返しに取つて投げ。詞又来る二人をひつ掴み。地一締め締むれば敢へなくも。フシ此世の縁は。切れにける。地色巻いて取らんと突棒の。刺股あひへ来る琴柱。詞沈んで兩手にしつかと取る。地やらじと大勢取付くを彼方をゆすり此方を振り。一振りふつて突放せば。將基倒しにやり。打碎かれて死ぬもあり。詞總がかりにと駈寄れば。地得たりと有合ふ門柱。車輪の如くに振廻しはらりくと。三重、難ぎ散らす。地何かは以てたまるべき。フシ皆ちりぐに逃げ行けば。地此次手に入道親子。首引抜かんと駈込むを。詞ヤレ暫らく板額と。地阿佐利の與市飛んで出て。詞汝が伯父の資國。大老中の評定極り。切腹と仰せ渡され。則ち某が介錯。最期の別れを惜しめよと。地言掛けられてハツトばかり。吐胸に涙打交り。スエテ暫し。イむ折からに。地城の九郎資國は子故に料を老の身の。淺黄上下白無垢は。冥途の。旅の晴出立。野邊の草葉の露よりも。果なく消ゆる命ぞと。フシ思ひ諦め座に直る。地色阿佐利の與市腹切り刀臺に置き。詞貴方子息平太と同罪を遁れ。武士の數に入つての切腹。太刀取の某迄何程か大悦。地色心靜かに御用意と相述べれば。詞御苦勞。縁ある其許のお手に掛り。地色冥途黄泉の道に赴くは老後の思ひ出。詞只返すくも面目もなき悴が積悪。主君の姫君に不義言ひかけ。御首討つて立退きしとは人生に外れし振舞ひ。地色追付け捕へられ御政法の竹鐮。心柄とは言ひながら切なき最期を遂げ居らうと。心にかゝるは是一つ。詞又二つにはあれなる板額女。幼き時孤兒と成つたるを。伯父の役と某が手鹽に掛けて育て上げ。地色貴殿の方へ嫁入させ子迄成したる甲斐も無く。飽かぬ離別の悲しみ。さぞ悔しかる本意なかる。取分け益なき女力。人の憎みも受けうかとそればかりが不便にござる。詞ヤイ板額。おぢや夫のある内は人も恐れて避けても通す。かゝらふ島の無き身には見侮づゝて許さぬぞ。必ず力を功に被な。十人力は百人の人数を以て叩き伏せ。地千人力は萬人の軍勢以つて討つて取る。弱いに怪我は。フシ無いものぞ。地色人の用ゐるも恐るゝも今迄とは違ふぞよ。短氣に命を失ふなど。子に云聞かす親よりも。深

き御恩の有難く。せき来る涙に聲震ひ。詞誤りました今迄は。地いかいお世話に成りながら愛想らしい事も無う。お心痛める力業。今此場所でお命を助ける力もあらばこそ。君の威光の一挫ぎ。叶はぬ物は理法權。權と法とに我命。代りになして給はれと。口説き敷けば愚か。詞假令我子の業ならずと。和田北條の争ひを預り置いた某が。姫君失ひ何を以て言譯せん。地色たゞ口惜しきは此家の主。入道親子に一恨み言残したが残念と。奥を見遣つて牙を噛み。劍逆手に取るより早く。左の脇へざつくと突立て右へきりと引廻す。ハツトばかりに板額が歎きと共に阿佐利の與市。苦痛させじと後へ廻り。南無と一言すゝめの掛聲。フシ首は前にぞ落ちにける。地夫は死骸を押しかくし他所に扱ふ他人向き。辛き思ひに板額は伯父の敵は入道親子。目に物見せんと駈行くを。待てと留むる與市は忠義。上の聞えを憚りて留まるも禮儀討つも孝。二つの道に踏迷ひ。出でては戻り戻りては甲斐なき跡を眺めやり。恩ある人は到極樂。無爲寂光の。故郷へ。我は夫に捨てられて定めなき世の露時雨。咽ぶ思ひを思ひやり見れば見交し。泣き隠し。フシ出づるもよしや。あしがきの隔つる中の飛鳥川水の。流れと人の身の行方。定めず別れ行。

第

三

地仁は百禍を除くといへども賞罰正しからざれば。却つて其身を害すとかや。荏柄の平太胤長が女房同じく一子公曉丸。尼將軍の館へ引取りかくまひ出し給はぬ故。實朝公の御前には藤澤入道安靜。阿佐利の與市義遠を始め其外の諸大名。晝夜を分かず相詰めてフシ評議。評定まち／＼なり。武將仰出さるゝは。詞我多年の望みによつて陸奥の名所舊跡一見の爲下りし所。僅かの間に圖らざる騒動。和田北條が矛盾の沙汰。就中一人の妹齋姫を敢へなく討つて立退きし。荏柄の平太が親族を探し出して糾明を遂げ。齋姫が亡執を晴らさせんと思へども。地色如何なる事にや母尼君平太めが女房。悴公曉とやらを圍まひ給ひ。御身に代へての御歎き。達つて申さば不孝と思ひ。然らば女は暫しの了

簡男子なんしなれば悴ばかり。御渡し下されよと再三使を立つたれども。詞御承引ごしやういんなく追歸おきかへさるとあつこ用捨致もちやうしなば。國家の政道せいだう狼おぼと成り。身に迫るは實朝一人。地かたぐいかにと以ての外心を惱まし宣へば。阿佐利の與市謹んで。詞主君を弑せし極重惡人。如何程惜しみ給ふとて眷屬けんぞくは遁れぬ命。幾重にも利害を説き。地御心に逆らはず。御得心にて平太が妻子御受取りなざる様。御賢慮を廻まわらされ。フシ然るべしとぞいひ上ぐる。地色入道居丈高ひさたかになり。詞イヤサこれ與市。お身は主殺しの仕置を知らずか。七從弟の末迄も残らず木の空へ上ぐるが大法。我君は親子の禮儀假令れいじやうにでもアおつしやらねば。孝行の筋が見えぬ。それを傍から付込んで。地利害を説くの得心のとはへ聞えた。詞御邊も大身鎧おほみやうの相伴しよばんが厭いとさに板額いたがくへ暇を遣はし。表向は他人となり内證うちしやうで肩持つのか。地是非後奴めらを渡されずば。尼君とて用捨はない。好みだての鼻眞口叶ひなまぐちはぬ事ぢやよしに召され。詞ヤア聞難し入道。地色譬へば平太が女房悴。樊噲項羽はんたいかううがかくまふとも。式目の法を眞先に押立て。我君の威勢をかつて受取りに。何條仔細のあるべき。詞さすれば御親子の禮儀もかけ。一つは命助けよとお頼みある。尼將軍の權威もなし。何とぞ天下の法を立て。母君の御意も立つる爲。地色利を盡してお願ひ申すそれに何ぞや以前のよしみ。縁ある故肩持つとは奇怪なる出放題でぼうだい。今一言いうて見よと。フシ色を正して決付ければ。詞ム、盗人猛々どろどろしいと。物知り顔にて云ひ並べるは要らざる詮議。左程汝が道を守らば行向つて尼君に斷立ことわりて。平太めが女房悴ナゼ受取つては歸らぬ。ベン／＼と埒らちが明かぬ故。此度はてつくりと此入道が秘藏息子ひざうじ。同名四郎清親を受取りにやつたれば。地色追付け二人の罪人めらを宙そらに引つさげ戻るは必定。其時ぐわらりと胸算用違むちやううたと吠面ほえづらすなど。重なる過言に堪へかね。詞オ、四郎が二人の科人かじんを引つ提げて歸らぬ内。雜言ざごんを吐くあごた骨斬下ほねざりげてくれんずと。柄かに手を掛け詰寄れば。シヤ小賢こけんしいと入道も。同じく刀ひねくつて。フシ後れを取らじと詰合つぎあうたり。地ヤレ暫くと御大將左右を顧み押しとめ給ひ。詞兩人が争ひは國を治むる政道の一助。何れを何れと言ひ難し。地善惡を決するは四郎が歸つて上の事。必ず／＼早まるなと御詞も終らぬ所へ。藤澤四郎清親面眞赤まことあかいに血まぶれ。這ふ／＼にて立歸れば。びつくりしながら父の入道。詞ホ、四郎早かつた。無ぞ汝が武勇に恐れ。早速科人渡されたであらうがな。但しは手痛く働いて受取りしかと問ひ掛けられ。テモ扱あひよんな所へ酷こたらしいお使。何が尼君の御館御門前には板額女いたがくめ。其すまじさは金毘羅の荒れたる様に立ちはだかり。地色道理を分けて言ふ間もなく片つ端から投散らし。寄付かるゝ事ならず。詞私も爰ぞと存じ働いても見たれども。中々及び絶えた事。少々疵きずを付けられても。骸かたを無事に持つて戻るが手柄と思ひ。天の命を耳二つてやう／＼の扱ひ。あぶない目に遭あひましたと。地そがれし耳を兩手に抱へ。フシ泣顔してぞ入りにける。地色與市は氣味よくオ、命は大事のもの。耳の二つや三つては代へ徳な拾ひ物。天晴れ入道の子息程ある。御發明／＼と。嘲哂あざわらせられて言句も出でず。始めの自慢もしよげになりフシぶつ／＼き顔を振廻す。實朝くわつと御色變り。詞エ、情なき母君や。佛を學ぶ難ちが髪の御身。姿を變へし世を捨人。慈悲専らにし給ふとて。現在我子の敵と言ひ。地色主を殺せし大惡人の悴。渡し給はぬのみならず使の者にかゝる狼藉ろうじやく。詞六十餘州の主となる實朝が仕置始め。妨げをなし給ふ母上こそ恨めしけれ。地此上は不孝の名を取り御心に背くとも。某直きに馳向はせむかひ二人の奴輩引やつつ立て歸らん。馬に鞍置け武士ども用意せよと言ひさして。御座を立たんとし給へばヤレ待ち給へ申上げたき旨ありと。聲をかけてお次より。因幡いんぱんの守大江の廣元い／＼と歩み出で。詞御憤り御尤には存ずれども。是しきに君のお馬を出し給ふは、鷄ひよこを裂くに牛の刀を用ゆる同然。世の人口も如何なりさりながら。尼君にも斯程惜しませ給ふ上。今更容易く御渡しもあるまじ。地色よつて某諸大名に觸ふをなし軍勢を催したり。短兵急たんべいきうに取俣とりまがせ荏柄じんがが悴を受取るべし。御心安く思し召せと事もなげに言上ごんじやうある。地色阿佐利の與市膝立直し。詞コハ廣元の詞とも覺えず。軍兵を以て受取らば多勢を集める迄もなく。某一人立越えてもいと易き事ながら。禮と不孝の大敵に手向ひならず是迄延引えんいん。地然るになんぞや仰々しく。諸軍へ觸をなしたるとは心得ぬ振舞。近頃粗忽せこつ千萬と。言ひも切らせずム、尤もの咎めながら。詞賢へ尼公の御心に背けばと

へ。藤澤四郎清親面眞赤まことあかいに血まぶれ。這ふ／＼にて立歸れば。びつくりしながら父の入道。詞ホ、四郎早かつた。無ぞ汝が武勇に恐れ。早速科人渡されたであらうがな。但しは手痛く働いて受取りしかと問ひ掛けられ。テモ扱あひよんな所へ酷こたらしいお使。何が尼君の御館御門前には板額女いたがくめ。其すまじさは金毘羅の荒れたる様に立ちはだかり。地色道理を分けて言ふ間もなく片つ端から投散らし。寄付かるゝ事ならず。詞私も爰ぞと存じ働いても見たれども。中々及び絶えた事。少々疵きずを付けられても。骸かたを無事に持つて戻るが手柄と思ひ。天の命を耳二つてやう／＼の扱ひ。あぶない目に遭あひましたと。地そがれし耳を兩手に抱へ。フシ泣顔してぞ入りにける。地色與市は氣味よくオ、命は大事のもの。耳の二つや三つては代へ徳な拾ひ物。天晴れ入道の子息程ある。御發明／＼と。嘲哂あざわらせられて言句も出でず。始めの自慢もしよげになりフシぶつ／＼き顔を振廻す。實朝くわつと御色變り。詞エ、情なき母君や。佛を學ぶ難ちが髪の御身。姿を變へし世を捨人。慈悲専らにし給ふとて。現在我子の敵と言ひ。地色主を殺せし大惡人の悴。渡し給はぬのみならず使の者にかゝる狼藉ろうじやく。詞六十餘州の主となる實朝が仕置始め。妨げをなし給ふ母上こそ恨めしけれ。地此上は不孝の名を取り御心に背くとも。某直きに馳向はせむかひ二人の奴輩引やつつ立て歸らん。馬に鞍置け武士ども用意せよと言ひさして。御座を立たんとし給へばヤレ待ち給へ申上げたき旨ありと。聲をかけてお次より。因幡いんぱんの守大江の廣元い／＼と歩み出で。詞御憤り御尤には存ずれども。是しきに君のお馬を出し給ふは、鷄ひよこを裂くに牛の刀を用ゆる同然。世の人口も如何なりさりながら。尼君にも斯程惜しませ給ふ上。今更容易く御渡しもあるまじ。地色よつて某諸大名に觸ふをなし軍勢を催したり。短兵急たんべいきうに取俣とりまがせ荏柄じんがが悴を受取るべし。御心安く思し召せと事もなげに言上ごんじやうある。地色阿佐利の與市膝立直し。詞コハ廣元の詞とも覺えず。軍兵を以て受取らば多勢を集める迄もなく。某一人立越えてもいと易き事ながら。禮と不孝の大敵に手向ひならず是迄延引えんいん。地然るになんぞや仰々しく。諸軍へ觸をなしたるとは心得ぬ振舞。近頃粗忽せこつ千萬と。言ひも切らせずム、尤もの咎めながら。詞賢へ尼公の御心に背けばと

て。天下の掟を亂しなば一天四海の笑ひ草。先祖へ對して不孝の一つ。一度怒り給ふとも。地色賞罰正しき明君と萬民こそつて尊敬なさは尼君共に御譽れ。詞爰を以て某が思案を込めて集めし軍勢。御白洲に招き入れ君の高覽に入るべきぞ。地色共に見物せられよと立上つて大聲上げ。詞申し付けたる諸軍勢隊伍を亂さず御前に相詰め。一々家名を名乗られよと。地呼ばよる聲と諸共に。ハツト答へて乗出す。オクリゆゝしへかりける。コハリ次第なり。

軍勢玉の小櫻

ナホスマづ一番に進みたる。印は名におふ四ツ目結。三所結ひの振分髪小櫻威の胴丸を。花やかに出立でて姿相應のコハリ挑花駒に。武者振氣高く跨りしは。如何なる人の嫡子ぞや地さん候親伯父は。藤戸の海を渡したる稔武士の八十氏川。早瀬を分くる名馬の蹄サツサ。フシ佐々木が末子綱若。親の手柄を羨みて。ナホス明暮れ濱邊の水遊び。水練浮足立泳ぎ。五尺の堀は一足飛び。九尺の高塀ひら／＼。ひらりと乗つたる手斧がけ。燕の羽返し宙返り將又。楊弓。雀小弓山鳥の尾の長口上。舌も廻らぬ先陣役。駒を控へてフシ乗据ゑたり。第二番に打つたるは。てん／＼太鼓の指物に。絹糸緘しの鎧を着し。金覆輪の乗鞍は。オクリ花なら。いねども芳しき。鶯の巢にほと／＼ぎす。武士の雛鳥と問はずして。土肥の子息の實千代ならん。フシ實によく御覽あるものかな。しやが父に似て母に似ず。藍より出て愛のなき。姿形は生れ付。書物一冊讀まねども。乳人が教へ聞覚え。鳥はかう／＼鼠はちう／＼。忠義に捨つる一命は何の一分五厘ぢやと。算用知らぬ高くくり。小耳に狭む鬢の髪。小意氣過ぎたる蜻蛉頭。フシ振廻してぞ。歩ませたり。コハリ次は鎧も一様に。ナホス若紫は春日の里。かいま見したる豆子供印も豆藏風車。兄は十歳。弟は。なな里憎む腕伯盛り。人に負けじとフシ乗込む姿。詞ハテやさしやな何人の。二葉の種ぞ名乗はいかに。イヤ。二葉より生ひ出でし。千葉の資若。胤君とて。地戦は今日の手ならひ墨。草子よごしの兄弟が。後陣の數に入る事は。如何

なる所以としら墨や。しやらくさ墨に候と。兄が進めば弟は。乗り後れじと聲高々。先へ行くのは酒屋のお方。跡にさがるは狼狐。虎の威を借るとりなりは。フシ不敵にも亦しをらしき。扱また跡なる旗さし物。巴色どるぶり／＼太鼓。江戸宇都の宮の岩松とて年も八歳口松者。ナホス餓飢も人數としやばり出る手相撲。首びき目無しどち。隠れん坊を仕嵩じて。敵の闘へも忍びの達者。なんぼの潜り難い潜り戸もく／＼潜つたが此處のく／＼り戸は今く／＼ぐり始めぢや。フシ山の大将。我なりと中にも目立つて。見えにける。其外佐藤竹の下。相馬の子供が印は竹馬。毬杖破魔弓。矢繼早。父の武功を的にして。まつかう肩骨フシ打出の小槌。詞當つて當つて頭やく。フシ思ひ／＼の旗さし物。御譜代外様の分ちなく。十一以下の軍勢ぞろへ。徒歩武者。馬武者きらめいて。照る日に輝く物具は。黄金花咲く陸奥山。五色の母衣が入れ亂れ。空さへ匂ふ花紅葉吉野。高雄の春秋を。一度にうつすお書院さき。廣庭狹しと乗廻し四府の賢陣魚鱗の備へ。孔明が曾孫太公が。鶴の孫とも見るばかりフシいさましく。又愛らし。地色實朝烏帽子を傾け給ひ。詞數度の使を承引あらず。殊に四郎清親だに言ひ甲斐なく追返され。地恥辱を取りしは目前なるに。かゝる小兒のたはむれ言。彼等を使に平太が悴。心安く受取るとは。廣元所存あつてかと仰せにはつと頭を下げ。詞最早與市申さるゝ通り鎌倉の諸歴々。武勇を以て奪ひ取るは。掌を返すよりいと易き事なれども。打破られぬは孝心の道。御親子不和になり給ふは如何ばかり歎かはしく。取つ置いつ工夫を廻らし。地頑是もなき童ども。此如く甲冑を帶し。御館へ押寄せば正しく弓を引くにはあらず。只一筋に國家の掟。糺さん爲の討手のまなびと御孝心を感じ給ひ。詞平太が悴を事故なく御渡しもやと存ずる手段。地忠義を守る廣元が寸志の智略に候と。理を糺したる一言に。君を始め伺公の面々。フシアツトばかりに感心ある。地色與市は暫し答へもなく子供の中を打眺めて居たりしが。詞驚き入つたる御計略膽に銘じて詞なししかし一ツの不審あり。かく諸大名の子息達獨りも残らぬ初陣に。某が悴市若ばかり見え申さず。地何故加へ給はらずや。御心底にまかせざる仔細ばしあつての儀か。詞されば／＼。尤も其元

御内室を縁を切り。他人と成つてはござれども。御子息とは血筋の一家。拙者が計らひにも成り難し。地君へ伺ひ兎も角も御差圖にまかされよと。言ひも果てぬに藤澤入道。ヤア尋ねに及ばずそりやならぬ。詞女房去つたは世間の見せかけ。内證ではこつてりと訪れをして樂しむやら。誰も番には附いて居ず。何を證據に他人呼ばはり。此方から勸めうとも遠慮すべき筈の所。地色悴を此人數へ入れたいとは。猶物臭うて吞込まぬと。言ひほぐせば大將暫らく御思案あり。詞入道が詞理に當つて道に背く。君臣の禮は左にあらず。地色忠義には親を捨て。兄弟妻子の恩愛を忘るゝが臣下の習ひ。縁あらば一入に非儀を正すが弓矢の作法望みに任せ與市が悴後陣の大將と定むべし。詞さりながら他人の子供千人より一大事の討手なるぞ。地幼少なりとて仕損ぜば共に遁れぬ世の人口。よく言ひ聞かせて出陣させよと。御座を立つて入り給へば。地色與市は面目世に施し。勇んで御前をたつか弓引けば返さじ武士の彌猛心や廣元は。つゝ立上つて諸軍に下知。さあ〜何れも先陣後陣の備へを立て。列を崩さず出陣あれ。早やとく〜とフシせり立つれば。地畏つたと乗出す。げにも勇者の實生とて花の蕾や梅檀の。フシ二葉の榮えかんばしき。紅梅色の手綱を掻繰り〜。響の音はちり〜りん。障泥はぼんはか。蹄はしと〜一連れに勇み進んで。三重へ押寄する。地至つて用捨は御身にかゝり。御親子不和の基ぞと。諫め申せど尼君は荏柄が妻子を隠まひ給ひ。物見の亭を高やぐら。門々固め實朝の。討手來らば討死と思ひ定めし御覺悟。フシ底意如何にと訝かしき。地色夜の目も合はぬ腰元仲間一ツ所に集りて。詞なんと思やる皆の衆。荏柄の妻子を受取らんと。數多の軍勢向ふといふぞや。日頃習ひし軍法の奥の手。地色命限りに逃退かうてはあるまいか。名ある武士と引組もより。可愛い男と引組んで。死ぬる戦がして見たいとそゝり出せば。詞才嗜みや。敵に後を見せるのは。女の身では大きな不作法。殊に味方に板額女。子迄産んだ大根強。地五萬や七萬のお敵は明家で棒。願て蠅。つい拜ますとしどもなき。咄し半ばへ荏柄が女房。綱手と言へど便りなき。落目に成つて氣もひがみ。詞コレ何れも。板額女ばかりを力にし。戦せうとはあふない思案。地色めい〜命

を的にかけ討死せうとは思はずか。笑止な衆と蔑したる詞憎しと板額女。物見を出てて詞ホオ、勇ましき綱手殿のお詞。左程のそもじが何故に。子迄引連れ尼君を。頼んでさもしい命乞ひ。實朝公は親御へ對し御祝ひもなされかね女房は兎も角も。一子公曉は姫を殺した者の悴。首討つてお渡しとの仰せ。達つてとあるならぬとある。仰合せて此騒動。地誠口程健氣なら公曉を刺殺し。其身も自害したがよい。兎角命は惜しいものと恥しめられてイヤコレ。詞死ぬるを厭はぬ證據には。幾度かお暇を申し上げてもお上には。我娘を殺したる荏柄こそ科人なれ。其方親子は知らぬ事。地色隠まひしには思案ありと奥深い御一言。死ぬるにも死なれずと言はせも立てず。詞其言譯暗い〜。今にも討手攻めかけなば。奥深い御思案があると云うて事済むか。ハテ其時は覺悟の前。サア其覺悟を今極め。一子公曉が首討つて御親子の中を丸うしや。イヤそれは。ソレハとは卑怯者と。地色角目かなめの競合が。漏れてや奥よりお局かけ出で。尼君様の上意なり。詞板額様は表を固め。夜廻り厳しく言付け給へ。地綱手様は先づ奥へと。言ふを幸ひよき折と。フシ皆引連れて入る影を。本意なげに打眺め。餘り上が慈悲過ぎて。天下の騒ぎとフシなる事よと。獨り恨みて居る所に。間近く聞ゆる人馬の音。列を構はぬ軍勢の鉦も太鼓も一時に鯨波をどつとぞ上げにける。地色すはや夜討と板額女。物見に上る其内に。松明提灯星の如く。先に進むは佐々木の末子綱若丸。土肥の實千代。二陣は千葉の資若胤若。蜻蛉頭も打交り。十一以下の子供の聲々。荏柄が一子公曉が。首取りに來た爰明けよ。明けぬは卑怯弱者よ。此方が怖いかえい〜わあ。フシ笑へ〜と罵しつたり。地色板額自然と心付き。天下の法と御親子の禮儀の程を思召し。子供を以て敵對か。實に尤もと感心し。定めて我子の市若も人數に加はり居るべしと。明りにすかし差覗き。あれか是かと見廻せど。似た姿なき不思議さに。物見より聲をかけ。詞コレ〜子供衆物問う。阿佐利の與市の一子市若と言ふ子。地色其中に居るならば一寸呼出して下されと。頼めば先なる佐々木の綱若。詞其市若はおれと友達。來しな誘ひにやつたれど。いやと云うて見えななんだと。地言ふに側から口々に。おいらも誘ひに寄つたれ

ど。詞軍は怖い物ぢや故。跡から行かうの留守ぢやのと。尻込みして得おぢやらぬ。地あんな腰抜け今からは。友達仲間へ入れまいと。譏る我子の噂をば。聞く親の身は胸せまり。スエテ暫し詞も無かりしが。詞いやなう子供衆。總體夜討といふものは。人の寝込みへ押寄せて。騙して討つ故卑怯戦。地色それを知つて市若が來ぬであらうと紛らかし。其方衆も手柄したくば明日夜が明け。詞いつもの飯食ふ時分に皆ござれ。其時小母が取持つて手柄さしてやろ程に。地今夜は去んで寝々しやと。我子の來ぬが不思議さに。當てなき事を引延ばす。フシ思ひは親の因果かや。地色寄手は何の差別なく。夜する戦が卑怯なら。詞明日夜が明けると其まゝ來う。其時手柄さしてやと。地先が頼めば其次が。小母様手柄をわしにもや。イヤおれにもと段々に。競合ふ頼み頑ぢよなく。鉦や太鼓を叩き立てフシ一先づ陣を引きにける。地色板額跡を打眺め。小母でなき身を小母にして。手柄頼むに市若は何として來ぬ事ぞ。假令我子は臆病でも。父が勵ましおこす筈。持病の蟲でも起りしか。母の無い子と甘やかし。養ひ過して病は出ぬか。心えなや氣遣ひと顔見ぬ内の物思ひ。案じに障子押立て、オクリ暫らくへ時をフシ移す内。江戸地程なく一子市若丸。十一歳の初陣に。着たる鎧は錦草。鉞形打つたる。兜を着し。ナホス地弓矢手挟み門前に大聲上げ。詞阿佐利の與市が一子市若丸。公曉が首受取らんと。抜駆けしたる證據の一矢。地是を戦の血祭りと。よつ引きひやうど門柱に。三寸ばかり射込みしはフシ健氣に。亦又しをらし。地色我子と聞くより板額女門押開き飛んで出て。詞ヤレ市若おぢやつたか。待兼ねましたほんにまあ。地よう來たこと事ぢやと嬉しさも。そゝろになれば市若も。詞母様久しう逢はぬ故。地逢ひたかつたと取纏る。詞オ、逢ひ度い筈道理々々。地色自らも別れてより片時忘るゝ事もなう。最前友達衆に尋ねたら。詞軍は嫌ひの逃げてのと。地色悪口聞くに猶の事。しかう案じてみました。まあ何として遅かつた。詞さればいの胸々へは觸があり。私は父様がお下りなされ。其方には公曉が首取る役。天晴れ手柄して來いとくれくれの言付け。地私にばつかり手柄さし。名を上げさして下されと。身勝手言ふに打ち懸頭。詞オ、よう言やつた。其方に

に手柄させて誰にささう。フムウ流石母が産んだ子。阿佐利殿の胤程ある。地心なら武者振りなら此様凛々しい子があらうか。詞そしてまあ此鎧。誰が物好きで誰が着せた。兜を猪首に着せたのは。地父様であらうがのと押廻しねぢ廻し。詞コレ市若。何故兜の忍びの緒結んでおきやらぬ。地解けてあるがと氣を付くれば。詞いや是は母様に逢うたらば。結んで貰へと父様の言付け。何自らに結んで貰へとか。ハア聞えた。一旦武士の義理に迫り。夫婦の縁は切つたれども。人知れず思ひ暮す。折あらば忍べ。忍びの思ひの糸。結べ結ぶと言ふ心デエ。地結んでやりましよと。縁起祝うてしつかりと。結ぶ拍子に忍びの緒。ふつと切れて落ちたるは。フシ心ありげに見えにけり。地はつと思ひし母親より。市若猶も氣にかけて。詞申し母様。軍に立つて討死する者。忍びの緒を切るとある。わしや討死をするのかや。爰へ死に來たのかと。地おろ／＼涙を打消して。詞オこな子はけうとい。其様氣にかゝる事言はぬもの。高の知れた荏柄が悴。ひねり殺せばとて苦の無い事。主を殺した者の子。遅かれ疾かれ通れぬ命。尼君へ申し上げ其方に首を討たしてやらう。地色紐も母が付け直し丈夫にしてやりませう。此方へござれと手を引いて門内さして入る海の。浪の哀れや打紐の。切れしを後の思ひとも。知らで親子は勇み立ち。オクリ伴ひ。へ一間にフシ入りにける。子を捨つる簀はあれども身を捨つる。簀は無しとの。フシ世の譬へ。身につまされて。阿佐利の與市。市若を討手とは。深き所存も有明の。スエテ月も心も搔曇る。思ひの糸に惹かされてフシ門前。近く來りしが。地色跡先見廻し館を眺め。あれが物見。是がお座敷。内の首尾を窺ふは。丁度此ずん此邊と。塀の側に身を寄せて。フシ耳を澄ます折からに。地色尼君荏柄が妻子を引連れ。表間近く出て給へば。よき幸ひと板額女。一間を出てて手を仕へ。詞實朝公より討手と申すは。十一以下の子供の軍勢。これ孝心の道を立て給ふ我君のお心。それに敵對公曉をお渡しないは。あんまり親御がひの我儘。急ぎ首討つてお渡しあらば。法も立ち道も立つ。地色双方のお心休め。私にお任せ下されと。貰ひ掛けたる心根は。フシ子にさす手柄の種なりし。地色尼君御目に涙を浮べ。詞其方の夫阿佐利の與市。仔細なん

にも言はぬよの。一旦の口止を用ひ。連添ふ者にも語らぬとは天晴れの侍。地色斯くなるからは何を隠さう。あの公曉は荏柄の平太が悴とは偽り。詞誠は先將軍頼家の一子善哉丸。エ。そりやお妾腹に出来たお子。オイノ。自らが心のさもしき聞いて給も。出家にするとして乳母諸共。鶴が岡の別當へ預け置きたれども。實朝に子のない故。地色若しもの時は跡目にもと。思ひ付いたが此子の因果。人の譏りを憚り。詞其方の連合ひ與市と。綱手の夫平太とを頼み。密かに奪ひ取つては貰うたれども。地別當の尋ねもきびしく。當座凌ぎと荏柄に預け。平太夫婦の子と言はして今の難儀。其譯言はば尼の身で。出家落した天罰と。言はれんも恥かしく。共に自害と覺悟する。心の内の悲しさを。推量しやとしやくり上げかこち給へば綱手も共に。我子ならば何故に是迄助け置きませう。疑ひ晴れて給はれと。言譯聞いて板額が。胸はがつくり繰返し。詞あの申しそんなら。夫阿佐利の與市。公曉は頼家のお胤といふ事。知つてゐるとも。與市は手車賣とやらに成り。平太は鳥賣。箱に入れて戻つてたもつた。ホイ。ハ。地はつとばかりに板額は。夫が懸けておこしたる。忍びの糸の判じ物。フシ解けて胸をば苦しめり。地色與市も表に打ちしをれ。さぞ女房が何かの事。思ひ合はさば胸迫り。我を恨まん。不便やとフシ聲を。立てずの忍び泣き。地公曉君はおとなしく。詞我命終るは厭はねども。共にとあるば、様のお命が助け度い。地よきに頼むと一言が。身にも應へる其上に。尼君近く立寄り給ひ。人は五十を定命と。言ふに六十を越しながら。地色一人の孫を先立てば。何長らへん夜明け迄最期の念佛それ迄に。此子が助かる筋あらば。尼が命は終るとも。助けてたも板額と。くれぐれ重き重荷をば。フシ仰せいなとも言ひかぬる。地詞の内に若君や。綱手引連れしをと。佛間を指して入り給ふ。フシ御心根ぞ痛はしき。地仰に残りし板額が。涙の顔を振上げて。ナウ聞えぬぞや我夫。公曉を頼家のお胤といふ事知つてなら。何故打明けては下されぬ。可哀さうに市若を。討手と言うて謙し越し。忍びの緒を切りかけて。母に結んで貰へとは。私に切れとの事なるか。お身代りといふ事を。蟲が知らして其時に。詞母様わしは討死を。するのかいのと氣にかけし。

今思へば神の告げ。地つけとも知らず餘所の子の。花々しきを見るにつけ。此市若は何故遅い。來さうなものと死ぬる子を。待兼ねたのは何事ぞ。殺しにおこすと知つたらば。待つまいものをと。しやくり上げ。歎けば夫は堀の外。詞忠義ならずば何故に。願ひ好んでおこさうぞ。父様手柄をして來うと。勇み進んで出た時の。俺が心を推量せよ。せめてま一度逢ひたさに。地忍んで來たと仲上り。足爪立つても高擧に。隔つ思ひはいと猶フシ涙くり。出すばかりなり。地色市若斯くと知らばこそ。一間をそろく忍び出で。詞申し母様。よき左右あるかと最前から。待つて居れども音もせず。友達衆が來ぬ内に。地手柄をさして父様に。褒めさして下されと。殺すと知らぬあどなさを。見るに母親せき上す。涙を忠義に思ひかへ。詞成程々々。末代に名を残す。大きな手柄させませう。イヤナウ市若。武士の子は何時知れず。もしやまあ其方が。平太が子の公曉で。君より討手が來りなば。どうせうと思やるぞ。ハテそれは知れた事。主を殺した者の子と。指差しに會はうより。潔よう腹切つて。流石は武士と言はるゝ氣。アノ腹切つてか。アイ。アノ腹をや。地腹をと言ふにしやくり出す。涙を呑込み。呑込みて。フシ顔打眺め。詞オ、そなたならさうあらう。其ゆゑしい心から。手柄がしたいは道理々々。さりながら此姿では。公曉が油斷せず。鎧も脱ぎ常の姿。地色あの一間に隠れりて。母が詞を掛けたらば父の心に叶ふ手柄。長地して見しややいのと鎧の紐。フシ解くも涙に結ばほれ死出の。晴着の。錦革。脱がせば下に白無垢を。着せて越したは胸愆な。酷い夫と恨みをば。來てなく夫は堀の外。我は忠義の男氣も。まさかの時は得討つまい。強い女ぢや討つさうな。殺すさうなと飛上り。見付けの石へ駈上り。堀に手をかけ羽あらば。飛んで入りたや顔見たやと。覺悟の上の覺悟にもフシこたへ兼ねたるばかりなり。地色板額涙の聲かくし。地コレ市若。最前もいふ如く。あの一間に忍び居て。假令どの様な事あつても。呼出す迄は出やんなや。手柄さして父様は愚か。鎌倉中の侍に。鑑と言はして褒めささう。地母に任しやと押入れて。立切る一間を最期場と。諦めかねし涙の袖。絞りながらに邊りなる。フシ燈し火消して廻りしを。地色尼君綱手は若君を後に圍ひ腰

刀。己れ我子を引入れて。手柄さそとは心得ずと。身を固めたる女の一圖。外には與市が内の音。靜まつたるに不思議たて。耳聳立てし四方八方。板額そろ／＼暗がり。足音隠し表の方。板間を強くぐわたく／＼。人來る音に踏鳴らしそろ／＼と戻つて一間の側。さあらぬ體にて聲に角立て。詞誰ぢや。それへ見えしは何者ぢや。何ぢや在柄の平太とや。シヤア。正しく汝姫君の敵。地遁さぬやらぬと立上り。何を目當かッシ詰掛くる。地色尼君綱手は誠かと。差視けども人影の。無いとは知らず市若が。一間の内に聞く耳の。外には與市身拵へッシいづれも。様子を窺へば。地色猶も詞を逆立てて。詞何んといふ平太。此板額に密かに言ふ事がある。オ聞かう。サアどうぢや。ヤ。ヤ。ヤア何といふ。あの市若を取返しに來た。そりやならぬ。尤も其方が子なれども。藥の上からわしが貰ひ。與市殿と二人して。育て上げた方此方の者。今に成つて戻せとは。アレまだしつこい。これ／＼。此方は現在主殺し。その主殺しの子と言ふとのコレ。市若は腹を切らねばならぬはいの。最前も公曉と。打替つたらどうするぞと問ふたれば。潔よう腹切つて。流石は武士と言はるゝと言つたぞや。二人の親に褒められうと思ひ死ぬるは定。可哀さうに取返さずと置いて下され。あれまだ一間を目掛ける氣相。何ぢや踏込み取返す。サア取返して見よ。イヤどこへイヤならぬ。地どつこいさうはと一人して。二人の物音足音を。與市は女が手にかけて。討つに討たれず腹切らす。計よと推しても。尼君綱手は不思議さに。心を配る一間には。不便や市若うろ／＼と。扱は我身は主殺しの。在柄の平太が子なるや。浅ましや悲しやと。立つては泣き居ては泣き。詮方もなく座を占めて。南無阿彌陀佛と差添を。抜くより早く脇腹へ。ぐつと刺せばばつと散る。障子に映る血煙を。見るより母は狂氣の如く。ヤレ腹切つたか出來したと。駈寄る音に阿佐利も半亂。尼君綱手もコハ如何にと。若君燈し火振上げて。見れば敢なや市若が。切なき息をほつとつき。詞ナウ母様。今まで私はほんの子と。思うて居たがよう聞けば。在柄殿の子なる由。主を殺した者の子が。助からうやうなしと。潔う死にまする。手柄もせず死にをつたと。父様がお叱りなら。よう詫言をして下され假令在柄

の子であると。やつぱりお前や與市様を。親と想うてゐる程に。子ぢやと思つて一遍の。地御回向頼み上げますと。言ふに母親張裂く思ひ。ヤレ其方をば父上が。手柄せよとて越されしは。公曉様は先將軍のお子。お身替りに立てよとの。心を籠めし忍びの緒。地色切るに切られず討ちかねて。獨り死んで貰ひたさ。何の在柄の子であるぞ。與市殿と我仲の。ほんのほんぼの本の子ぢや。詞其方一人が死ぬるとの。尼君様や若君のお命の替り。手柄も手柄大きな手柄。潔う死んでたも。地何の因果で武士の。子とは生れ來た事ぞと。口説き歎けば表には。詞市若父も來てゐるぞ。臨終正念南無阿彌陀と。地色唱ふる心通じてや。今際に成つて目を開き。詞そんなら在柄の子でもなく。死ぬるも手柄になりますか。地嬉しうござる母様。さらばござると敢なくも。息引取れば表も内も。思はずわつと泣倒れスエテ前後。ッシ不覺の涙なり。地かゝる哀れも我夫の。悪事よりと綱手は覺悟。座を占め自害と見えければ。尼君やがて双物振ぎ取り。詞汝誠の心あらば。夫在柄が行方を尋ね。姫が敵を討つて得させよ。市若への追善には。我愛着の心を放れ。再び公曉出家させ。地色後世弔はせんと若君の。御誓を押し切り給ひ。綱手に從ひ此家を立退き。如何なる僧をも師と頼めと。見放し給ふ若君は。成人の後公曉の讀みを。其儘聲に變へ。公曉法師と名乗りしは。ッシ此幼子の事なりし。地色夜もはや過ぎて明方の。又も寄せ來る鯨波の聲。板額は是非なく涙ながら。死骸の首を打落し。悲しさを隠し聲張上げ。詞尼君隠まひ給ひたる在柄が一子。公曉が首討つてお渡し申す。受取人はお通りと。地色大門開けば阿佐利の與市。爰ぞと涙押拂ひ。詞オいしくも致されたり。則ち是に市若丸。受取る役に控へたりと。地我子の名をば名乗るも追善。尼君不便と回向の唱名。供養は若君法の旅。綱手諸共館をば出づるも思ひ見る思ひ。親と親とは式法に。我子の首を受取り渡し。詞いかい御苦勞。御苦勞の聲も涙に震ひ出し。わつと泣けばははつと。地禮儀に隠す涙の袖。縫れば拂ふ愛別離苦。會者定離ぞと振切つて是非なく／＼も引別れ御館を。指して立歸る。

第 四 道行こがれ松蟲

六部念佛南無阿彌陀ア。南無阿彌陀ア。阿彌陀ア。ナホス幾度か。物思ふフシ袖に。訪れて。涙にあかぬ秋の風。スエ便りも聞かず文も見ぬ。荏柄が妻の綱手こそ。小オクリ絶えぬ。妹背に繋がる、修行公曉も旅衣。本フシ六十六部に身をなして。後には笈前に鉦。右に撞木の現とも。夢とも知らぬ世のさがに。長地お主を討ちし我夫は廣き世界にかぐみ鳥我は浮世を放れ鳥。比翼争ふ北條や。和田が妬みのとりくんに。フシ定め兼ねたる境川。鎌倉山の山かづら。未だ夜を籠めて落ちて行く。フシオクリ心のへ内こそ。便りなきフシ世を白雲に。數見えて。田の面に落つる雁の聲稻葉もそよと訪れに。人目忍ぶの。眼我がな。みだには。乾く間もなき袂の浦も。引かば靡きやれさりとは。ナホス何時かは君を都べの萩の下葉の。露になりとも。フシ濡れてなりとも。と萩吹く風の。便りをも聞くやと招く旗薄。尾花が末の思ひ草。兎やせん角や千貫樋水の。流れと身の上と一方ならぬ二枚橋。かけて情は。時知らぬ富士の。山こそ我身の上よ。煙比べん袖しの浦。戀と浮瀨の鳴渡ゆく。瀬戸の染飯言ひかねて目元ばかりに。泣く子坂。小夜の。中山中々に。スエ愛しい子にも鹽見坂。杖つきの里とぼく／＼とまひ舞坂に立止まり。疲れ紛らす道草の。フシ木の實拾うて在します。地綱手はつく／＼打守り。ア、定めなの世の中や。大山は淵となり江河は岡と變るとも。先將軍の若君と呼ばれ給はん御身をさて。淺ましの有様やと。せき来る胸を。フシ押鎮め。アレ／＼日脚も暮近し。人里遠き此野邊は熊狼の恐れあり。いざさせ給へと手を取れど。詞愚かな事を言ふ人かな。地父上此世に在まさは熊狼も我家來。怖くば其方先へ行きや。おれは爰にと横田川。フシ横車こそわりなけれ。地やる方もなく憂きふしに。三下り眼別れ。別れと異なる事ばかり。言うて私に苦にさすのかえ。よい／＼仕様ぢやの。ナホスそんなら捨てて行くぞえと。威せば流石稚氣に堪へて給もとかいづくり。馬を綱手はほた／＼と。勇み賺して拍子とり。狂言盜扱

も扱も此方は。いたいけな事言うた。足が痛くと北嵯峨へござらば。三度笠をしやんと被てお伴するが面白い。吉野初瀬の花よりも紅葉よりも。戀しき人は見たいものぢや。所々お無理なしに疾々ござれ。しんどかいちやが負ひませう。ナホス笈も脊中に。懸帯の結ぶ縁を松の尾や。此處に北嵯峨西嵯峨を尋ね。尋ねて二親に。逢ふ坂越えて身の上を。言うて夫にあはた山。逢はゞ日頃の憂き辛氣三條口。にぞ三重へ着きにける。

鉢々、キ憂き辛さ。何れ劣らぬ世の中に。地蔵經哀れはかなき我等かな知らずはさても止みぬべき。業に引かる、魂魄を導き給へ地藏尊。ナホス厨子にぶらりと鶴が岡。地別當阿闍梨は先將軍頼家卿より預りし。善哉丸を奪取られ去年の秋より方々と。何處を先途に。フシ雲掴む若しは變化か人賣りかと。丹波の山の奥よりも。丹波の湊ゆら／＼と。オクリ尋ねて都縦横に。オン小嶋が崎より寄りかける觀世小経の地藏尊。長地くみ上る内彼若に廻り逢はんの大願も半過ぐれど栗田口。往來の人に勸進を。フシ請うて。暫しは休らひぬ。地色直ぐなる御代にねぢけ者。藤澤が郎等根來伴藏供人引具し駈來り。蚤取眼で藪から棒。詞コリヤ／＼願人。荏柄が女房伴を連れ。此街道へ來る由跡の宿で聞いて來た。地色見たらば知らせと氣を急ぐ顔色。詞ハレとても無い滅相なお尋ね。荏柄は知らぬが麻柄なら。そんじよ其處等と聖靈の荷持を頼んで問ひ給へ。地我等は地藏を建立の大行者。フシ勸進寄進とすゝめける。詞オ、是は誤つた尋ねる女の年頃は三十内外。むつちりと太肉色白な女房。捕へて手柄にせにやならぬ。地其行方が聞きたいと言ふに點頭き。詞エ、それで聞えた。扱は人の女房を追駈けて。煩惱濁を見知らすのか。アそれは無分別。道具譬へて言はゞ濁り江に。月の宿らぬ如くぞや思ひを。善途に翻へして。フシ勸じより佛に御寄進あれ。女中はどつちへ通つたやら。白紙夏書反古によらず。一紙半錢の奉財の輩は。此世にては比類なき手柄に誇り。御家來ならば。數千人の上座に座せん。奇妙輕薄。いやながら申すと言はせも立てず。詞ヤア急ぎの用で通る者。地邪魔ひろくなと跳飛ばし。フシ蹴飛ばしてこそ通りけれ。詞エ、埒もない八九三の脛に出合うて。勸進帳を棒に振つた。ア、まゝよ。地唯兎に

角に何時迄もまよと思はぬ善哉丸。廻り逢ひたやア、痛やと。腰撫てさすり砂打拂ひ。起上つたる向ふより。荏柄が妻は世を忍ぶ辛き憂目も三度笠。難行公曉の手を引いて通りかゝるを阿闍梨はやがて。若しやと覗けば身を交し。避けて行かんと笠傾け。右へ寄ればもつれ寄り。フシ左へ寄れば。纏ひ付き。小腰屈めて立塞がり。それ。つらく面影見れば。大事の國守の預り物は。手車賣の箱にかくれ。生死不定の世の中を。一遍尋ねぬ。所もなし。此處に邪魔して。顔見せぬ女中一人おはします御名をば。街妻外道と名付け。奉り幸ひの。小笠に隔て。せんほ盡果て。鐵灸眼にかけるぞと。立寄り給へば。詞ア、是坊さま。しみ執拗い此方も同じ修行の身。地奉加は互につく。算用なしに通して貰はう。道の邪魔ぞとすり退くを。どっこへ。フシ大新發意を改むる。斯程弟子の善哉に。よく似た姿を。怪しみて。鶴が岡の別當。無體に此子を勸進すと。仰せを聞いて公曉はやがて笠脱ぎ捨て。ナウお前は阿闍梨様。そりやこそ尋ねる善哉丸。詞扱は己れは鳥賣めが女房か。地其子は此方の預り物。事なく戻せば其通り異議に及ぶと許さぬと。地藏菩薩の錫杖。追取り小脇に掻い込み。睨み付けたる眼はくるく。フシ久留尊佛の。如くなり。詞ア、申し。地色必ず御倉相遊ばすなど。笈を下し手を仕へ。詞扱は鶴が岡の別當様にてましますか。地色成程其鳥賣は自らが夫荏柄の平太胤長。是には段々申譯あり暫くと。宥める後の木蔭より。伴藏主従忍び足。追取り巻いて大音聲。詞ヤア荏柄が女房遁れぬ所腕廻せ。其悴共に搦め捕れ。地承ると寄る所を。用意の刀を抜く手も早く。先に進みし下人が肩口肋をかけて向ふ袈裟。はらりずんど切離せば。先を取られて主従三人。後れながらに打つてかゝるを事ともせず。縦横微塵となく立て。フシ山道さして追うて行く。地色阿闍梨は斬合ふどさくさ紛れ。公曉を連れて立退かんと。思ふ折ふし又足音。兎やせん角やと氣を碎き。半分出来たる勸進より佛。すつぽり着せてそらさぬ顔。フシ荏柄が妻は立歸り。詞ヤア公曉様は何處にぞと。地尋ね廻ればコレ。女中。詞一紙半錢の奉財でコレ此一子。地藏菩薩の胸より下が。建立なされて。地愚僧が大願成就と。悦び給へば此方も幸ひよき折と。ア、お嬉しや忝なや。

尼君の仰せと言ひ以前の通り御弟子となし。御出家堅固を頼み上げます。自らは是より嵯峨逢坂の縁を尋ね。夫の行方身の安否。都に足留め申す所存。何を申すも事急なり。始終の様子は此お子に。御聞きなされ下されよと。餘儀なく言ふに。詞オ、拙僧が受取る上は。壽命は千年鶴が岡へ。髓に守りまし御入佛。氣遣ひなしに落ちさつしやれ。地アレ又向ふに大勢人音。見付けられては互の邪魔。詞坂への道は左手へ。愚僧は爰にて敵を騙りやり過してゆつくりと。地鎌倉指して下るべしと。笈をともし脊負はせて。ヒロヒ煙管も腰にはせ。さらば。口早に。名残をちやんと鉦の聲。フシ嵯峨の奥へと落ちて行く。地阿闍梨は公曉を厨子に入れ。下郎が死骸の血を取つて。我身一ぱい塗り散らし。よろほひ伏して在します。地程なく伴藏加勢を入れ取つて歸せば別當は。わざと苦しき聲音にて。詞ナウ。方々。文彌詞ア、扱て苦しや堪へ難や。尋ね逢ひたる幼子は又女めに奪ひ取られ。地剩へ此の如く身内の深手に眼もくらみ。詞心がくれ。ぐれとして沈み入るやうに侍るなり。此體ならば相果つべし。御身達を誰やの人やら知らねども。若しも空しくなるならば。地敵を討つて給はれやと。フシいと苦しげに宣へば。ナホス皆々誠と目をこすり。詞エ、むごたらしい目を見る事かな。氣遣ひあるな坊様。地敵を取つて得さすべし。扱々憎き女めいで。追つ駄けんと行く所をアイヤなう。文彌詞ヤそつちへは逃げなんだ。右手の道から難波瀉短かき日脚急がれよと地言へば點頭き呑込んだと。大勢引連れすまたの街道當途もなしに。フシ追うて行く。ナホス地阿闍梨はそつと立上り。詞ハ、ハ、ハ、ハ。さつても甘い追手の衆。脇道へやつたれば我行先にも氣遣ひなしと。地地藏ぐるめに背に負ひ。詞どりやどりや去のぞ。サア去のに河原の地藏菩薩。十より上の嬰兒を。地肩にひっかけ足早に鎌倉指してぞ三重時しるや。フシ秋は木の葉も。色付いて。錦を飾る小倉山。地色麓に四季を建分けし。春は愛宕の花見の亭。長地夏は嵐の山うけて秋は其ま。紅葉を。多枯急ぐ鴻臚館。スエ爰て小倉の山莊に。祖父定家の筆の跡。拾ひ集めて爲氏卿。百人一首と題を据ゑ末世の人に傳へんと。内裏を離れ山里に。心を澄ます名歌寄せ。フシ奇特にも亦物さびし。地色石

使として留守もりの車戸次夫婦は五十越し。白髪半分黒眼。光らす慾の貝浚へ。妻も名に負ふ竹箒掃き込むばかり塵一ツ。散らさぬ上のよく案じ。詞コレ親父殿。此様に毎日々々掃除しても。鏝半銭落ちてはなし。うか／＼と暮して未の六十日が詰らぬぞや。オそれも思つて居るてや。爲氏殿に使はれ。歌詠んだとて錢にはならず。鎌倉にをる娘めが内に居るなら賣つてやり。田地一反の主にもなるが。地色ふやうにならぬ世界。詞ぢやが氣遣ひすな。ちつと人に頼まれた事がある。是が手に入ると大きな金々。地色よい身に成つて見せうぞと語れば共に女房が。詞そりや其當は俺もある。ナンヂヤ其方も誰ぞに頼まれたか。オ、テヤ。むまい／＼。してそれはと掃除をやめ。地色話半ばへ荏柄が女房笈を背中に逢坂で。在處を尋ね此家を目がけ。ちとお頼み申しましたよ。詞關の車戸次といふお人内方なら逢はしてと。地色いふに夫婦が柴戸を明け。詞ヤ其方は娘のお綱でないか。父様母様でも久しや。前の所を尋ねたと。地内へ入れれば母親は不興顔に立寄り。詞ヤイ爰な恩知らず。伊勢参りをかこつけ六年以前に家を出て。それより鎌倉にゐるとばかり。夫婦の者に貢もおこさず。榮耀らしい國巡り。地色又食ひ倒しにうせたかと。子を子と思はぬ無得心。其氣を知つて出次第に。詞成程お叱りは尤もさりながら。今は私も仕合せ致し。ちとした事で夫の行方。尋ねながらの廻國。地路銀もたアんと持つて居ます。お前方への土産はさだる。是迄の事了簡し。一夜泊めてとむまい事。フシ齒に合ふ事を言ひ散らす。詞何ぢや路銀も土産もあるとや。オそんならようござつた。コレ親父殿。久しぶりの娘。何ぞ馳走をして下され。地おつとまかせと小尻をからげ。おりや嵯峨へ往て荒鮎買うて來う。溜乳飲ましやと機嫌して。車戸次は表母親は。イザ先づ奥で東の話。草臥ならば親甲斐に足さすつてやりませう。一足擦らば千兩くれう。二足擦らば萬兩と。當なき當の槌で庭。フシ掃きさし伴ひ入りにける。はや暮れかゝる。秋の日の。曬月影身に受けて。よしあり氣なる浪人の風呂敷包みちよつこりと。似合ぬ風の旅姿。笠傾けて柴戸に立寄り。たそお取次頼みたし。詞爲氏卿の歌道を慕ひ。押付けて參上申す。地色宜敷御沙汰と案内の。出合ひ頭に爲氏卿一間を明けさせ給ひ

しが。詞歌の道に心をよせ。慕ひ來たとはしをらしむ。地苦しからず此方へと仰せにハツト威儀つくろひ。怖ず慮せず目通りに頭を下げ。詞承れば先生には。百人首を選び給ふ由。及ずながら拙も。腰折れにても加へ度く。地推參申し候と卑下せし詞に爲氏卿。詞ホヲ、頼もしの旅人やな。過し頃新古今集を選まれしかども。花ばかりにて實は少く。祖父定家の心に叶はず。我此山莊に引籠り。書殘されし色紙を集め。百人一首と題をす。末世に残す和歌の道。地色時至らぬか是非もなや。九十九首は撰りたれども今一首不足せり。何とぞ御邊詠足し給はゞ。フシ喜悅ならんとありければ。詞さん候某は關東者。千賀の鹽竈を一目見致し。浦漕ぐ舟の面白く詠みかけし其歌は。世の中は常にもがもな渚こぐ。漁士の小舟と迄はつゞり候へども。下の七文字に迫り三十一文字成就せず。地色あはれ御添削あつて百首に加へ給はらば。後代不思議の面目と。スエ思ひ入つたる風情なり。地色爲氏暫らく歌を吟し。詞ハア、奇妙々々。世の中の體は。浦こぐ舟の跡なきと言ふ心を以て詠みかけし歌。下の七文字こそ猶一大事添削に及ばず。貴殿旅人の身なればいづくも同じ旅の空。地今宵は是に一宿あり七文字案じ給ふべし。イザあの間への御差圖。疲れに辭儀も遠慮なく。兎角は御意に任せんと。しづく／＼立つて雪見の亭是も御縁のはしくれを。曾つて一夜は明石瀉。鳴がくれして入りけるは。フシ唯人ならじと。見えにけり。地色爲氏卿は文臺に敷の色紙を取集め。何れが巻頭巻軸の。始終を分けんと氣をこらし。心をすまし思はずもとろ。オクリとろ。へまどろみフシ給ひしに。寢鳥の聲の。物さびていとしん／＼と夕なぎに。嚙くや藻鹽の身をこがし。顯はれ出でし齋姫。慕ひ寄ること物憂けれ。地色爲氏ふつと御目を交し。ア、ラ怪しからずや。詞實朝の妹齋姫は。荏柄の平太が手にかゝり。空しく成りしと聞及ぶ。地色もしや虚説か但し又。我つれ／＼の思ひに引かれ。迷ひ來りしものなるかと。思はず一間を駈出でて。フシ立寄り給へば。ナウ恨めしの戀人や。君がつれなき心から。思はぬ人に思はれて。仇に此世を。去りしぞや。思ひ切られぬ輪廻の絆。苦患を救ひ給はれとよ。詞オ、實に道理さりながら。和田北條が争ひの盛りの花を折取つて。地色非道と言はれん悲

しさに。故意と強顔く言切りし。未來は一蓮托生と。御回向あればいや。とても御回向なすならば。此の世の縁を結び置き。後世を助けて。給はれとフシ打ちしを。れてぞおはします。調げに。現在の果を見て。過去未來を知ると言へば。地此世の縁を願ふは理。唯此の上は二世三世。此世も未來も夫婦ぞや。心よく成佛と。仰せの内より柴垣押分け。謠千秋萬歳の。千箱とかなて。ナホス地三方に。長柄を取添へ荏柄の平太。立出づるを見て爲氏は。コハそも如何にと御驚き姫は纏て色直し。オクリ衣紋つづくろふフシ折からに。地色車戸次は表へ戻りがけ。女房庭に立聞きをするとも知らず荏柄の平太。遙に退り謹んで。調君情なくも和田北條が異論を思召し。姫が志取りあへ給はず。去る勅使御下向の後。地色思ひ焦れて相煩ひ。命も危く候故。調親にて候城の九郎某を招き。和田北條の確執は姫君を幸ひに。入道親子がなす業。汝宜敷く計へと申すに付き。新參の腰元を殺し。衣裳を着せ替へ首を隠し。姫を討つたる體にも成し。御供申し立退きし其跡にて。親資國も切腹致せし由。是と申すも姫君の御願ひを叶へたさ。地色様々心を盡くせども御賢慮の程計りかね。近寄る手段の偽幽霊。斯く迄主従心を盡す。心底憐れと思召し。御縁を組ませ下されよとスエ餘儀なく言ふに姫も共々。あらぬ姿に身を變へて焦れ徘徊ふ有様を。不便なとも可愛いと。唯一言の仰せはないか。心強やと繩りフシ付き。歎かせ給へば。地色爲氏卿岩木ならねば心解け。調ハテ一旦は世の人口。期して辭退は此方から。地得致すまいと戯れて。じつと抱き締め給ふのが現世未來の即身成佛。フシいつそ殺せの睦言に。地色荏柄は勇んで目出度し。お盃よりお寢間が肝腎。又もや御意の變らぬ契り。紅葉の亭てしつぱりと。何處も彼處も紅葉の。お手いらすが御馳走と。味な所を自慢して。オクリ伴ひへ一間にフシ入りにけり。地色車戸次は始終聞き濟まし忍び入れば女房も。差足して傍に寄り。何と様子を聞いてかと。言ふ口押へて高い。調是につけても北條殿は。先潜の早い和郎。齋姫を平太が討つたとは心得ず。爲氏に首だけの女。忍び行くまいものてなし。奪ひ取つて渡さば。褒美は望み次第との内通。地出世の種とは此事と語れば共に女房が。調ハテナウ。大名の心は九

分十分。妾が方は縁ある故和田殿よりまつ其如くの頼み事。則ち隣村へ捕手の役人。地是へ渡せば褒美と引替へ。出世は仕勝と夫でも。慾に隔つる熊手性。見込んで點頭き出来た。調奥へ通路のならぬ某。兎角は其方が心任せ。シテどうして盗出す。是幸ひの事がある。娘が脊負うて来た笈の内へ。姫を騙して押込め。裏道から。合點かと。地私語く事を呑込んで。よい時分に。咳せよ。それを合圖と言ひ合せ。車戸次は勝手へ身拵へ。フシ女は奥を窺ふ所に。地色娘の綱手は物陰で斯くと聞くより走り出て。立塞つてコレ母様。調あのお供した侍はわしが尋ぬる夫。姫君はお主。奪ひ取らす事ならぬぞえ。地色まだ慾心は直らぬのと。諫めかゝれば。コリヤ言ふな。調年寄つて色氣はなし。慾知らいでよいものか。地聲立て居ると是ぢやがと。懷劍逆手に突つかくれば。調ア、危ない。親として子を殺す地邪見な心といふを打消し。調ぬかすな。己れは幼き時犬の餌食となる奴を。末頼みに育て上げ。物にせうと思ふ内。よう家出をひろいだなア。恩を思うて母と一所に姫を盗出すか。地厭とぬかすと突殺す。サア返答と手詰になり。調成程一味致しましよ。何ぢや一味。イヤ合點がいかぬ。油断さして爲氏や。夫にぬつくり言はうでの。それとも誠の心なら。己れが恐るゝ地獄とやら。神も佛も打込んで。恐しい誓文聞かう。あの母様の勿體ない。悪事にもせよ親の事。地わしが口から言うたらば舌は八裂き車裂き。阿鼻大焦の苦を受けう。其代りにはお情に。一味は許して下されとスエわつとばかりに。フシ泣沈む。調オそれ程一味がせつなくば。親の因果ぢや許してやらう。其代りに頼み事。コリヤ姉よ。其方が夫。あの平太が氣味が悪い。爰へ呼出しおこしたら。酒を盛つて盛りつぶし。よう寢入らして置いてたも。姫をそびき出す迄は。大事の事ぢや色目に出すな。此方等が出世の跡取りは。釜の下まで其方が物。エ阿呆めと地猫撫の。毛色優しく言廻し。爪磨立て、奥の間へ。窺ひ行くぞフシ恐しき。地色跡に綱手は詮方も涙にくれて居たりしが淺ましや我ながら。育てられたる厚恩の親といふ字に押へられ。お主の大事も得言はぬか。何の因果であの衆と。親子の縁を結びしぞと。昔を悔み身を恨みフシひとり。託ちてゐる所へ。地荏柄の平太胤長。我に逢

はんと呼出すは誰人なるぞと立出でて。見れば我妻。詞ヤレ女房か珍らしやと。地駈寄る夫に抱き付き。ナウ逢ひたかつたによい所へ。よう出て来てと急ぎ上す。心は撞木早鐘の。フシつきしほも無き風情なり。詞ハテこな者興がる挨拶。先づといふ。嚙ぞ國元では某が。姫君討つたとの取沙汰。其方も難儀しつらん。公曉は何とした尼君へ戻したかと。地色何かの事を問ふ間も待兼ねコレ。姫君のお身の上。氣遣ひなくと。奥へ目を付け氣を配り。急げば急ぐ程。詞オ、討つたと思つてお身の上。氣遣ひしたは道理々々。御安體にてお供して。爲氏卿と御祝言。其方も悦べ目出度いと。地何の懸念もない夫。氣が付けがしと女房は立つたり居たり身をあせり。言はんとすれど親の科。口に溜り胸に充ち。幸ひ有合ふ銚子鍋酒の力で一口と。土器取つてちやうど受け。ぐつと乾せば夫は手を打ち見事。久しぶりて女夫の盃。テエ戴ことすり寄せれば。持つて飛び退き涙聲。詞コレ盃どころかいの。へエ、情ない。地言ふに言はれぬ胸の苦しさ。恩も義理も思はずば。いうて／＼言ひ破り安穩では置くまいものと。親を恨みの心とは。夢にも平太知らばこそ。詞ハテきつい恨みやう。如何様連添ふ夫が不義を言ひかけ。姫君を討つたと思はゞ安穩では置かぬ筈。惡戯者め不義者めと。言うて／＼言ひ破り。食付く程に思ふは尤も。地色サア仲直りの盃と。じやらけ掛ればいや／＼。詞言ふまいと言ふ誓文は立てたれども。言うて退けう。ハテもう言はずとよいはい。今夜は姫君の御祝言。あやかつて我々もしつぼり機嫌直しや。地直しやと底の心はしら浪の。フシ帆かけて来いともつれ寄る。地色綱手はあるにもあらばこそ。本氣で言はれぬ一大事。酒の力と汲み流し。飲んで胸据え。胸を据え。何の儘よも儘ならぬ。親の惡名いふも憂し。言はねばお主へ不忠となる。兎やせん角やと胸築て。打込まるとより辛い酒。受けては干し。詞コレはしたり。地受けては干し。詞コレハしたり。地手酌は呵責の汲む熱湯。阿鼻焦熱の苦しみを。我と我でに受けるかと。言はず語らず思はずも。わつとばかりに伏沈む。地心知らねば夫は呆れ。詞こりや留守の間に阿呆が上り。底抜けの無き上戸。おとましや又持柄の癖が起らう。地正氣を付けよと抱起せば。むく／＼と起上り。ひ

よろ付く足の他愛なく。詞飲んだに依つて酔うたが何と。こなんも酔うたかひよろ／＼なさるゝよ。コレは迷惑。其方が足がアレ危ない。それ危ないと。地あぶながる程猶ひよろつき。詞あぶない事お前も知つてか。あぶなか萬事に氣を付け召され。此家の祖父祖母私が親。それで何にも言はぬぞえ。誓文立てたて言はぬぞえ。地お姫様をばコレナウ。詞言はぬぞえ。地言はぬ切ない心をば。推量して給へ我夫苦しいのはいとどうど伏し。泣く音と共に寢入りしは。フシ哀れにも亦是非もなき。地様子言はねば一筋に。酒の科ぞと平太はうつかり。詞テモしやれるは／＼。夫の側とも言はず高断言分あれども。言はぬぞえ。久しぶりぢやに依つて。言はぬぞえ。如何様女の酒の酔はどうやら憎うないもの。お上にも今時分はお唐臼の最中。地色我にも一白めん上申そと。戯れ寄ればコレ／＼。詞お姫様のお身の上一大事がある。油断する所でないかと。地寢言にびつくり遙に飛退き。詞ヤアラ心得ず。すべて寢言と言ふ物は。己れが心に思ふ事。なす事いふと聞き及ぶ。地色一大事とは心元なし。返して聞かんと氣相變へ。詞ヤイ女房。姫君のお身の上。油断すなどは何の事。地一大事の事言へ聞かんと咎めて見れば。詞成程。今言ふはみな寢言。本性では言はれぬ事。此家の留守守り。車戸次夫婦はわしが親。五つの年から育てられ大恩受けし身なれども。あまり情ない慾心を見限り。家出をして東に下り。縁でこそあれお前と夫婦。其恩受けた二親が。和田北條に頼まれ。今夜姫君奪ふ筈。様々の意見も聞き入れず。他言せまいと恐しい誓文。さもなくても親の事。子として言ふは恩知らず。道を思つて現の空言。わしやよう寢入つてゐますぞ。ムウ聞えた。出来した。連れ／＼。汝が酒は鴻門にて樊將軍が沛公を。助けし酒の忠義に勝り。我爲には神の告。地イデ車戸次夫婦を切りさいなみ。此世の暇を取らせんと。勢ひ込んで駈行くを起上つて裾に取り付き。詞惡人とは言ひながら。義理ある親の大事を漏らし。地天道如何で許し給はん我から先へと夫の刀。拔取る所をしつかと押へ。詞ヤア狼狽へたか女房。汝が言うたは皆寢言。現て我は言はうがな。それでも眼前コリヤ。夢ぢやないか。夢の醒めやう未だ早い。地まそつと寢よと突飛ばし。又駈行くを猶取

付き。詞わしが爲に親なれば。お前の爲にも舅姑。地了簡付けて給はれと。スエテ縫れば流石進みかね。詞よしよし左程に思ふなら。今見た夢の夢合せ。眠り覺さず思案あり。地我に續けと諸共に。引連れ立つて一間なる。フシ紅葉の亭へと駈り行く。地色八聲の鳥の音も過ぎて。車戸次が妻は奥の首尾。まんまと仕畢せ夫をは。呼出す合圖の聲しほなき。それと悟つて来るを待ちかね。詞これ。爲氏が寢入りし内。姫を密かにそびき出し笈へ押込め。次の間に出しである。和田へやる氣か北條へか。地色此方の心を聞いた上此方にも思案ありと。相談の内在柄は懸て。笈を開き姫君と。女房綱手と入れかへて。フシ姫君引連れ入りにける。地色とは知らずして車戸次は間に合ひ。兎角盗み出しての事人音に氣を付けよと。フシ差足してぞ忍び行く。地色女房跡に目を利かし。松吹く風も蟲の音も。若しやと心配る内。車戸次は姫と娘とを。入れかへある事夢にも知らず。笈を背負うて駈來り。サアしてやつた是からが。めいめい出世の仕勝ぞと。駈出さんとする所を。女房やがて笈に手をかけ。コレ親仁殿。詞和田殿の御家來は西在所に待つての筈。地道が違つた此方へと。引留むれば振放し。詞そげめやい。己れにほつと飽き果て。是をついで東下り。北條殿へ渡さにやならぬ。地邪魔ひろくと馴染の胸骨。踏折つてくれんすと。言捨て行くをしつかと捕へ。詞オおりや又姫を和田へ渡し。獨り出世の種にする。地こつちへ寄越しやと引戻す。シヤ。ひつきれめ味やると。駈出せば引戻す。戻せば駈出し。コハリ兩方が。我慢外道と慾心魔王。猛虎の皮を争ひし例も。ナホスフシかくやと。淺ましよ。地色女の強慾積りてや重荷背負ひし親父をば。尻居にどうど引据ゆれば。憎しと車戸次は起きさまに。すらりと抜いたるだんびら物。コレ待つてと引つはづし。笈を楯に身を隠す。まつ二つにと及び腰。飛上つて斬付ければ女は遁れ中に立つ笈を二つに斬割つたり。中に敢へなや綱手が手負ひ。詞ヤこりや娘ぢや。地姫ではないと狼狽へ廻る其内に。平太は姫君誘うて縁先に躍り出て。詞ヤアおのれらが工を聞き。姫君と入れかへ置きしを知らざるか。地因果の程を思ひ知れとハツタと睨め付け。詞サア女房。最前言ひしは爰の事。地最後の夢を醒ませよと。言ふ聲涙手負も涙。ナ

ウ淺ましや父上母様。身内にたまる慾心が死出の山にて劍となり。責め詞まれ給はん事。今見るやうで。フシいとレきぞや。地色是より心を改めて佛の縁を結んでたべ。名殘惜しいは我夫。羨ましいは姫君様。お前は目出度う御祝言。我は戀しい夫に別れ。冥途へ嫁入り致します。是も何故二親の。酷い心で。心でと。フシ恨み。涙の泣いじやくり。地色姫は悲しさ詮方も。涙と共に手を合せ。詞何にも言はぬコレ綱手。其方衆夫婦は氏神とも。我爲の結ぶの神。地神も佛も世にあらば。此難救ひ給はれと。わつと叫ばせ給ふにぞ。平太は猶も涙にくれ。詞姫君のお詞を。名僧知識の引導と。思うて未來成佛せよ。地名殘は互に盡きせぬと。思ひ切つても切れやらぬフシ心ぞ。思ひやられたり。地色哀れを知らぬ車戸次夫婦。しをれし顔も胸算用。詞コレ婆。手盛食うた腹癒せに。其方も注進おれも注進。合點か。地合點と點頭き合ひ。立上つて駈出す所に。思ひも寄らぬ後の方。東西より來る矢先。車戸次夫婦が背骨にはつしり。うんとつけに返るも天命。フシ唯一矢にて息絶えたり。地色姫君在柄はコハ如何に。何人なるぞと一間を明くれば。御主爲氏卿衣冠正しく立ち給へば。此方の一間に浪人は。忝くも右大臣源の實朝卿。四海に秀でし御顔色。姫も在柄も吃驚し。御大將の御機嫌を。如何と案じしをれ入る兩卿一度に悠々と。フシオクリ一間を。へ出でさせフシ給ひつよ。地色實朝優美の御聲にて。詞我肉身の妹を在柄の平太に殺され。其又敵平太をば只今一矢に射止めたり。和田北條が異論すむ迄。地我は見ぬ振知らぬ振と。仰せに人々爲氏も。安堵の思ひ喜悅の眉。心の禮に腰折の。フシ歌の聖も尊敬あり。地色重ねて大將御聲も爽かに。詞イカに爲氏卿。我撰集に入らん爲。姿を窺し此家に來り。下の七文字に差詰り。工夫をこらす所に。今綱手が悲しみを見て。綱手悲しもといふ七文字が浮かんだら。地色和歌の道に叶ひなば百首に加へ給はれと。仰せに爲氏御手を打ち。扱は鎌倉の右大臣にて在ますな。詠みかけの其歌は。世の中はつねにもがもな渚こぐ。漁士の小舟の綱手かなしも。ホオ、是ぞ誠に當意即妙。面白きといふ心を以て無常に通じ。則ち綱手がよき追善。九十九人に此一首。地色合せて百首百人首。我願望も成就と。悦び給へば今はの綱手。詞ナウ有難や冥

加なや。右大臣家の御歌に我名をもつて一首となし。末世に残す御供養。地常にもがもな漕ぐ舟は。常寂光の弘誓の舟。乗後れじと出るいきばかり。我夫さらばと敢へなくも。フシ夢の夢とぞ消えにける。地わつと泣き出す姫よりも泣かぬ顔して掻き抱く。夫の心はよみと歌赤人ならぬ爲氏も。無慚や此世を猿丸の。紅葉踏み分け啼く鹿と。詠みしも夫を慕ふ歌天地頭の大將も。親に孝行天納受未來は上品上生と貴賤法師の分ちなく。回向をなしてほのくくと小倉の。山の朝霧に。都を立てて東路や鎌倉。山に花咲かす和歌の名人達人は此大將の事。なりき

第五

地武備盛んなれば却つて其身を亡すとかや。藤澤入道が毒氣を呑み込み。和田北條が確執今日を限りの戦ひと。フシ入亂れてぞ斬結ぶ。地色未だ勝負も決せぬ内。北條江馬の太郎義時。緋威の胴丸に星兜を猪首に着なし。悠々と立出づれば。紫裾濃の鎧を着し。和田新左衛門の尉常盛。コハリ負けじと進む敵味方。床几にかゝれば床几にかゝり。弱身を見せぬ勇將猛將。ナホス今ぞ手詰と軍勢も。フシ息を閉ぢてぞ控へ居る。地色北條義時詞を和らげ。詞和田殿には士卒の費を厭ひ。勝負を一時に決せんとの望み。尤もさこそあるべき事。イザ天運に任せんお立ちあれとあひしらふ。ホオ、潔し面白し。御邊藤澤四郎と心を合せ。齋姫を嫁らんと思ひ付かれしが家の滅亡。イヤそりや貴殿の事サ。入道がお蔭を蒙り。我君の聲にならんとは野太し。北條がある内思ひも寄らず。和田がある内存分にさうかと。コハリ意地と意地を立て合ふきつ先。ナホス斬りかくれば受流し。突けば開き。打てば拂ひ。手練を盡す互の妙術。フシ既に危く見えける所に。地色暫しノノと聲かけて。阿佐利の與市義遠。荏柄の平太に腰繩付け。引立てて駈來り。戦ふ中を押分けて。詞ヤレ早まるまい御兩人。方々が望まるゝ齋姫は。是なる平太に殺され。今は此世に亡き御方。争ひ勝つたとして詮なき事。急いで姫君の敵首討つて胸を暗らし。双方陣を引かれよと。地天下の騒ぎを悲しみて。在

柄に最期を極めさす。フシ忠義の程ぞやるせなき。地色心を感じ和田北條。進みかねしを荏柄の平太。怒る眼に涙を浮め。詞へエ浅ましや御兩人。三老職と言はるゝ身が。齋姫の艶色に迷ひ。一戦に及ぶとは武名の穢れも思はずか。争ふ元を失はば。邪氣執念もあるまじと。地痛はしながら姫君を討奉りし此平太。刻んでなりとも腹を癒て。兩家の和陸頼み入る。申す事も是限り。サア首取つて給はれと。座を占むれば。北條義時。詞オよい覺悟。サア常盛。汝が執心かけし姫の敵。急いで平太が首を取れ。辭儀に及ばぬわれ取れ。取るぞよ。地取れよと詰めかける。阿佐利の與市聲をかけ。詞荏柄の平太を手に渡し御存分に致すから。兩人共姫君へ愛執残す事なきか。地性根を定めて討ち給へと。云ふに義時打ちうなづき。詞假令姫君此世にあるとも。六道四生の迷ひ者化性の者よナウ和田。おんでも無い事一旦討たれし齋姫。若しや都へ生れ出で。爲氏殿に添はゞ添へ。それこそ幽霊其時に。又鳥臺持つて出でよ。地此の世の暇を取らするぞと。振上ぐる太刀の蔭コリヤ待て和田。詞與市が志の此科人。切先争ふ眞中へ渡したからは二つ割り。首は其方へ胴は此方へ。まんがちさせぬサア討てと。地平太が上帯確かと取る。オ、軍場の血祭。是見よやつと飛上り。はつしと打つて打落す。兜ばかりが地に落ちて。無事な體を北條引退け。詞和田が胸中顯はれたり。軍勢引けと呼ばれば。地和田も同じく聲をかけ。姫に執心なきからは皆入道が讒言よ。詞此常盛を亡ぼして。謀叛する氣と言つたぞや。貴殿も我を亡ぼして。天下を奪ふと言つたぞや。然らば先君頼家の。姫遣らうとの上意も偽り。地それよとと打解けし。兩家の和陸に阿佐利も勇み。平太は元より姫の事。一埒したる嬉しさはフシ天へも上る心地なり。地色かかる所に思はずも一叢繁る森の内より。耳を突抜く鉦太鼓。時をどつとぞフシ上げにける。地色スハ何者ぞと見る内に。藤澤入道馬上に跨がり聲張り上げ。詞ヤアノそれなる和田北條。耳を浚へてよつく聞け。銘々が威勢争ひに鎌倉を騒がす條。實朝卿以ての外の御機嫌。急ぎ兩人ども誅せよとの御意を受け。某親子向うたり。恥を思はゞ腹を切れ。如何に如何にと呼ばはつたり。地シヤ愚人夏の蟲。火の中へよう來たと。阿佐利北條和田荏柄。拔連れノ切り

かくれば。何かは以てたまるべき。一先づ引けと森陰に。どつと返せば餘さじと。フシ息を繼がせず追うて行く。地江戸斯くとや誰か告げたりけん。阿佐利が女房板額女。赤地の鎧に鉢巻しめ。好む所の大長刀。右手の小脇に搦い込んで。フシ飛鳥の如く駈來り。地色左手を屹と見渡せば。矢叫びの聲天地に響き。戦ひ半ばと見えにけり。詞ヤレ嬉しやまだ軍は眞最中。地憎しと思ふ坊主め親子。觀念さしてやらうぞと。駈行く向ふに隠し勢。鞠子品川足柄六浦四人は名に負ふ古今の勇士。板額御前を討取れと。四方より追つ取巻く。シヤ。詞いとらしい若殿輩。獨りの女に四人の。お敵は腰が張るけれど。大きな形ていやとも言はれず。お腹へ乗せる其代り。此長刀へサアごんせと。地持つたる得物の大長刀。受けつ流しつ水車くるりくと振廻し。爰に追詰め彼處に追ひ。火花を散らして。三重へ戦ひしが。地色暫時の間に四人の者。フシ一度に息は絶えにける。地色猶もむらがる軍勢を。一人宛はまどろしと。長刀打捨てて手を擴げ。多勢の中へ飛びかゝる。女天狗の女郎坊鼻の低いが難ばかり。目よりも高く差上げて愛宕山の土器投げ。はらりくとフシ投げ散らす。地森の内には和田北條。爰を最期と切立つれば。數多の軍勢皆ちりんと。藤澤入道親子の者。一先づ本國藤澤へ。引けやくと下知をなし。馬の鼻を立並べ落行く所を板額女。待設けしと物陰より。飛出て尾筒をしつかと取り一方車に引廻し。中に立つたる女の古木。入道いらつて聲をかけ。詞コリヤくと四郎大力とは言ひながら高の知れた女武者。鎧に障泥打當てくと一鞭くれて乗出さば。女が體を引裂くか腕を兩方へ引抜くか。二つに一つは知れた事。手綱弛めて乗出せと。地下知に隨ひ駈出すをどつこいと引止め。詞アラしをらしのお指圖や。此方衆二人のお首をば。大盃に掘り直し。夫阿佐利と仲直し。ざんざんざつと渡せばよし。さないと愛目これ見よと。地金剛力士の力足。乗手もさすが馬上は得たり。どうくと乗出せばきりくと引戻す。駒は四足を踏固め。女は一足ふみ占めくと。大地を踏抜く其響き。地震雷一時に。鳴出す音も。フシ斯くやらん。地色板額寄つて左の方。四郎が乗つたる栗毛をば。尻居にどうど引据ゆれば。馬は前立ち乗手は逆様。落つると其儘フシ乗代

り。地色一鞭當つれば流石は名馬。すつくと立つて高嘶き。南無三寶と藤澤入道。眞二つにと抜きかざし。討つて掛ればひらりと外し。打物の腕引摺み。持直す手もあら金の。熊手に引つ提げ引明くれば。落馬の四郎は起上り。親討たせじと飛びかゝるを。是も同じく引つ摺み。鞍の前輪に押付けて。片方は差上げ片方は搔込み。詞藤澤入道親子の者。生捕つたりと地呼ばはりの。聲と等しく和田北條。阿佐利荏柄も駈來り。是を夫婦の仲直し機嫌直し色直し。今日の手柄の大將軍。やつぱり其儘入道親子も其儘々々。御前へ引いて我君の。鏡にかけて天照らす。神の御國の仕置者。納まる御代の験ぞと悦び。勇み立歸る實に。神國の道直ぐに。源氏の末は萬々歳。目出度かりとも中々申す。ばかりはなかりける

中田舎御本誌の巻頭には、中田舎の地理的状況と、その歴史的背景が詳しく記述されている。この地域は、古くから交通の要路として重要な役割を果たしてきた。また、この地域には、多くの名産品があり、その生産と流通についても詳しく記述されている。また、この地域には、多くの神社や寺があり、その歴史と文化についても詳しく記述されている。また、この地域には、多くの名産品があり、その生産と流通についても詳しく記述されている。また、この地域には、多くの神社や寺があり、その歴史と文化についても詳しく記述されている。

河七原條 釜淵双級巴

河七原條の釜淵双級巴は、この地域を流れる重要な河川である。この河川は、古くから農業や漁業に重要な役割を果たしてきた。また、この河川には、多くの名産品があり、その生産と流通についても詳しく記述されている。また、この河川には、多くの神社や寺があり、その歴史と文化についても詳しく記述されている。また、この河川には、多くの名産品があり、その生産と流通についても詳しく記述されている。また、この河川には、多くの神社や寺があり、その歴史と文化についても詳しく記述されている。

河七 釜淵 雙級 巴

河七 釜淵 雙級 巴

作者 並 木 宗 輔

地唐土にフシやさしき名をば。付きたるは。緑の林白波と。オクリ和言。唐音變れども變らぬ國のあれ鼠。石川の五右衛門とてもとは岩木の惣領なれども。河内の土民に育てられ農作きらひ大小を。好む鎧のフシつまりより。好まぬ事に旅姿。オクリ笠で。日の目をふせげども防ぎかねたる口の端に。フシ所離れて何國へか。ギンオクリ生駒の。山の山つづき。鬼取よりも恐ろしき。摑む心のフシ鷲の峯。地麓は小川いがみ川。地曲りくくて身の上をそれと沙汰せじ佐太の森フシ牧方近く着きにける。地色五右衛門暫く立休らひ。詞ハア、美豆野御牧に。鹿狩があるかして多くの勢子の聲。羨しやなあ。地我も武門の家に生れながら。如何なる事にや三つの時より捨てられ。百姓の家にて人となり。鋤畝よりも大小と心は一騎當千でも。詞人の物を我が物に。すれば所を追出す。地都て別れし妻や子に逢はうと思ひ是迄は出ごととは出たが。詞先づ北國へ行て働かうか。東國方がよからうかと。地取つつ置いつの心は那智黒。磨きかねたる性根なり。地色かゝる所へ何國とも逸矢一筋飛び來り。小松の枝にはつしと立つ。はつと五右衛門打鷲き。此藪垣のあなたに鹿狩。さては逸矢か長居はならずと。行過ぎしが立留り。何か暫く思案して立歸りて彼の矢をば。引抜き取つて足早に。フシ來た道後へ駈け戻る。地色狩場の方より鬚奴息を切つて馳せ來り。逸矢尋ぬるろく眼。其處よ此處よと草叢を捜し廻るフシ跡よりも。地色友傍輩が息やすめ。煙管くはへて。コレサ是非内。詞何をきよろしくしめぐる。お仕着せの襦はもはや蹴込んだか。コレサく。はてこな者何落して何尋ねる。イヤ何も落しはせぬ。若殿のお矢が知れぬ。汝も共々尋ねてくれ。それが尋ねに及ぶ事か。若殿のおやは都三位中將様。手前のお屋敷へ御齋

子にお出でなされ。今の親なら我々が旦那。ハレ狼狽者め何馬鹿つくす。見えぬは鎧のお矢さ。かぶらの親なら大根の事かと。地どんな聞人と口下手がフシ争ふ所へ。ハルフシ國の世繼の。若緑。地まだ十六の角丸。跡に付添ふ諸侍。御傳役の當馬を始め。御休息の其間風景御覽と床几を直し。フシ傳き申せば。地若殿は逸矢の見えぬに御心を痛め給ひ。詞いかに方々。昔義經八島にて。弓を浪間に取落し。小兵を敵に知らせじと海へ飛入り取返し。恥辱をかくし給ふとや。地我も其矢は惜しからねど。里の農人拾ひなば腕固らずと笑はれん。面目なやと年よりも恥を知つたる御一言。フシいづれも。感じある所へ。地石川五右衛門老母と見えし手負をいたはり。物哀れに打萎れ。ちとお願ひと間近く寄り。手をつかへ頭を下げ。詞某めは隣國和州浪人。身負に迫り一人の母を伴ひ。都方へ助力を頼みに參る此道。何者の業にや。遠矢を射かけ。母が肩先を射抜く。早速抜き取り保養致し候へども。地次第に弱る老の急所。せめて息ある中に敵を取つて見せ申したく。心は彌猛にはやれどもいかなる者のわざとも知れず。詞御弱年なれども。此國の太守と見受け御訴訟申す。あはれ御威光を以て御詮索乞ひ願ひ奉る。地色則ち證據は此一矢と。差出す矢こそ最前の。射損じ給ひし白羽ぞと近習外様も打驚き。若君はつと思せども。さすが一國一城を治むる器量備つて。其矢是へとお手に取り。詞敵を顯し母の怨を報せんとは。ヲ、天晴の志。最前逃げ行く鹿を射損じて。過せしは某よ。地イザ立寄つて遺恨をはらせ。相手になりて取らせんと。さも潔く宣ふにぞ。人々手に汗握るばかり。フシ事こそあらんと身構す。地色五右衛門御顔つく。詠め。詞梅檀は二葉と申すが。ハアア御威勢といひ御器量備はる御一言。見る影もなき素浪人が詞を立て。地色相手に成つて下されんとは分も立ち心もはれ。お恨申さんやうもなし。詞コレ母人。今のをお聞きなされたか。敵といふは此國の城守。我々しきが相手とは勿體なく恐れあり。地言ひがひなき悴を持ち。貧苦に迫る其上に。あへない最期とさぞや無念に思されん。詞せめてこなたの心晴しに。冥途黄泉のお供を致し。死出三途を負ひ奉らんそれで腹をみてたべと。地座を占め覺悟と見えければ。若君驚きアレ留めよと宣ふに任せ。御

傳役の當馬之丞つか。と立寄り。詞ヤレ逸り給ふな御浪人。御心底尤もなれども。見れば僅かな淺疵。保養を加へ給ひなば。よも命に別儀あるまじ。生死も知れぬに追腹とは近頃愈忽と。地言はれて暫く差控へ。面目なや其保養致す方便があれば。相果てうとは申さぬ。詞今日を立てかね。母を他門へ預けに參る程の儀。何とて介抱フシなるべきや。地色さあればとて現在親の今は手痕。他所に見なしてゐられうか。心底の程御推量と涙にふるふ。フシ聲音に泥み。地色御用金一包挾箱より取出し。詞近頃侮りがましいが。貧苦に迫るお物語お笑止に存じ。母御の手痕養生代。地些少なからと差出す。詞ヤレ情なき御差配。身不肖なれども以前は懸鞍にも腰を掛け。鍔鍔もつかした某。金銀を貪れば斯様に身負は仕らぬ。お眼識が違ひました。地近頃仁體に似合ずと立派な詞に猶押返し。詞そりや一概の御了簡。一國の掟にも。過料を以て誤をゆるす。是則ち若殿の。誤をふせぐ過料金。申さば僅か五十兩なれども。若殿は堂上方より此國へ御養子。某親の名代としてつき來り。まさかの時の御用にもと貯へ持ちしお枕金。則ち金役の名判かけ屋の極印。地さもしき金も出所は一天の君の御座所。堂上方より出でたる金。御拜領も同然。詞一つは若殿のお心も休めるため。御受納あつて給はれと。地事を納むる詞を幸ひおつ取つて押戴き。詞拜領とあれば身の面目。有難しと受納致そか。ハテそこに御遠慮無用。但し些少なかな。コハ勿體ない。左様なれば大悦。地色只此上は老母の介抱專要と。立別るれば若君もコリヤ。浪人。詞我が誤を償ひしは事穩便の爲なるぞ。汝が力と思ふなど。地仰かしこき道草や。フシ露踏み分けて出て給へば。地色當馬之丞も心得ぬ浪人者と見ながらも。殿の御名を大垣の。内に籠めたるいかど崎。オクリ目かどをへ付けて。フシ立歸る。フシ後見送りて。地色五右衛門は金懐に取納め。あたりを見廻し手負の傍。立寄つてコリヤ婆。詞首尾はよいぞ早起きると。地言ふよりむつくと蚤取眼。目を光らして。詞お侍様味ようしやました。どれ分口。地下はりませと手を出せば。ヲ、大儀代取らせんと。鳥目貳百投げ出し。必ず外へ沙汰すと言ひ捨て行くを引きとどめ。詞コリヤ何でえすぞ。五十兩の割前を。どてまたとはヲけうこつ。お目出

たいを圍うても是程は暖る。心よう寝てゐるを矢の根で肩先突き破り。目の眩ふ所を金々と。地金で性根をつけさせ。俺がするやうにせいなれと。成つてゐたので五十兩。茄子わけでも有りやうは。痛い目しただけお負てえんす。詞これなしの目くさり銭。地いらぬでござんとフシ蹴返せば五右衛門むつとし。詞ヤイ乞食婆め。菰を脱して下著を着せ。酒くらはして血走せ。腹ほてさした大きな貨。まだ其上に五十兩の扱ひ金半分取るとは。テモ横着な老耄め。イヤ人に疵付け其貨を。一人して飲まうとはテモ恐しいお侍。我が。こなたが。おのれがと。地詞あらして割り打ちを。やらじ取らんとフシいどみあふ。地色婆は初手より物だくみ。一味を拵へ置きたるか。小屋の者共皆来いと。呼る聲に五右衛門も南無三寶と飛びかゝり。取つて引寄せ心もと。ぐつと突込みフシ一えぐり。ヤレ人殺しと最期の大聲。餘さじ遣らじと乞食仲間。てん手に棒杖釘打竹。騙りひろいだ侍を。叩き萎せぶち殺せと。喚いてかゝれば八方微塵論に及ばず切りなぐる。一方禦げば一方から。群りかゝるを立割。梨割唐竹の。斜に殺がれて逃ぐるもあり。村の番太も役人も。加勢をすれど叶はゞこそ。秋の木の葉。と散り失せて。残るは石川鐵石。フシ五右衛門。地騙り取つたる五十兩。小判の耳より人の口。萬々兩とも言ひ囁す。千が萬とり百が千とり。五十歩逃げて百歩をば。飛ぶも一飛び一息に船場を。キホヒ指。してぞ三重へいそぎ行く。二上り歌里は名高き。ギン都の富士と筋向ひ。色をたてぬき島原三筋。よみのこんだる。ナホスフシ遊女町。地爰に流るゝ瀧川が今日浮草の根引とて。常より早き揚屋入。おくる遣手の鼻さへも。フシ燕尾屋にぞ入りにける。地色主の傳六忙しげに。詞エい瀧川様が待ちかねます。夜前人を上げます通り身請の埒をなされんとて。平様はお國より昨日大坂迄お着き。お藏屋敷の御用をしまひ。すぐに夜舟で上らんとのお飛脚。それ故お前の親御の方へも。今朝早々から人走らせ。是もやんがてお客も追付。すりや肝腎のお前の方へ。使業では心元なく。ぢきにお馬と出かける所。お顔を見たて。先づ落着く。サア〜奥へイザ奥へと。たくしかくればヲ忙し。詞今朝から早うとお使なれど。昨夕聞いて今日の事。地色親方への附届傍輩衆との暇乞。何かに隙入り遅な

はつたら免してと。ねぢられてイエ〜。詞遅い事はござりませぬ。呼びましておけとの御狀所をひよつと間違うては私が無念と。お目玉を貰ふがいやさ。堅苦しい田舎侍。地町の粹とは違ひますと。言へが遣手がヲそれ〜。詞廻りがようでも揚餞の外。一文散らさぬ吝ん坊。後の登に前垂の染賃いうて見たれども。いつかな事すつとこなで。お歸り。地あんな吝い侍は。島原へ出かけずとも。皺腹切つて死んだがよいと。識れば亭主がコリヤお杉。詞あの氣でも見ん事身請今日まんざら無手でもあるまい。なんぼ吝くとびん水入の。そこらは鼻が口車。地廻しかけるぞあてにしや。ヲツトそんなら川さまと圍の間で飲みかけう。執成いうてくれなされ必ずや傳六さん。忘れまいぞと念押しで奥へ入ればヲ、いかにも。萬は我等呑み献立。しまうて取らんと傳六は臺所の。フシ板本に。ヤアをいとこ鱈冷し物。何から正銘房信の。薄刃追取りちよき〜ちよつきりきり〜切り刻み。フシ人の氣をとる料理かた。地色酸いも甘いもくた者が知つて付込む瀧川が。親の悪者三三五郎兵衛。娘の身請をあてにして伴ひ來る負せ方。置土の九郎次とて低みを埋めて歩をわせる。日廻し金の忙しなうコリヤ五郎兵衛。詞金を濟す當があると。島原三界此様に。引きずり廻つてどうするのぢや。見ん事われ濟すかよ。ハテ濟さいてよいものか。豫て咄した娘が身請。今日埒する筈。甘雨や卅兩は祝儀というても取り易い。地利足揃へて急度返辨。氣遣ひのきんの字に。長點かけて貰ひましたよと。地な詞に九郎次もにつこり。詞ヲ、さうなうては叶はぬ筈。銅金の根城損かけうとは思はぬ。地間違ひのないやうと。念に念おす詞を返し。詞ハテ高の知れた貳拾兩。穴一倍はつても濟めかねぬ。どんどと仰しやる事はない。地不承ながらちつとの間。爰に待つてと燕尾屋の。中戸口に九郎次を待せ。つゝと通つて。詞エ傳六様それにござりますか。今朝程はお使。姉めが身の上段々お世話。首尾なりまして私も。金の緒に取付きます。サレバ〜。娘御が出世の片付。其許にもよい入前。地瀧川様も今來てなり。お客も追付見えませう。見ればお連もありさうな小座敷が明いてある。酒でも參つて待たしやませ。詞申し表の。此方へ入つてお休みなされ。地然らば御免と。フシ内に入る。地五郎兵衛

も落着顔。詞娘に逢うて待合せお客にもお目にかゝり。ちよつと咄す用事もあり。地其事に付きこの連衆。臺所にありや結句お邪魔。片脇の小座敷をそんならいつそ御無心と。九郎次を伴ひ煙草盆。フシ提げて一間に入りにけり。地色はたゞ。ハルフシ心の外や。瀧川に戀ぞ積りてふちかたを。金に束ねて身請する。平の平平常ならぬ連に危き石川五右衛門。フシ跡に引添ひ入来る。地亭主は矢庭に飛んで下り。そりや平様の御登り。御出の御筋。先づ川さまへ知らして呼出せ。ヤレ目出たいと。鳴りまはれば瀧川もフシ遣手引連れ立出づる。詞これく御亭主。イヤサあまり其様に仰山さりと迷惑。馳走になりには參らぬ。瀧川殿を請出すばかりの上京。扱此お連は牧方より同船の御浪人。夜がな宵とお咄相手。殊に船中の間船上りより是までイヤハヤ仰山御懇意。お心遣ひの返禮旁々。ひらにとお供して罷越した。地御酒一つ上げておくりやれと。挨拶すれば五右衛門も。態々詞をやはらめて。詞こりや御亭主初對面てござるよ。拙者は此近郷にそといたした浪人者。見らるゝ通り長髪。養生の爲大坂へ罷越し。夜前歸る乗合にて四方山の咄がしみ。連があれば三里とやら。お誘ひに任せ立寄り申した。承る様子がお傾城を請出さるゝ由。何とやら羨しい。歴々の御身上に宵り。地珍しい廓酒。病中の憂さばらし一つ食べて歸ろかい。詞コレハく有難いお詞。ガ此廓始つての燕尾屋。初對面とはちとお恨。御長髪ではござれどもお達者さうなお産付。盗人に見せても御病人とは申すまい。地先づ平様と奥座敷へ御同道。それお盃御膳の用意と。騒げば平平ア、是さく。詞其心遣ひ仰山困り申す。かう參る道。かの藤の森にて一膳蕎麥。あなたも拙者も仕度は仰山よくおぢやる。夜食がほしくば乞ひ申さう。例の豆腐のぐつ煮に冷飯。イヤモそれが仰山御馳走。御浪人も病中とあれば食養生が肝腎。最前も言つた通り。料理食べにはるゝとは參らぬ。今日は君が身請の一卷。外の事は費へ費へ。先づ契約の金渡すべし。地小判といふ物見せうかと。猫に鰹の五右衛門が。鼻のさきにて二百兩取出して封押切り。詞先達て渡した手附が四十兩。今百十兩都合百五十兩。是て身の代買懸りの借金ぐるめ。地何かの作略皆濟とよみならべ。残りの金に又封しつかり肌につけ。

詞何さこれ川殿や。拙者は御覽ある通り。大切の金仰山出しての心中。其許にも金の冥利。我等を随分大切に。可愛がつてくれめせと。地いふも笑止さ瀧川は。フシいとど轉さ。増りけり。地色傳六は金受取り。詞いかにも是にてさりと落着。お金をわたしは親方へ。すぐに持參し證文取つてお渡し申さん。地こゝは端近お座敷へ。お連様にも御退屈。コリヤ女子ども。お銚子く其てうしに。乗つて身請の埒せんと。ハズミフシ勇み進みて出でて行く。地平平も機嫌よく何さま奥にてゆつくりと。打寛いて御酒飲べん。御浪人いさござれ。皆款待せと先に立て。跡に残りて仲居を招き。詞お身にちと頼み事あり餘の儀でもない。是の亭主が仰山馳走ぶるが肝にこたへる。肴には梅干生味噌がよいぞや。そなたが氣轉てついざつと。地いふに領く悪じやれ女子。詞アイくくそれ座頭と仰しやる。次手に舞子といひ捨て。地呼びに走ればア、是々と。留めるかひなき當惑の。フシ折へ出かける三二五郎兵衛。揉手して小腰をかゞめ。詞私めは瀧川が親。三二五郎兵衛と申す者。此度娘が身請をなされ。國へ連れてござる由。末頼みにいたす一人のかゝり子。一緒に引越し同道せんと存ずれども。急な事故跡より發足。それに就き方々の算用差引き委細は追つて。先づ當分入用の金三十兩。地御合力下されよとフシつまんだやうにいひ出せば。地色平平ぎよつとし。詞何ぢや小判三十兩。アノ只くれいか。瀧川こそ請出しに來れ。お身がやうな白髮親仁。請出しには參らぬ。それに何ぢや親だ。親が定なら樽肴で。歴きと禮もいふべき筈さ。無心いふ親いやだぞ。牛やら馬やらこちや知らない。アラ勿體ない。いやだぞ。くくくと。地七里結界跳ね飛ばされて。こなたも唾みの性根をあらはし。詞コレお侍。嫌がられても瀧川が親。娘を請出し女房にさはれば親の高家。國へいて大きな顔してかゝらにやならぬ。ア養うて貰はにやならぬ。イヤぞんざいなる棒手振め。あはれ國へ來て見らう。地ヲ、行て見せうと争ふ所へ。勇みにいさんで主の傳六門口よりかさ高に。詞サアく埒が明いて來た。コレく平さま。是が則ち川様の年季證文。右の外に一錢の掛り合毛頭無いと申す一札。出口への斷りも濟んだれば。地御勝手次第何時でも。手を引合うて大門をお出なされと。

事。騙してなりと賺してなりと。ならば縁も切つてほしい。呼出して済む事ならおつとまかせとかい立つて。女心に何の氣も。なくと笑ふとふりかはり。フシ勇んで奥へ走り行く。地色五右衛門は手を又へ立ちはだかつてゐる所へ。平は千鳥足。ちろくめかどは強き酔どれ。詞コリヤ御浪人様め。手のわるい。盃を差捨てに座敷を外いて何御思案。拙者を爰へ引擦り出してなんでえす。三二とやらさり荷とやらが。御挨拶なら嫌でえすと。地ひよろつく足元死骸に躓き。こりや何ぢやと吃驚するを抜打ちに。胸板かけて切付ければ。コハ狼藉とすらりと抜く。右の腕を肩口より打落されてうんとばかり。倒れ伏すをづだく。に斬ればそこらに流るゝ血汐。瀧川駈出てヤア是はと。いふ聲も出ずわなわなと。フシ顛ひ戦くばかりなり。地五右衛門鎮めてコレ。詞かうしてしまへば誰が見ても喧嘩。相手向ひの討果し。外へ難儀は少しもかゝらぬ。地合點かと呑込ませば。いかさまさうと胸落着き。ハツア有難や。忝や。命の親と手を合せ。後々迄も此事を沙汰遊ばして下さるなと。スエ頼む詞に。詞合點がいたか。こなたも俺も見ず知らず。いは他人のふりがかり。よその事でも切人は某。互に大事はいはぬづくとばかりでは氣も休るまい。爰が談合なんと氣遣げのない様にいつそ二人が女夫になるぢやあるまいか。すりや女房の親の科。夫が言はう筈がない。地氣が休つてよかるがのと。理詰は耳より傍に寄り。詞どうやら談合のなりさうな事。したがお前にお内儀さんはないかへと。地念を押されてイヤ。詞女房子もあつたれども。ちとした事で七年以前生別れ。今は鰥の一人住。地そんなら持つて下さるか。ヘテ持たいてはと蹴れて忙しき中にもひつたりべつたり。抱き締めたる縁結び。フシ深き妹脊と成りにけり。地五右衛門やがて平平が。死骸の肌へ手を差入れコレ。詞是がそなたの年季證文。地金は俺がと小判を引出し。押戴いたる目つき顔付。不審はねねは是申し。詞此手形は聞えたが。其金お前は取る氣かえ。取ることも取るとも。此金故に付きまるとひ二百兩を取る首尾なく。九十兩ではあはぬ仕事。ヤアすりやお前は。コリヤ男の悪事を女房の口から。言ふな黙れと肌につけ。ヤレ喧嘩よといふ聲に。家内が騒げば近所となり。どさくさまざなれ夕まぐれ。

ぐれの來ぬうちサア來いと。走り女夫が手を引いて出口へ。こそは三重へ駈けりゆく

中 之 卷

地武士は人目に高楊枝柳の馬場に浪人の。表美々しく内證は。女房と見えて下女ぶんの。連れ子をすぐに丁稚ぶん去年生んだる子のあひが青田に變る夫婦仲。フシ世に睦じく暮しける。地色主は近所夜咄しに出行く月も四つ過。妻のおりつは乳のみ子の宵寢の膝を休めんと。表間近く立出で。詞コリヤ五郎市よ。坊が枕を持つて來い。腕が抜けるヲしんど。地ころりさそうと下におく。兄は十一年だけに申し母様。詞旦那様もお留守。表は締めてござるかや。ヲ宵から錠をおろして置いた。昨夕もお客で夜通し。地今夜轉けたら他愛はあるまい。何時お歸りあらうも知れぬ。それ迄おれは爰に假寢。詞そなたは奥にお寢間もして。煙草盆に火もいけ。裾に物置き轉けてみや。地ろくに寢る時起そぞと。いひつけやつて乳のみ子の寢んねの伽のとろくも。二夜越しの草臥に。オクリ思はずへ深くフシ寢入りける。地色時は亥も過ぎ子にうつり牛より黒き夜盜の一族。石川五右衛門三上の百助。足柄金藏。片田の小雀。小鮎の源五郎引手して。此家をめがけ門の戸を。しやくれど堅めし錠。五右衛門制してさなせそく。詞強きを破るは變のもと。戸尻の壁を切破り。自由をさせんと兩双の双。地ぐつと突込み引廻せば。練磨を得たる手の内の。ぎしつく音もあらばこそ。コハリ三尺四方に切破り。内を覗ふ竹飄箆。がらつかすれどフシ寢入りばな。地色とつくと見すまし小聲になり。詞首尾は上々さりながら。心にくきは見かけと違ひ。見込のなき内の様態。殊に女が枕元。守り刀を置いたるは。浪人者と覺ゆるぞ。フシ油断して先とられな。地小鮎の源五郎先にたて手に合ふ物を持出せ。あながち重きを徳とすな。輕きといへども錠前の。ギンおりたる物にはこうみあり。寅の刻より一陽萌す陽は顯はれ陰は隠る。今は丑三つ時分はよし。時刻うつすな急げ。詞それく疊の縁を踏み。上敷につまづくな。地ハズミ驚の。足どり

それよくと透し詠めて下知をなし。我は女が枕元目を。さまざま一討と。鏝元くつろげ待ちかけしは危くも又恐ろし。ハルフシ教に従ひ。徒黨の面々。江戸着替の半襦袢。金引出よと私語いて持出づれば。ヲ、出来いた。跡は某見廻つて引包めて立歸らん。お身達先へと追歸し。一人残つて奥の間へ。オクリ不敵に。何も又忍び行く。ギン正直は。ハルフシ子供にたとへ。目にたとへ。地寝足ればいつと時知らず。目をさましたる稚子は。本フシ添乳の肌を這ひ出でて。機嫌遊びのフシ折からに。地色五右衛門葛籠背に負ひ。出づる姿が氣に入りしか。手招き足ずりにこくとフシわらふ笑顔の愛らしさ。地色人を剥ぎ取る邪慳にも。ハテしをらしやいたいやと。思はずも立留り。我七年以前都追放にあひし節。離別せし女房に預け置いたる稚子の。面ざしにさも似たりと。子を持ちし身はよその子の。愛に引かれて愛しかり。ヲドリ拍子何がお氣參つて。てうちしやる。ヲ、ヲ、ようしやる。笑ひ佛に笑はしよしと。地我を忘れて餘念なく。背負ひし葛籠振廻し。ヲドリ拍子つら負うたが可笑しいか。こはい伯父が嬉しいかと。地踊る疊の足音で。添乳の母は飛んで起き。詞ヤ汝や何者ぢや。何處から来た。地盗人さうなと我子を一問へ押遣つて。守り刀を搦込めば。不敵の五右衛門胴をする。詞俺や何處からも来ぬ。外から来た盗人ぢや。聲立つると捻ぢ殺す。ヲヲ殺さるゝとて主の留守。白紙一枚盗られても言譯たぬ。背負うたつら置いて行け。イヤならぬ。地ならぬとは是ぢやと突つかくる。利腕苦もなく引摺み。詞おかさま。盗人にはひり。子を愛してゐると性骨。こなたの手には合ひ難いと。地双物腕取り顔見合せ。詞ヤ汝や女房のおりつてないかと。地頭巾を取れば以前の夫。詞五右衛門殿か。ホイ。地はつとばかりに胸迫りフシ心も空に詞なし。地色五右衛門も面目なさ。うぢくそろく片傍へ。背負ひし葛籠おろす内。主の浪人夜咄より歸る表の間の壁切つたは如何にと差覗き。様子ありげな内の體。そつと這ひ入り庭陰に忍びて様子を窺ひある。地色五右衛門詞も差足に。詞久しう逢はぬにまあ壯健で。そうして爰にはどうしてぞ。あぢな所て逢うたのと。地問はれて女房詮方なく。あぢな所であぢな出合ひ。顔見て私も胸がふくれた。詞ソレ覺えが

ござらう。都御追放の節。自らには暇の狀。五郎市は預けると。くれぐれのお詞。地大事と思ひ四五年も辛抱はフシしたれども。地色何するすべも女の手業。爲ん方盡きて此家の奉公。詞五郎市は丁稚ぶん。私はアノ子を生んでから。マア下女ぶんのがてら奉公。地それはさうぢやがお前は以前の氣もなほらずひよんな商賣。そうして今は何處にぢやえ。詞どこは久しう故郷へ歸つてゐたれども。物が見えぬと五右衛門と又してもどやをもむ。兄めが顔も見がてらと上りごとは上つても。都の内へは足踏ならず。やう／＼大津に足を留め。知らぬ呉服商賣より知つた小糠商とまあ手なれた事をしてゐる。是といふも子の無い故浮世壹分五リンの暮し。そなたに逢ふたら兄めを取戻し。外の商してみる氣。勿體ない事ぢやが此商賣にもほつと飽いた。五郎市を戻したも。ヲ、戻しませうさりながら。今は此家の旦那殿。親やら主やら義理ある中。其留守の間へ家後切。盗人殿が入られて。それが即ち父親で。五郎市を戻したと。私が口からどうもいはれぬ。表向から晝中に。迎ひにごんせ戻しましたよ。ハテこな人は。晝中に京へ来ると又むらへかまれる。旦那殿へは駈落したというて。今夜幸ひぢや連れて去の。イヤさうはなりません。ならざいつそ盗んで去のか。盗ます事は。サならずとどうぞ。インヤ。はて。なりませぬ。エ、面倒な女め。地五右衛門が連れ歸るに誰が黠を打つ。引連れて立歸るとッシ奥を目がけ駈入るを。地色主庭より飛んで出て。素首取つて引戻し。立塞ればおりつは吃驚ひよんな出合とフシ氣をもがく。地色五右衛門苛つて。詞ヤア汝は此家の主よな。俺が子を俺がてに連れ歸るを。地邪魔するかと。掴みかゝるを確と止め。有無をいはず引擔ぎ。投げんとすれども此方も曲者。身を躲して振解き。取手柔道の早業も互に外し潜りある。傍ではおりつはあぶくと。いづれを押しづれをば制し止めん様もなくフシうろつくばかり急ぐばかり。地色後は互に髻髪掴み合つてどつかと坐し。息も切れるれば主は聲かけ。詞それ女房水一つと。いふに此方もコレおか様。慮外ながら俺にもと。地こはれて胸は氷水フシ解けぬ思ひぞ切なれ。地色主は怒の聲あらゝげ。詞汝盜賊今宵ばかりと思ふかや。いつぞや美豆野御牧にて。騙り取つたる五十兩。多

くの人を切殺し立退いたる重罪人。地縄掛けずにおかうかと。思ひもよらぬ一言に。五右衛門ぎよつと持ったる髻
 挽ぎ放し。詞ムウ。其譯知つた貴殿は何人。ヤ何人とはと抜き放すマ、マ、く待つた。其金は扱ひ金。騙のわ
 けを知つたは如何に。ヤア吐かすまい。割内やらぬ腹立に。一味の非人が訴へ。某こそ其時取扱ひし侍當馬之丞。見忘
 れたか愚人め。騙り取られし越度により。知行に放れ此所に逼塞。地汝が首取り再び歸參の願ひをする。フシ覺悟ひ
 るげと詰寄すれば。詞ヤレ逸るまい。尤もく。何と其金五十兩。お戻し申そが御了簡はあるまいか。ヤア狼狽者め。
 其金は若殿のお遣ひ金。則ちお里の金役人。岩木兵部の名列をする。かけ屋の極印明白。外の金で事すめば。其時調
 へ返納する。今更拵へ首代とは。卑怯者めと言はせも立てず。イヤ今更ならず。其時の金。返辨申すと懐中より。地取
 出し投げ出す五十兩。包の封印其儘に嗜み持ちしはフシ不思議なり。詞ムウ合點のいかぬ。扱は汝は榮耀にひろく盜
 賊な。貧苦に逼り盗みせば。今迄此金持ち貯よう筈はなし。地重々の科人と。極付けられて眼を瞬き。詞榮耀にす
 るとはお情なし。地心ある御方と見こんで恥を申し申す。詞必ず他言御無用。もと某は。腹からの盜賊にもあらず。
 則ち其金の上包に。金役岩木兵部と。判形すゑたは某が實の親。ヒヤア。ヲ、おりつも此儀は知るまじ。いかなる事に
 や三つの時。此一腰を相添へ。伏見の野はづれに捨てられ。河州石川の百姓に育てられ。人と成つて都へ上り。心悪
 黨ゆゑ邪人仲間へ入込み。意に所を追拂はれ。又故郷へ歸れども足も留らず。御自分を騙りしも。何とぞ其金にて
 武士にも思つた時は本心。騙り了せ上包をよく見れば。岩木兵部と父の名銘字。封じ目にしつかりと魂の判形。
 地いかに盜賊すればとて。現在親の魂を。切裂く事も勿體なく。幾度か手は掛くれども。ギン名判に恐れ只今迄。フシ堪
 へ堪へて貯へし。地色佛體受けし人間の本心實は變らねど。貪慾邪智の上曇り。はれるは臨終今はの時。それ迄待た
 ず當馬殿。本知にかへる種ならば首とり給へ惜しからずと。近付き寄りて差付くる。侍勝の根性に。フシ盜賊さする
 は惜しかりし。地色始終を聞いて當馬之丞。詞ムウ岩木兵部殿の御子息。雅き時は友市とはいはざりしか。ハテよく

御存じ。ヲ、存じた筈。拙者は江州より兵部殿方へ養子に参り。若殿に付き美豆野お館へ奉公。ム、すりや親々はひ
 とつか。いゝて見れば行合ひ兄弟。アノ御自分と。ライノ。地是はとばかり手を打つてフシ呆れ果てしが。地色當馬之
 丞何思ひけんすつくと立ち。刀すらりと抜放し。手水鉢に打ちつけ。打ち折つてからりと捨て。詞誠に鳩に三枝
 の禮あれば。鳥に反哺の孝あり。盗みはすれど親の事。忘れぬ性根あつばれ。其心に免じ當馬之丞武士を捨て今日
 より町人。ソリヤ何故な。なぜとは。武士を立つれば御自分の首取らいて先知へ歸られうか。親兵部殿にも。御存生
 にて折ふしは仰せ出され。此友市は何とした。太刀錆びになる相ありしが。佛神の加護あつて。人並に生立ちしかと。
 老體の病身は苦になされず。地御目の内に涙は幾度。詞何とぞ本心に立歸り。御健勝の内御對面あられよ。地性根の
 直らぬ内は某とても音信不通。お歸りあれこれ限りと立上れば五右衛門は。親の堅固の嬉しさと侍捨てゝの恵みに
 退つて三拜。フシおりつも嬉しく。地色永居は無用と引立つれば。小腰折り。折あらば。此お禮をといふしほに。差
 詰めたりし門の戸を。開くるおりつは事なき内とフシ心急きたつ主は見ぬふり。詞コリヤ。女房。盗みにはひりお
 めおめと。手ぶりで去んでは本意なかる。何によらず望の物やつて去なせよ。ア、申しそりやあんまりお情過ぎる。
 見れば諸色も餘程不足。ヤレそれは高の知れた浪人の貯へ。何惜しからん。まだ其外に。心のなほる絆足。二人が中
 の。ナ。子盗み。地さして去なせいと氣を付けられてハットばかり。やがて五部市呼出し。フシ手渡しすれば。いとど
 尙嬉しさかぎり涙ぐみ。重々の御恩何として報せんと。手を合すれば其恩は此。子盗みを元手とし。商賣替へて見せ
 られよと。深き情の教訓も。縁にひかる。友綱や末は。首柳首綱と。知らず伴ふ。ギン子故の闇明け方。近く三重別
 れける。ギン針に引かる。糸筋や。廓を。出でて五右衛門が妻と定まる瀧川が。素人の業を仕習うて。フシ洗濯物
 の縫く。フシ忙しき中へ五郎市を連れて戻つて繼合す。親子の中のをぶくは。絹の表に晒裏。フシ肌つき悪く
 暮しある。地色來る人毎に悪者の。三上の百助堅田の小雀。遠慮もなくずつと入り。詞エお瀧さま縫仕事。御精が出

ますの。コレハ二人づれてようこそ。主は晝寝。地何ぞ用ならいひ置いて。詞イヤ用というて商賣づく。コレ此小雀が在所。堅田の落鴈屋に嫁入があつて。しつかりと土産。躍りこむ相談に暮方から金藏所へ寄合ひます。扱と。雀よ。次手に今のをいぬか。汝いへ。ハテ言ひに来たぢやないか。そんなら餘の事でもごんせぬお瀧さん。昨日爰の五郎市殿が使に来て。今の母様のあたりが懇にむごい。わび言してくれて、如才のない言ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし。コレ、雀殿。憎うてむごうしませうか。サア、そこもあるてや。あんまり可愛いと胸愆がまじつて繼子憎みになるもの。ハテ異な事の挨拶。繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所へまで。地懺悔をいうて行く息子。あんまりかはゆうござらぬと。一蹴蹴られて道理々々。詞百よ。聞いて見ればおか様の尤もさうな。繼子憎むは世界の大法。とかく息子が腹借らぬが誤。公事はさばけた来い去のと。地差別知らずが燃える火に。フシ焚附かうて立歸る。地つらき親をば親にして。猶も機嫌をとる端香。愛想に汲んで五郎市は。しとやかに立出で。詞申し母さま。お氣が盡きやうと思ひ茶を入れました。地出ばな一つと差出す。はや小雀がいひしを根に持ち。詞何ぢや茶をいれたそりや誰が頼んで。そなたが飲んだ飲みあまり。口ふさげに持つて来たか。地アノ勿體ないなんの飲餘でござりましたよ。初穂を汲んで参りました。詞ム、初穂を飲まして。此母を追出すのか。飲めなら飲まうドレおこしやと。地挽ぎとる拍子に情なや。仕立てし布子にざんぷりと。かゝりや繋がる親子とて。フシあひ見る茶とぞなりにける。地色我が誤も子に嫁する。まゝ母性根を顯して。詞ヤイこゝな倉相者。代りのない晴着。地よう此様にしたなあと。取つて引寄せ太股を。指先強く二つ三つ四つめの紋のつかみ染。ナウ悲しやと五郎市は逃げ廻り手を合せ。誤りました今度から。嗜みませう堪忍と。フシ詫びる目元もおろゝ涙。詞又泣くか。地吠えるかと。聲はしたなきフシ折からに。地色人の女房の上水を飲みに廻る小鮎の源五郎。門口より差覗き。詞ハテこりや又親子喧嘩でえすか。性慾もない息子殿。地笑止な和郎と座を占めて。詞コレお瀧さん。繼子の世話をやかずとも。俺が言ふ様にならんせんかいの。

地人にばつかり思はせて。フシ氣強いお人と當擦る。詞又小鮎殿のじやらゝと。そんな機嫌ぢやないぞや。地あつたらら口にはお風。詞サア其風に實が入つて傍へ寄ると震ひ付く。機嫌なほしにちよつと爰をと。地手を取つて無理に引込む太股ふつり。詞アイタ、こりや繼子殿の相伴だ。地扱も手ひどい御馳走と。顔をしかめて擦りある。詞ヲ、よい氣味の。傍に告人のあるも構はず。地好んで痛いめなさるゝと上手ごかしを。コリヤなると。思つて何かな追従に。憎む繼子を取つて引立て。詞告人とは此和郎か。目離のないちよつぱり殿。地奥へ行て貰はうと。むごいなを馳走に。フシ蹴飛ばせば。地五郎市むつと目に角を。立てがひもない親の前。詮かた涙押隠し。オクリ泣くゝ奥にフシ入りにける。地サア見る人もなし聞人もなし。主のあるこな様に。いひかけるから命づく。首を先へ投げだそか。胸から下を受取る氣か。はずみ切つたお返事をと。フシしなだれかゝるを。そつと外し。詞夫五右衛門幸ひ宿にゐらるゝ。其通り申聞せ。地急度お返事致さんと。立上ればア、是と。詞をれいうて堪るものか。よいゝさうあるからは此方も意地づく破れかぶれ。御大切に思召すお配合の芥藻屑。いふ所へ行て申すぢや迄。地お暇申すと強請りかけ立つをお瀧は引留め。詞ソリヤこなたも同じ仲間。サア其仲間がいふからは慥かな證據。首投出してと申すはこゝ。惚れかゝるとそつこん火へ陥るも構はぬ氣。地色なんと一度か二度の事。ワツトいふ氣はごんせぬか。詞そんなら一度で大事ないか。半分でも忝い。幸ひ傍に人はなし。表を鎖してつい爰でと。地抱き付くを氣疎。それゝ親仁の足音。詞アイ、呼ばんすもうそこへ。地そりやこそ爰へ出て来るわと。威せばうろゝ狼狽へるを。無理に押遣り押出して。晩にゝと一寸のがれ。二寸延びたる鼻毛の小鮎。内儀の泥に酔はされて。フシ跡をも見ずし逃げ歸る。地色五郎市様子聞きながら。聞かぬ振にて奥より出で。詞申し母様。父様のお目が醒め。夕飯上ると仰しやる。地わし据ゑましよかと問ふも恐々。詞ヲそりやおれがませう。其代りに縫仕事取置いて跡掃いて。日暮れになつたら火を點し。門も閉め庭も掃き。地遣ひ水から風呂の水。いひつけずと汲んで置きや。子供遣ふもア、世話と。オクリいひ

つゝ奥へ入る影を。打眺めく、スエ恨み。涙にくれけるが。思ひまはせば我が身程。親に縁なき。フシ者あらじ。地色眞の母様ある時は父様に氣兼ねる。今又父様ほんのなら。母様が隔りて善き事しても氣に入らず。そと町より来る者まで見侮つて足にかけ。蹴たり踏んだり何事ぞ。此家にうか／＼暮すなら。まだ此上にどのやうな恐ろしい目に合ふも知れず。何國へなりとも逃げ行かんと。表をさして駆出でしが。ほんの母様の所は覺えず。どこを先途と立戻り。又駆出しては行く先の。あてのないのに引かされて。行つては戻り戻りては。巷に迷ふ稚子の。フシ途方に。暮れてゐたりける。地色五右衛門は寄合の。時分ならんと立出でて。詞五郎市よ。何して。地そこにと咎められ。イヤ何處いも行きやませぬ。お前は何處へと問ひ返す。詞ヲ、俺は寄合に。暇は入るまいつい戻ると。地いひ捨て行く袂にすがり。詞モウ今夜は何處いも。行かずと内にみて下され。地さなくば私も連れて行てと。おろ／＼涙の體を見て。思はずも打萎れ。詞何故さう言ふぞ仲間事。行かぬと何かと後の邪魔。地ちつとの間ぢや留守しやと。賺せど猶もしくしくと。フシ涙に聲もおど震ひ。詞と様。私はほんのかゝ様に逢ひたい。地去して下され去にたいと。泣き萎るれば五右衛門も。胸は張裂く思ひにてしばし涙にくれけるが。詞ホヲ、道理ぢやさうあらう。常から女房めが仕方。いかに己が子でないとして。朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大仰に。又しても打ち打擲。酷い奴憎い奴。もう引捉へ言はうかと。思へど胸を擦つてゐる。腑甲斐ないと思はうが爰をよう聞け。父はな。悪い商賣してゐる。今止めたう思へども。仲間事ゆゑ止めさせぬ。それをあの嘆めがよう知つて。睨見ての我儘氣まゝ。地今追出したらやら腹立ち。どんな事を吐さうやら。殊に彼奴が親は悪者。忽ち其方や俺が身に。難儀のかゝるが悲しさに。何事も堪忍する。詞子心にも聞分けて。了簡つけてみてくれい。眞の母にも他人が添ひ。今さら戻すも戻されず。地色其うちに思案して憂い辛い目をさせまいぞと。いひ慰むれば五郎市は。涙を袖で押拭ひ。詞父様の苦になる事なら。打たれても抓られても。堪忍してゐませう。地其代りには何處へござろと。早う戻つて下されと。フシいひつゝ猶もしやくり

泣く。詞ヲ、聞分がよいよ。惣別堪忍といふ事が人は肝腎。男と生れ堪忍のならぬは女房の間男。さては人中の面恥。拳一つ當てられてもそこは男づく。其外は皆内證。堪忍が即ち辛抱。地ちつとの間の留守。辛抱して持つてゐや。つゝ戻らうと。懇な意見ながらの言聞せ。それが小耳にとまるとも。知らで五右衛門寄合のフシ時分遅しと出て行く。地是非も涙に門をしめ。内の灯火庭廻り。いひ付けられた荒増を。フシ片付け廻る折柄に。地色お瀧が親の無頼者。三三五郎兵衛しらにせの。指先うごく鬚親仁門の戸たゝいて。お瀧／＼と呼ぶ聲す。五郎市扱は最前の。小鮒が來たと心得て。わざと其場を知らぬふり。フシ聞かぬふりして奥に入る。地色猶も忙しく叩くにぞお瀧も心ならねども。誰ぢや／＼と咎め出で。俺ぢや開けいは親の聲。又用無心か氣の毒と。思へど是非なく内へ入れ。詞日も暮れたにうと／＼と。地何しにおいてと尋ねれば。詞何しにとは。娘の所へ親の來るが不思議か。地あた面倒なと膝打捲り。詞いふまいと思へどいはぬが損。聞くうちぢや聞けお瀧。此中借つた二十兩。昨夕五三たてころりとしまひ。跡をつなく種が切れた。五右衛門は宿にか。まあ十兩か廿兩。借る氣で來た言うてくれ。近年見たがはやり出で。ア、胴も合はぬぞいと。地咄し出せば。詞ア、もう其咄聞きとむない。地小判の生る木もあるやうに。又しても無心。主の手前へ私も氣の毒。殊に今夜は留守。マア往んで下さんせ。詞イヤ往ぬまい。汝こそさういふ五右衛門は。金の生る木があるげな。毎晩々々甘い商賣。元手入らずの擲取り。ようごろが來ぬなあ。今夜も働きの留守ならば戻る迄待たう。むすめ。けん／＼言ふなやい。何にも知つてゐるぞいと。地底氣味わるき一言に。くわつと胸まで迫上し。詞コレ親仁さん。人の事でも大事小事。あじやらにも言はぬもの。いうてよければお前もの。京の島原で置土の九郎次を殺し。難儀に及ぶを五右衛門殿の。思案一つで事無うしまひ。親子共に恙なう。今日迄暮すは誰が蔭。地其恩を知つてなら苦口いはんす筈はない。金借る度にいたかはなせ。さう胴慾にはいはぬものと恨み歎けば喧しい。詞そりや有つて過ぎた事。今でも金を借せばよし。いやといふと此村の庄屋へ行て。夜の商賣いうて來る。地それとも五右衛門が心底次第。

戻る迄べん／＼とかうしてもゐられまい。寢所せい寝てゐよう。詞そんならどうでも逢ふ氣かえ。逢はずといつて庄屋殿へ行こか。サアそれは。なんと。地色ハテ寝て待つ氣なら此一間。寢所して上げましたよと。暗いをふせぐ明り障子引開ければ。詞ヲ、よい合點。汝も五つから俺が手じほ。いつ孝行な事もない。来てちと腰揉め足擦れ。嫌といふと庄屋殿と。地威し立てられ是非なくも。ハテ撫で擦りて濟む事なら。致しませうと伴うて。入るも疵持つ足の裏。オクリ篠原へならぬ。フシ藪垣の。フシ隔つる思ひに。五郎市は。小鮎と心得奥の間の。親の差添そこ爰と。尋ね廻れど知れざれば。勝手の戸棚を心ざし。捜し當りし修羅の一腰。そつと拔取り小脇に挿込み。おのれ最前蹴た意趣と。父の眼を抜く不義者め。たゞ置かうかと忍び寄り窺ひ聞けばお瀧が聲。詞申し。お前とわしとは因果な縁。切らうというても切られぬ。今にも夫が戻られては。意地づくでどうならうも知れず。私可愛いと思うてなら。まあ往んで下さんせ。イヤ往なぬ。小言いふと五右衛門を。逆磔にかけさす。殺そと活そと俺次第と。地廣言吐くは憎さも憎し。往ぬる所を殺さうか。詞寢てゐる所を突かうかと。脇差抜いて子心に取つつ置いつの一思案。地色かくとも知らず五右衛門は。さぞ待ちかねんとつかはと。歸る表の足音を。人こそ來れと五郎市は。心急くまゝ障子越し。ぐつと突いたはお瀧が胸腹。わつと魂切る聲に驚き。ヤレ人殺しと三二五郎兵衛。フシ奥を指して逃げ入れば。五右衛門の戸蹴破つて。見れば女房朱に染み。五郎市は人違へと。うろつくを取つて引寄せ。詞ヤイ悴。恨あるは道理ながら。母と名がつきや親殺し。辨別知らぬか痴呆者と。地叱りつければ聲ふるひ。詞母様を小鮎めが女房にしをる故。小鮎を殺すと思つたら母様でござつた。地堪へて下され怪我であつたと。あどなき詞も聞答め。詞何といふ。嗚と小鮎が不義したとや。其又相手は。奥へ逃げて行きました。地扱はと目がけ駈行くを。ノウこれ待つてと手負は呼びとめ。詞其逃げたのは私が親。三二五郎兵衛殿。あの子がそれと知らぬも尤も。今日晝小鮎が無體の戀慕。嫌といへば身を捨て、訴人に出ると阿房の一徹。地色もしやと思ひ宥めて歸し。今宵忍んで來る約束。思ひもよらず。親仁殿が見えまして。詞又金

の無心。お歸り迄待つとて。一間にわしと差向ひ。小鮎と思ひ違へたは。地あるまい事では無けれども。親と名のつく自らを。殺してあの子の身の科が。何とあらうとそれが悲しい。やつぱり不義で見付けられ。自害と沙汰して下されと。スエテ思ひ過ぎする。心を疑ひ。詞ヤアしら／＼しい。左程いたはる五郎市を。是まで酷く責め遣ひ。今さら悲しい不便だとは。地追従らしいおけ／＼と。つつけりいひ出す詞の内。苦しき身體押直り。詞コレ五右衛門殿。今死ぬる身が何の追従。こなたは又五郎市に。何老舗の何商。何さす胸で連れて戻つた。地色女房にさへ暇の状。まさかの時は他人向と。常からのいひ聞せ。男の子は夫に付き。どう言ひ抜けても。フシ遁れぬぞや。地色たとへ別儀ないとでも。鬼でもならぬ恐しい商賣。こなたはそれを讓る氣か。可哀さうに美しう。生れついたあの顔を。撞木の上に曝さうかと。それが悲しき愛しさに。追出す種の無得心。早う此家を逃げよかし。母御の方へ去ねかしと。打擲するもこなたこそ。一生その身で果つるとも。せめてあの子は。人にしたさにと。わつと泣入る眞實を。地聞いて五郎市泣き出し。かゝ様堪へて下さりませ。何にも知らいで恨みました。ひよんな事して切りましたと。悔み歎けば五右衛門も。至極の涙に咽びながら。詞一寸の蟲にさへ五分の魂あるといへば。まして我とても悴を連れて歸りしより。たとへしつけぬ荷步行持。人の籠を廻つても。ふつつりと止めうと善心に。もとづく甲斐も情なや。地色同類數多に絡まされ。止めうというても止めさせず。翹鳥にかゝる此骸。追付刀の錆屑と。なる身をせめてそなたとなう。代つて死んだら果報ぢやに。科なきそちは先へ立ち。罪ある我は引残り。責め詞まれ死ぬるである。疊の上での臨終は。羨しいと掻口説き。ハルフシ男。泣きにぞ泣き居たる。地色今はになりて五郎市を。引寄せて打眺め。詞愛しや是迄氣の苦勞。怪我でないとして殺すをば。無理とは更に。フシ思はぬぞや。地色其代りに佛壇に香花きらして下さるな。四十九日は家の内に。迷ひあるとの事なれば。直に手向を受けませう。名残惜しい我が夫。苦しいわいのといふ聲も。無常の嵐一吹に。吹き散らされて敢なくも。フシ此世の縁は切れにけり。地ノウこれ母様々々とする我が子の歎上

り。堪へかねたる五右衛門が。身を震はして嘔り泣き取亂したるフシ折からに。地色一間の内より三二五郎兵衛。始終を見届け飛んで出て。詞ヤア遅れぬところ五右衛門。餓鬼めは即ち親殺し。此旨上へ言上と。地いひ捨て既に駆出すを。南無三寶と飛びかゝり。何の苦もなく引摺み。有無をいはず氷の双ぐつと突込み一剣り。剣る間に向ふへ提燈。人こそ来れと死骸を投げ捨て。やがて我子を引立て。詞是からが身の大事。そちも親を殺すれば。我も舅の命を取る。二人共に親殺し。地此場にゐられずサア来いと。肩にフシ引掛け出る所に。約束時分と小鮎の源五郎。のろくと小提燈。明りにそれと見るより五右衛門。此奴故と飛びかゝり。躍り上つて眞二つすぐに立退く八聲の鶏。こつか高野をあてにして飛ぶがごとくに。三重へ出て行く。

下之卷

ハルフシ身の科を。數へゆく身の果敢なくも。地翅鳥にかゝる五右衛門が子に引かされて遠近の。フシ人目を忍ぶ破れ笠。子にも小笠を拾ひさせ。三里夜の内明方に伏見の里の藤の森。フシ街道筋に着きけるが。地色貯へなければ五郎市に認めさせる便りなく。途方に暮れてゐる折節。長袖武士と思しき乗物。八幡下向の朝戻り何恐れなき物詣と。見込んで五右衛門近く立寄り。詞龜忽ながらお乗物をお侍と見うけ。旅疲れの浪人がお願ひの筋あり。地色御聞届けと餘儀なくも。言ひかけられて乗物をフシ傍におろす其内に。地色五郎市に指さしたる脇差取つて小腰をかゞめ。詞某一人の悴を連れ。長途の路銀遣ひきらし差當つての難儀。何とぞ此一腰。御求め下されなば御恩ならんと差出す。地色乗物開き出づるを見れば七十越した白髪の老人。悠々と。フシ挾箱に腰打掛け。地色目鏡を力に一見致さん。詞どれお腰の物と手にとつて。地ためつすがめつ。詞ム、鏝はかんと身はせき打。地見れば見る程其昔我が子に付けて捨てたる一腰。ハツト驚き。詞これ一旅人。是は他所より求められしか。地もとの出所不審しと。詞の内より。詞イ

ヤ御念に及ばず。即ち某悴の時分。後の印と親共より。添へ置かれたる一腰と。地聞くより扱は我が子かと飛付く程に思へども。豫てよからぬ噂は聞く。今の風采家來の見る目。かたぐい愧ぢて心を鎮め。詞ハテノウ左様かしてあつばれのお道具。なれども持人の根性が双物にうつり。あつたら事は落ち難い錆が出ましたよ。切先にこぼれ疵。疵ある性は直り難く一生が亂れ焼。鏝はねぬけ。古いをおもと賞翫すれど。友傍輩の附合が悪しく。地金をあらはすもめんずれ。地目貫の龍は後藤なれども。勢なきは雲霧の間に住むべき所なく。逃げ彷徨ふ有様。詞自慢の鮫も出所はよけれど。親が放れて他人むき。地子は子と思へど傍あたり。目利があれば初の生れといはれぬ。詞はてなうあつたら恰好で。見すばらしい此脇差。地色老の見る目も情なしと。物に寄へし心と知らず。詞イヤ是まで幾人か手覚え。悴が僅かな小腕にさへ突留めたる業物。拵に構はずとも。地切れを見込に御求めと。いはせも立てず。サアサアその幾人か手覚え尙氣遣ひ。殊に御子息の小腕。突留めたとハア心許なし。御存じない異物語なれども。某もその昔男子一人儲け。仔細あつて捨て申した。地色もしその捨てられた悴。御自分のやうに流浪致し。親に捨てられずはかうあるまいと。恨うかと存じお咄申す。詞若き時分月も忘れず正月庚申の日。お館は庚申待。與女中に戯れ。一夜の契に子胤をおろし。生れたは月足らず九月廿日。又是も庚申の日。庚申の夜盗をすれば顯はれ。其夜懐胎の子は必ず盗するとの俗説。地色信ずるに足らねども里にやれば突展す。養子にやれば目遣ひが悪いと厭うて貫人なし。仕官の身の是非もなく此里の野はづれに捨て。河内の土民を頼み。拾ひ養ひ貰ひしが。人と成つて都へ上り俗説に違はず。事を仕出して都を追放。扱こそわがため敵ぞと。思ひ切つてはありながら。次第に寄る年くる日數。人懐しき折柄は思ひ出して我と我が。心に行方をとふばかり。もし其許の所縁の内心當りの人あらば。地傳へてたべと打つけに。いひ聞かされて五右衛門は。その捨子こそ某と。言はんとせしが。詞いや。地聴きお心脇差でそれと知つても他人むき。殊に我は重罪人。後の咎もいかゞぞと。心付きてよそしく。詞ありし昔の物語我が身のやうに存せ

られ。思はず落涙致しました。定めてその後其子息氣も改り申さんが。情なきは是迄の罪滅せず。今にも繩目の恥を受け。親あるなどといはれては不孝の上の不孝と思ひ。地わざと見ぬふり聞かぬふり。よそにあしらひられまじよ。と斷ことわりいへば。詞その心ならまだしも。地色せめて其許の子息を我が孫と思ひ。餞別を致さんと金一包取出し。詞黃金は朽ちても朽ちせぬまつ其ごとく。惡事も亦未代まで其名は朽ちぬと心得。親の性根を見習ふな。地色對面も是限り。後世菩提はいづれとも。弔ふべき者は。定らずと泣く／＼立つて一腰も。共に渡して乗物へ。涙隠しに入り給へば。しばしと留むる甲斐もなくはや乗物を昇き上げて。フシ心もなげに急ぎ行く。地跡懐しく五右衛門は打萎れ。フシ涙ぐみ。地色現在親を親とせず子を子とさせぬは我がなす業。此罰にても極重の罪科のがれず淺ましやと。先非を悔いてしやくり泣き。フシ詮方もなき折柄に。地色自業自滅の時來り追手と思しき捕手の役人。それ五右衛門よあますなど四方より追取巻く。コハ叶はじと五郎市を崇道の宮へ押遣つて。其身は封置を小楯にとり。力士のごとく踏跨り。段平刀抜いて待ちかけたり。捕手の小頭早野彌藤次捕繩手操つて。詞ヤア／＼五右衛門。是迄なしたる惡事の段々残らず顯れ。其上舅を手につけ。倅は母を殺したる様子。三三五郎兵衛に止を刺さざるゆゑ委しく白狀。遁れぬ所腕まはせ。地繩をかゝれと呼はつたり。地五右衛門ハツト止の事。思ひ出して後悔も。かなはぬ所と胸をすゑ。詞これ／＼役人。舅は勿論女房も某が殺したり。倅が存じた事にもあらず。彼が命をお助けあらば尋常に繩かゝらん。さもなくば死物狂ひ。有無の返答承らんと身構す。ヤアいらざる倅を庇ひだて。はや先だつて上聞に達し。親子共同罪との仰せ。地かなはぬ事と聞くよりくわつと眼を見ひらき。詞さうお言やると片端切つて／＼切抜ける。搦めとらば取つて見よと。地いふより飛付く捕手の人數。得たりと眞向後袈裟。三の胴の車切り。腰骨脊骨きらひなく爰を最期と三重へ切散らす。地さしもの捕手も手にあまり。加勢を入れんとひしめく所へヤレ暫くと聲かけて。親の兵部は老足の心も空に取つて返し。小頭に打向ひ。詞科人は石川五右衛門とな。仔細あつて彼めには重々遺恨あり。地色某に御渡しと。願へば彌

藤次。貴殿は何誰。

詞三位中將が家來岩木兵部。

ムウ今御發向の諸大夫。據は無けれども。中々老體の手に及ぶまじ。

地お怪我あつては氣の毒と。聞入なければ押返し。詞もし捕り損じ候はゞ。老の皺腹致す迄。地武士は五の遺恨ばら

し。是非にと餘儀なくフシ頼むにぞ。地色然らば加勢なされよと。指圖嬉しく向ふに進み。詞コリヤ／＼五右衛門。

以前の意趣をはらさんため岩木兵部が向うたり。切抜けるなら抜けて見よ。老の手並を見せうぞと。地表は怒り落ち

よかし。逃げよと知らず眼つき顔付。扱は助けて其代り腹召されんのお心か。ハテ是非もなや此場こそ。我が絶體

絶命と。思ひ定めて。詞コレ／＼兵部殿。成程恨をはらせんが。心入あり貴殿の養子。當馬之丞を呼びにやられよ。

地一言申す仔細ありと用ありげなる詞のはし。詞ヲ、幸ひ某迎ひのため。稱荷まで來てあつらん。地色それ呼び來れ。

と早使。忙しき中に双方がフシ一息ついて待つ所に。地程なく來る當馬之丞。かくと見るより吃驚。驚隠す五右衛門

かけ聲コレ／＼當馬。詞我が運命今日に極る。親父が遺恨をはらせんとて向はれたれども。捕り損じ切腹召されん事

笑止に思ひ。手にたつ貴殿を呼びに遣はす。地親に代つて働かれよ。用捨はないと立向ふ。是ぞ以前の恩返しと。早

くも悟つて當馬之丞。詞心ざし奇特なれども。今町人になりたる某。武士でなければ手柄望まず。切抜けなりとも。

勝手次第と言ひ放す。ヤアその町人には誰がしたぞ。刀を折つたその恨み。今はらさいて何時はらす。一生氣樂に町

人とは。養父へ對して大不孝。とても遁れぬ五右衛門が命。他門へ渡して心がよいか。地狼狽者とフシ氣をつけられ

れども流石は筋目。先知に代へし養父の家。相續させんとは祝着々々。さりながら。得心の繩かけては役なし。誠切

抜ける所存ならば。あつばれ手柄に捕つて見しよ。ヤア一旦は男づく。此上何故用捨せん。捕手數多の見る前。潔

う我捕れよ。捕るぞよ。捕れよ。サア。サアと。地睨みあへども心は一致。こなたは首尾よく捕られんとフシ目處を外

して切付くる。地逃がば逃げよと捕りかぬる。親の兵部はあぶ／＼と養子が手柄も望めども。現在實子が虎口の命。

藤次。貴殿は何誰。

詞三位中將が家來岩木兵部。

ムウ今御發向の諸大夫。據は無けれども。中々老體の手に及ぶまじ。

地お怪我あつては氣の毒と。聞入なければ押返し。詞もし捕り損じ候はゞ。老の皺腹致す迄。地武士は五の遺恨ばら

し。是非にと餘儀なくフシ頼むにぞ。地色然らば加勢なされよと。指圖嬉しく向ふに進み。詞コリヤ／＼五右衛門。

以前の意趣をはらさんため岩木兵部が向うたり。切抜けるなら抜けて見よ。老の手並を見せうぞと。地表は怒り落ち

よかし。逃げよと知らず眼つき顔付。扱は助けて其代り腹召されんのお心か。ハテ是非もなや此場こそ。我が絶體

絶命と。思ひ定めて。詞コレ／＼兵部殿。成程恨をはらせんが。心入あり貴殿の養子。當馬之丞を呼びにやられよ。

地一言申す仔細ありと用ありげなる詞のはし。詞ヲ、幸ひ某迎ひのため。稱荷まで來てあつらん。地色それ呼び來れ。

と早使。忙しき中に双方がフシ一息ついて待つ所に。地程なく來る當馬之丞。かくと見るより吃驚。驚隠す五右衛門

かけ聲コレ／＼當馬。詞我が運命今日に極る。親父が遺恨をはらせんとて向はれたれども。捕り損じ切腹召されん事

笑止に思ひ。手にたつ貴殿を呼びに遣はす。地親に代つて働かれよ。用捨はないと立向ふ。是ぞ以前の恩返しと。早

くも悟つて當馬之丞。詞心ざし奇特なれども。今町人になりたる某。武士でなければ手柄望まず。切抜けなりとも。

勝手次第と言ひ放す。ヤアその町人には誰がしたぞ。刀を折つたその恨み。今はらさいて何時はらす。一生氣樂に町

人とは。養父へ對して大不孝。とても遁れぬ五右衛門が命。他門へ渡して心がよいか。地狼狽者とフシ氣をつけられ

れども流石は筋目。先知に代へし養父の家。相續させんとは祝着々々。さりながら。得心の繩かけては役なし。誠切

抜ける所存ならば。あつばれ手柄に捕つて見しよ。ヤア一旦は男づく。此上何故用捨せん。捕手數多の見る前。潔

う我捕れよ。捕るぞよ。捕れよ。サア。サアと。地睨みあへども心は一致。こなたは首尾よく捕られんとフシ目處を外

して切付くる。地逃がば逃げよと捕りかぬる。親の兵部はあぶ／＼と養子が手柄も望めども。現在實子が虎口の命。

助けたや逃したやと。老の思ひは千變萬化。捕手は四方に目を離さず遁れ難なき罅の口。程よく五右衛門切込む拍子。頓き伏すを取つて押へ。是非なく繩をかけるうち。役人社内に駈入つて五郎市を高手小手。親子を共に番ひ鳥。なく音は老の胸の内。共に悲しむ當馬之丞。凋れし聲も御法の呼はり。詞盜賊の張本。石川五右衛門親子の者。牽屋へ引けと引立てさせ。地行くも涙の柵や繋かれ。つなぐ縁の綱。結びついたる行合兄弟。千筋の繩も跡につき。共に警護の。うし綱や是非なく。くも三重引かれゆく

道行街の手向草

タ、キつくりおく。ギン罪が須彌ほどあるならば。ギン閻魔の廳につけ所。ナホスなしと五道を。フシ踏み迷ふ。あさき石川五右衛門が身より出せる錆刀。なせし悪事の無量業。スエ数は船にも車にも。オクリ罪科。重き親と子に乗せたる駒の首綱や。かゝる憂目にあらけなく。絡み付いたる縛は。暗き冥途のフシ毘島立。二條大宮東へとギンオクリ引かる。道に立集ふ群集をはらふ警護さへ。長地聲をひしぎの割竹はさながら訶責きらめきし拔身の槍も此世から。劔の山か焦熱の。油の小路沸らして。小オクリ小石。小川も諸共に同じ處刑に釜の座と。氣を空蟬の烏丸。かはい。く人と人毎の聲を力に引かれゆく。子は父親の。成佛と後手に珠數くるまや町。フシあと見返れば。地五右衛門は我が子の姿見送りて。此身を先へ引かれなば見窄しげなうしろ影。見まじきものと胸迫り。スエテ聲も涙にかきくれて。詞御見物のいづれもへ。かく我々を見せしめと。生恥さらすも前世の業。地本來一物なき時は。善悪。邪正の分隔。なしと思して一遍の。フシ御回向。なされ。フシ下さるべし。地大木になる楠も二葉の時は。童に。摘みとらるれどおのがまゝ。繁れば後に石となる。われが盗みもその如く。始めに思ひ止らずし。一度はまゝよ。二度は大事か三惡道。今日といふ今日親と子が。釜煮の油責現世に報ふ阿鼻地獄。あると知らざる。フシあさましやと。二人鉢々、キ涙の限り

聲限り。悔み叫べど其かひも。ないて歸らぬ身の越度國の旋を。フシ堺町。シテ地親の嘆きの聲につれ。又思ひ出す五郎市が。涙の顔を振上げて。此多勢の中にさへ母様はなせ見えぬ。わしは他人の御回向を。うけずとも母様に。逢うて死にたい顔見たい。クル逢ひたいわいのと身を悶え。差腑向けば黒髪の中。フシおくれを。傳ふつゆ涙。二人ハルフシ柳の馬場に。雨模様空かき曇り日陰にも。嫌ひ憎まれ世の人の疎み。はてにし身の上も。たゞ往生は。三下リタ、キ歎屋町に。シテもしや佛の御幸町。ワキ心の闇をてら町と。シテさして行くみち法の道。ワキ逆縁ながら浮むべき。シテ頼みは彌陀の誓願寺。一念發起。菩提心。二人ギン子はまだ賽の河原。ナホス町。菩薩の御手に招かれて。いざ松原と聞くならば五條の橋に取付いて救ひ給へと一心に。頼めとばかり教へられ。願くばかり。クルフシ泣くばかり。ハルフシ見交すばかり。恩愛の薄き契の哀れやと。深片手に見る人もギン見らるゝも夢世の中の。怨と悪とにこり木屋のフシ町をばづれて野嵐に。嘶ゆる駒の足はやみ最期場近くなりければ。見物群集とりくく。に宗旨々々の手向草。題目。眞言念佛の。聲は高瀬や六字づめ七條。河原に三重へ着きける

地仕置の場所は七條河原。二町四方に垣結ひ廻し。内に立てたる拔身の鎧。鼎にすゑし大釜はフシ地獄の。責を此世から。ハルフシ見に集りし。群集の中。先を拂うて早野彌藤次。岩木當馬も相役に。いひ付けられて是非もなく。フシ床凡にかゝる後よりも。地色親の兵部は心もそら。叶はぬながらも立向ひ。詞承れば五右衛門を。此所にて釜煎とや。是迄盜賊の仕置は討首。地古來稀なる御制法といふを打消し。詞イヤ。それは彼が科のなす所。先づ立歸りの科二つには。去年島原にて平の平平を殺し金をとり。三つには此度舅を手につけ。一味の輩を白状せず。成程酷き罪に行ひ。同類をいはせよと用捨なき御上意。地役人の私ならずといひ聞かされてハツトばかり。返す詞もなき中に。詞然らば悴五郎市とやらは。實の母があると申す。さすれば親殺しとも申されず。地是は何故同罪ぞや。詞コハ改りしお尋ね。後の親を親とするが天下の從。スリヤ是も遁れずか。いつかなく。ハ。ハレ。地不便千萬と。よそにはい

へど心は闇。スエテ老の奥歯を嚙締めて。フシ泣く音を隠すばかりなり。地かくと聞くより母のおりつ。息を切つて駈着けしが。夫當馬が今日の役目思惑いかゞと垣の外。うろつく内に引出す。オクリよそのへ見る目も哀れなれ。ハルフシ親にも子にも。首枷の脊に細繩のフシ菱の紋。締附けられし後手は。本フシ鮫にかゞみて鑰に折れ。血の通ひさへなつ草の。焼付けらるゝ身の上と。オクリ思ふ。心のはかなくもフシ打しを。れてぞ座になほる。地彌藤次いかゞ思ひけん親子の縛。解かせて。詞なんと五右衛門。様々の責苦に落ちざれば。今日は釜の罪。忤五郎市を不便に思はゞ一味の盜賊殘らず白状せよ。地萬民の苦しむる賊徒。狩取らするがお上へ奉公。此理をよく辨へよとフシ柔を。以て問ひかくる。地五右衛門ちつとも悪びれず。詞御尤もの仰。殊にあれに御老體。相役當馬殿の思召にも。子は不便にないか。苦痛さするを思はぬかと。地御蔑みもあるべきが。たとへて申さば盜賊は國の鼠。取盡すに盡されうや。詞僅か手下の五十七狩取らしたとて。さのみ天下の助にもならず。地萬民のためならば只用心に如くはなし。詞取らるる油斷あればこそ取る盜賊も出來申す。地五右衛門が最期の一句はかくばかり。詞石川や。濱の眞砂はつきるとも。地世に盜人の種はつきまじ。重ねてお尋ね御無用と。フシ何の。にべなくいひなぐる。地色氣の毒あまり當馬之丞。詞コレサ五右衛門。其身は格別忤が苦痛。地又外々へどうつつて。誰が悲しみにならうやら。思ひはかつて白状し。輕き罪にあはれよと。兵部や妻の心をば。フシ思ひやりつゝ制すれば。詞愚かの仰や。是迄妻子一家にも。語らぬ事をいひ合せ。大事を計りし一味の同類。地いづれをそれと名指しがならうか。よし白状したりとて。忤が命助かるにもあらず。悪事をなさば悪事を立てぬき。釜に入らうが火に入らうが。未練な同類指すなどは。思ひもよらず。詞ヤイ五郎市よ。苦痛というて半時か一時。死ぬるは切ないものと心得。父が子ぢや狼狽へな。熱いといふもちつとの間。地怖い夢ぢやと思つてゐよと。賺せば何にもえ言はずに。しく／＼泣いてゐる體に。強き心も弱りはて。スエテ共に涙に沈みしが。人目思つて泣顔隠し。詞そちは死ぬるが悲しいか。卑怯な父が子でないぞと。地覺悟させんと恥しむ

れば。五郎市涙の聲ふるひ。詞卑怯ではない父さま。道々もいふ通り。地私はま一度かゝ様に會ひたい。會はして下され拜みます。死んだらモウよう會はぬ。それが悲しうて泣きます。と。しやくり上げたる哀れさを。聞く親の身も世もあられず。わつと泣出す聲につれ。役人下僕も共泣に。フシ袂を。捲るばかりなり。地色さすがに剛き五右衛門も。不覺の涙に沈みしが氣を取直し。詞それは何をいふ五郎市。母はそちが手につけ。其科故この仕置。會ひたか冥途へか。會はしてやらう。イヤ／＼それは後のかゝ様。地初の本の母さまに。會はして下され會ひたいと。泣くを消しかね答へかね。詞會はしたうても會はされぬがお上の掟。聞きわけよ五郎市。父に如才があるものかと。地すがるも涙見る涙。コハリはや鼎には煙立ち。フシ時刻移ると迫り立つる。地色未練と人や笑はんと五右衛門突立ち。我が子を取つて脇挟み。時一寸を待つも惜むに似たり。とても遁れぬ今日只今。いづれも念佛頼むぞといひ捨て釜へ。フシ飛込めば。地色兵部當馬ははつと氣も落ち。堪へかねたる母のおりつ。垣押破り走り入り。ヤレ五郎市よ母なるは。可愛の者やと駈寄るを。當馬之丞押隔て。詞眞の母にもせよ縁切つたれば今は他人。其理を以てお祟なきを有難いとは思はず。何面目に我が子呼はり。近寄る事は叶はぬと。地差留められて聲をあげ。ナウ情なや恥かしや。我が子といへば盜人の。妻と定る恥辱にも。かへて駈出る親心。推量して只一言。暇乞さしてたべ。恨めしいは五右衛門殿。こなたの心を直さうばかり。五郎市を戻したに。共に悪事を見ならはせ親殺しとは何事ぞ。仕置も多いに釜煎とは。あんまり酷い胸忿な。かうなる事と知つたらば。戻すまいもの悔しやと。ノルフシ身を投げ。伏して泣きあたる。地色釜の中より五郎市は。延上り／＼。詞母様よう来て下さつた。會ひたうて／＼。泣いてばかりみました。父様と一所にモウ爰て死にます。死んだ後でも人殺し。親殺しといはれても。なした業なら是非ないが。盜人の子といはるゝが。地私や悲しい母様。人がいふなら言ひ消して。お前の子ぢやというて下され。詞御見物様いづれも様。親殺しも人違へ。怪我であつたと了簡し。地御回向頼み上げますと。わつと泣出す心根を。思ひやりつゝ人々も。フシ哀れと共に袖しぼる。地色五右

衛門悲歎の涙ながら群集に向ひ聲を勵まし。詞この多勢の其中に。財寶を我に奪ひ取られ。よい氣味とも憎しとも。又仇なき其人は。不便とも思されんさりながら。めん／＼我身の手本ぞと。地思うて念佛頼むぞや。詞盜の元は偽より起り。偽の始は身持から。若いお人は取分けて。色狂ひ小博奕の。つばめを合はす筆のさき。地後に手先がはたらいて。主親の物他人の物。一人の方人二人の味方。三人五人と枝葉つき。止めうというて止められず。坂に車を轉すごとく。車は早く心はあと。悔んでかへらぬ釜の罪。我が身ばかりか悴まで。苦痛をさする悲しさを。推量あつて一遍の。御回向頼み上げます。未練な最期も子故の闇。スエテ面目なやとせき上ぐる。地心を思ひ諸見物。兵部おりつは正體も。ないて返らぬ親と子の。フシ別れはさぞと知られたり。コハリはや顛倒の時來り。釜に油のいきり立ち。たまぎり上る其音は。鳴神よりもフシ恐ろしく。フシ見る人ごとに。身の毛だつ。中に哀れは五右衛門が。我が子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂亂。さすかの當馬も顔そむけ。役目で責むる彌藤次も。白状せよゆるめんと。フシいうたばかりに。フシ目もやらず。地色性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣る瀨なく。片手に擱んで五郎市を目よりも高く差上げ。暫しなりとも苦しみをさせじとこそは。フシ身をもがく。コハリ油は次第に煮えあがり五體もあからむ詞責の責阿鼻。焦熱を此世から。ナホス地見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを見かねて當馬聲をかけ。詞ヤア／＼五右衛門。とても遁れぬ悴が命。庇ひだてする見苦しき。後で苦痛をささうより。なぜ一思ひに先だてん。地血迷うたかと教へはげに。尤とは思へども現在親の手にかけて。何とせん彼とせんと。差上げたり下したり。見る苦しきは恩愛妹脊。叶はぬ時の今はの際。いなゝき響く大聲にて。詞五郎市父が先驅せよと。地ぐつと突込む釜の底其身も共に打重り。狂ひ死せし石川が。釜煎の跡淵となり。七條河原に名を残す。釜が淵瀨の物語。ギン傳へ／＼て今こゝに豊の。竹の一ふしに御代萬。歳を書き残す。

此 釜淵 双級 巴 終

鷓 山 姫 捨 松

鷓山姫捨松

作者 並 木 宗 輔

序詞放勳天下を帥に仁を以て民之に従ひ。桀紂天下を帥に暴を以て民之に従ふ。其好む所に令すれば。我秋津洲に法警縁。思はず人の之に由る。道の道たる賢王のめぐみも深き四つの海。天津日繼の御調物。積り重て四十八代。稱徳天皇と申すこそ。ヲロシへ女帝ながらも。いやたかき。地御座の左に長屋の王子。佛法不思議の御評議とて。元興寺の積學。筑紫そだちの悪法師玄昉僧正伴はるれば。かたへの席には右大臣豊成公。長谷寺の住僧徳道上人をいぎなひ給ひ。國母光明皇太后。三寶歸依の遺勅とて。兩僧共に椅子をゆるされ。フシ威儀とう。とうたる其中へ。地つがなく出くる田舎者。六十餘のやせ親仁。なんの遠慮もしらすの庭。御殿を見廻し御階のもとへ。立寄つてやり聲だし。詞身共は淡路のお百姓。武島の翁磯大夫と申す者。此頃うらが在所の海より。引上た佛様。どうやらいなげななり格好。村中が寄合うて判断しても知れぬ故。何かはなしに禁中様へ。お目にかけうと思ふから。秋のかたてにとつばかは。持つてきたれば待つてをれと。おつしやつてから三日になれど。よい物ぢやおいていねとも。よしない物ぢや持つていねとも。ぐつともすつともお返事なしに。つり付られていかい迷惑。はたごもたまらず年貢時。地どちらへどうなと埒明て。きりへ往なして貰ひましょと。へつらひなしに百姓の。フシ詞遣ひぞ律義なる。地科むる色なく豊成公。詞ヲこりやく土民。今日則ち其御評議。地追付兎かうの勅下らん。瀧口にて暫くひかへよ。詞それく官人此者其方へと。地詞の下に走り寄付きて。フシかたへに立去れば。地玉座の御簾かゝがりて。天皇仰出さるゝは。詞今賤の男が詞のごとく。淡路の海より上りしとて。異形の佛を捧げしかども。我國は神國にて。佛法に程經ねば。靈佛

更に見別がたし。地七千餘卷の經々に。有名の佛か但し又。凶事のものか高僧達。立寄つて拜見あれと。かしこまりなる勅。豊成やがて黒漆の。御厨子の扉を開かるれば。くはつと沉香木の。かほりと共に光明かゞやく菩薩の尊像。ハツトおりたつ長谷の徳道。フシ信心肝に銘ずる禮拜。地合掌素直に座に着き給へど。玄昉はじろりつと。見向きし計り座も動かさず。佛者をけづるけんどのの。詞鏡に仰々しく。詞ア、ラ忌はしやけがらはしや。是はこれ其昔。五天竺より到來せし。四韋駄と號す書に見えたる。神通の目蓮を。打殺せし竹杖外道か扱は又。四大海の水を耳る穴に封じて。三界衆生に愛目を見せし。拘留外道が形ぞならん。地玉座近くは穢有りと。ほくし掛ければ長屋の王子。引取つてヲ適々。詞驚き入つたる博識多才。地いでく貴僧の詞に隨ひ。異形の物を王子が足下に。踏くだかんと立かゝるを。豊成押へてアツア暫く。詞それこそ一轍一途の御賢慮。玄昉の見立さる事ならんが。地兎角は兩評よろしかるべし。詞これく長谷寺徳道上人。和僧三拜せられしには思ひ當りも有るやらん。地訝しさと尋ねに上人。忍辱柔和の袖搔合せ。事も愚や是こそは。詞補陀落淨土に影向まします。觀世音菩薩の尊像。御誓願は種々重罪。五逆消滅。自他平等即身成佛なさしめんと。地大慈大悲の御正體。其願文を説とし。天下を惠ませ給ひなば。猶君が代は萬代と。治る國の御實と。フシ奏せらるれば。地邪念の玄昉。むつと顔に聲がなくて。詞イヤア上側目利の當ずつほう違つた違つた。而像計りが菩薩と見えても。惣身は毒蟲百足の如し。外面似菩薩内心如夜叉。女を魔王のたとへを取つて。外道の尊む所の物なり。女帝の御前を憚りてよい加減に取なし置くに。治る國の御實とは。帝を貶せん下巧か。地さらば罪科輕からずと。横筋かいに理を付て。かさ押にやり込むれば。徳道笑止とア、いや是々。然なの給ひそ玄昉殿。詞そも法華經の樞鍵。普門品の大旨を鑑るに。觀世音は一切衆生。有情非情を悉く。極樂淨土に導かんと。三十三身に像を分け。遍滿し給ふ其二つの。尊像に疑ひなし。地和僧は何とて忌はしき。四韋駄とやらん書を誦じ外道の輩が尊める。非義の悟はしられしぞや。邪道を捨てて有がたき佛の御法をうけ給へと。理非明

白なる詞にぎつと。言句つまつてや、腹立ち。詞ヤア邪道とは推參至極。地あご引裂かんと口だんばく。肘はりかけても合掌し。構はぬ相手に詮なき力み。しまひ付ねばやれしはし。計ふ旨有り双方共。挑み争ふ事なかれと。鎮め給へる皇の。フシ御聲を機に控へる。地天皇豊成近うと召れ。詞験者の兩説裏表。先づ觀音にて有るなしの勝負を正さんには。其方娘の中將姫。普門品を讀誦して。夢中に菩薩の尊像を拜せしと兼て聞く。地是ぞ幸ひ召寄せて見分させよと勅判の。いとも畏きみことのり。承つて豊成公。オクリやがて、便を立てらる。地直なる道に負け色の玄昉。最眞な長屋の王子。苦々しげに笏取直し。詞よしは誠の觀音にもせよ。我神國には無益の佛像。昔欽明の聖代にも。異國の法とて捨られしが。尤なるかな佛道には。方便といひぬけて虚言つく事を専とす。地今其教を用ひ給ふ天皇にも綸言を。方便の偽とくろめん爲の下拵。近頃さもしき御所存と。嘲る詞を豊成聞きかね。詞コハ王子には粗忽の仰。綸言を方便の拵事とは。何を以てと言はせも立てず。イヤ拵事で有るまいか汝も兼々聞つらん。丸が一子春日丸を。帝位に即けんと望む度々。ともかくもくと。地當座遁れにべんくだらく。延引成るは察する所。詞先年惠美の押勝と。心を合せ謀叛を起せし。鹽燒の王が悻。淡路島へ置きし。大炊の君といふわつばを。呼返して御位を譲らんと思しめす。地お心あてと見すゑたる。王子が胸の割符を合す。佛法歸依の方便仕掛。詞但し春日に今日只今。御即位あれと天皇へ。勸るか豊成。地なんとくと無理望み。今に始めず流石の大臣。返答困れば天皇も。あぐませ給ふ御氣色にて。詞イヤなう王子相構へて。地朕が心を疑ひあるな。一旦言ひし詞に違へず春日丸につまがな。重て最上吉日選み位を譲らん今日は。先づ此の佛の評議あれと。宥め給へる折からに。中將姫參内と。披露につれて入り来る御階。傳ひもしなやかに。育ち氣高き振袖の。稱襦袢手入らずは。本フシ籬が。花やよこはぎの。父のかたへに。フシ畏る。地帝も觀慮おだやかに。詞ヲ珍らしや中將姫。召しよする事余の儀にあらず。おことが兼々物語。瑞夢に菩薩を悉く拜見をせしと有る。其内の一體に。若此像なかりしか。立寄つて見定めよと。地軟かなりし

勅説に。お受も會釋中將姫。這寄摩寄り御厨子に向ひ。思はずはつと頭を傾け遙かに退り。詞ア、ラ有難や不思議やな。三十三夜さの夢毎に拜み申せし其中にも。わきて此尊像は夢の御告も速かに。地罪業深き女人を皆。數千の手にて救ひ取り成佛させん姿なり。よく見覺えて世の人に。語り傳へと一夜の夢に。ま見え給ふが十一度。詞我が姿は普陀落山。尋ね來ませとの給ひて。搔消す如く失せ給ふ。地大慈大悲の千手觀音菩薩の像にて在ます。猶も夜毎に拜したる三十三體繪像に寫し。肌身を離さず持ふと。懷中の守より取出して觀覽にと。玉座に向つて押開けば。實にも三十三身をしるせし中の千手觀音。此木像と一點一刀。違はず徳道見立の通りと。帝の觀感淺からず。豊成公は喜悅の眉。百官歸伏の思ひをなしはつと一度に手を合せ。拜せらるれば上人は。時の面目けら腹を。たてわかつたる王子と玄昉。佛頂面を赤らめて。フシ返す詞もなかりけり。地天皇重て宣はく。詞實にも尊き靈佛なれども。天津日繼の御末なる禁庭には神慮の恐れ。地徳道見立の規模として長谷の本尊に立てられよ。しかし異形の體なれば玄昉の詞の如く。萬民必ず疑はん。詞姫が夢想に拜せし數。十一面の觀世音新たに作り此菩薩。御くしに納め流布有るべし。地再興有るうち尊像は中將姫に預くるなり。朕も世を治めてより未だ一事の慈悲をもなさず。佛法の大意を學び。餓たる民に金銀米錢。施して後春日丸を。目出度く帝位につくべきぞや。其旨心得退出あれと人氣を破らぬ勅。とりも直さず平等利益。御簾さかれば各々あつと。平伏歸服立腹も。柔き靡く。辭儀會釋立別。れてぞ。歸らるゝフシ跡へひよかゝ又出かける。淡路の翁磯大夫。邊を見廻し。詞はて扱こりや。皆何所へござつたやら。あんごらひよんと待たして置いて。又釣るのか。さうゝはおら等も迷惑。何のまゝよ往んでくりよ。往ぬるぞや。往にますぞやと。地言捨て出るをこりやゝ待てよ。と御簾の内より呼びとめられ。詞ハアテ意地の悪い。隠れてさうなと振返れば。地御簾押上稱徳天皇。御階にすごゝ立ち出て給ふ。王位におされ磯大夫ハツト。フシ白洲にうづくまる。詞許す近うと間近く召れ。汝淡路の者ならば。三年以前に遠流せし朕が甥子の大炊の君。在家を知るやと宣へば。ア、成程其のお

方は。身共が在所の隣村よ。うるゝとしてござります。ヲ無事なれば悦ばしい。随分命を全うし再び歸浴を祈れよと。傳へてくれ磯大夫。地其方は下賤の者なれども。物の哀れは知るべきぞや。力を添へて不便を加へいたはつてくれ頼むぞよと。勿體なくも龍眼に。涙を含み賤の男を頼ませ給ふは恩愛と。思ひやられて磯大夫。ほろりつと涙ぐみ。詞扱もゝおいとしや。上々様でも思ひどは。同じ事か私めも。一人女子めがござります。かうして旅へ出て居る内も。子の事計り苦になつて。ほんにやれる空が。微塵もないから一倍と。身につまされておいとしばい。お氣遣ひ遊ばすな此方の村へひきとつて。結構に養ひましょと。地受がふ詞に天皇は。くれゝよきにと計りにて。御衣の袂を御顔に。フシあてさせ給ふ焦れ泣き。地磯大夫も娘が事。案じますればもうお暇。詞行くかよさらば。おさらばと。地見返りながら子に早う。あはじと急ぐ足元を羨ましげに見送りて。夜の御殿に入り給へば。御格子參る女孺内侍。しろく掲ぐる。搔燈明らかき。代の三重ためしなれ。地善と惡とは裏表淡路の國より差上げし。御佛の尊像に天皇御歸依ましゝて。佛法に觀慮を傾け殺生を禁制し。飢たる者に八木を與へ。民の憂へを救はせ給ふフシ慈悲の御代こそ有がたき。地それを逆らふ長屋の王子次第に募る邪心。主を見ならふ難掌隨身。宿禰の鬼重内舍人藏人毎夜寢鳥をさしあるき未來は何とならの里。飛火の繁此處彼處。フシ時尋る宵月夜。地藏人ほつと立やすらひ。詞やれゝ探した。此松には雀が一匹とまつてをらぬ。貴殿は何て去られしか。サレバゝ。此飛火の森は殺生禁斷の所故定て大分小鳥共が。とまつて居らんと思ひの外こそつく物は鳥めばつかり。地此儘で歸つては王子の御機嫌をこなふは必定。今一精出されよ。詞ヲいかにも随分探して見ん。地あれゝ向ふの茂つた藪にはよい鳥共がをりそな物。如何様それよと見やるさきよりくる提燈。藤橋を付けたるは横萩の家紋。詞エ、面倒な。かたくな者の右大臣豊成。きやつも佛法歸依の輩。我々が體を見れば殺生ぢやの。なんの彼のとちんぶんかんで事喧まし。地遺過さんと稻村のフシかげへ二人は身を忍ぶ。地程なく近付く豊成の提燈目當に兩執權左京之進晴時。久米の八郎景勝主人迎ひの一筋道。足

もとぶひの松蔭にて兩方行合ふ主従の。フシ禮儀正敷。兩人は土に手をつき頭を下げ。詞俄の參内心許なく。殊に夜中の御歩行。地御迎ひの爲參上と申上ぐれば豊成公。詞ホ、大儀々々。今宵俄の參内は大切なる御内勅。それにつけ汝ら二人に申し渡す旨有りと。地下部を遠ざけ。松かげに人忍ぶとも知り給はず。立寄つて聲をひそめ。詞内勅有りしは余の儀でなし。長屋の王子兼て一子の春日丸に御位を繼がせ。其身は太上天皇にへ上らんとは無理望。又天皇は淡路の國に流されまします。大炊の君に御即位ありたき觀慮にて。地戀ひこがれ給へども表向より呼歸さば。忽ち王子に謀叛おこらん。急に此事人知れず謀ひくれとの勅。詞畏て勅答し汝等二人を彼地へ下し。大炊の君を奪ひ返させんと。心せきて歸館の折から途中の出合。地早速ながら打立ち。津の國より早舟に乗り淡路へ渡り。大炊の君を密に奪ひ取り立歸れ。彼の國は王子の領分たやすくは渡すまじ。何とぞ計略を以て首尾能くせよ。フシ大儀ながらと有りければ。地ハツとは言へど兩人が顔見合せ。ノウ八郎。詞君の仰はざる事なれども。變心我慢の惡王子。大炊の君に御即位の。催し有りともれ聞ば如何成る事か出て來らん。ヲ、サ先づ我君への祟は治定。拙者は都に残りたい。イヤおれ残ろはておれがと。地互に争ふ主思ひ。豊成押へてヤレ兩人。詞萬一露顯に及びなば。先づ一旦春日丸に御位を讓らせまし。邪慾非道の長屋の王子を。當分なだめて置く内には。地遣唐使に異國へ渡りし舊臣達の歸朝を待受け。詞此人々としめし合せて其時こそ。大炊の君を天子と仰ぎ奉らんと。地宸襟もやすめ置きたるぞ都において氣遣ひなし。とかく天皇焦れ給ふ大炊の君を奪ひ歸る。役目こそ大事なれ。是より直にはや急げと。言ひ捨て其身は下部を引つれ。オクリ館へ歸り給ひける地仰に異議なく晴時八郎。いざ夜通しに津の國迄急ぐべしと立上れば。稻村の片陰より晴時八郎までくと。聲かけられて二人はびつくり。身構へして振り返り。詞我々が名を知つて呼びかくるは何やつぞと。地見廻せば兩方より拔身を掲げ躍り出て。詞ヤアうつそり共。我々は王子の御家來。内舎人藏人宿禰の鬼重。此稻村に居るとも知らず。主従密合ひ密事の相談。聞た通りを早速王子へ御注進と思へども。汝等を淡路へやつた後

では。主君の御一子春日丸の御即位が後手に成る。それ故に呼びとめた。我々に見付られしは汝等が命の終り際。地寢鳥を刺すよりいと易く王子様へはよき土産。フシ覺悟ひろげとふんばつたり。地二人はふつと吹出し。詞ヤレヤレ優しや密事を聞て。ようこそ往んでくれなんだ。此場で殺せば此方の勝手。遁すな八郎合點と地一度に刀抜きはなし打つてかゝれば受とめて。ヤア推參なるあごた骨切さげてくれんと。拂うてかゝる二人の相手。二人が達者の太刀さばき暫し支へて三重切結ぶ。地八郎も晴時も音に聞えし手利の若者。何かはもつて堪るべき眼藏人途に迷ふを。どさりと胸切鬼重も。フシ逃るが最期の後袈裟。詞八郎出來した。刀と共に。フシ心もをさめ。地用意がよくば淡路へ立越え大炊の君をばひ返し。宸襟やすめん尤と勇む。水魚の道ひろき大江の。岸へと三重へ急ぎ行く。地青丹よし奈良の都の一構へ。時めく館は長屋の王子兼て愛子の春日丸。王位につけん物工み。徒黨を集め取籠り叛逆遠逆のもてなしと。御達はしたも陰陽。フシつぶやきさゝやき立集ふ。地女中頭の更科がコレ瀧野殿。詞おさざ殿。今宵も亦お客が有るげな。地お座敷廻り庭廻り。廊下の燈籠燭臺の用意もしておかんせや。詞サアさう聞いた故掃き掃除。お客と言ふは又例の。豊成公の後づれ岩根御前。若衆様を育てた權柄顔。一人は又意地悪の廣繼殿。地山猿のよな顔付で。女子見る目のいやらしさ。あんな男の女房に成る者もあるかいなう。詞ヤア男次手に更科殿。此頃から又膏藥賣。萬能屋の勘六殿は。こなんと深い中さうな。地アノ中門より内へとて男の通ひは法度と有る。詞固くろしい此館で。どうして逢はるゝ事ぞいなう。サア其あはれぬ所をば。切なう逢ふのがほんの樂み。人目忍ぶが魂膽秘密。必ず沙汰してくだすな。地なんの互ちやあやかりものと。距てぬ中の傍輩どしッ打とけ語る折もをり。フシ日毎に。此處へ膏藥は吸出し。オクリ呼出し聲はり上げ。歌合萬能膏藥。きふウ、ハ。く。く。ウハ。ウハく。だいがめむいた。萬能かうやか。半田の町の灸代は。もみやはらげてはつてくりよ。ありやさ。こりやさ。ありやさこりやさ。半田かうやか。きうウ、ハウハだいがめむいた。晩にや必ず。もみやはらげてはつてくりよ

こりやさ。／＼。半田かうやかと中門のフシ内を見入れて立寄れば。地そりやこを見た更科殿。けんびきなりと何處なりと。取つて擦つて貰はんせ。此方は爰をちりがやくとフシ入るも嬉しく更科は。中門に立出てコレ徒男。詞けふもどこぞで後家娘の。肩ひねるて、乳ひねり。じやら付きすぎでの日ぐらしか。地悪性男の可愛いは。わしが因果と懐へ。手をさし入れてふつつりと。フシ詰めるは戀の手くせかや。詞是は迷惑今朝によつと。出がけから今迄に。呼こむ所が皆荒男。二十四五人もみやらはらげ。日くれぬ内にとつばかは。地顔見にばつかり来たのがわるか。往んでほつしり獨ねせうともたし掛ればフシ抱きとめ。詞人に物を言はせぬ様に。又ひんしゃんとなんぞいの。地今夜は往なさぬ用が有る。此方や浮氣ではないぞやとじつとしめられサア誰も。詞うは氣でかたい此館の。地内へ忍んであふものかと。フシとろけてかゝる折ふしに。詞岩根御前廣繼卿。地御入りなりと呼ばはる聲にハツト飛退き。後に／＼と更科は言ひ捨て一間へ行く後に。勘六は用水の。フシ桶のこかげへ身を忍ぶ。地程なく入来る太宰の大貳藤原の廣嗣は。豊成の北の方岩根御前を伴ひて。召にしたがひ參上と。廣間に通れば長屋の王子。くはん／＼と出迎ひ。詞ホ、早速の入来大儀／＼。地と座に着き給へば。兩人ハツト御前に手をつき。詞俄の御召御諒の程。推量りかね候と恐れ入つて伺へば。ヲ、いやさのみ驚く事ならず。其方達も存知の通り。我一子春日丸を天子に立てんと望みし所。なるともならぬともなま殺しの蛇繪言。べん／＼と果てぬ故。元興寺の玄昉を招き調伏の法を頼みしに。此度淡路の海邊より上りし觀音の尊像。不思議の靈佛にて。都近く有る内は我慢邪道の秘法は叶はず。彼の觀音だに奪ひ渡さば。土中に埋み封じこめ。即時に奇特を見せんと慥に受合ふ。地幸かなそれなる岩根。春日丸をそだてたる功によつて。辭退に及ぶ豊成へ。詞押付て後妻にやり置しは。地斯様の折の役にもと思ひしが時こそ來れ。詞其觀音は勅諭にて汝が繼娘中將姫が預り置く。地何とぞ密に奪ひ取り。玄昉方へ渡さば大願成就。春日丸を天子となさば。育てあげしそら造も威勢は益々。廣嗣とも／＼すゝめよと。仰に乗つたる詞の合點。詞御諒の通りいかてか違背と。

地すゝむる外道に吞込む魔王。笑を含みて岩根御前。詞ヲ、何が扱／＼。蓋ひ君のお爲といひ。いき湯女郎の中將姫。此頃からめつきりと。佛法歸依の地獄るとき。皆目への當事。地其返報に何がな彼奴が難儀の箱。毒薬こそ盛るまいけれ。詞繼子憎みは世界の慣ひ。成程其觀世音の尊像。地盜取つて差上げん。必ず廣嗣卿沙汰せまいぞ。詞何の何の。とても口へははいらぬ娘。笑止と存せず御勝手次第。地君にもさぞ御満足と見上ぐる王子は喜悅の眉。ヲ、目出たし目出たし然らば先づ。奥に入つて悦びの。酒くみ交さんいざ來れと。座を立給へば廣嗣岩根。それ女中方お銚子御盃と。呼はりながら王子に引添ひ。フシ奥の殿にぞ入りにける。ハツト地答へて。地共三方長柄と立騒ぎ。出づる中にも更科は。詞コレ二人の衆。わしや今宵は頭痛がして。氣色がわるい部屋へ引込みちつとの間。ヲ休みたいと言ふ事か。勘六殿の顔見ながら。頭痛がするは道理／＼。地氣遣ひなしにゆつくりと。帶紐といつて休まんせ。お上の御用はわしらが勤める。戀は互と氣を通しいざ。フシお酌にと入りにける。地更科やがて部屋に入り。忍び夫の通ひ路。火燵のやぐら炭櫃とも。そつと上ぐれば下より勘六。ヤレ窮屈やとぬつと出る。ヲ、おとましや此ほこり。いつかぶせやむ事ぞ。如何に會ひたい見たいとて水溜桶の後から。下屋を傳ひ忍び合ふ。切ない戀があるかいのと。スエスなれば。共に男も取付。詞商のじやら／＼が元手と成つた濡草鞋。一足飛に此季から無理暇とつて宿ばいり。女夫になろとは思はずかと。地言ふも嬉しく成程々々。詞半田の町と所は聞く。地そろ／＼着類もやつておこ。マア人の來ぬ内とフシひつたりめきし形振を。地見たか聞いたか岩根御前差足して差のぞき。詞更科殿／＼と。地呼ぶにはつと氣後し。蒲團を男に被せて置き。走り出ていや私は。詞今宵持病が差出て。傍輩衆迄斷たて休んで居ります。サアそれでも名ざしのお召し。見る體が奥迄ゆかれぬ。大病でもなささうな。地早う／＼と立よつて。手を取りかゝればエ、そんなら。參りませうと不承無承。是非なげ首に立上り。後に心は残れどもかんづかれじと足早に。フシ奥の一間に走りゆく。地岩根も引そひ行くふり見せ小戻りして部屋の口。オクリためらひるゝとも知らばこそ。地勘六蒲

團を身にまとひ。起上つてやれ恐やの。詞膏藥賣がつがない。戀なればとて此きびしい。館の内に通ひ道拵へ忍ぶ此方も大膽。扱今の婆めも、きついせはしない。餓鬼。あの様にやり／＼とぬかさいでも大事な用でがなあるに。まつとの所でちや／＼いれて。あた仰山に目をむいた。引とらまへてはつてくりよもの。地エ、憎い奴ぢやと部屋の口。覗く岩根と顔見合せ。ハツト驚き飛上りうろたへ廻り途を失ひ中門さして逃出るを。コリヤ／＼待てと呼留められわな／＼震ふ計りにて、フシ性根正體なかりけり。詞ヲ、きつい怖りやう。自はな。此お館の者にもあらず。横裁の妻岩根といふ者。あながち料める筋ではなし。氣遣ひせずとマア此處へと。地思ひの外なやはらぎに少しは息つき。詞さうおつしやつて下さるれば。ほんの地獄で佛様。地お助け願ひ奉ると手を合すれば、氣遣ひ無用さりながら。詞中門から此部屋へ其なりふりては行かれまい。地何處からどうして忍びしぞ。重ねて嗜む心なら。有様に言うたがよい。詞聞くも一ツは後日の用心。言はねば却つて心が置かれ。見遁しにも成りにくい。地生けつ、フシ殺したぐられて。地是にこりよの胴を据ゑ。詞重て通はぬ心から有様に申上ん。私生れ付いての悪性者。人の小娘後家妾。逢はれぬ所を忍び入るに鍛錬し。アノ用水桶の後腰板一枚外しおき。それから傳ふ部屋のしたや。火燵の内より這上る。地悪い事には才覺のならぬ事はないものと。語れば點頭く岩根御前。詞ハテ發明な忍びのしやう。まだ尋る事も有れども。人が聞ては爲にならず。幸ひ自ら館への歸りがけ。序に送つてくれがてら。地道々身の上話さぬか。詞何が扱／＼見遁しの御恩。地送りがてらにお館まで参りましたよ。詞ヲ恩を知つたは健氣者。地供せよ來れとかい立て伴ひ歸る邪仁の情。後は悔の種とも知らぬ男は後につき御館、フシをさして送りゆく。地かくとは知らず更科は。座敷を外し漸と。にげ出る後より廣嗣が。酔どれ姿のしたる目付。詞コリヤ更科の命取りめ。八幡惚れた叶へてくれと。地抱きつくをア、是申し。詞酒御機嫌と黙つてありや。爰まで來てのおなぶり。此館でそんな自墮落なりませぬと。地振り放されてひよる／＼。詞いや其法度はおれも合點。お目てた酒の酔まされに。日頃の思ひ出今日は

らす。地手を取つて更科が部屋の内へと引込むを。はてわやくなと擲放せば。そりや醒惚と又取りつく。あたいやらしいと突きとばす。はづみに廣嗣火燵の穴へがばと踏込む其上へ。ちやつと炭櫃で頭を押へ。我身をおもりに腰打かけ。フシほつと息繼ぎ見廻して。地扱は夫もとがめられ逃げて往なれしものならん。爰にゐては廣嗣が。立たば置くまい勘六殿の宿は兼々聞ておく。おれも逃げ退きあの人と。マア相談をと思案を極め。立上つて帯引しめ中門さしてかけ出づる。向ふへぬつと廣嗣が。桶のあひより這ひ出て。顔見合すれば更科はハツト驚きにげこむを。飛かゝり取つて引伏せ。詞ヤア合點のゆかぬ死に女郎。おのれが部屋の火燵の穴へ。落ちて向ふの明を目當はひ出たれば中門の。用水の蔭察する所。盜賊ならぬ忍びの脱け道。何にもせよ横道女。地腕を廻せとあらけなく。取てしめたるひたたれの露の、フシ命のしぼり繩。地危き所へ。地共。詞廣嗣様／＼急のお召ぢやヤレはやう。地御前へお出と聲々に呼出れば急とは何事。詞コリヤ／＼兩人こいつを預る。身が來る迄に必ず逃すな。地急度申し渡したとフシいひ付奥へ走り行く。地二人は驚きヤア更科殿。なんとして縛られてと不審立てられさればいなう。詞先刻に奥で見ての通り。あの廣嗣が自を付廻しての無理戀察。聞入れねば擧句の果に。縛つて置てと無體な縛め。地ちやつと解いて逃してたべと。差付くれればラどれ／＼。詞どうであいつが唯は置くまい。マア何方へなと隠れさせと。地何心なく引ほどけば。ア、忝し後頼むと。フシ走りつまづき遁れ行く。地後に二人は見送る計り奥より廣嗣聲高々。詞不届女め直御詮議と。地王子を傳き立出て。庭見廻せども更科が。姿見えねばやがて立寄り。二人の婢左右に引立て。詞コリヤ今汝等に預け置いた。繩付の女めは何國へ逃せし行方ぬかせと。地目通りに突据ゆれば。詞イヤ更科殿はついあそこへ。呼んで参ると立上り。地逃げんとするを王子は透さず飛かゝつて。二人が鬚引つかんで引戻し。詞ヤア丸を騙り逃げ退かんとは。推參至極の女ばらと。地兩の小脇に引付てフシすつくと立たる時しも有れ。地表の方に足音高く。詞津の國菅屋の時澄。御注進と呼はつてあはたゞしく參上し。今朝四つ時豊成の雜掌晴時八郎。兩人急なる體相にて。大

江の岸より淡路舟に打乗り彼國へ立越候。兼て左様の事あらば告知らせよとの仰によつて。地早打にて御注進と。聞くより王子は面色あらまげ。詞ヤアそれこそ必定淡路島の。大炊の君を呼返し御位譲らん内勅にて。豊成が下人に云付け差下せしに極つたり。地何時か我子春日丸に御位譲の沙汰あらん。詞是より一戦を催し天皇をぼつ下し。帝位を奪ふ軍の首途。地血祭りは此女ばらと。首引ぬいてかつばと捨て。詞こりや〜時澄。此近邊近郷を駈廻つて諸武士等に。王子が錦の籠を立つる。地館へ詰めよと觸をなし。扱淡州へは飛脚を立て。我領分の百姓共に。詞流人を奪ふ豊成が二人の下臈晴時八郎。搦め捕つて大炊の君も密に刺殺せと。地委細に認め廻文狀追々に下すべし急よ。やつとせり立つれば。承つて芦屋時澄御前をフシ立つて駈り行く。地廣嗣愚闇の肩に鍔よせ。詞君の御威勢盛なれども。萬一官軍同心なくば如何あらんと言はせも立す。ア、愚か〜。それにこそ方便あれ。丸は天武帝の曾孫なれども。態と三公同位に連り。錦の旗を預りゐるは。かゝる時節に軍勢を集ん爲。地イデ〜王子が計略見せんとフシ一間に駈入り。地錦の旗かい込んで躍り出たは竿高く押立て給へば。コハリ靡き。隨ふ軍勢共。打連立つて門外に馬。乗放し聲張り上げ。詞只今王子の御催促。錦の御籠立てしと聞き馳せ參ぜし我々は。三笠の冠者廣宗木辻の九郎定俊。木津の左衛門手具の軍治花蘭太郎同次郎夜中急なるお召故六具堅むる隙もなく。馬上にて上帯しめ一散に駈け參ず。地手勢々々は後より追々。御出陣と呼はつてフシ御前近く相詰れば。地王子は勇みの色をなしサア。詞天位は心のまま。地我に敵對ふ月卿雲客かたはしにぼつ立かり立。流罪死罪遠島左遷。ちくらが沖の水層となさん勇めや。勇め廣嗣と。歩みの板をどう。〜。どつと踏み鳴し。勢盛んに見えたる所へ。勅使と呼ばはる寢耳に水。思ひがけなく王子廣嗣。見やる向へしづ〜と。横萩の右大臣豊成。禮儀の衣冠恭しげに。錦の覆かけまくも。忝しや神寶。八咫の鏡を守奉り。立入り給へばほつとりと。雷やみて澄む空に。月の出たる如くにてフシ上座へ直り。詞正しく。詞勅使の趣餘の儀にあらず。兼て王子の器に任せ。春日丸に相違なく。御位譲有るべきとの諭言。萬一疑心もあらんか

と。三種の隨一。八咫の鏡を先づ證據として相渡さる。春日君御位につき給へば。王子は則ち上天王。又御。御の鏡の籠は三公の役。今日より某預り申せとの勅諭。地さあれば錦の御旗と。此神鏡を引替に。お渡しあれとフシ述べ給へば。地悪氣の王子から〜と笑ひ。詞強敵盛なる時は偽物をもつて欺き。六國起つて子貢が辯で納めし計略。其手は食はぬ豊成。八咫の鏡と偽り。しらにせ磨の姿見。ほつかりとつかまさうとは洒落臭い謀。地いで鑄物師が荒細工。現はしてくれんずと飛かゝるを掻くゞり。神鏡ふり上げ王子の脊骨。はつしと打たるむいきの手の内。是はと駈け寄る廣嗣も直にのめらす鏡の側杖。互違に。ぶつてぶち据ゑ。威勢を見せてもひるまぬ兩人。詞勅使と思つて少しは用捨。地掴みひしいでくれんずと。躍りかゝるを豊成やがて神鏡の。覆を取て差上れば。アラ有難や八咫の鏡。天照神の今爰に在すが如き光に恐れさすがの。王子も廣嗣も思はず後へたぢ〜たぢ。庭に控へし諸軍勢。フシ一同にはつと。蹲る。地豊成御聲高らかに。詞謀計は眼前の利潤と言へども。つひには神明の罰を蒙る。勿體なくも日の御神讓置かれし御正體。にせ物と言ふ神罰によつて。天照太神不肖の豊成が手を借りて。懲しめ給ふと。フシ思召めせ。地王子も正しき王孫なれば。神鏡の威徳のぶるに及ばず。詞水清からんとすれども。泥砂に濁すといふ金言邪念をはらひ。地神鏡へお詫あれと鏡にかけたる諫言に。恐れて王子も壘に頭を下げ。詞ハ、ア誤つたり〜。我子春日を御位にさへつけ給へば。此上何か別心有らん。地立歸つて天皇へ宜しく勅答頼み入ると。始てやはらく實義の詞。實に神國に著き。八咫の鏡の御威徳。有難くも亦。恐れ有り。地豊成王子を席にすゝめ。其身は遙に押さがり。詞不肖の臣が諫言に王子の御心やはらぐも。是もつて天照神の御恵と恐悦至極仕る。地此上は御旗と神鏡引がへに御渡しあれ。詞ヲ、何かは違背あるべきと。地錦の旗を出さるれば此方も頓て御鏡をうや〜しく差し渡し。フシ旗を受取立上り。詞ヤア〜諸軍の面々慥に聞け。王子の若宮。春日丸へ御即位成るぞ。此豊成は輔佐の臣。則ち御旗を預かつたれば。武官の棟梁。大臣が下知を受くるや受けぬや。返答あれとの〜しり給へば。地皆一同に詞を揃へ。

詞我々は代々の官軍錦のはたの有る方より。外へは付かぬ金鐵武士。地御疑下されなと。平伏すればホ、さもあらん神妙々々。天下泰平國豊か。春日天王御治世と長屋の王子へフシ暇の式禮。地コハ御苦勞と廣嗣が。輕薄にのる互の辭儀。いざ諸軍勢此方へと引連れ。歸る智勇の臣。大義と見送る王子の心。やはらく光影清き。八咫の鏡の御威徳。惡の報のまはりも早く玻璃の。鏡の曇を澄す水かがみ。濁にしまぬ豊成に。御旗の威勢十寸鏡。あら氣を。押へる臣下の鑑天下。一とぞもてはやす

第二

歌浪のあはちの瀬にすむあ。はびや。海女が。ヨンヨ。さんやとら。ねばせて。そだ。つ。人のフシ育ちも。二神の情のしづく淡路瀧。左遷の君を牛の背に。小オクリ乗せて。口取る百姓の娘が友の磯遊び。そくはぬ連と見えざるも。フシ流石童の徳ぞかし。地大炊の君は餘念なく。これ／＼おこなあれを見や。詞今日は向ふの山々が。とつくりとよう見え。あれが四國と言ふのかや。ヲ、ほんに日和がよいぢやげに。福良の沖に霞もなし。地あんたが讀岐の金比羅山。此方が阿波の南がた。歌南がたには名所が七つ。一に大龍寺二に鶴峯三に。藥王寺四にしのへじま。五には中田の櫻が馬場よ。六に丈六。中津が岸よ。七に灌頂。灌頂瀧からの落くる水が。先にあたりて朝日の頃は。霧とまふこそ名所なれ。コレしようがへ。ナホスフシ歌の通りと教ゆれば。詞ヲあの灌頂の瀧の水。五色にわかるをいつぞ又。朝見に来うぞやサアおこな。地濱邊のしやれ貝拾はんと。フシ下りさせ給へば。濱松に牛を繋いでどりやわしも。拾うて上と吹上の。浦の砂道しやなくと。フシ磯に馴がひかきわくる。地大炊の君はともすれば。戀しき方の名にし負ふ。都がひをば。フシ取上げて。入れる袂の錦がい。長地故郷遠き身なしがひ此嶋がひの草の家になてしこがひと小がひ迄。もりなぐさめの供遊び。歌海の花がひ。拾いて品よく。いろかひ姫がひ。いとらしいなりふり。數の貝取

こづまにな。サヨヲ、さりととは／＼。なうさて。みだれずまきのます徳がひ。鶴、雀のかひもよし。すがひやさしや。あいやらさらとんと。とムんと友の千鳥がひ。濱千鳥。あさりて後へすだれがひ。とムんととんと溝がひに。ころび苜蓿。フシヲいたやがひ。フシ沖の鹽がひにつこりと。笑ふつぼみの櫻がひ。君の恵みの花がひや。千草のかひはつきせじとフシひろひ。渚の日向ぼこ。地壽命薬と是もまた。出かけた親仁は庄屋の福兵衛。諸事を我慢な息子にまかせ。磯邊あるきにおこなを見付。とろ／＼眼元でこりやおこな。詞むごいぞよ。／＼と。フシしなだれ寄れば。詞ヲいやらしい又しても。白髪頭を振廻して。孫に持ちそなおれにまあ。かなへて呉れの惚れたのと。地こちやそんなこた知らぬぞやと。ひんとしられてサアそこぢやて。詞其知らぬ所の思ひれ一ばい。磯の小しどめ。ほつちりと。地言はして見たいと。フシ抱き付けば。詞ア、いやこれなぶつてたもんなと。地振放して立のけば。詞テモ仰山な。剃立頭で峰追ふ様に。いつ言うてもびんしやんと。地どうでうそぢやと思ふけに。文でくどこも書く手は持たず。口で言うては向ふし。詞矢先にかけても見たし。せんばう盡きて此方の村の。道場の新發意こまづけて。諸々の雜行ふり捨て。たゞ一心一向に。おらが心の有たけほたけ書て貰うたこりや付け文。地これ見てくれと懐より。狀さし出せばヤレをかしやよう。詞子供に爺が付け文とは。地老に惚れたといふのである。道場の坊様頼んでの。よう後生願やとフシふり切れば。地大炊の君も聞かぬふり。福兵衛はせいてこりやおこな。詞老には惚れぬわごりに惚れた。ほれた／＼。ほんぼんに。本惚れ。／＼うそぢやない。此文章のうまい所。讀んだら汝もいやぢやあるまい。地こりや見てくれと封じめ切り。つき付ければヲ阿呆らしい。詞そんな物まあかどなかて。地讀まる、物かこちや知らぬと。のけばそしたら持つて往んで。詞こつそりと見て返事をするか。地いやむつかしいと逃げ廻る。ついて歩いて無理矢理に。文をおこなが懐へ。フシねぢ込所へ歩きの久助。息を切つてこれ庄屋殿。詞王子様より廻文狀。都の時切早飛脚。地何ぢやか急な事さうなと。聞いて悔りエ、邪魔な。詞無筆のおれを知つてみて。何故又息子の銀兵衛に見

せぬ。イヤ銀兵も留守ぢやげに。さうぢやけに持つて来た。使の人が急ぐげに。地じやけに／＼と言ひ捨て。フシ廻文渡し歸りける。詞なんでもめつたに周章てる奴。めんやうおこなを口説きかける。所へは邪魔がつく。必ず其文よう見てくれよ。ヲ慰みに見てやるぞ。地そんな阿呆を言はずとまあ。其廻文を見やらいでの。詞ヲ此廻文も見ざるまいと。言うてからがおら等は無筆。持つて往んでも息子は留守。ヤア幸ぢやこりやおこな。むつかしながらちよつと是。呼んで聞いて賜らぬか。ヲ地そんなもなれ見てやると。立寄り取つて封じめ切り。讀めるか知らぬと聞きかけ。詞エ急ぎ遣はず廻文の事。ハ、ア讀んだり／＼。じやが急ぎとは何である。地次はどうぢやとすり寄れば。詞一つ。したりあの一つも讀めるか。こりや我折れ。ヲきよと／＼とやかましい。まあおつとせて聞つしやれ。ヲ、さうしましよ。地呼んで給もとフシ小首傾け聞かたる。詞一つ其地にはある流人。此度横秋豊成が家來に言ひ付奪ひにくだす。左様の輩見付次第。搦め取つて都へ引くべし。將又流人大炊の君は。密かにさし。エ、ひそかに。／＼。ヤアどうぢや。サア密にさしや。さしなんと。エさし容し／＼。地目出度くかしこと紛らして。たゞんで退けばハレ滅相な。詞廻文に目出度かしこと書てきた事。神武此方有るものか。てもどぎ／＼したどんな讀みやう。どりや其廻文こちよこせ。地いやこりや此方へ持つて往ぬると懐に。入るればこりや／＼それなうては。村中へ觸まはされぬ。又道場の坊様に。讀んで貰はにやわかちが知れぬ。よこせ／＼と追廻り。何なく捕へ懐に。フシ手を差し入れて取返し。地ヲ此廻文に書て有る大炊の君とは其わつば。詞何にもせよ其奴が事。地連れて往なうと寄らんとす。イヤ此おかたの事でもの。さし許すのなら此方から許す。詞まあ其廻文とつくりと。讀んでもらうて知らしにござれと。地言ひつゝ牛に大炊の君。乗せて口とり一散に。オクリ後をも見ずして。フシおひかへる。地諸譯知れば福兵衛は。押しても言はず首傾け。詞ハテ面倒なさし赦せ。赦せにさしとは何の事。地とかく道場のぼん様に。讀んでもらうて安心の。決定せんといにかける。向へとはか息子の銀兵衛。詞コレ親仁殿何してをる。村の歩に聞て来た。

廻文は何事ぢや。地どれ見よ／＼と立寄れば。詞ヤイ其處な者どこのら／＼。見苦しい村中の娘。子供を捕まへて。又じやらついでるよつたな。たしなめよ／＼。ハアレせか／＼と何ぢやいの。親の意見を受ける様な。銀兵衛ではアごあらぬ。ごたくばらずとどれ廻文。地きり／＼此處へだはれいなうと。決め付けられて又脱むか。詞エツエおのれはかれになりをろぞと。地廻文渡せば引つ取つて。詞こりや封が切つて有る。もう誰ぞ讀んで見たか。ヲ、サ。急なと聞た故。隣村の磯大夫が娘のおこなが居合して。讀まして聞たが。肝心の所てよみがくだらなんだ。地サア讀め聞かんと手をあざなへ耳を濟ましてきくフシ親仁。地息子は聞いて扱なんぢや。詞あまり思ひに堪へかねて。一筆申し／＼。こりや／＼銀兵衛。おこなが讀んだはさうぢや無かつたぞよ。ハレまあ後を開かれいなう。エそもじを思ひ初めし此かた。寝ても覺ても面影が。眼にちらちらとコリヤたはけ奴。さつきに聞いたは流人の事ぢや。おのりやこりや何處その小娘に。性根を抜かして戯言はくな。エ、憎い忤奴。どりや此方へおこしをれ。道場の坊に見て貰う。デモさう書いて有るが定。なんぢや元の雫末の露よりいとやすく。おちて靡くの返り事。是はしつかい骨上のお文様のやうな事。どうやら道場の新發意の。地手によつたと聞くより親仁が俄に轉倒。詞ア、いやそりや違つた。／＼と。地あせればハレまだ何のちがを。詞さう書て有るもつと讀も。戀に焦がれてこりや讀むな。ハアテ讀まいて事がひるものか。イヤ讀まいても事がひる。地ひる／＼と姪にしほ。フシ消えも失せなき風情なり。地銀兵衛も不審顔。詞何様にも廻文状に變つた文言。戀に焦れてア、こりや／＼。もう讀んでくれな。狀が變つたエ、どんけなど。地もがけばそんな事さうな。序に奥の宛名を見よと。開きかゝればコリヤ開な。地あけな／＼と手に纏り。詞宛名を見てたまるものかと。地千々になりたるフシ折からに。地歩きの久助又駈け來り。詞これ／＼庄屋殿都から。又廻文の追飛脚。直に會はうと待つて居る。急ぢや／＼。地と苛だてに。親仁は幸ひ文引たくり。急なら久助銀兵衛を。ヤレ連て行けこりや急げと。せかぬ息子を無理矢理に。押し立て。引立て。三更連歸る。地蒼海の中に一つの放鳴。淡路の國に年を

經し武嶋の翁磯大夫。磯邊船手のゐばからひ村の支配も年だけの。役目を受けて田島は大かた當て小仕舞に オクリ寢
 覺も。樂な百姓の有べかゝりのまばらやに。大炊の君を育みて。スエいたはる心冥加よく。老の入前ゆつくりと。圍
 爐裏を伽の。フシ手煎じに。フシ千年をのぶる。折からに。地隣在所の戸次右衛門島しまうて歸りがけ。詞磯大夫様
 お内にをるか。エ戸次右なんと思つて。サアのぼらつしやれ茶もわいてをる。一つおまそか。イエお構くんざります
 な。少御無心に來りました。ハテ無心とは何てかの。イヤ何ぢやれ別の事でもごんざりませぬ。あんたの六兵とつ
 れなうて。明日夜の内から伊勢參り。へ、それぢやけに船切手。書いてもらをと存じてと。地腰かくれば。詞ヲ、易
 いこと書ておまそ。寒空に向いてから參宮とは奇特々々。地信あれば徳あると硯を引よせ墨すれば。詞イヤモそりや
 おつしやるやうなもの。御神様のおかげでやら。地今年も作はどうやらかうやら。世間並より實入も多し。よい綿も
 ふきます。詞ぢやけれど。近年王子様の領分になつてからめつきり取めがぶいけに。此方とがやうな下作は。たま
 るもんぢやごんざりませぬ。サアそれで田島借す者も難儀でござる。扱船切手は六兵と二人か。イヤあのわる親子う
 ら親子。四人連れてごんざります。ハレよう子供を參らすなう。サア是も兼ての願ほどき。足らぬ所は杓ふつて。へ、
 報謝參りに致します。地ヲ、其心が納受が深いと。挨拶しながら切手を認め。フシ印判出して押す所へ。地隣在所の
 歩きの久助。息を切つてこれ戸次殿。詞扱たんねたやれちやつと。地村に大きな公用で皆寄合うてぢや。ゆつくりと
 何して爰にぢや。さあ〜とせり立てられて。詞いやおらは參宮をするけに船切手。ハアテ參宮所ぢやない。皆待ち
 兼てぢやヤレござれ。地ナウやれ早うと引つ立つて。フシ喚きちらして連歸る。地磯大夫は船切手。持ッてうつそり
 ハレ急な。詞公用とは何事ぞ。地心許なし此切手は。又とりにわしよ迄と。懷に入れ表口。フシ見やる向ふへ娘のお
 こな。大炊の君と濱邊より戻る心は斑牛。小屋に繫いて息せきと。歸れば父はやれ娘。詞外へつれまし遊びに出たら。
 ちよつちよと何故に戻らぬぞ。おらは隣の福兵衛が村に。何やら公用で寄合ふけな。地いて聞て來り留守せよ〜と

と。並上ればイヤ父さま。詞寄合は知れて有る。此事であろまあ是を讀んで見やんせ。地どりや〜何ぢやと取つて
 開けば。詞都より長屋の王子の廻文狀。地一々讀んで呆れし顔色。大炊の君は打しほれ。ナウ其文見んと立寄り給へ
 ば。詞イヤ御ろんじやる物ではないと。地隠せば御目に涙を浮かべ。詞最前おこなが濱邊にてよみしをあらまし聞い
 たるが。王子の方より我身をば失へと有る事成るかや。地豊成が言付て奪取に來るとは如何なる企か恐ろしと。稚心
 におろ〜と。フシ御物思ひの御顔ばせ。地見るめ哀れと磯大夫力を付けて是まうし。詞此廻文に書いたやうには。
 あまうまいなんのさせましよ。氣遣ひなされなお前の事は私が都へ上つた時。伯母御天皇様のお直の詞に。大炊の君
 をいたはり不便を加へ。息災で置いてくれ磯大夫と。勿體お頼。案じさつしやりますな。如才もなう守そだて。地御
 成人させますと。受合てとつばかは。戻ると其儘お前様を。よその村より呼取り。お隠ひまうすからは。都へとて
 は歸さぬ分別。詞もと此淡路の一國は。おのころ嶋と申して惣日本の國の始り。何とぞゆく〜此嶋に内裏を建て
 てお前をば。淡路の廢帝様と仰がんと存ずるから。村中の下百姓にもあらましは吞込ませ。若もの事が有る時は。ア
 ノ水太鼓をどん〜と。打つとさう〜集る筈。王子からでも豊成からでも。萬人して奪ひに來うが。此國へ他國か
 ら入込む事はかまはね共。地いにしなには此磯大夫が。船切手と言ふ物を書いてやらねば一人も。去ぬる事ならぬ離
 嶋。フシちつともお案じなされなや。地こんな廻文ごくには足らぬと。ずん〜に引裂いて圍爐裏へほりくべ。詞こ
 りや娘。したが濱邊の遊び歩行は。隣の在所ぢや遠慮せよ。萬一お怪我をさせましては。天皇様に受合うた詞が立ず
 りや娘にも又。ひよつと傍杖くはそも知れぬ。地内で遊べば氣遣ひないと。聞て娘も顔色なほり。大炊の君は胸落付き。
 ヲそんなら嬉しい磯大夫。今から濱邊へ此方らは行ぬ。奥で遊ぼと稚氣に人目を恐れフシ入り給ふ。地御心根のいた
 はしと。フシ見送る折節表の方。けはしき足音何事ぞと。言ふまほどなく旅姿大童なる侍が。息を切つて内へかけ込
 み。詞某は旅の浪人。九州邊へ奉公の目見えに下る。船中にてふと口論をしだせし所。乗合の騒ぎと船頭が相手同士。

磯へ上りしが相手は多勢。漸く切抜け此通り。地委細は緩々後にて申し出さん先づ。かくまうておくりやれと。せきにせいたる詞に當惑。詞ハレとでもない百姓の。年寄つた身で。侍衆の喧嘩の尻が持たるゝ物か。地かくまうてとは思ひも寄らず。外人をお頼此方や知らぬと。相手にならねば。ヤレ情ないなう親仁。詞家を見掛けていふ無心。隠はれずとも片陰に。地暫く姿を隠したし。事急に及んだと。フシうろつけば。詞ハテ迷惑。つい影隠す計りならそれ娘。ちつとの間背戸口の。灰小屋の片隅にても隠して進ぜ。いかしやませと。地聞いて悦び然らば御免。娘御頼むと打連立ち裏口。オクリさして。忍び入る追ひつづいて駈來るは。言ひしに違はず相手の侍。ずつと踏込みこりやく親仁。詞狼藉者をつけ込んだり。何處へ隠せし是へ出せ。地庇ひだてせば汝もゆるさぬ。さあどうぢや。卑怯者めもてさらぬかと。拔身を引提げ鐵壁も。フシ突抜かんずる勢ひなり。詞ア、是卒爾なお侍。そんな人は爰へは來ませぬ。門違へてかなござりましよ。地はれやれめつそなお方やと。そらさぬ顔つきヤア僞るな。詞慥に此家へつけ込んだ。地諍ふからは家探せんと。フシ奥を目かけて入らんとす。立塞がつてそりやならぬ。詞百姓の茅屋は武士の城郭。知らぬと言はゞ足下の。明い内にとつととお往にやれ。地かう出した手に十人力すわ骨達者な堅親仁村て口聞者者共。土に付ぬは恐くないと。フシ大手を擴げふんばつたり。詞ヤア面倒なやせ親仁。地妨して怪我まくるなど。突飛ばされていや申し。詞かう先づ力んでとめするも有様言へばお爲づく。高が途中の振がかり。見ず知らず同士口論さうな。調べぬいて手柄にならず。地御主人持なら私の端喧嘩くらんで討果すは。扶持知行を盗むも同然。御浪人なら出世の妨。相手が逃げたりやおまへの丸勝。御一分は立つと言ふもの。止めるを機にお歸りなされ悪い事は申さぬと威して行かねば理詰てかゝる。武嶋の翁が老功の。詞にハツト。フシ氣のつく顔色。地小首を傾け。詞アツア實に誠に。時の張合若氣の至り。地さうぢや。近頃危忽と。フシ刀を鞘に納むれば。地翁はおち付きヤレ嬉しや。事になつては所の騒と。氣の毒餘つて出次第に慮外がましき強意見。聞入れ給ふは流石に武士がた。詞御了簡遊ばして。スリ

ヤお歸りなさるゝか。ハテ了簡を致さいでは。貴殿の詞理に當り。釋迦孔子にも劣らぬ教訓。地過分々々と過つて。改め直す打とけ詞。詞扱御亭主氣の毒は。兎や角せし内日も晩じる船は遙に帆かげも有るまじ。地殊に此國不知案内。近頃申し兼たれ共。一宿させておくりやるまいか。詞イヤそれは。地と言はせも立てずア是さ。詞武士が一旦了簡せし上。たとへ相手の侍が。今爰へ出て某が。地頬を踏むとも言ひ分なし。刀冥利と金打し。餘儀なき仕掛に。フシのつひきならず。詞ハテそんならさむくとも。此一間で明してござれ。地百姓の事なれば何進せませす物もなし。詞いや一夜の宿が大きなお情。地必ず。お構ひ無用。此煙草益お借申すと提げて。フシ一間に入りけり。詞ハレ迷惑な押付客。地ちやつと相手の侍を。往なしてしまふと入らんとす。奥よりおこなが膽礬色。すた。聲でノウ父さま。詞さつきに隠れた侍が大炊様の側へいて。何やら私語き無理やりに。連れまして裏道から。地逃げたと聞いて南無三寶。都の忍びに騙られし今。此一間へ泊つたやつ相ずりめに極つた。村中集どけはかさん。詞それ。娘太鼓うて。地アツトおこながよせ太鼓。けはしく打てば何事と。コハリ在所が追々にかかけ着れば。磯大夫無念の面色。詞アレ村の衆。隠ひ置いたる大炊の君を。騙めに盗まれた。此國七里四方の外。某が船切手。書いてやらねば渡海はならねど。地騙されたが腹が立つ。詞まだあの一間に。相ずりの侍奴が残つて居る。地憎さも憎し存ぶんに仕やうが有る。立寄つてくゝし上げて下されと。頼めばまつかせ何にもせよ。庄屋殿を蕩させては村中の名折になる。我組伏せん引くゝらん。どりや細引よ荒縄よ。地なうたが早いと。フシ奪めれば。地障子の内よりねだれのどす聲。詞是々いづれも。此方左様の者ておりない。武士ておりやるぞ侍ぢやぞ。卒爾召れて後悔有るなど。地聞てせきたつ磯大夫。詞ヤア落付き詞のゆすりかけ。武士でも鬼でも高が一人一度に掛つて障子を蹴放し。地引ずり出してぶちのめし。腕ねぢ上て盗人の。法の通と言ひ捨に。恐がる娘の手を取つて奥の一間に。フシ入りにける。地身拵して百姓共。さあと聲かけフシ立向ふ。地障子をくはらりと内より開き。煙草益さげのうのうと。出る姿は唯者ならず。人を囁とも

思はぬ手強さ。むさとも寄られずさうぐが。フシ唯わあ／＼と聲ばかり。地此方は猶も不敵のゐずまひ。煙草の煙を吹きかれば。詞イヤなめ過ぎた此煙管と。操にかゝるを小手なぐり。飛のく後へ双方より。取つたとかゝる兩拳。胸どりもぎの車投げ。地もんどり打たせば残りの百姓。詞ヤア腕づくなら氣が出来た。地面白なつたと入代り。立かかるを事ともせずもつて開いて。三重詞へばた／＼すな。江戸とがさうな相手を取つて伏せ。右へ投げのけ左へのらせ。コハリ邊へよせねば手捕にならじと。皆起上つて得物の農具。手ん手に取つたるからさほ打。詞シヤ面倒なと抜き放す。地劍に恐れ一度にわつと。逃ぐるを奥へ追込んで。フシ出る後から又むらがり。しつこうかゝるを叶はぬふり。ついと逃出て門口の。フシ木蔭に忍べば。遁さじと。追かけ出しが見失ひ。詞どつちへ失せた其方か。地こつちか遠くは行かじと。フシ當どもなしに追うてゆく。地やり過してそつと出て。立歸つてうそ／＼と。用有げに奥見廻し。フシ又一間。にぞ隠れる。地騒ぎに恐れにげ廻る子に付き歩いて磯大夫。下知さへならねばコリヤおこな。詞足手纏ひぢやそちはまめ。隣村の藪のきは。地戸次が邊りへ退いてるよと。押やられておづ／＼と。表へ出しが駈戻り。詞ヤレおつとろしやよう是とつ様。大炊様を盗んで往んだ侍が。肩ふり歩行て来るぞやと。地わなき震へば親仁も共に。氣を取のぼして。詞どりやうせるか。待て大騙めどうする見よと。地あはてる心をあはてぬ身振尻。引からげつ。おろして見つ。フシ駈り廻つて。佛壇の下より取出す大威し。一尺五寸男の魂。是きめたればもう氣が据る。詞何の滅多に恐ろしがるなど。地娘をかこひどつかと坐し。膝のふるひを押へる力み。弱身を食はじと。フシ待かけた。り。地程なく来る以前の侍。上下立派に黄金を。並べし臺を目八分。禮儀亂さずしづ／＼立入り。こやちばり返りし翁が前に恭しく臺を置き。諸手をついて詞を改め。詞拙者めは。都横萩右大臣豊成が雑掌。左京之進晴時と申す者。後より喧嘩の相手と偽り入り込しも同傍輩。久米の八郎景勝。主人豊成内勅を蒙り。大炊の君を密に迎ひ歸るべしと。我々兩人に申付け罷下し候へども。此國は長屋の王子の領分。容易は渡されまじと。穢敷かかき貴殿とも存せず。よ

しない騙事を申し入りこみ。まんまと大炊の君はばひ取り。立歸らんにも船場にて。武嶋の翁磯大夫の。切手なくては船に乗せじと申すに付き。これに困りし一つの難儀。又一つには大炊の君を。是迄いたはり御育み下されし返禮かた／＼。輕少なから黄金拾枚。御受納有つて恙なく。都へ御供申す様船切手を賜らば。地莫大のお情と。スエテ頭を。下ぐれば磯大夫。返答もなく佛頂面。ずつと立て白木の臺ばつし／＼と踏くだく。音に堪へぬ短氣の八郎。出んとするを晴時がハアテこりや。詞こりやお腹立尤もなれども。ナそこを了簡。堪忍のならぬ所をナ翁殿。地幾重にもお膝を抱くと。一間へ聞する詞と知らず。磯大夫目を刺だし。詞ヤア推參なる大騙め。たとひ偶を拵へて。大炊の君を盗まずとも。何故あけすけにて連歸らん。また其上に此贈物。金に目がくれ船切手。書いてやりそなおれぢやと思ふか。一度ならず二度ならず。言語道斷しかたが憎い。出やうが悪い。出直して大炊の君を連れてこい。此磯大夫は。王子様の領内に住むお百姓。豊成殿の下人めらに。禮物うける覺えは無い。今一人のどろばうめも。村中の者共を。投げたり踏んだり暴れる。此方も意地ぢや。此由を王子様へとつくりと。注進申さにや往なされぬ。それ迄うぬ等が命を繋ぐ。地かてに此金持つてうせねと。蹴散らし蹴とばし娘よ來いと。引連れ奥に入りけるは。フシ若々しくも理づめと諛。返答なければ久米の八郎。堪へかねてとんで出で。エ、まだるい晴時。詞先達一間で聞けば。切手なくては渡海ならずと。ぬかせし故ひつ捕へ。書かして後より追付んと。思ふ所へそなたが来て。見事取るかと控へてゐれば。存外すがいな目に會うて。どんくさい何うつかり。地いで踏込んで慮外のゑだ骨。ほつき／＼折ゆがめ。首筋押へて船切手。書せて見せうと駈込むを。引留めてコリヤ。八郎。詞郷に入つては郷に隨へ。短慮出しては仕畢せられぬ。大炊の君を人知れず。地背戸の岩屋にお隠し申す。汝は急ぎかけ付て守護申してくれ某は。一應も再應も。翁をなだめ船切手。受取る迄は此家は放れぬ。フシさあ／＼急げと押やれば。詞イヤそんなこたまどろしい。其方お側へ往いてたもれ。地なんの書かすに手間隙いらぬ。おれが残ると意地はれば。詞ハレ呑込の悪い男。あら立て／＼は事の破。おれに任して岩

屋へ急げ。地かういふ内も大炊の君に。凶事ある時は兩人が。始終の工面も皆徒事。詞忠義にならぬが其方は。しめし合せを用ぬ氣かと。地たしなまされて不承々々。詞サアいくはいの。地行くまいといふにこそ。詞おりや行く程に随分早う船切手書しておぢやれ。地晩いとおれが來たうなる。エ、もどかしいと呟き。岩やを指して。フシ急ぎ行く。地晴時は首尾見合せ。又折入てなだめる思案と。散らせし黄金取集め。オクリ一間のへ内へ入る後へ。地くる歪み頼となり村。庄やの福兵衛が一番子。繪綱の銀兵衛のさばり聲。詞磯大夫殿お宿に居るか。會をぞや會をぞや。地公用ぢやきりく出られと鳴り込めば。詞ナニ銀兵衛か。公用とは。地なんぢやなんぢやと磯大夫。立出づればどさりとへたかり。詞イヤ何ぢやれ別の事でもござあらぬ。是の内に隠うて有る。流人のわつば大炊の君を。王子様より。ヲくどくと言ふに及ばぬ。今日此方の親仁をたらし。おこなませが。すりかへて戻つた廻文。此方も讀んで見たである。其後から其事を追々の早飛脚。村中をよせ談合して。おらが首うつ管にきめた。連れて往んでしやつふりと言はさにやならぬ。もし意地ばると。地何處てなと仕舞ふてのきやけうと。詞コレ脇差用意して來た。何處に居る。地出して貰をと膝まくり。フシかた身をゆするぞ憎手なる。地正直きなりの磯大夫。つくろひもなく氣の毒顔。詞サア何如にも今日の廻文見た。したが其大炊の君はたつた今騙にあひ。盜まれて是にはおはせぬ。ヤなんぢや。此處にはをらぬ。居らぬで済むか。よその在所にへちまうて居る物を呼びよせ。大切さうに隠まうて。今殺せとある廻文見から。盜まれた。そんな事くふ銀兵衛ぢやない。手めはあかつた四も五も要らぬ。出した。地くと。腰を。つかふ詞も意地くねわるく。蟲に障ればハアテ扱。詞盜まれたに違ひはない。地うそなら家探して見やれ。詞ム、家探しせよとは丈夫な出様。それで聞いたと割符が合ふ。袴を着た侍が。金持つて來たのは何ぢや。わごりやわつばを金にしたの。棺へ片足ふんごんで。地慾頼なへび親仁サア。どこへふけらした。フシ其先聞こと摺よれば。詞イヤそりや知らぬ。地知らぬとは横着など。胸元掴んでコリヤ親仁。詞金をわぐねてふけらして。ぬつくりと此顔で。騙られた

と此口から。ヤ此頼けたから。地ぬかすがかたりと。横面はつけ蹴とばせば。ぐつと込あげこらへぬ蟲。氣のせく抜きうち一尺五寸。あてと違うて小鬚先。そがれて立退き。詞ヤア老ぼれ。おのりや銀兵衛を斬つたぞよ。ヲ斬らいては悪者め。なま若いなりをして。言はせておけば方圖もない。金取つたとはま一度ぬかせ。イヤ大ずりめがたけくしい。地たけくしいとは其あごた。切割つて村中の。日頃の鬱憤はらしてやらんと。討つてかゝればハテしやらなど。抜いて拂へば又切り込む受けつ。流しつ水論の。意趣迄持たす。フシ互の挑み。地氣は頑丈でも磯大夫。腕先弱る老のくれ。血氣盛の一打に。ずつかり切られて尻居どうど。フシへたりながらに切結ぶ。地おこなは見るよりのう悲しやと匿寄つて。銀兵衛が双の下に縋りつく。手負の父はヤレ娘。かまうて怪我すなのけく。あせれば氣強き此方の悪者。詞ヲこいつがだゝい廻文狀。持つて戻つて見せた故。おれが手柄の邪魔ひろぐと。地喉首掴んでひつさくれば。詞ヤア其娘をなんとすると。地よろほひ立てば娘の喉へ。切先つき付ケ。詞こりやこびるめ。おのれが理を知つて居ろ。サアわつばをやつた先ぬかせ。言はねば殺すが言はぬか突こか。ヤア老ぼれ。双向ひだてすりや親子の別れどうぢや。地何と胸づくし。方に任せ締めつければ。物は言はれずびりく。とふるふ娘の姿を見て。ヤレ手向ひせぬ待つてたべと。拔身を捨てどつかと坐し。詞其子が知つた事でもなし。助けて下され是拜む。地ゆるめてやつてと手を合せ。俄に弱る。子故のやみ。取亂したる。親子の有様目も當て。られずいぢらしく。地弱みを見込んで猶圖に乗り。詞ヲそれ程此奴が許してほしか。地おのれわつばが行方を言ふかと。手詰のせこめ一間より。目當の手裏劍眼つぶし。はつと驚き娘の胸元。放せば暗時とんで出。銀兵衛を引伏せ拔身をもぎ取り。ぐつと突込む心元。剣り廻せば磯大夫。ヤレ有難や。忝なやと。悦ぶ聲も痛手のすたき。苦しいかいと抱き付き。ステ擦る。娘の顔じろく。眺める父は不便の涙。側に見る眼の果なやと思ふ程猶氣もせかれ。晴時立よりノウ磯大夫殿。詞息女の御難を救ひしも船切手を貰ひたさ。地見れば御邊も急所の深疵。保養の筋は見え難し。何とぞ命の有る内に一筆書いて給はらぬか。

大炊の君を恙なく歸す功德は廣大無邊。未來の爲も悪しからじと。頼めば翁は成程々々。詞王子より廻文狀。追々來れば一刻も。此地に在して御爲ならず。地取わけ只今娘が急難命を助け下されし。御恩報じにお望なくとも。認めて參らせたし。とは言ふものの最早目くらみ腕叶はねば。一點も引かれまじ。詞幸ひ最前參宮人に頼れ。書て置いたる船切手是に有り。是を持て船中迄。伊勢參りの姿にやつし。地目出度く都へ大炊の君を。御供あれと懷中より取出せば。晴時受取忝しと。押戴て讀下し。詞何此切手の表には參宮人四人と有り。都へ歸る我々は主從三人。人數の不足若船場で。咎にあはゞ如何答へん。翁殿と念を入るれば。地のう其切手の都合には。此娘を人數に加へ。都へ連れて貰ひたし。詞我なき後で此嶋によもや生けては置きますまい。心にかゝる此子が事。地凡性あるものとして。子に迷はぬはなけれども。わきて親き親心。繰言ながら聞いてたべ。詞彼が母めは迎へてより。添ふに隨ひ根性の。さかなき女と見限はて。十三年前去りこくり。二ツの年より繼母に。かけるもつらしと後妻を持たず。地やもめの膝に抱きかゝへ今年十五の此背丈。手鹽にかけた一人子をむぎ／＼又て殺さりよと。思うて死んで浮まれませぬ。現世後生の。フシお助ぞや。地必ず都へつれて給へ。田舎生れのおぼこ者不束な奴なれども。親の因果てまんざらの下司奉公もさせともない。とても事の御慈悲にお情ありげな晴時殿。此方へ養子進ぜたい。貰うてだに下されば娘が出世と悦んで。最後迷す成佛致す。未來を救うて給はれと。いふ舌の根も拜む手も。重く閉ぢたる上まぶた。コレなうとつ様／＼と。呼付けられてはつちりと。開く眼元の。哀れさを。見捨られねば晴時すり寄り。詞コレ磯大夫殿。おこなは今より拙者が娘。早速切手の人數を合せ。御供申す君への忠義。地女にまれ者つれ歸り都て名ある聲を取り。此晴時が名跡を。追付繼する慥に思ひ。心安く成佛あれと高らかに呼はつて。歎く沈む娘の手を取り。立上れば今はの翁。詞ハツア其お詞が知識の引導。おこな聞いたか歴々の。武士の娘に成るからは其方はいかい果報者。おれも結構な金色の。佛様の在所へ行く。泣くな悦べ晴時殿。地おさらばさらばが一世の別れ。五十遙に打越せし。フシ浪の泡

とぞ消え果てたり。地わつと泣入る娘をば。抱きかゝへてな泣いそないそ。無常の世界武士の子は泣かぬものぢやと親がひの。勵ます詞。子心に涙を胸に押かくし。開入れ立つも。いたはるも何れ義理有る親と子が。大炊の君をお供して。都へ歸るは亡き人の。末期の。一句に都合ぞと。諫め。すかしてやう／＼と船場を。指して急ぎゆく

第

三

地時につれ花も紅葉もかけ隠し。霜に打れて盛をば。待つかひもなき横萩の右大臣家の一人姫。中將姫は時ならぬお下屋敷の花園に。何をながめか冬至過ぎ末の四日は御所中の。一季半季の出替日。蠅が往ぬると戯れの。上の仰が末の代に。フシ大師講とてはやす。地お傍遣ひは桐の谷とて。久米の八郎景勝が。妻とフシよばれて。主思ひ。オクリお部屋を。離れしらすに立出で。お末の女中と呼聲に。あいと答へて二三人心得顔に立並ぶ。詞誠に今日は霜月廿四日下下の出替日。残りの衆は皆年季。何れもは一季の約束。先の季も勤る氣か。地志はと問はれて後達詞を拵へ。詞相變らず御奉公地お目かけられてと詞敷を。言はぬが重疊めてたし／＼。詞扱お姫様づきの若黨中間。みなりの者は呼ぶに及ばず。望ある者斗り。地呼出されよと言ふに隨ひ。承つて三人が立間も口はたゞ置かず。詞同じ事なら若黨の林平殿と先の季も。一つにゐたいよい男と。地囁き合つて勝手口。詞若黨衆中間衆。別けて袖岡林平殿。先の季極めのお召し。地はつと答へて聲揃へ。先の季極めぢや無禮すな。手ふりはおかち先催へ。次はお草履挾箱。長刀持も姫君の。御祝儀祝うて先のけ／＼ない／＼ないとフシ。躡る。地張面擴げ桐の谷縁先に差出。詞今日は例年の通り一年の極日。望あるはそち達斗りか。一人づつ出て願ひ事。地言うて見やとやさかたに。さき手を押退け私めは。詞お草履取り品助めてござりまする。是迄二兩二歩の給金。三兩になされて下され。と申は。髭油ががい高直に罷成り。下直な膏藥に致さんと存ずれば。落ちたら知らぬばれても知らぬと申す。お公家方に入らぬ鎌髭。剃りこくらうと存

ずれども。親に離るゝ様に存じて不便に。ごはりまらずでござりますると。地なまりきなりな。フシ願ひもをかしく。地髭油程の事ならぎんだしとやら言ふ。足してやると。重き口合有がたく。フシ引込む後へ髭もなき。ぬつべら男はお挾箱。角平めてござりまする。詞某一人の繼母ありて然も鬼婆。せぶりはいでも取りたがる其酷さ。譬へて言はば。お家の姫君同然の私が身の上と。地言はせも立ずヤイ。詞そりや何を言ふ事。生さぬ仲でもお袋岩根御前様はお情深く。其方達が繼母とは違ふ。へ、成程。岩根様程酷もござりませぬが。ハテ扱まだ言ふか。母の養ひほしくば品助同然に増してやろ。地ひなりに居よと帳面に。點をかけたは天の口。フシ塞ぐも流石金ならん。地次の剃下望む事。言はんとするを桐の谷聲かけ。詞其方も惣並の立身。地變らざるよと思ふ圖へ。丁度參つた長刀持。フシぐつとも言はず入る後に。地若黨岡林平が訴訟ありげに座に直る。外とは違ひ詞もやはらか。詞そなたの事はお上にも御大切に思召し。何によらず望む事。叶へてやつてとゞめよとの仰せ。地御扶持でもお金でも。望み次第と言はれてハツと地に平伏し。有難いお詞おして申すも憚りながら。詞私めは此季からお暇を下されなば。猶もつての御厚恩と。聞いて桐の谷肩に皺よせ。詞そなたの事は中途よりの奉公人。有付時は幾年もと言やつたを忘れたか。帳面見れば拜借も八兩一步。欲しくば呉れうと思召すお上のお心。地其慈悲なお家を見捨て達つて隙をもらふとは。仔細が有らうそれ聞こと。おされて林平。懐より金一包取出し。よんで八兩一ぶんを。立つる心で縁はなにし置き。詞仔細と申して我々しき。まづ借用のお金返辨。地御受取りと立派な仕方。ほつとせしが言ひがかり。金取つて投返し。詞ヤア僅な金を催促と。思うてわしへの面當か。但しは不自由なお家と見立て。返済するか慮外者と。地險で感せば猶頭を下げ。勿體ない何しに左様。唯美うお暇を。申受たい望ばかり。御前のお取なし偏に頼み上げますと。素直に怒の立矢もなく。詞すりやどう有つても隙取る氣か。他の奉公望にあらず。引込んで刀をやめ小商でも致す所存。ハテなう。是程迄言ふに得心なくば姫君へ申上げ。お隙貰うて進ぜう。暫く是へ上り。地待つてござれと扱扱が。もう

改まる表むき。奥の間へ入る内も。オクリ心を。残し。別れゆく。地常は遠慮てより添はぬ。中居はしたは時を得て。なう林平殿此處へ。と招きよせ。詞聞けば此方は引込むとや。一人身の宿ばいり。不自由にあらうおれ行こか。いやわしが行て飯たいて。地赤子産ましてもらはうと。縄りすり寄る中にも早蕨。二人を引きのけコレ袖岡殿。詞亥の子の餅の据臆に。子の子の餅はいくつぞと。問うたを此方覚えてか。地手づけ渡した此女房。いやぢや有るまいなう。と。抱き付けばもぎ放し。詞片木に乗せたはわしが膳。結んで置たは自と。フシ引退けせり合ふ其内に。地桐の谷が聲しはぶき。はつと立退く出合頭。見ぬふりしてナウ女中方。お部屋が暗い燈火の。用意と残らず奥へ追やり。詞林平殿お暇の事姫君へ申上げたれば。直にお逢ひなされんのお事。有がたう思うたがよいぞやと。地言ひ聞かす内名香のかをりに。フシつれる。佛や。たそがれ時の夕顔の花と言はん深みどり。オクリ柳の。肩に水晶の御目の内の爽かさ。雲の上なる天人の。天降りますす心地にて。フシ思はずはつと平伏す。地座に着き給ひ中將姫。若黨の林平爰へおぢや。近う寄りやとお詞が。骨身にこたへ有がたく。猶も疊にひれ伏して。御免々々にじりよる。詞ハテ苦しいない大事ない。地誰に遠慮と及び越。瑠璃の様な御手にて。引寄せ給へばぞと。身の毛立つ程嬉しさ。と。フシ恐さとまじる胸ぶまひ。地コハ何事と桐の谷が。驚く色目遠慮なく。詞林平そちは聞えぬぞよ。花見遊山の供先で目顔で知らせど知らぬふり。見ぬ振するは惚れられまい。地思はれまいとの用心か。秘共とのじやらくらは憎い男と手先をば。じつとしめられ猶がた。我身を我と思はれず。夢か現か夢ならば覺めてくれなと。フシ身を縮む。地預る桐の谷走り寄り。持給ふ手をもぎ放し。詞はしたない姫君様。人にこそ寄れ若黨づれの。手を取つてコリヤ何事。其酒が長じたの。其お心故繼母岩根御前の憎みも強く。夫八郎他行の間も得お傍を放ぬはいの。おまへはまあ何と心得てと。地意見にか。ればア、おきや。詞若黨づれと蔑しやれど。其もと問へば二柱。産れた故郷はたつれも變らぬ。父豊成様の仰せにも。おれも後づれを持つた程に。我も好いた男もてて。粹なことの。恥かしい事ぢ

やが。此林平を見初めてより思ひにしづめど折もなく。地はや際貫ひ去ぬるといふ何時迄人目が包まれう。許してたも桐の谷。惚れたはいのとひつたりと。抱き付き給へばヲ氣疎と。引のける人あせる人。思はれ人は果報すぎ。フシ冷汗流しむたりしが。地立直つて手を仕へ。詞お氣づまりの鬱性を。お晴しなさるゝ爲にもせよ。身に取つての有難さ。地死しても忘れず。フシさりながら。地御大切なる御身。戯れ言を誠に取なし。沙汰致してはお爲にならず。八郎様の奥様。詞ありや私をおなぶりなされ。お慰みの笑ひ草と。地言ひ紛らせば姫君は。胴慾なことを言ふ人。詞慰みにも偽にも惚れたと直に言はれうか。聞入なくば胸を据ゑ。地覺悟極た證據を見しよと。守刀を懐より。取出し給へば桐の谷驚き御手に縋り。詞コリヤあんまりで興がさめる。お怪我が有つては氣の毒と。地取らんとすればいや／＼。詞どうて其方が邪魔する顔付。林平も聞入まい。言ひ出した事恥かいて。地何の生きて居ようぞと。振切り給へばもて扱ひ。詞成程お前の志。お詞立てうさりながら。二度とはならぬ今宵一夜。お伽ささうがそれ切で。ふつゝり思し切らるゝか。地それが厭なら死になりと。フシどうなりともと突き離され。地ハテ思ひ死に死なうより一夜ちよと楽しんで。成程と思ひ切りましよと。仰にやう／＼双物もぎとり。詞ノウ林平殿お聞の通り。ひよつとお怪我が有つては。こなたもわしもお上へ立ず。不承ながら今宵一夜は酒のお相手。お伽申て下されと。地言はれてどうやら氣味悪く。返答なきを姫君。詞幸ひ晝より九献をはやし。盃半ぢやおぢや行こと。地引立て給へばイヤもうし。詞酒のお相手ばかり。お寢間は御免と斟酌も。地大事なわいのと無理矢理に。伴ひ給ふ障子の内。早弾きかける三味線のオクリ調子に。性根狂ふらん。地後にフシしばらく。桐の谷は。何を思ひの一思索。ステテ心をすます折からに。廿餘の女房のはらげし髪も兵庫わけ。小灯燈ざげ廣庭迄。フシ遠慮もなけにさし覗き。詞是もうしお女中さん。若黨の袖岡林平殿に。ちよと合せて下さんせ。内から迎ひに來たと言や。地合點の管と一口に。ひつこなしたは袖岡が妻と悟りし眼推量。是幸ひと桐の谷は。詞ノウさう言ふは林平のお内儀か。地大事な此處へと柔かな。詞についてのしより。詞ど

なたかは存じませぬが。お優しさうなお方。私が連合は今日切つて。お暇を貰ひ戻らるゝ筈。今朝からうちを掃除して。待てども待てども音もせず。こりやあんまりぢや見て來うと。留守を頼んで参りしと。地世帯じみたる話にわざと。フシ物有りさうに顔打ながめ。詞愛しや此方は騙されて。何にも知らないで迎に來たか。地高いもひきいも女子の身は。相身互ぢや言うて聞かさう。詞林平が隙貫ひ往ぬるとは大きな偽り。此家の姫君中將様と。毎夜／＼の酒盛。お寢間の伽までつとめるわいの。エ、なあに嘘ばつかり。私に腹を立てさすやうに。初對面から輕骨。ムウ偽りと思つてなら。しだらを見せうコレ爰から。地障子に映る影を見やと。教へる手先のフシ折も折。地林平が聲として。詞古襦袍で姫君の懐へとは勿體なし。いつそ裸身でぐす／＼ぐす。地お約束の盃と差すやら引くやら押へるやら。あなたは二上り此方は氣上り。くはつとせき上げエ、腹のたつ。犬畜生の男め踏こんで引ずり出し。存分言うて腹いよと。小棹引上駈出すを。立塞がつて押戻し。詞いやのうさうはまあなるまい。とは何故な。なぜとは。そなたがふん込み。わつばさつばになる時は。姫君は流しもの。林平はお仕置。首討るゝが合點か。ヒエ、なんと。大事の前の小事。早く騙して美しう。連れて去ぬる思案はないか。地格氣所であるまいかと。理にせめられて胸がつくり。腹立よりも案じが先立ち。地ハア如何様家來が主の娘。犯した罪はどこでも討首。詞どうぞお前のはからひで。呼出す事は成るまいかな。詞いつかないかな。片時お傍を離れず。願て蠅下地。其上女房が來たと聞いたら。戀の意地はり心中だて。地猶氣をもつて動まい。爰は何とぞ往なねばならぬ。仕様があらうがハテどうがなと。頼まぬ事を苦にするとは。知らて女房サそこをお頼み申上げます。詞ありやうは格氣よりお仕置と有るでほとと當惑。地どうぞ夫が戻る分別あそまいとしめし合せた事が有る物。其事をちよと一筆うつらせ。此儀に付用有りと。地書いてやつたらびつくりし。色も香も捨て一散にとんで往ぬるは定の事。若しやうな心當ないかいなうと輕はづみ。切なき場所へ持ちこむとは。知らて女

房は何をがな。用事のうつりと思案して。床に直せし硯箱。取りにたてば桐の谷は。詞たとへ親子たりとも。密書を見ずとは古人の教。地心静かに書かれよと遠ざかれれば是は。御念の入つたお堅い事と。筆を浸してさら／＼と手早に書て封じめに。氏神しるす心の錠。多びに結んで持つて立つ。詞ア、これ／＼そなたの文を其方がやつては。謀と覺るは定。姿を見てもがんづかれ。手段が知れるそもじはの。地供部屋へ行きかくれてゐて。往ぬる所を捕まへる。思案がよかる其文は。自が屈てやると。ちよいと取る手もはやぶさの。鷹と雀でいやとも言はれず。そんなら私は隠れて居りましょ。直渡して下さんせと。頼木の下の雨のもる。フシ下部が。部屋へと急ぎ行く。フシ奥はそれとも。しらいとの。地人聲隠す合の手や。後先見廻し桐の谷は。文の封じめそつと外して押開き。よんで何をか悦びの。押戴き／＼。天を拜し地を拜し。もとの如くにとつくりと。フシ封じし袖に入れて。地さあらぬ體に一間の口。しと／＼と立より。詞ヤレ／＼お。秘衆氣の利かぬ。奥の一間へお寢間しや。夜が更けるがといふ聲に。地三味の音やめて燈火の影にうつらふ姫君は。林平と手に手を取りて。フシ立出て給ひ。詞桐の谷寢間へ行まする。地何にも用は無いかやと。念の入つたは一物の。あるをばけしてホ、／＼。詞なんの私がある。さりながら林平殿。お主と添寢に其大小。近頃無禮ととがめられ。げに／＼御酒に食べゑひはつたりと失念。お預け申すと兩腰を。渡せば受取り側に直し。詞いやほんにもうし。最前お宿元から急用とて。文が參つたお届け申すと。地件の一通さし渡し。側によつて身構へを。するとも知らず林平は。定て戻るを待ちかねて人おこせしものならんと。封押切つて讀み下し。ハツト驚く眼付顔付。詞南無三寶一大事。地罷り歸ると駈出すを。立塞つて桐の谷。そり打かけて聲あららげ。詞ヤア大盗人のうつそりめ。誠姫君戀慕とは偽り。此所に押込られお在す仔細といつば。天子より預り給ひし千手觀音の御正體。寶藏に納め有りしに。何もか盗取り在る所知れず。他所より入込し體もなく御内の者にきはまれども。詮議の手掛なき折に幸ひ今日の出代り日。達つて暇を請ふ者をと我役てなき先の季定め。地倍の倍にて抱ようと。いへども聞ぬ

己が隙乞。詞其上最前返納の。金の蓄へ分に過ぎたり。何者ぞに頼れ盗み取つたる褒美にもらひし金と見付け。並大抵では言ふまじと。姫君に呑み込ませ。地酒に長じさせ色にこかし。とひ落さんと思ふ圖へ。持つて參つた女房の文。詞觀音の儀に付急用ありと。書いたは天命のがれぬ所。サア尋常に白狀せよと。地つめかけられて林平は。胸はどうづき氣は轉倒。女相手も身は丸腰。たゞ手を上げて暫くの暇を願ふ斗りなり。地流石慈悲ある姫君は。中に分入りそばに寄り。詞よもやそちが自に。難儀をかきよとて隠しはせまい。何者ぞに頼れのつ引ならぬ品故に。奪ひ取たと覺えたり。此御佛なき時は。自斗りか父上迄天子の咎。有りやうにいうてくれ。地身のせつなさにあられもない。心に思はぬ言の葉は。恥かしや悲しやと。ステテ歎きしづませ給ふにぞ。地流石の者も打しほれ。取つ置いつの胸の内。やがて桐の谷姫君引のけ。詞理知らぬ人非人何おつしやつてもお詞づひへ。地憂目を見せて白狀せんと。刀するりと抜きはなす。物蔭より女房がヤレこれ待つてと聲かけて。かけ来る間に胸打の。手は廻らねど林平が。引外して双向に掴み。切先己が脇腹へ。フシぐつと突込みどうと伏す。地ノウ悲しやと取纏る。女房よりは姫君桐の谷。詮議の種を殺してはと。あせるを手負ひは聲を上げ。詞やれうろたへまい人々。白狀致さん近う／＼と呼集め。ホラ、さすが八郎殿の御内方。推量の通り觀世音の尊像は。某が奪ひ取たり。扱こそ。仔細申すも恥かしながらも某は武士にあらず。膏藥賣萬能屋勘六と申せし者。女房は更科とて王子の。ある夜の忍び合を岩根御前に見付られ。地危きを遁れし恩の上。呼出されてお家の奉公。御臺のおかげと思ふ折ふし。詞密に招れ。中將姫が預りし觀世音の尊像。盗出してくれよとある。地道ならねども恩返しと。寶藏へ忍び奪ひ取り。詞女房に持たせ元興寺の客僧。玄助方へ渡し申した。ヒヤア。其夜はわざと屋敷を出ず。詮議有りともいひ抜けん。おぞい企も鼻の先。地褒美の金を貰ひしより。又此上に何事をか。頼れん内知れぬ内。出代りせんと迷足の。早き瀬にうつ魚の網。目に立てられて情なや。此世の隙迄フシもらひしぞや。地自業自滅の罪のがれず。せめて更科我に代り。詞彼尊像を取かへし。姫君へ戻してくれ。地それが未

來へ手向ぞと。いふが命の離れ際はなうしばしと留るかひ。なき世なりけり年月を。別れて暮し今日よりは。共にと思ふ樂みも。仇になつたか悲しやと。あへなき死骸に抱き付き聲を。フシばかりに泣しづむ。地共に不便と中將姫。桐の谷も心は涙。拂ひ隠してコレ／＼泣いてゐる所てなし。詞今日限に言譯たゝねば。姫君は禁牢との仰せ。此旨父御へ申上げ。御難を救ふが未來へ手向け。證據に立とは思はぬかと氣を付けられて尤も。夫が敵は頼んだ人。岩根御前が相手ぞと。伴ひつれて駆出すを。ナウ待つてたも二人の衆。詞我身の罪を遁れんとて。母様の悪事のだんだん。言はして自ら生きてゐようか。地假令如何なる責にあふとも。言ふ氣でなしそなた衆も顔へも出してたもんな。母様のお身の難救ふと思へばわしや嬉しい。恨みる者は身の因果と。噎び絶え入り絡ふぞ。其孝行はお前をば。憎み給ふは何事と。右や左に取纏りわつと斗りに。泣沈む。物の哀れを武士は。知らぬか隨人泰の安彦。父豊成の使として庭上に畏り。詞今日限に言ひ譯立たずは。姫君引立て來れよとの御上意。御預りの桐の谷殿お渡しあれと立上る。地兼て覺悟も今更に。歎き沈めど姫君は。遁れぬ道と涙を拂ひ。ア、迷うたり人々よ。坭に埋れし蓮葉も種清ければ。終には開く。必ず歎く事なかれ。たとへ呵責の責にあふとも。罪有る人の名を出さば。我が命なきと知ればや連れ行けと打しほれ。立別れ給ふにぞ。お袖に纏つて桐の谷。詞其お心なら何事も。口を閉ぢて申すまい。其代りには必ずとも短慮なお心持給ふな。何にも言うてたもんなやと。地互にかため更科が。追付尊像取返し。御手に入る。と約束の。詞がせてめて力草。憂忘草。フシ忍草。いつ迄くさともぎ放す。麻につれたる蓬生や荒れたる。軒の根なし草引立て。られて。三重へ出る日や。フシ光も薄き。雪の空。庭の木枝も白妙の。六ツの花笠かつき合ひ。水は氷と張詰めて。フシ日のめもさゝぬ座敷牢。地押こめられし中將姫。稱讚讀誦の聲だにも。スエテ次第に。弱り玉の緒も消ゆる。フシ斗りぞ痛しき。地宿直がてらの番人は。お末女中のはしたなき。氣なし苦なしが火鉢に集り。詞何と思やる皆の衆。雪降には間男の。洗濯するといふのに。此寒い冷いは。どうした事であるぞいのと。地言へばこまきがこましや

くれ。詞ハテ知れた事。今年は七月に開。それでどうでもつもりが違ふ。思ひの外に冷るはいの。ムウそんなら。開年には冷える物かや。ハアア道理てこそ。此お家の閨御臺様。其心の冷たさ。お姫様を此座敷牢に押こめ置き。人の前では霰のやうな涙をこぼし。陰へ廻つてはひねりかき餅。ひと割れる様な目に合はずぞや。地ひつちぎりの相伴を。食はぬ様にしたがよいと。さがなき口のかげ言も。我身の事とはしらはり。フシふすま。押明て岩根御前。誰ぞあるかと出給へば。そりやこそ閨御臺様あなかしこりよと。フシ口ふさぐ。詞なんぢや女の口から穴かし。こりや又大口話か。慙ない事の。必ずお姫に其様な。さもしい詞教へてくれな。當分はこらしめに。糺明はさすれども有様はかはい。今朝からなんぞおましたか。地機嫌はよいかと問ふも人前。心をかしく。地共。詞イヤ此間はお心持悪いとて。不食なされてござります。それにそちらは構ぬか。何故好物を拵へていやといやろとおまさぬぞ。勝手へ行て料理人に言ひ付け。ふくとの丸漬がある。腸持をたいておませと云へ。いけ／＼と。地残らず追やり。立切る襖のかけに立寄り。詞お姫のやるか。大事ないわしぢや。地明けますと。オクリ閉まりし。一間押明くれば。地痛はしや中將姫。芙蓉の顔。おもやせて。後の世頼む御法の聲。スエテ色香もすたり在します。詞ハテ又氣のつまる佛頼み。幸ひ父御もお留守。小庭に雪が積つて。冷さがどうも言へぬ。此處へ出て氣をはらし。身を冷したがよいはいのと。地儼しき様でつれなきを。背かば如何と姫君は。一間を出て小庭を見渡し。詞母様のお蔭にて。今日は日の目を拜みます。見れば寒紅梅も咲きたれども。雪に閉ぢられて盛を見せず。其閉ぢたる雪も。咲きたる花も。散り消え失せるは目の當り。世の中の有様程。果ないものはござりませぬなう。イヤそんな事は知りませぬ。月雪花といへども。素で見ても面白くない物。ヤほんに聞けば。此間は不食しやるげな。何がなりましたう思ひ。手づから拵へた物が有るが。機嫌よう。こし召して下さるか。地何時に變りしやさかたに。姫君は手をつかへ。詞有難や冥加なや。佛の毒蛇に身を與へ給ふお慈悲。地何しに否と申しましたよと仰せあれば。いやなう。詞さまでのものでもござらぬが。進ぜる物は

是。地これをとずつと突出す氷の双。ハツト思はず飛のく姫君。母様それを私にとは。どういふ事のお心ぞとフシ聲打頼ひ問ひ給ふ。詞ホヲ、無理におまそと思へば。ぐつと喉へ押込むけれど。まあ後生氣で無意氣にせぬ。何によらず自が。問ふ事が有るありやうに言へよ。隠すと是ぢやと地今度は逆手。ア、くくく。まをしてお前に私が何を包まう。其様になされずとも。お問ひなされて下されと涙に。フシくれて宣へば。詞ヲ切なかゆるめてやらう。逃げなよ。コリヤ。あの若黨の袖岡林平は。何故に切腹した。定めて八郎が女房と牒し合して。何ぞ言はして聞いたであらうがな。林平めも血迷うて。ぬかしたてあろそれ言へと。地疵持つ足の裏間に。はつと思へど姫君は。言うては大事としらじらしく。いへくなんにも申しは致しませぬ。もとより尋るわけもなしと。包み給へば又つゝかけ。詞ヤアさう抜かす程なほ氣遣ひ。然らば何故林平は切腹したぞ。其わけ聞かう。地なんと。くくと責められ。ステテ當惑の。胸押しづめ。詞御尤もの御不審。今は何をか隠し申さん。林平には自が無體な不義を申しかけ。聞入れぬを桐の谷が。外へ漏さばお爲にならずと。無理に押へ詰腹切らせ。地狂氣に取なし侍ふとフシ誠し。やかに宣ふにぞ。地流石の繼母も胸やすまり。詞ホ、まあ。それで安堵した。いつでも連合。豊成公が詮議あらば其通り必ず言へよ。外の事口叩くと。かけへ廻つて又是ぢやと。地威す手強さ氣の強さフシせん方も。なき折からに。地隨身安彦馳來り。詞仰せ付られし竹垣の牢出來。四方ひつそぎ八寸釘用意よく候と。地聞いて御臺は打うなづき。詞コレ姫。あの暗い所にあよよりは日の目もさす結構な。座敷が出來たおぢや行こと。地引立る氣は夜叉魔王。變化に取られし心地にて。オクリ泣くく引かれ入給ふ。フシとは知らずして。入り來るは。地左京之進晴時が妻と呼ばれて憎からず。娘と言はれ氣の毒の。田舎育ちの。フシおこなを引連れ。地通る後よりまうし。浮舟さんと。呼かけ出るは八郎が妻。詞梧桐の谷様かいの。おなつかしやの挨拶に。此方も近寄りなれくしく。詞まあ御息もじてお目出度や。見れば美しい娘御を連れられたが。ありやどなたでござります。サレバ此子はお前のお連合も知つての通り。夫晴時が田舎より貰ひ歸られし娘。是

はしたり。ハテよい御器量。お名は何と申しますと。地問へばおこなは詞も聞ひれ。詞私は國では。こなと言ひ居つたれど。今のかゝ様が名を替へて。千壽と申しますてや。テモあぢなおもの言ひやう。アリヤお國の詞かえ。サア氣の毒なほ。どうし居つてと。てやとには。ほつと愛想が盡きましたてや。アレ私も申ましたホ、くく。つい移つて。イヤもうし。うつる序に此家へうつり。押込られ給ふ中將姫様。尤も科は重けれども。禁牢同然の御糺明。あまりお痛はしう存じ。地此子が御目見えを幸ひに。岩根御前様迄お詫申しに參りしが。詞見れば御番の女中も見えず。やつぱり一間にござるかいなあ。イヤもうし。最前お出入の本頭が申すには。姫君入るゝ本牢拵へるとの噂。早それへお入れなされた物でござりましたよと。地話す内にも目に溜る涙を。フシ互に押へしが。地やゝ有つて桐の谷。詞私もお詫の心で參つたれども。何時ぞやから岩根御前様の御機嫌を害ひ。式日のお禮も勤ず。生中に顔出して。おまへのお詫の邪魔になれば氣の毒。マア差控へて居りましょかいなあ。如何様そこも有り。いつそ阿呆な私とは昆布に山椒で合もよし。申し出して首尾がよか。地お知らせを申しましょ。さう遊ばしてと頼み頼まれ。互に後程々々と辭儀に餘りて立別れ。浮舟は奥の間へ。取次頼みに行く内に。桐の谷は勝手口。入らんとすれば姥立ち出で。詞まうしコレお姫様より密かにお文と。地渡せば受取り何氣なくあたりを。フシながめ入りにける。地知らせと共に岩根御前人目は綿の打見よく。詞是はく晴時の内儀。連れられた娘が話の養子。地どれくあほうサア此處へと。愛くろしきに取あへず。御意の通と式禮し。詞コリヤ千壽。あなたが此お家の御臺様。手をついてお目見え申しやと。地教へに隨ひ詞にべなく。詞扱はお前がおかみ様でござんすか。かゝ様がお目見えをさす程に。お屋敷迄歩行と言はんとした故。何ぢやれ土産もなう。地來をりましてござんすと言ふもをかしく岩根御前。詞テモ面白い物の言ひやう。イヤ正直さうな好いた娘。いつそわしに賜らぬか。手廻りて遣ひたいと。地仰せは幸ひ機嫌とりと。手を取つて側へ押やり。詞何が扱手前より望む所。その代りには。ちとお願ひお頼み申す筋有り。地言ひ出す顔色早くも悟り。詞マ

願ひといふはお姫の詫か。地成程左様といふよりも、スエテ俄に。しほるゝ人目追従。詞ム、やさしいようこそ〜。連合豊成公お歸りあらば。其方を力にお詫び申さう。アノおまへがかへ。おいのう。たつた一人のかんぞ子が。難儀にあふを親の身で。詫言せず置き置かれうか。おりや氣強うはござらぬと。恨涙に目をこすり泣いて。見せれば此方もなづみ。詞テモ扱も〜。其様なお心とは知らいで。人が申せばともなく。陰言申せし勿體なや。地とは言ひながら姫君を。一間に置かさへ痛はしきに。詞何故本牢へはお入れなされた。あのいやる事わいなう。一間に置くと。人目威しの双物三昧。最前にもコレ此合口を逆手に持つてわしへの双向ひ。ヲこはい事でござつた。そりや何故にえ。其罰の事が有るてや。八郎が女房が。媒にて。若黨の林平と密通し。姫頭に見付られ。相手有つてはやかましと。桐の谷が手につけ林平を殺したげな。ヒヤア。其事を自に。知つたか知らぬかありやうに言へ。言はぬと。喉へ突込む。てて。ヲ、恐ろしい事い。どうて是は本氣では有るまい。若しや怪我でもさしては。悲しい上の悲しみと思ひ。ついで。竹の牢を拵へ。入れさして置きました。何のわしに如才があるぞと。地有る事無い事打つて變へ。咄せば浮舟せき立つて。勝手に向ひ聲あらげ。詞桐の谷の人でなし。御意見すべき其身にて。媒は何事ぞ。それ斗りでも姫君は。牢舎は扱おき流し者。地不忠不義なる女めと。フシ聞えがしの怒り聲。詞もうよいはいのと。地御臺の猫なで。言へばよいかと娘の千壽。詞さつきにも女中がな。お姫様から密かに。文渡したを桐の谷様。たぼして勝手へ行かんとしたと。地言ふも追従育ちのいやしさ。扱は外にも不義有つて。媒すると覺えたり。其文證據に一詮義と。座敷を蹴立る折もをり。大臣のお歸り知らず。はつと是非なくしづまりてフシ御臺と。共に出迎ふ。地御主横萩の右大臣豊成公座上に御足を留め給ひ。詞晴時が女房浮舟よな。定て中將姫が災難聞及ばん。天子より預り奉りし尊像を失ひ。毎日々々藤原の廣嗣をもつての御催促。是非に及ばず今日は姫に密談し。心がかりな者あらば。差圖にまかせ引捕へく〜り上。拷問して言はせんと胸を据ゑて歸りし。どこへとぼしり懸るも知れず。汝も一間へはや來れ。地御臺も奥

へと言ひ捨に。フシ何いふ間なく入り給へば。地岩根御前は氣味悪く。浮舟は御跡したひ。行かんとするを押とめ。詞アノ御機嫌へ言ひ出しては却つて姫の爲にならぬ。地首尾見合して自が。詫言ひ出さう其時に。無理に押へる心根の有るとも知らずさもあらば。お前に任すよいか様にと。鬼を頼んで猶地獄。餓鬼めが何かしやべらんと。先も氣遣ひ繼母は。オクリ一間をへさして走り行く。フシ後うちながめ。浮舟は暫し佇みある所へ。勝手口より桐の谷立ち出で。どうぢや〜お首尾はと。問へど俄に顔をむけ。娘に問へどし〜らしん。辛氣な顔ぢやが浮舟さん。詞又繼母が邪魔したか。地我君様も鼻毛をのぼし。お聞入れないかえと。言へども猶も見向もせず。詞勿體ないあの。佛の様な御臺様を繼母よばはり。人てなしに用はなし。地面恥かこより足ばやに。とつと〜往んだらよからうと。胸に餘りし當ことを。聞ぬ氣な桐の谷。むつと顔にてずつと差寄り。詞そりや誰へおつしやるぞ。此方が問ふのは姫君の。地お詫の筋と言はせも立ず。詞其お詫叶ひませぬたとへ此度の越度ないとして。姫君には不義の悪名。地淡島へでも流しやり。腰より下の病の養生。此方に直して貰はにやならぬ。詞ホ、〜〜こりやをかしい。扱は繼母と一つになり。無實で科を重うするのか。姫君に不義有るとは。地何を目的何を證據。過言であらう浮舟殿。詞イヤ過言でない證據が有る。ムウ面白い。證據があらばそれ見よう。ヲ見せう。サア出した。イヤ此處はお上のお耳へ近し。向ふのお庭へたつてもらはう。必ず行たら見るぞや。地見せる。コハリぞやと。詞詰め合ひ兩方が。立つも一度に目を離さず。尻目鋭く西東別れて。おける縁先は花と。花との。コハリ櫻鯛。下駄の鼻緒の仕末よく。オクリはきしめいてこそ立。フシ向ふ。地娘は見なれず聞なれず。怖さ先だち氣はうろ〜。先手を取つて桐の谷。詞さし圖に任せお庭へ出たが。見せる證據はどれどこに。まそつと向ふへ出てくだんせ。サアでたがどうでござんす。ハテまあ急かすとお下にござんせ。お下に居たがどうでござんす。どうとは最前姫君より。そもじの方へ參つた文。それが證據ぢやそれ出した。コレコレ粗相言ふまいぞ。お前が浮舟さんでないか。わしが桐の谷でなくば。聞ずてにもならうが。此お家の建物。晴時